山口大学大学院東アジア研究科
博士論文

近代日本の中国語教育関係書における擬声語の研究

平成 30 年 9 月

李　夫　平

目　次

要　旨 1
序　章 1
0.1　近代日本の中国語教育関係書に関する研究背景 1
0.2　中国語関係書の研究価値 3
0.3　中国語関係書における擬声語の研究の提起 3
0.3.1　本研究の着想 4
0.3.2　中国語関係書の言語研究の現状－語彙研究の提起 4
0.3.2.1　中国語関係書の言語研究の現状 4
0.3.2.2　語彙研究の方向の提起 10
0.3.3　中国語関係書における擬声語の概況－擬声語研究の可能性 11
0.3.3.1　中国語関係書における擬声語 12
0.3.3.2　擬声語研究の提起 17
0.3.4　中国語擬声語の研究現状 17
0.3.4.1　中国語擬声語の研究現状 17
0.3.4.2　先行研究の問題点 19
0.4　研究の目的と意義 20
0.4.1　研究目的 20
0.4.2　研究意義 21
0.5　研究方法 22
0.6　論文の独創的な点 23
第 1 章　近代日本の中国語関係書及びその中の擬声語 24
1.1　近代日本の中国語教育の中の中国語 24
1.2　資料とした中国語関係書 24
1.2.1　近代日本の中国語関係書の概況 24
1.2.2　擬声語の調査資料 30
1.3　調査資料の中国語関係書とその中の擬声語 33
第 2 章　擬声語の形態的構造 35
2.1　中国語擬声語の形態タイプ及びその分類方法 35
2.1.1　中国語擬声語の形態タイプの歴史的な特徴 35
2.1.2　現在の中国語擬声語の形態タイプの種類及びその分類方法 36
2.1.3　本論文の形態タイプの種類及びその分類方法 38
2.2　中国語関係書における擬声語の形態構造の特徴 39
2.2.1　擬声語の形態タイプの判定と擬声語の語数の統計に関する問題 39
2.2.2　形態タイプ 42
2.3　形態タイプの分布状況 42

2.3.1　形態タイプの全般の分布特徴 43
2.3.2　児化擬声語 43
2.3.3　中国語関係書における児化擬声語の概況 45
2.4　まとめ 45
第 3 章　擬声語の意味分野 47
3.1　言語学での意味分野 47
3.2　擬声語の意味分野及びその分類 48
3.2.1　擬声語の意味分野に関連する日中の代表的な先行研究 48
3.2.2　意味分野の分類及びその問題点 50
3.3　中国語関係書における擬声語の意味分野 51
3.3.1　中国語関係書においての意味分野の関連内容 51
3.3.2　各意味分野に対応する擬声語の語数の統計の基準 52
3.4　各意味分野における中国語関係書の擬声語の分布状況 54
3.4.1　意味分野別による擬声語の分布状況 55
3.4.2　擬声語の意味分野と形態タイプの対応状況 56
3.4.3　擬声語の各形態タイプの描写特徴 58
3.5　まとめ 60
附：各意味分野における中国語関係書の擬声語の整理表 62
第 4 章　形態構造と意味分野から見る擬声語の使用状況—『萬物聲音』『北京語の味』『児女英雄伝』の比較研究 65
4.1　始めに 65
4.2　中国語関係書の『萬物聲音』と『北京語の味』 65
4.2.1　『萬物聲音』と『北京語の味』を取り上げた理由 66
4.2.2　『萬物聲音』と『北京語の味』の内容 66
4.3　『萬物聲音』と『北京語の味』の擬声語 67
4.4　『萬物聲音』と『北京語の味』の擬声語の型別 73
4.4.1　擬声語の型別 73
4.4.2　各型の擬声語の分布状況 74
4.4.3　児化擬声語 76
4.5　『萬物聲音』と『北京語の味』の各型擬声語と意味分野の対応状況 77
4.5.1　擬声語の意味分野 77
4.5.2　各型の擬声語と意味分野別の対応状況 79
4.6　『児女英雄伝』と中国語関係書の擬声語との対照 79
4.6.1　『児女英雄伝』を取り上げた理由 80
4.6.2　『児女英雄伝』における擬声語 80
4.6.3　『萬物聲音』『北京語の味』『児女英雄伝』における擬声語の比較 81

4.6.3.1　型別による擬声語の分布状況 82
4.6.3.2　意味分野別による擬声語の分布状況 83
4.7　まとめ 84
第 5 章　擬声語の音韻構成 85
5.1　中国語の音韻概況―声母・韻母・声調 85
5.1.1　中国語の音韻体系 85
5.1.2　中国語の音声特徴 85
5.1.3 近代以降の中国語音韻体系の特徴 86
5.2　中国語擬声語の音韻構造 87
5.2.1　中国語擬声語の音韻特徴の研究現状 87
5.2.2　擬声語の重言・双声・畳韻の現象 91
5.2.3　中国語関係書の擬声語の音韻考察の提起 91
5.3　中国語関係書における擬声語の音韻状況 92
5.3.1　中国語関係書における発音表記方法 92
5.3.2　中国語関係書における擬声語の音節表 94
5.4　中国語関係書における擬声語擬声語に用いられた声母・韻母・声調の特徴 97
5.4.1　単音節擬声語の声・韻・調の状況 97
5.4.2　2 音節擬声語の声・韻・調 99
5.4.3　多音節擬声語の声・韻・調 105
5.5　中国語関係書における擬声語の音韻構成の特徴 107
第 6 章　擬声語の音象徴 111
6.1　音象徴の定義と音象徴語 111
6.1.1　音象徴の定義と内容 111
6.1.2　音象徴語 113
6.2　音象徴の先行研究 113
6.2.1　音象徴の言語普遍性と言語個別性 113
6.2.2　音象徴研究の着眼点と内容 114
6.2.3　中国語擬声語の音象徴の先行研究 115
6.3　中国語関係書における擬声語の音象徴 118
6.3.1　音象徴の考察の方向 119
6.3.2　声母の基本的な音象徴 121
6.3.2.1　破裂音と破擦音の有気音・無気音の声母 121
6.3.2.2　摩擦音の声母 129
6.3.2.3　鼻音の声母 131
6.3.2.4　側面音の声母と零声母 132
6.3.3　韻母の基本的な音象徴 133

6.3.4　声調の音象徴 135
6.4　中国語関係書における擬声語の音象徴の全般的傾向 136
6.4.1　中国語関係書における擬声語の音韻構成から見て 136
6.4.2　音韻構成の対照から見て 137
6.5　終わりに 138
終 章 140
7.1　論文の各章の要約 140
7.2　結論 142
7.3　研究展望 145
付録 146
（1）中国語関係書における擬声語及び用例・語釈 146
（2）『中国語教本類集成』と『中国語学資料叢刊』における中国語関係書 156
（3）中国語関係書における各型の擬声語 160
（4）中国語の声母表 164
（5）中国語の韻母表 164
（6）中国語関係書における擬声語の音節表 165
参考文献 171
Ⅰ　中文文献（ピンインの abc 順） 171
Ⅱ　日文文献（五十音順） 175
Ⅲ　欧文文献（アルファベット順） 178

要　旨

本研究は明治以降昭和20年までの近代日本の中国語教育の関係書における擬声語を研究の対象にし、その形態構造、意味分野、音声構成、音象徴の特徴から擬声語の実態を考察した。この研究は語群の語形、語義、音韻から、それらの擬声語の実態を究明することを通して、近代日本の中国語教育における擬声語を代表とする中国語の習得状況と近代日本人が持っていた中国語に対する認識状況を指摘した。

先行考察は、近代日本の中国語教育関係書の歴史的特徴（関係書の利用実態、当時の教育方法と目的に応じた特徴）、関係書の中の擬声語の位置づけ、日中の関係書の研究現状と中国語擬声語の先行研究を見た。この考察によって、近代日本の中国語関係書における擬声語の研究の可能性を提起した。それで、中国語関係書及びその中の擬声語（用例・語釈を含む）を取り出して詳細に検討する。

擬声語の音節パターンの特徴を型別及び各型の擬声語の分布状況からみると、中国語関係書にいて基本型とされるA型、AA型、AB（AB）型の擬声語は常用されているのに対して、3音節以上と特殊型の擬声語は少なく、使用度も高くない。児化擬声語は中国語関係書において頻繁に出現していた現象が目立っている。型別に対応する児化擬声語の分布状況の差異が存在している。例えば、常用型のA型、AA型、AB型において多くあるのに対して、ABB型、ABA型、AABB型、ABCB型、ABCD型、AAAB型などの特殊型の擬声語には見られない。また、中国語関係書の擬声語は形態表の記符号の使い方において規範問題が存在している。つまり、中国語関係書の擬声語には、形態の規則性、語音形式の安定性と規範性を欠いた状況があった。この状況は擬声語の収集・記録方法、近代日本人学者の中国語の認識・習得の程度などと関わっている。さらに当時の中国語擬声語の実態を知るために、中国語の語音と意味の関わりをめぐって中国語擬声語の状況を検討する必要がある。

本論では中国語関係書の擬声語の意味分野を「人の声」、「動物の声」、「自然現象の音」、「動作に関わる音」、「物の音」（衝撃の音、破裂の音、摩擦の音、鳴る音の下位分類を含む）に分類した。意味分野別による中国語関係書の各型の擬声語の分布状況を見ると、動物の鳴き声と物の音は最も多い。すべての意味分野には、A型、AA型、AB（AB）型の擬声語は最も頻繁に見られるものである。AA型とAAA型は動物の鳴き声に最も多く用いられ、AB型は物の音、AABB型は人の声が多いというような対応関係も明瞭に見て取れる。つまり、意味分野に対応する各型の擬声語の分布状況によって、異なる型別の擬声語が持つ独自の音声描写の特徴がわかった。型別全体の擬声語の分布状況には、意味分野別によって擬声語の語数は大きな差が見られる。このように、意味分野の型別に対応する擬声語の分布状況によって、擬声語全体はバランスよく用いられていない傾向が見られる。『萬物聲音』と『北京語の味』を代表とする中国語関係書における擬声語の形態構造（型別の種類、各型の使用割合）、意味分野の種類、型別と意味分野との対応状況を現実の中

国語擬声語の状況との対照を通して、『児女英雄伝』における擬声語と近代日本の中国語関係書における擬声語の音節パターンの使用自由度及び意味分野においての分布が比較的なコントラストを示していることが見られた。

中国語関係書の擬声語の音韻構成（声母・韻母・声）の検討で、破裂音（k を除く）と少数の破擦音（j・z・c）の声母、単韻母・-ng 韻母の韻母が最も頻繁に使われる音韻から見れば、中国語関係書の擬声語の音韻には、活発な音韻の組み合わせが少なく、現実の中国語と同様、中国語関係書の擬声語の声調には第 1 声が最も多く、非常に顕著な出現頻度を持っている。音韻状況の考察結果として、中国語関係書における擬声語の実態は経済的・便利的な音韻特徴が容易に受け入れる中国語を呈する近代日本の中国語実用語の教育に応じているということである。

近代日本人の学者が持っていた中国語の言語音及びその意味に対する認識のもう一面を考察するために、擬声語の用例・語釈の意味特徴を分析することを通して、語頭音節の声母、韻母、声調の音象徴的な意味を詳細に検討してみた。それによって、破裂音と一部分の破裂音の声母と単韻母/ a，u，i/・複合韻母/ua/・鼻韻母などの常用された音韻の音象徴がはっきりと窺えた。また、一般的な音象徴的意味が中国語の音韻に見られる。例えば、対抗の運動状態或いは（力）強さのある運動のイメージが/b，p，d，t，g/の音象徴において、ある程度の一致性とされる。常用韻母の/a，u，ua，-ng/などは持つ大きさ・強さ及びそれらの対立のイメージが普遍的に見られる。このように、擬声語の声・韻・調の選択状況から見ると、それらの利用頻度のアンバランスと集中的な傾向が窺える。一方、自然音の特徴から見ると、それらの共通点が認識されやすく、言語音で表現されやすいのである。さらに、近代日本人（学者）が持っていた中国語擬声語に対する認識からいうと、中国語の言語要素の内部及び語音、語義などの間、習得差異が存在しているようであろう。

まとめてみると、実際、中国語関係書の擬声語の形態構造、意味分野、音韻構成、音象徴の実態からみると、近代日本の中国語教育における中国語は語彙の範囲・広さ、語と音韻の認識の深度・全面性などの方面でまだ至っていないところがある。つまり、近代日本の中国語教育は一定の程度中国語実用語の習得に限らず、ある程度言語研究の努力もしていたのである。この考察の結果は中国語関係書の言葉の確実さ・真実さ、つまり、中国語関係書における語彙はどのようであるか、またそれらの資料は当時の北京語口語の実態を反映する面で、全面的であるかどうかという問題に対するある程度の解答となり得る。

その原因というと、日中言語・文化の差異は中国語の習得、（近代）日本人が持っていた中国語に対する理解に困難を与えるに違いない。擬声語の一点に絞っていうと、一言語は子音・母音の組み合わせによって、複雑な音響も模倣できることは確かであるが、現実の音響と言語表現の対応特徴から見ると、民族間の根本的な感覚の相違はともかく、ある程度の隔たりが存在している。そして、異言語の教育・学習において、その隔たりを克服することは難しい。従って、異言語に対する全面的或いは系統的な認識をできるために、異文化に対する理解がどうしても必要である。

序　章

0.1　近代日本の中国語教育関係書[1]に関する研究背景

近年、中国域外の中国語（主に北京官話）文献が発見され整理されるに伴って、それらは中国語史の研究の重要な材料であると認識されるようになってきた。近代日本の中国語教育関係書はそれらの文献の一部分として、近代日本の中国語教育と中国語の研究で非常に重要なものとなり得る背景がある。

まず、近代日本の中国語関係書はほとんどが外国人である日本人によって作られたもので、全面的に当時の中国の社会・政治・経済などの状況を記録し、語音、語彙、文法などから詳細に中国語を紹介している。それらの資料は中国語を外国語とする教育・学習のためのもので、普通の中国の言語資料と異なるため、中国語の研究において重要な役割を演じている。それについて、陳明娥（2014）は「東亜語言学視野」[2]において、東アジアの異文化による「借鏡観形」[3]は中国語の過去の形態と変化の把握に対して実行できる方法であると指摘している。「東亜語言学視野」とは「中国、朝鮮、韩国、日本、越南语言学研究最优“整体性”视野，这超越了“国别”范畴和“语系”范畴，着眼于历史上形成的“汉字文化圈”内“跨文化”互动的东亚文明的语言学学术关照理念」[4]（中国、朝鮮、韓国、日本、ベトナムの言語学研究の最適な“全体性”の視野である。これは“国別”の範疇と“語族”の範疇を越え、歴史に形成された“漢字文化圏”における異文化のインタラクティブな東アジア文明に着目する言語学の学術対照理念である―筆者訳）。「借鏡観形」は「東亜言語学視野」の研究理念を実現する方法として、外国の中国語関係文献や研究などを利用することを通して、中国語の特徴を考察することを意味する。そのために、外国の関係文献の言語研究は欠かせない一つの作業であり、「适应当代中国“海外汉学”学术发展趋势的基本」[5]（現代中国の　“海外中国学”」の学術研究の発展にとって一つの基本的な条件である―筆者訳）でもある。そこで、膨大な量の近代日本の中国語教科書は中国語の一時期の言語の記録として、その内容が中国語と中国の歴史・文化の研究にとっても大切なものである。

次に、近代日本には中国語ブーム（漢語熱）ともいうべき現象が何度かあり、それは現在も見られる。この現象の全貌を知るために、その時代の中国語教科書は軽視してはなら

---

[1] 近代日本の中国語教育関係書は近代日本の中国語教科書を主とする資料の全称である。これらは本論文の調査資料である。以下、これらを「中国語関係書」と呼称する。

[2] 陳明娥（2014）『日本明治期北京官話課本詞彙研究』厦門大学出版社（代序）p1

[3]「借鏡観形」は中国の歴史文献の『劉子新論・貴言』における言葉である。原文は「人目短于自见，故借镜以自观形」である。「東亜言語学視野」における中国語の研究の場合、「借鏡観形」の「鏡」は中国語を使った歴史を持つ東アジアの異文化のことを指し、「形」は現実の中国語の特徴を指す。

[4] 陳明娥（2014）『日本明治期北京官話課本詞彙研究』厦門大学出版社（代序）p1

[5] 李無未・孟廣潔（2015）「日本漢語教科書的学術価値」
中国社会科学网　http://www.cssn.cn/zx/201512/t20151222_2792923.shtml 2015 年 12 月 22 日取得

ない存在である。中国語ブームはある国における一時的な言語教育・学習の盛況の現象を表す言葉である。日本では、近代と 1970 年代に中国語ブームが起こった。王順洪（2003）[6]によれば、近代日本の初回の中国語ブームは明治維新後の 1871 年の漢語学所の設置から始まった。その後、1894 年～1905 年が第 2 回で、1930 年代が第 3 回の中国語ブームの時期である。1945 年以降、中国語ブームは冷めてきた。しかし、1972 年の日中国交の正常化と中国の改革開放につれて、中国語ブームは新しい時期を迎えた。

このような中国語ブームの状況をその発生した原因や、中国語教育の方法と内容などから研究することによって、中国語教育と中国の対外漢語教学[7]の進展を進めることに役に立つアドバイスを提供することが期待される。その期待に応えるために、本論文は近代日本の中国語教科書の使用状況、教科書の内容に対する研究を通して、日本の中国語教育の特徴を考察する。

また、日本の歴史的中国語教育の研究を振り返ることによって、日本の中国語教育の現状における問題点を明らかにして、その解決方法を探す上で、ヒントが得られるかもしれない。例えば、内田慶市（1999）[8]は日本の中国語教育の現状の一面を次のように述べている。

> 現在の日本における中国語教育、特にその大学における外国語教育に占める位置を考えた場合、受講生の数だけをとってみても、一昔前に比べたら隔世の感がある。ほとんどの大学において、英語を抜きにした諸外国語の中で、極めて突出した数を示している。そのこと自体は寧ろ歓迎すべきことではあるが、一方で様々な問題も抱え込んでいる。外国語としての中国語教育法（論）の早期の確立、体系的・効果的なテキストの編集、あるいは受講生の（と言うよりは、日本人の心の奥底に根強く残る）中国語に対する認識の問題等々である。

このように、内田は現在の日本における中国語教育における問題点について、教育法、テキスト、日本人の中国語に対する認識などの問題点を挙げている。また、内田は中国語の教授の内容に関する問題を指摘して、教育法、教授法の状況を論述し、以下のように述べている。

> それはそれで結構なのだが、実は中国語の場合、教えるべき内容の規準化が明確にはされていないという大きな問題が残されている。文法事項、語彙数、文型等、編者によってまちまちである。もちろん、これは私たち中国語学、中国語教育にたずさわる者の責任であるが、早期の確立が望まれる大きな課題である。

---

[6]「三十年来日本的“漢語熱”」雲南師範大学学報　第 1 巻第 2 期　pp.43-46
[7] 対外漢語教学とは外国人に中国語を教授することである。
[8]「中国語教育の歴史と現状」『研究センター報』

しかし、一方で、そのような科学的な教育法、体系的な教授法（たとえば「コミュニカティブ・アプローチ」とか「タスク」とかいう最新の教授法）が確立されたとしても、上述の唐通事以来の「伝統的」教授法と対抗しうるかという疑問が私にはある。

内田が指摘する現在の日本における中国語教育の現状を解決するには、「教えるべき内容」、教育法、教授法を探究すべきである。いわゆる「科学的な教育法、体系的な教授法」が「唐通事以来の「伝統的」教授法」より優れているとは限らない。そのため、日本の中国語教育が直面している問題を解決するために、近代日本の中国語教育を振り返り、その状況を参考とすることが、現在の日本の中国語教育の展開に役立つに相違ない。そのためには、近代日本の中国語教育及びその関係書の研究をする必要がある。

0.2　中国語関係書の研究価値

張美蘭（2007）の「明治時代の中国語教育とその特徴」は「明治時代の北京語教材の資料的価値」を 2 つに大別している。一つは「官話系統の変化を反映する」ことであり、もう一つは口語語彙と文型をめぐる「清末民国初期における北京官話の研究資料」となっていることである。同様な考えとして、李無未（2007）は北京官話教科書の語彙について、官話教科書を貫いている言語意識と言語の教育意識は、北京官話そのものの研究だけでなく、北京官話の言語学史の研究にとっても、軽視できない価値があるとしている。その意味で、近代日本の中国語関係書の研究は当時の社会的状況を明らかにすることに対して有益であるとともに、言語研究上の意義もある。

さらに、陳明娥・李無未（2012）は、教科書の語彙が当時の社会の風俗文化を反映しており、言語現象の実態、北京語の伝承と発展の状況を記録しておいる材料であるゆえに、中国語史研究の重要な価値を持つと言っている。また、言語史の研究の視点から、魏薇（2013）は北京官話教科書は漢語語彙史研究、世界の中国語教学史の研究にとって重要な史料であると指摘して、北京官話教科書の語彙から、中国語の歴史的な変化を具体的に考察することができると述べている。陳明娥（2014）は東アジア言語学の視野を持って、「漢字文化圏」における中国語史研究を進めることを研究方向にし、当時の言語の実態と中国語教育の特徴の解明を目的にして、明治期の北京官話資料における中国語の状況を考察した。その結果、この時期の教科書は信頼できる貴重なものとして、中国語史、社会史、中国語教学史の領域で高い研究価値を持っているとした。徐麗（2014）、楊杏紅（2014）、陳明娥（2015）の研究も同じような結論を出している。近代日本の中国語関係書の持つ言語や文化などの価値が注目され、認められているであろう。

0.3　中国語関係書における擬声語の研究の提起

本節では中国語関係書における擬声語を研究のテーマにする理由を 3 つの方面から解釈

する。その 3 つの方面はそれぞれ関係書の言語研究の現状、中国語関係書における擬声語の概況、中国語擬声語の研究現状である。

0.3.1　本研究の着想

明清以来、日本において中国語教育の資料がしばしば作られた。それらのテキストは性質も内容も中国語の歴史的な文学や戯曲などの文献と異なるため、新しい材料として、近代中国語の研究にとっても重要な価値がある。中国語関係書の中には、中国語を記録するものとして興味深いものが多くある。例えば、歇後語（諧後語・解腹語・切口語・しゃれことば）の関連書である『支那諧謔語研究』、『支那諧謔語彙』、諺・俗語を集めた『支那常用俗諺語集解』、常用の動詞・助動詞・慣用句の用例を記録・解説した『華語助字の活用』、『華語動字の活用』、『助動語解』、擬声語と感動詞を紹介する『北京官話萬物聲音附感投詞』や『北京語の味』などがある。それらの資料における言語の研究は一定の研究価値をもつであろう。

中国語教育史の角度からみると、近代日本の中国語関係書は当時の中国語を記録しているという特徴を持つ。日本の中国語教育における中国語の取り扱いの実態に関する研究の意味も見られる。それらの資料における言語の語音、語彙、文法の実態及び特徴を検討することは近代日本の中国語教育における中国語の特徴を知り、また中国語教育の状況を推察し当時の中国語の実態を知ることにも役立つ。さらに、そのような中国語は日本人が持っていた中国語に対する認識を反映する点で、研究の意義を持っていると思われる。そのため、それらの資料に現れる言葉を手掛かりに中国語の特徴を究明するのは、一つの研究方法となりうる。そのため、筆者は代表的な中国語関係書におけるある言語現象（語彙の特徴）を考察することを通して、近代日本の中国語関係書の言語の全般的な状況を把握する。

0.3.2　中国語関係書の言語研究の現状－語彙研究の提起

本小節は中国語関係書の言語研究の現状を考察し、その中の問題点を指摘することに基づいて、中国語関係書における語彙という研究方向を提起する。

0.3.2.1　中国語関係書の言語研究の現状

（1）日本側の中国語関係書の研究状況

近代日本の中国語教育に関する研究は初期には中国語の教育史を中心とする特徴が見られる。例えば、中国語関係書研究の初期の代表者とされる六角恒廣は中国語教育史の角度での考察を主とする。六角の代表作の『近代日本の中国語教育』（淡路書房 1961）、『中国語教育史の研究』（東方書店 1988）、『中国語教育史論稿』（不二出版 1989）、『中国語教本類集成』（不二出版 1991）、『中国語教育史稿拾遺』（不二出版 2002）などは基本的に中国語教育についてのものである。六角の他、波多野太郎（『中国語学資料叢刊』不二出版 1985）や安藤彦太郎などの研究者も主に中国語教育史の関連研究を行っている。これらの研究は本論で中国語関係書の分類や編纂の時代背景、目的などを知る研究にとって重要な参考資

料とされる。

近年は研究状況が変化している。近代日本の中国語教育に関する研究論文には、教育史の他、文献の編纂と言語特徴などを考察するものも多くなっている。中国語関係書の研究を視野に入れて、その中の言語現象を検討する論文が増えているのである。音韻の研究、品詞（副詞、形容詞、語気詞など）の研究、語彙の研究の成果が次々と出ている。一方、中国側の業績も顕著であるが、未開拓の分野もまだ存在し、全面的かつ系統的な中国語教育の研究はまだ形成されていない。これらの研究現状を知るために、以下に日本と中国の研究状況をみる。

中国語関係書の研究は、中国より日本のほうが早くから着手した。テキスト及びその中の言語に関する研究が多く取り上げられている。特に『急就篇』、『官話指南』のような代表的な中国語関係書を中心とする研究論文が見られる。それらの資料の重要性について、六角恒廣（1994）[9]は「それら（中国語教育関係書ー筆者注）の大半は『官話指南』や『談論新篇』そして『急就篇』の形式や内容を模したものといっても、過言ではない」と述べている。まず、『官話急就篇』（1904）と『急就篇』（1933）は著者が同じで、宮島大八であり、発行所も同じで善隣書院である。『急就篇』は 1904 年に『官話急就篇』によって改訂されたものである。中国語関係書の発行状況から見ると、『官話急就篇』は 1904 年に『急就篇』が出版されるまで 127 版が刊行された。『急就篇』は昭和 20 年 10 月まで改訂された 71 版が発行される。

このように、『官話急就篇』や『急就篇』などのような代表的な中国語関係書は近代日本の中国語教育及び当時の中国語の実態を反映する点で、非常に重要な資料であることがわかる。そのため、代表的な中国語関係書（テキスト）の関連研究によって、その全貌の特徴を考察するのは有意義な方向である。例えば、言語研究の方面で、『急就篇』、『官話急就篇』、『官話指南』などの代表的なテキストに関する研究が多く見られる。那須清（1972）[10]が、『官話急就篇』、『急就篇』、『改訂急就篇』、『続急就篇』の語彙を詳細に比較している。那須清（1972）は、『官話急就篇』と『急就篇』における語彙を「名辞」と「問答」にわけてそれぞれ語の入れ替えや変更を整理し、北京官話を一般的な用語に改めたものが多いことを指摘して、「名辞」から「単語」への変化と単語の増補は基本的には極めて恣意的であり、大した意味がないと結論づけている。また、代表的な中国語関係書の版本と言語の特徴をめぐる研究ある。例えば、『官話急就篇』に関する板垣友子の一連の研究を見ると、「中国語教本『官話急就篇』の言語について」[11]、「中国語教本『官話急就篇』と『急就篇』の比較：「問答」の語彙変化」[12]、「中国語教本『官話急就篇』と『急就篇』における語彙の変化(1)単語」[13]などがある。氷野善寛（2011）[14]は語彙の引用と継承状況から、『官話指南』

[9]『中国語書誌』不二出版
[10]「『急就篇』の語彙」『文学論輯』第 19 号 北九州大学文学研究会 pp.1-29
[11] 2012『外国語学研究 』(13) 大東文化大学大学院外国語学研究科編 pp.59-69
[12] 2013a『中国語教育』(11). pp.46-66
[13] 2013b『外国語学研究』(14).大東文化大学大学院外国語学研究科編 pp.39-47

が『正音撮要』を踏襲している状況を指摘している。近代日本の中国語関係書の言語研究は様々な視点で始まったが、代表的なテキストを中心にする研究現状がはっきりと見られる。中国語関係書の言語研究は語彙、音韻、文法などの多様な視角で行うと同時に、もっと多くの関係書を入れる必要もある。

助詞、副詞、語気詞などの品詞、発音及びその表記に関する論文も多い。例えば、尹俊（2016）の「『北京官話伊蘇普喩言』に見られる副詞「所」について」[15]は品詞（名詞、動詞、副詞、感嘆詞など）の用例を分析することを通して教科書の語彙の特徴を論じたものである。山田忠司（2003）も「清末北京語の一斑－『燕語新編』を資料として」[16]において、中国語関係書の言語の特徴から当時の北京語の実態を探るために、『燕語新編』を、それと同時代の資料である『燕京婦語』と比較している。結論として、『燕語新編』の言語は北京語であるが、「北京語と言ってもそれは均質的なものではないことが窺える」と指摘した。また、中国語の声調現象を研究した李無未（2004）の「清末期の日本人学者による北京官話の声調認識—四種類の日本人学者編集の中国語の辞書と教科書を手がかりに」、中国語の発音の表記方法を検討した張照旭（2013）の「『日清字音鑑』の中国語仮名表記について」、張照旭（2014）の「明治期中国語教科書における中国語カナ表記についての研究」などがある。それらの研究は様々な角度で、特定のテキストをめぐって中国語関係書の言語の一面を展開しているものである。近代日本の中国語教育における多様な発音及びその表記に関する考察は当時の中国語の実態を知るための欠かせない方面である。しかし、現時点日本には中国語関係書の全面的な研究が少ないと言える。そして、中国語関係書の言語研究のものは更に足りないため、先行研究の方向と視点で、その研究を進める必要がある。

このように、日本側では、中国語教育史の研究と同様に、中国語関係書の言語の研究も早くから始まった。言語の全般的特徴は共時・通時の視点で、発音、語彙、文法などの面から行われていた。語彙の研究状況から言うと、研究視野に入れられた品詞或いは語群は全面的ではなく、まだ触れられていない中国語関係書も多く残っている。それに、中国語関係書における語彙の全般的な様子がはっきりしていない。

（2）中国側の研究状況

中国で、中国語関係書の本格的な研究が始まったのは近年のことである。王順洪（1989）の「日本漢語教育的歴史与現状」は近代日本の中国語教育を論じたものである。王順洪は六角恒廣の『中国語教育史の研究』（1988）[17]と『中国語書誌』（1994）[18]を翻訳し、「六角恒廣的日本近代漢語教育史研究」（1999）[19]などの論文を書いた。これらは日本側の初期の研究と同様、ほとんど教育史関連のものである。また、研究がいくつかの代表的な文献に集中しているため、他の多数の中国語教育の関係書はまだ研究視野に入っていないようで

---

[14]『官話指南』の来歴の一端—『正音撮要』との関係について」『関西大学中国文学会紀要』（32） pp.43-71
[15] 大東文化大学大学院外国語学研究科『外国語学研究』（17） pp.125-134
[16]『文教大学文学部紀要』17(1) pp.23-35
[17] 中国語の訳本は『日本中国語教育史研究』（北京語言大学出版社 1992 年）である。
[18] 中国語の訳本は『日本中国語教学書誌』（北京語言大学出版社 2000 年）である。
[19]『漢語学習』第 4 期 pp.62-64

ある。

近年、中国語関係書の文献編纂の概況に関する研究は、頻繁に見られる。李無未・陳珊珊（2006）[20]は北京官話教科書の種類、書物としての体裁、内容と教学方法、日本の中国語教科書の編纂史における位置づけなどを検討した。李無未・李逊（2007）の「中国学者与日本明治期中国語教科書」[21]では、多くの中国人の学者は教科書の著者、校正・審査者、共著者の役割を担っていると述べている。楊杏紅・張娜（2013）は「日本明治時期北京官話口語課本的編写特点」で、日本の北京官話教科書を、唐話を踏襲したもの、『語言自邇集』を底本にして編纂されたものと新作のものに分けて検討している。そして、11 点の明治時代の北京官話教科書から 202 語の口語の語彙を取り出して、語彙が持つ北京語の特徴を指摘し、その変化状況を論じている。これらの研究には関係書における言語の状況及びその収集方法・来源に関する内容が見られるため、中国語関係書の概況を知る点で、本研究の参考としうるものがある。

語彙、文法の面で展開された研究も多くある。例えば、江藍生（1994・1995）の「『燕京婦語』所反映的清末北京話特色（上・下）」[22]と孫錫信（1997）の「『官話指南』語法拾零」[23]がある。前者は日本の女性を中国語学習者の対象とした北京語の教科書である『燕京婦語』の語音と文法の状況を考察し、後者は南京話教科書である『官話指南』の文法の特徴を分析している。これらの研究は個体のテキストの全般な言語特徴を考察したものである。語彙の特徴に注目する研究が数多く見られ、テキストの分析や対照研究を更に幾つか取り上げると次にようである。張美蘭（2007a）[24]は『語言自邇集』が北京官話の語彙の発音、意味を記録しているため、当時の言語の実態を詳細に写しているとしている。張美蘭（2011）[25]は日本、朝鮮、ヨーロッパの中国語教育史、『語言自邇集』、『京語会話』、『官話指南』、『官話類編』などの中国語関係書における語彙・文法・品詞をめぐって、明清時代の中国語教育の研究を展開している。張美蘭は、明清時代の中国語に関する従来の研究は中国本土の文献資料が利用される一方、外国の中国語文献が利用されることは音韻学を除くと、少ないと指摘した。陳明娥・李無未（2012）[26]は日本の明治期の 10 点の官話教科書を材料に、北京語の語彙を統計して、1510 語の品詞の特徴を分析している。陳明娥・李無未（2012）は、考察の結果、それらの教科書の中の口語語彙は当時の社会の風俗文化を反映し、北京語の実態を記録したものと認められるとして、その 10 点の官話教科書は北京語の伝承と発展を反映した信頼に価する資料であるとしている。また、楊杏紅は北京官話の研究現状における問題点を考えると、中国語関係書の言語の共時的研究と歴史的な言語変化の研究、

---

[20]「日本明治期的北京官話会話課本」『世界漢語教学』pp.121-132

[21] 国際漢語教学動態与研究』第 3 期

[22]「『燕京婦語』所反映的清末北京話特色（上）」は『語文研究』1994 年第 4 期 （pp.15-19）に、「同（下）」は『語文研究』1995 年第 1 期 pp.10-16 にそれぞれ掲載された。

[23]『漢語歴史語法叢稿』漢語大詞典出版社

[24]「『語言自邇集』中的清末北京話口語詞及其貢献」『北京社会科学』第 5 期 pp.83-88

[25]『明清域外官話文献語言研究』東北師範大学出版社

[26]「清末民初北京話口語詞汇及其漢語史価値ー以日本明治期間北京話課本為例」『厦門大学学報』第 2 期 pp.56-63

日中文献の対照・比較研究が重視されるべきであると指摘している。陳明娥（2014）[27]は14 点の北京官話教科書の語彙を調査して、語彙特徴の現状と歴史的な変化、語彙の分野と分布状況、書き言葉と話し言葉を区分する教学意識、ヨーロッパからの外来語の使用状況などを考察している。他に、徐麗（2014）[28]は『官話指南』、『談論新篇』、『官話急就篇』に現れる語彙の社会的・文化的背景の他に、その中の語音認識、声調現象、品詞（介詞、代名詞、助詞）の特徴、3 種類の文型(疑問文、処置文、受け身文)から清末の北京官話の文法の特徴を検討している。このように、多種類の中国語関係書を考察のテキストにし、それらの言語特徴を考察するのは、中国語関係書の全般的な状況を知るための実行可能の方法であろう。このようなものは先行研究において一般的であると言える。

以上の他に、ある品詞を中心にし、その特徴と使用状況を論じた研究も多くある。例えば、孫錫信（1999）は『近代漢語語気詞—漢語語気詞的歴史考察』で、清末の語気詞状況について『官話指南』の用例を取り出して概説している。同様に、李無未・楊杏紅（2011）[29]は多くの中国語教科書と同時期の中国の文献の中の語気詞を対比しつつ論述し、この中で語気詞の語形、発音、用法上の差異及び原因を説明し、「呐」「咯」の分析を通して日本の官話教科書における語彙の特殊性を論説した。楊杏紅（2013）の「日本明治期北京官話課本中的児化詞」[30]は児化語を対象にし、日本の中国語教科書と同時期の中国の文献『児女英雄伝』を比べて、中国語教科書の児化語が少なく、児化語形態構造の種類が少なく、語義の機能が明確であり、個別な児化語の使用状況(例えば、『官話指南』と『北京官話談論新篇』の中の「今儿・今儿个」)が見られると指摘した。他に、斉燦（2014）の「19 世紀末南北京官話介詞、助詞比較研究—以『官話指南』『官話類編』注釈為例」[31]は『官話指南』と『官話類編』の 2 書における前置詞、助詞の統計・比較研究を通して、南京官話と北京官話との相違を探求した。品詞を中心にした中国語関係書の語彙研究或いは対照研究はある品詞の現状及び特徴を全面的に明らかにしている点で、重要な研究方向である。現状から見ると、中国語関係書における品詞状況に関する研究には、系統的なものがあまりなく、触れられていない品詞が存在する。それゆえ、そのような品詞の研究を続ける必要がある。

音声・音韻の視点から中国語関係書の言語特徴を考察する成果も豊富である。張衛東（1998）の「威妥瑪氏『語言自邇集』所記的北京音系」は『語言自邇集』の北京語の音韻、声調、音節形態の特徴を詳細に論述し、この文献が北京語の現実を反映するものとして、重要な価値をもつと指摘する。張衛東（2002）[32]は『語言自邇集』（第二版）の「異読字音表」の研究によって、当時の漢字の多音現象、白話と文言の発音の分立現象、特殊な音韻

---

[27]『明治時期北京官話課本詞彙研究』厦門大学出版社

[28]「日本明治期漢語教科書研究—以『官話指南』『談論新篇』『官話急就篇』為中心」北京師範大学博士学位論文

[29]「清末民初北京官話語気詞例釈—以日本明治期北京官話課本為依拠」『漢語学習』第 1 期 pp.96-103

[30]『長春師範大学学報』第 1 期 pp.41-45

[31] 北京外国语大学修士論文

[32]「従『語言自迩集·異読字音表』看百年来北京音的演変」『廣東外語外貿大学学報』第 13 巻第 4 期 pp.15-23

の存在現象を論じている。趙小丹（2006）の「『日清会話辞典』語音研究」[33]は『日清会話辞典』の編纂体裁と発音表記の特徴を検討し、テキストの音韻体系の要素（声母、韻母、声調）を詳細に検討し、日本語の片仮名とローマ字の表記が当時の北京官話の音韻体系を反映していたと述べ、語音の問題と研究の価値を全面的に論じている。李無未・邸宏香（2007）[34]は官話教科書の種類、北京官話の音声的特徴、発音表記の符号と教科書の内容の設置などの面から中国語の語音教科書と辞書・参考書類を考察し、教科書の価値を説明して、関係書の研究の現状の問題点を指摘する。例えば、編纂の方法などが不備であり、教学の理論と方法が単一であり、発音表記の方法が比較的古いことである。多くの中国語関係書が記録していた中国語音韻と発音表記方法及びそれらに対した詳細な説明によって、近代日本の中国語の実用語教育において、音声・音韻が突出した位置に置かれていることがわかる。ゆえに、その状況に関する研究には豊富な資料があり、その意義も認められる。しかし、関連の先行研究は主に辞書をめぐるもので、中国語関係書の一般的な学習書を中心としたものが少ない。一般的な学習書などを研究対象にして、音声・音韻の考察を行うことは中国語関係書における実用語の実態を明らかにすることに対して同様に有意義な方向であろう。

上に言及した張衛東、李無未などの研究者は近代日本の中国語関係書の研究の資料としての信憑性と研究の価値を喚起し、言語面の具体的な研究を実施した。例えば、品詞（動詞、名詞、語気詞、助詞、介詞、虚詞など）、語音、語義、方言・外来語の個別研究と比較研究である。文法機能を持つ語彙の考察として、張美蘭・陳思羽（2005）[35]は中国語関係書の『語言自邇集』『官話指南』『談論新篇』と朝鮮の中国語関係書などにおける語気詞の「～的話・呢・哇・啊・哪・呀」などを取り出し、助詞類の表記語彙として、それらの具体的な用法を検討している。李無未（2008）[36]は『支那文典』という特定の教材の中の語例を対象にし、『文学書官話』との比較を通して、両書の口語文法の特徴を検討している。文法研究の作品である楊杏紅（2014）の『日本明治時期北京官話課本語法研究』[37]は 10 点の明治期の中国語関係書を対象とし、語彙と口語の文法の特徴を考察している。このような研究は特定の語彙現象或いは文法現象を切り口として代表的な中国語関係書における言語特徴を分析したものであるが、実際中国語関係書における言語の全貌、または、当時の中国語の実態を探究するものと言える。現時点の研究現状から見ると、その研究結果を実現するために、中国語関係書の範囲を広げ、もっと多くの新しい研究方向を取り入れる必要がある。

以上は主に語音・語彙・文法、教科書の性質と編纂に関する先行研究の代表的な研究成果を取り上げながら、中国語関係書の言語研究の現状を概観し、同時に先行研究の分野、

---

[33] 吉林大学修士学位論文
[34]「日本明治期北京官話語音課本和工具書」『漢語学習』第 6 期 pp.88-94
[35]「清末民初北京口語中的話題標記—以 100 多年前幾部域外漢語教材為例」『世界漢語教学』第 2 期 pp.63-73
[36]「日本漢語口語語法研究的先声—読 1877 年刊行的『支那文典』」『語言学論叢』第 37 輯 商務印書館
[37] 厦門大学出版社

視点、方法を明らかにした。それによって、本研究の方向、問題点、解決方法の提起に対するヒントを与えることがなりうる。

0.3.2.2　語彙研究の方向の提起

0.3.2.1 で紹介したように、中国語関係書の言語の先行研究が様々な視点と分野からなされているとはいえ、多くの問題点が残っている。李無未（2007）の「日本明治期北京官話教科書研究的基本問題」は日本側の六角恒廣、倉石武四郎、安藤彦太郎の文献収集・整理・研究、中国側の王順洪の翻訳研究、張美蘭と李無未との文献の関連研究を考察しながら、中国語関係書の研究を概観している。李無未は北京官話の先行研究の成果を紹介して、現在の研究の問題点を十の基本問題[38]として指摘する中、第一点として、中国語関係書の言語意識に対する論述が不充分であることを挙げている。この指摘は中国語関係書の言語の先行研究にも見られる。そのため、中国語の語音、文法、語彙などをめぐる研究が進められる必要がある。また、使用者の角度での教科書の考察、テキストの編纂の特徴と踏襲関係の分析、教科書における書き言葉と話し言葉の関係に対する認識などの考察も進められる必要もある。

陳明娥（2014）は北京官話教科書の教学研究と外来語研究の視点で、教科書の中の語彙の特徴を説明して、北京官話資料の研究の現状の問題点を次のように指摘する。①言語研究が足りない：膨大な量の中国語関係書の文献上の価値、言語特徴などに関する関連研究はわずかである。その中には、全面的な言語研究は少なく、特定のテキストを中心とするものが一般的である。教科書における言語の性質をさらに究明する必要がある。言語の共時的な変化研究の面で、中国側の文献との比較研究は行われていない。②域外の中国語関係書を発掘し収集することに力を入れることも重要である。さらに多くの文献がテキスト

[38] 李無未（2007）が提起した十の基本問題はそれぞれ次のようである。一、语言意识，比如语音意识、语法意识、词汇意识阐发不够（一、言語意識、例えば語音意識、文法意識、語彙意識に対する検討が足りていないー筆者訳）。二、日本明治时代北京官话教科书之间的继承与创新关系研究停留在表面上，仅以体例研究代替内在关系研究（二、日本明治期の北京官話教科書における踏襲とイノベーションの関係に関する研究が表面にとどまり、教科書の体裁の問題のみを内在関係の研究に替えているー筆者訳）。三、对部分日本学者编撰北京官话教科书旨在进行文化侵略的目的性认识不足（三、一部分の日本人学者が北京官話教科書を編纂した目的が文化的侵略を目指していたのである。これについての認識が不足しているー筆者訳）。四、没有能够从教材体现的编写“类别”特点出发认识其价值（四、教科書の編纂の「類別」によって教科書の価値を認識することができていないー筆者訳）。五、很少从语言学习者的角度观察教材的实用性特点以及教学效果（五、言語学習者の角度から教科書の実用的な特徴と教学の効果を考察する研究が非常に少ないー筆者訳）。六、汉字文化圈视野内日本学者编写教材的特点挖掘不深（六、漢字文化圏の視野で、日本人学者の編纂した教科書の特徴に対する考察が深くないー筆者訳）。七、日本北京官话教科书本土化的历史进程线索需要进一步摸清（七、日本の北京官話教科書が日本式なものに変化した歴史的過程の情報をもう一歩明らかにする必要があるー筆者訳）。八、日本学者对口语与书面语的关系的认识还需要甄别，汉语书面语与口语的距离在清代是非常明显的（八、日本人学者が持つ話し言葉と書き言葉との関係に対する認識を鑑別する必要もある。清代に中国語の書き言葉と話し言葉の差異が非常に明らかであるー筆者訳）。九、对特定专门化领域北京话教科书编写的重视，比如商业、军事等，带给今天人的认识需要理清（九、特定または専門の分野（例えば、商業、軍事などがある）の北京官話教科書の編纂を重視することが再認識しなければならないー筆者訳）。十、散见在中国各地的日本明治时期北京官话教科书还有待于进一步收集与整理（十、中国の各地に散らばっている日本明治期の北京官話教科書を収集・整理する必要があるー筆者訳）。

と言語の研究の分野に取り入れられなければならない。また、楊杏紅（2014）、徐麗（2014）なども、同様の指摘をしており、大量の教科書や、辞書などがまだ研究されておらず、より細かい視点で言語研究を進める仕事が山積しているため、今までの研究成果は体系的になっていないとしている。研究現状から言うと、筆者は語彙の研究について手つかずと言ってもよいと思う。例えば、中国語関係書における語彙が持っている日本人学者の使用意識、語彙の歴史的な変化の特徴に関する研究なども不十分である。特定の品詞を課題にした研究である李無未・楊杏紅（2011）、楊杏紅（2013）などのようなものは少なく、擬声語、感嘆詞、形容詞などを中心にする研究はない。他に、中国語関係書の個別的研究と総体研究にせよ、通時的な研究と共時的な研究にせよ、さらに多くの資料を取り入れて、もう一歩それらの内容を考察する必要がある。語彙の調査と比較の研究が重視されるべきである。

近代日本の中国語教育の実用目的に応じる言葉はネイティブの中国語そのままではなく、日本人学者たちの経験主義に加工されたものである。そのため、それらの言葉がどの程度の確実さ・真実さで記録されたのかは検討する必要がある。言語研究の問題点としてそれを具体的に言えば、それは中国語関係書における語彙はどのようであるか、またそれらの資料は当時の北京語口語の実態を反映することで全面的であるかどうかという問題である。この点について、陳明娥（2015）は次のように述べている。

> 这些域外官话教材究竟能在多大程度上体现当时的北京官话？又能在多大程度上反映当时北京官话口语的面貌？母语国家的教学意识和教学策略、编纂者的身份和语言、教材本身的性质等因素究竟会产生多大的影响？（これらの域外の官話教科書は一体どのぐらい当時の北京官話が現れているか？またどのくらい当時の北京官話の口語の実態を反映しているか？ある言語を母語とする国の教学意識と教学方法、編纂者の素性と言語の特徴、教科書の性質などの原因はどれぐらい影響を及ぼすか）[39]—筆者訳。

上に指摘した問題は近代日本の中国語関係書における中国語が現実の中国語を現す度合い、中国語関係書の言語の特徴が持つ時代性、言語を記録する資料としての信憑性の度合いはどのようであるかを表す。本論文はこの問題意識を持ちながら、中国語関係書の言語の研究を提起し、それらの中の語彙の特徴を考察する。

0.3.3　中国語関係書における擬声語の概況－擬声語研究の可能性

中国語関係書においては、擬声語が言語教育の一面として注意された。関係書の内容は研究の対象として、言語研究の可能性を提供する。また、それは近代日本の中国語教育においてどのような教育目的を持っていたかが問題になる。そのため、本節では中国語関係書の擬声語が持つ研究の可能性を指摘してみる。

[39]『国際漢語学報』p68

0.3.3.1　中国語関係書における擬声語

近代日本の中国語教育は実用語の教育である。この特徴は近代日本の中国語関係書にも反映されている。約 1437 点[40]の近代日本の中国語関係書には、学習書、時文・尺牘、文法・作文、発音・字音、語彙・辞書などの種類があり、中国語の発音、語彙、文法に対する全面的かつ繊細な記述もある。

本論文の考察は主に、『中国語教本類集成』、『中国語学資料叢刊』所載の中国語関係書教科書をめぐって行った。資料中における擬声語と感嘆詞の扱い方は、文法の教科書では意味や語形の説明が中心になるのに対して、（一般）学習書の教科書[41]の場合は一般に用例を会話文、文章、散語の体裁で掲げている。（一般）学習書の教科書の例を取り上げると、中川敬義（1880）『北京官話伊蘇普喩言』、福島安正（1886）『自邇集平仄編四聲聯珠』、廣部精（1892）『亞細亞言語集』（再版）、瀬上恕治（1896）『萬物聲音』、金国璞・平岩道治（1898）『北京官話談論新篇』、中西次郎（1910）『四民実用清語集附諺語』、宮越健太郎・内之宮金城（1936）『最新支那語教科書讀本篇』、倉石武四郎（1939）『倉石中等支那語』、大山聖華（1941）『北京語の味』などがそうである。これらのうち、瀬上恕治（1896）、中西次郎（1910）、実藤惠秀（1933）、宮越健太郎・内之宮金城（1936）、大山聖華（1941）は、独立の章節を設けて擬声語の発音を注音符号で表記し、それらの擬声語が模倣する自然音を付けている。

中国語関係書の語彙現象からみると、擬声語は独立の言語現象として中国語教育において中国語の教育・学習の目的意識を持ちながら注目されている。ここでは、代表的な中国語関係書を取り上げ、それらの中の擬声語の関連内容を次のように述べる。

村上秀吉（1893）『支那文典』[42]は簡単に「間投詞ハ啊、罷、咳、哎喲、罷了、噫、嗚呼等ノ詞ヲイフ」（p68）とし、それらの感嘆詞の用例をあげて、その意味を説明している。信原継雄（1905）『清語文典』[43]（p90）は、感嘆詞と擬声語の定義、分類、用例を村上（1893）より詳しく述べている。これらの他、実藤惠秀（1933）『漢文基準支那現代文捷徑』[44]（p201）、何盛三（1934）『北京官話文法』（p290）[45]と宮越健太郎（1941）『華語文法提要』[46]（p115）も、感嘆詞の特徴に言及している。近代日本において外国語として教授された中国語という視点からみて、感嘆詞の使用状況は見返すに値すると思う。

---

40 六角恒廣（2001）　不二出版 p97

41「学習書」の定義については本論文の 1.2 を参照。「一般学習書」は『中国語教本類集成』の中で、中国語関係書の 1 種類である。「一般学習書」は『中国語関係書書目』に載る「学習書」と大体同じである。本論文は一般学習書という言い方を採用する。また、上記の分類方法と少々異なるのは『中国語学資料叢刊』である。『中国語学資料叢刊』は中国語関係書を白話研究篇、方言研究篇、尺牘篇、社会風俗・官話翻訳古典小説篇、精選課本篇などの種類に分けている。白話研究篇と精選課本篇のものはそれぞれ『中国語教本類集成』の文法書、一般学習書と完全に対応していない。例えば、白話研究篇には、文法書のほかに、一般学習書も見られる。

42 村上秀吉（1893）　博文館

43 信原継雄（1905）　青木嵩山堂

44 本書は「一般学習書」（『中国語教本類集成』第二集第三巻）であるが、総論篇、読本篇、文法篇、参考篇からなる。そのため、本節では文法書として扱うこともある。

45 何盛三（1934）　東学社

46 宮越健太郎（1941）　外国学院出版部

さらに言うと、実藤惠秀（1933）と何盛三（1934）は、感嘆詞の下位分類として擬声語[47]を取り上げている。実藤（1933）は用字の特徴を「感歎詞はすべて音表文字であるが故に，すべて口偏を用ひてあり，且つ！が附いてゐるから一見區別できる」と説明して、更に一歩擬声語に関して「人間以外の物の音を示すにも大部分は口偏を用ひて音表文字たることを表わしてゐる」と述べている。つまり、実藤は感嘆詞は人の呼びかけ、応答を表すものと、人間以外の物の声を表す擬声語を含むとしている。何盛三（1934）は間投詞（感嘆詞の意味）を「感動ノ聲」（狭義の間投詞—原文の注解）と「音響ノ模倣」（擬声語—筆者注）とに分類して記述しており、感嘆詞の定義を詳細に記している。他に、瀬上恕治（1906）の『北京官話萬物聲音附感投詞及發音須知』[48]（以下『萬物聲音』と略する）でも、感嘆詞と擬声語を同一視している。一方、大山聖華は、『北京語の味』[49]の中で、擬声語を独立の節にして取り扱っている。

このように、中国語関係書において擬声語は近代日本の中国語教育の内容として注意されているが、近代日本の中国語関係書の中で、どのように位置づけられたのかが不明である。具体的にいうと、中国語関係書において、擬声語への関心はどのところに力点を置いたのか、その目的が何であったのか、またその実態は近代日本の中国教育の目的とどのように関わっていたのかが未解明の問題である。

これらの問題を解決する前に、近代日本の中国語関係書の中の擬声語の位置づけを明らかにする必要がある。それによって、本研究は擬声語研究の可能性を検討して、中国語関係書における擬声語の形態構造、語音、語義の特徴と、近代日本が持つ中国語の音韻などに対する認識の研究に参考となる材料を提供できると期待する。次に、中国語関係書における擬声語の概況を具体的な用例、表記方法などから紹介する。

（1）　擬声語の用例の概況

中国語擬声語がどのような言葉であるかに対する歴史的な認識というと、中国で最初に文言文の文法を体系的に著述した馬建忠の『馬氏文通』（1898）が思い出される。それは中国語擬声語に触れている。その中に、「凡實字以貌動靜之容者，曰狀字」（289 頁）と「狀字用以狀形肖聲者」（294 頁）という内容がある。その中に「砰磅・期期・卒卒・洞洞」などの擬声語の例がある。

『馬氏文通』と同時代の中国語関係書においては、大部分の擬声語が会話類、短文・散語類の中の語例として出る。例えば、『北京官話文法』の「喵喵　猫の鳴聲」や、「嘎吱嘎吱　皮鞋にて歩くカチカチと云う様な音聲」、「哈哈 笑聲」などがある。『漢文基準支那現代文捷徑』では、「咿啞　櫓の聲」、「咕咕咕咕　鳩の聲」、「丁零零　鈴の聲」などの擬声語を「人間以外の物の音を示すにも大部分は口偏を用ひて音表文字たることを表わしてゐる」

---

47 実藤惠秀（1933）には、「擬声語」という名称はない。

48 本書では間投詞と擬声語の多くの語例を集めている。内容は見出し語及び表記方法と用例である。語彙の表記方法はウェード式ローマ字表記、官話合聲字母とカタカナの三つである。

49 大山聖華（1941）中華法令編印館。『北京の味』の「研究篇」の中にある「擬音一覧」には、自然音を表わす 89 種の擬声語が挙げられている。本論文の「自然音」という言葉は擬声語の模倣対象のことであり、すべての現象の声または音を指す。

としている。

他に、擬声語を独立した語群とし、品詞の種類を言明していない関係書もある。例えば、瀬上恕治（1906）『萬物聲音』、中西次郎（1910）『四民実用清語集附諺語用法』[50]、宮越健太郎・内之宮金城（1936）『最新支那語教科書讀本篇』[51]、大山聖華（1941）『北京語の味』などである。これらのテキストは擬声語の具体的な語例を多く収集し記載しているだけである。

上に記した中国語関係書は筆者が『中国語教本類集成』と『中国語学資料叢刊』[52]を調査して得たものである。それらは中国語関係書の全般からすると、わずかであるが、これらを代表的資料として、当時の日本人の中国語擬声語に対する基本認識の一端を垣間見ることができる。ここに、上に出した代表的な中国語関係書において見られる擬声語[53]のいくつかを掲げてみよう[54]。

①村上秀吉（1893）『支那文典』（p68）

間投詞ハ啊、罷、咳、哎喲、罷了、噫、嗚呼等ノ詞ヲイフ。(例)啊ハコレ叫呼的記號ニシテ天父啊求爾聽我的禱告。罷ハコレ使令的記號ニシテ擡轎罷。咳（哎）喲ハコレ驚懼異怪的記號ニシテ咳喲賊來到了怎麽樣罷。罷了ハコレ夠數的記號ニシテ喜歡ト喜歡セサルトヲ論セサルモノ罷了我現今也進了學了。

②信原継雄（1905）『清語文典』（p90）

感歎詞とは、情緒の切迫した時、自然に出でる聲である。日本語のあゝアオヤーの如き類が是に屬する。

心理学に於ては、情的意識を、三つの段階に分けて、左の如くして居る。

一、単元的（又、感應とも云ふ）

二、再現的（又、情緒的とも云ふ）

三、構成的（又、情操とも云ふ）

して、感應が基で聲を發せぬことは無いが、（病人の呻き聲の類）之れは單語として見るべき者でない。情操が基と成つても、聲は發しるが（詩と成り歌と成つて出るで有らう）之れも単語の中へは入れられぬから、つまり、感歎詞は情緒のみが基で出る聲らしい。

そこで、情緒の分類は、直ちに移して、感歎詞の内容分類を「主我的のもの」「主他的の

---

50 大阪屋号書店。本書は中国語の日常用語と基本的な会話文を録し、日本語の訳文を添えている。

51 本書の上巻の第三十四課「聲音」という部分は十数個の擬声語及び対応する自然現象を取り上げる。

52『中国語学資料叢刊』は『白話研究篇』と『『燕語社會風俗官話翻譯古典小説精選課本篇』を含む。

53 中国語関係書には、一般的に擬声語と感嘆詞（中国語関係書には間投詞とも呼ばれる）の品詞の種類が区分されていないまま出された例文が見られる。そのため、下文に取りあげた中国語関係書における擬声語の引用文と一緒に、感嘆詞の内容も挙げている。

54 下文に取り出した関係書の他、『萬物聲音』と『北京語の味』も代表的なものである。それらは本論文の第 4 章で詳細に紹介するため、ここに上げなかった。

もの」「中性のもの」にわけている。

主我的感歎詞とは、自身に對して、直接に快不快を感ずる場合に泄れ出る詞である。(例：嚄ホー，嗐ヘイ，呦ヨー)。主他的感歎詞とは他人に對する愛情や同情や其の反對の情緒やの發動する事に因つて、泄れ出る歎聲である。(例：啊あー，唉アイ，哼ホン)。中性的感歎詞とは、主我や主他の如き特殊情緒より以外の一般的情緒を表はすのである。(例：啊アー、噯喲アイ　ヨー、嘿ヘイ、敢請カンチン、可不是麼コブーシマ、是シー。)

心理学に於て、情と云ふ者の研究がまだ不充分で、其の分類も、もの足らぬ點があるのだから其の情の代表者たる此の感歎詞の分類も随つて完全な事は出来にくいのみならず、その微妙なる用法に至つては到底科学的に説述する事は出来ぬ。そこで通例ならば外形からと内容からとの二方面から分類するのであるが徒らに繁を増すのみであるから、今は以上で止めて置く。

③実藤惠秀（1933)『漢文基準支那現代文捷徑』(p201)

感歎詞はすべて音表文字であるが故に，すべて口偏を用ひてあり，且つ！が附いてゐるから一見區別できるが大體の見當だけ示す。

（擬声語）人間以外の物の音を示すにも大部分は口偏を用ひて音表文字たることを表わしてゐる。

感嘆詞 15 語：嚇啦 喜んだ時（ほら)、哈哈　笑ふ聲（はは…、噲 喂　呼ぶ時、喏　長上に應へる時（はい)、啊　應への時、啊呀　驚異の時（おや、まあ)、嗄唷　驚異或いは疲労の時、 咳　 驚異の時、噯呀　憂慮の時（あ あ)、哼　憂慮或は輕侮、唉　憂慮或は疑惑、啊　疑惑を解いた時、嗄　呸　増惡の時、嘿　呵斥の時。

擬声語 10 語：(例）咿啞（櫓の聲）呷呷呷呷（家鴨の聲）丁零零（鈴の聲）など。

④何盛三（1934)『北京官話文法』(p287)

間投詞とわ感情の發露又わ自然に因り發する聲である。從つて嚴密なる意味にてわ詞でわない、只感情の聲若くわ自然の響である。間投詞わ其性質上文法關係以外に在りて、説話の始半終等随所に其感情の發露と共に發せらるる場合が少ない。

間投詞わ其構造により（一）本来の間投詞で何の字義をも持たぬものがあるし、(二）他の若くわ成句を間投詞として用うるものがある。本来の間投詞わ更に其性質に從い下の如く彙類して、各用法を説明する。

一、感動ノ聲（狭義の間投詞）—即肉體的感覺、若くわ精神的情操の表示であつて更に便宜上其各場合を下に分説す。(ア）驚異を表すもの—噯呀 噯喲 咳 嚄 啊等。(イ）疑の意を表わすもの、—噯等。(ウ）疑の解けたる意を表わすもの、—啊等。(エ）嘆聲—噯呀アイア哎アイ 咳ヘア　哼オン等。(オ）厭惡の情を表わすもの、—噯アイ　呸ペイ　呸　ピイ等。（カ）招呼の意を表すもの—嘿ヘイ。(キ）物事を想起したる時等に發するもの—呦。(ク）

回答の意を表わす聲―喳（下僕が主人に對するもの）啊（一般の人の問答うるもの）　哼（同等の人又わ下の人に對して答うる）。

二、音響ノ模倣、―即動物の鳴聲、其他あらゆる音響の模倣である。人の笑聲、哭聲、叫聲の模倣亦之に屬する。喵喵　猫の鳴聲、汪汪　犬の鳴聲、咩咩　羊の鳴聲、嘞嘞　豚の鳴聲、嘎嘎　猿の鳴聲、嗞嗞 鼠の鳴聲、唶唶　鵲雀の鳴聲、[illegible]　家鴨の鳴聲、呱呱　鳥の鳴聲、嗡嗡　蚊蝿等の鳴聲、嗡嗡哇　蟬の一種の鳴聲、咕嘟咕嘟　熱湯のたぎる音、欻　沸きたる油に物を浸けたる時の音、吧叉　陶器玻璃等のバチヤツと粉碎する音、嘩啷　同上音ガランと云ふ音、嘎吱嘎吱　皮鞋にて歩くカチカチと云う様な音、咕咚咕咚コトンコトンと云う足音など、咯嗒咯嗒　時計のカチカチと云ふ音、唰啷唰啷　サラサラなど云う秋風などの音、轟轟　雷の音など、哇哇 小兒の泣聲、哈哈 笑聲。

⑤宮越健太郎（1941）『華語文法提要』（p115）

歎詞は句外に獨立する点に於て助詞と異なるのである。單に感情を發露する聲音なるが故に詞の本質上は何等の説明すべき意義を有しないのであるが、便宜上常用歎詞（借文字）を以て其一部を説明する事にする。（１）驚呀賛嘆を表すもの。啊（阿 啞 呀）（a）ㄚ、啊呀(aya) ㄚㄧㄚ、哦（喔 嚄 呵）（o）ㄛ、哦喲（喔喲 呵侑）（oyo）ㄛㄧㄛ。（2）感傷痛惜を表すもの。噯（哎 唉）（ai）ㄞ、噯呀(哎吓)（aia）ㄞㄧㄚ。（3）歡笑譏嘲を表すもの。哈哈（haha）ㄏㄚㄏㄚ、呵呵（嚄嚄）（hoho）ㄏㄛㄏㄛ。（4）憤怒擯斥を表すもの。呸（pei）ㄅㄟ、哼（hêng）ㄏㄥ、啐（ts'ui）ㄘㄨㄟ。（5）呼喚應諾を表すもの。唷（喂）（wei）ㄨㄟ、嘿（hei）ㄏㄟ、哼（êng）ㄥ、呵（a）ㄚ。

上の内容から見ると、擬声語は中国語関係書において、中国語教育の重視していた語群の 1 つであることが見られる。それらは中国語教育或いは中国語の研究にとって有意義な言語の材料である。

（2）擬声語の記録方法と収集方法

中国語関係書は大体語音や、語彙、会話などの一つ或はいくつかを中心にして作られたものである。例えば、ある教科書は単語の内容（発音と用例）を中心にするもので、会話文と散語（即ち単語）を載せていない。一方、中国語関係書の中には、ただ会話と散語を詳細に記述し、中国語の発音が付いていないものもある。

擬声語の記録方法について、一般学習書と文法書に挙げられた擬声語の語例から見ると、擬声語の記録は語例と発音を重視する。擬声語を特に集めた『萬物聲音』や『北京語の味』などの一般学習書は言うまでもないが、『漢文基準支那現代文捷徑』や『華語文法提要』などの文法書も同様である。そのため、擬声語の教育・学習の力点は発音と語義にあるという傾向が見られる。なぜなら、擬声語は語の発音と意味が直接な模倣関係を持つという特徴の語群であるからである。そのため、表記文字より発音を記録することのほうが重要である。例えば、打銅鑼 ㄉㄨㄤ ㄉㄨㄤ（tuang tuang）、馬 ㄙ…ㄙ（s(ssû)…s(ssû)）、蛐蟮

（蚯蚓） ㄖㄦˋ ㄖㄦˋ (j(ih)êrhi j(ih)êrhi)、蚊子(蚊) ㄖㄧㄥ (jiêng) [55]は中国語擬声語の例であるが、これらのものは現行の音韻体系に外れている。中国語関係書において、この状況は稀である。中国語の語音で自然音を表すことから見ると、それは日本人が持つ中国語に対する認識の努力と見なされる。つまり、この現象から、中国語語音（発音）を習得しようという中国語教育の基本的狙いと、日本人の学者の中国語語音への認識の熱意を考察することができる。

0.3.3.2　擬声語研究の提起

中国語関係書の調査により、擬声語が近代日本の中国語関係書において注意されていたことがわかる。このことから、擬声語を中国語関係書の言語研究或いは近代日本の中国語教育の研究の視野に入れる可能性があるといえる。つまり、中国語関係書において擬声語は独立した語群とされ、近代日本の中国語教育において重要性が認識されていたのであることから、その原因と目的を解明する必要がある。また、時代的な教育目的に応じるための中国語教育の特徴が中国語関係書の言語に反映されるであろう。その研究方向で、中国語関係書における擬声語の現状に基づく問題点を取り出すことが可能であろう、従って、本研究は中国語関係書における擬声語の実態を考察の方向とし、擬声語の教育の目的及びそれと近代日本の中国語教育の関係を明らかにする。

0.3.4　中国語擬声語の研究現状

0.3.4.1　中国語擬声語の研究現状

中国語史の視点からは、擬声語の研究は古代、近代、現代の 3 つの時期に分けて行われている。更に中国語擬声語研究の時期からは、1898 年～1949 年頃、1950 年～1980 年頃、1980 年代以降の三期の区分方法が饒勤（2000）、呉校華（2008）などの研究で見られる[56]。饒勤（2000）は、重要な研究の成果と時期的研究状況によって擬声語の研究史の時代区分を行っている。1898 年というのは中国最初の文法著作の『馬氏文通』の刊行年 1898 年であり、1950 年からの第二期には代表的な中国語擬声語の研究成果が出ていて、1980 年代以降は中国語擬声語の研究が更に広い方向で展開されている。擬声語の研究方法については、共時・通時、比較、調査・統計・分析の手法により、語彙、文法、語義、音韻・音声、符号表記の考察の形で行われている。

擬声語の先行研究の状況を時期別に述べると次のようである。

第一期の 1898 年～1949 年は中国最初の系統的文法著作といわれる馬建忠（1898）の『馬氏文通』に始まる。この時期の研究は陳承澤（1922）の『国文法草創』、黎錦熙（1924）の『新著国語文法』、呂叔湘（1942）の『中国文法要略』、王力（1943）の『中国現代語法』などの文法書を主とするが、基本的に擬声語の品詞の属性と文法の作用を論述するもので

---

[55] これらは『北京の味』の例である。アルファベットのウェード式ローマ字表記は、『北京の味』の所載の注音符号とウェード式ローマ字の対応表を参照して筆者がつけた。

[56] 筆者の調べで、この区分方法は饒勤（2000）の「現代漢語擬声詞研究綜述」で初めて見られる。

ある。

中国語擬声語研究の第二期には、初の擬声語研究著作である耿二嶺（1986）の『漢語擬声詞』の他に、多くの現代中国語の研究書[57]と教材、廖化津（1956）・邵敬敏（1981）の論文などがあるが、第一期と同様、擬声語の品詞状況、修辞特徴、規範性の検討を主とする。また、朱德熙（1982）の「潮陽話和北京話重疊式象声詞的構造」は潮陽話[58]の「C_1V_1-C_1V_2-叫」式と北京話の「C_1V_1-C_2V_1-C_2V_2」式の重疊式擬声語を比較して、その異同を考察している。孟琮（1983）の「北京話的擬声詞」と馬慶株（1984）の「擬声詞研究」は形態構造、音韻構造特徴、意味分野などの角度で、より体系的な擬声語の研究を行うとともに、擬声語研究の方法と視点の新しい領域を拓いたことが注目される。

第三期に入ると、擬声語の品詞、形態構造、修辞作用の研究が盛んになる。例えば、石毓智（1995）の「論漢語的大音節結構」、王洪君（1996）の「漢語語音詞的韻律類型」、冉啓斌（2012）の「論漢語擬声詞中的邊音」、儲泰松（2012）の「普通話擬聲詞的語音規律及其例外」などの研究が出た。それらは、擬声語のある音韻現象（例えば、側面音 l の使用特徴など）、形態構造と音韻序列の関係（例えば、双声畳韻重言の擬声語がどのような音韻構造の特徴を持っているか）、擬声語の音韻特徴と意味表現の関係などを試論している。李雨颯（2017）は「古代漢語象声詞研究」で、『廣韻』『説文解字』『漢語大詞典』を参考として『詩経』『文選』『楽府詩集』における擬声語を調査し、擬声語の形態構造、音韻構造、意味分野、文法特徴を分析した。そして、李雨颯（2017）の論文は古代、近代、現代の擬声語に関する先行研究についても、詳細に検討している。検討の結果は次のようであった。①古代擬声語の研究は『詩経』を中心とするものが多く見られるが、通時的な研究はあまり多くない。研究論文には喬秋穎（2002）の「『詩経』擬声詞研究ー漢語表音詞的曆時研究之一」、趙愛武（2005）の「象声詞—従詩經到元曲」、趙愛武（2014）の「漢語象声詞的語義與標写形式」、林鶴鳴（2015）の「『説文解字』擬声詞研究」などがある。②中古擬声語の研究は古代擬声語より豊富になる。趙愛武の「唐詩宋詞中的象声詞」（2012）と「元曲象声詞研究」（2012）、赵爱武・陈清芬（2013）の「明清小説中的象声詞」などの論文がある。③現代擬声語の研究は活発で、研究の成果ももっとも豊富である。研究論文の例として、李鏡兒（2007）の『現代漢語擬声詞研究』、呉校華（2008）の『現代漢語擬声詞研究』、余哲（2010）の『現代漢語擬声詞新探』などがある。その他、中国語の擬声語の詳細な研究史については、上記の李雨颯（2017）に詳しいのでそちらに譲る。

以上のほかには、擬声語の比較研究はあまり多くない。学位論文である徐氷若（2001）『現代漢語象声詞研究』や呉校華（2008）などの中に、擬声語と感嘆詞の品詞、語義の特徴が論及されている。また、楊樹森（2006）の「論象声詞与嘆詞的差異性」、段曹林（2009）の「論擬声詞、歎詞、語気詞皆“摹声”」、劉亜楠（2013）の「現代漢語諧音及擬聲現象分析」

[57] 例えば、黎錦熙・劉世儒（1959）の『漢語語法教材』（商務印書館）、北京大学中文系（1962）の『現代漢語』（商務印書館）、胡裕樹（1979）の『現代漢語』（修訂版）（上海教育出版社）、黄伯榮・廖緒東（1980）の『現代漢語』（高等教育出版社）、史錫堯（1984）の『現代漢語』（北京師範大学出版社）などがある。

[58] 中国広東省の潮阳の方言で、閩南語に属する潮州話の 1 種である。

などの論文は、語義と人が発する声の関係という点で擬声語と近似している語群の感嘆詞と語気詞を提起して、それらと擬声語の比較研究を行っている。

以上に取り上げた論文の他にまだ多数あるが、それらの研究は様々で、語彙学、文法学、語義学、音韻学にわたる。

0.3.4.2　先行研究の問題点

以上の紹介は、研究の現状を知るには大ざっぱであるが、擬声語研究の歴史的な発展がうかがえる。しかし、不明な部分はまだ残っている。

①研究方向や研究方法などが不充分である

中国語擬声語の研究には、議論はなされるが決着がつかない問題がある。例えば、擬声語の品詞特徴と分類、語形の規範化といったことである。近代及びそれ以前の中国語擬声語に関する考察状況から見ると、それらの研究は主に中国の代表的な史料から得た擬声語の語義特徴と形態構造を分析したものである。これらは、研究の方法が単一で、考察の方向も語形と文法の特徴を扱っているにすぎない。ここから、中国擬声語の研究は、方法の多様性、分野の広さ、分析の深さにおいて充分ではない。さらに、近代中国語擬声語の研究現状からいうと、中国側でも外国側でも全般の研究がまだまだ形成されていない。既存の研究は、個別の中国の文献に現れる擬声語の形態特徴及びその歴史的な変化の特徴を扱ったものが一般的である。一方、近代中国語擬声語の整理などの分野には、足りていないところが存在する。

耿二岭（1986）は、「中国語擬声語は従来繊細に研究されておらず、重視されていない語群であり、一般使用者の意識に上らず、言語学者に無視されている状況に置かれている。実際、今のところ、中国語擬声語の最も基本的な特徴に対する研究でさえまだおぼつかないというほかない」[59]と述べている。耿二岭（1986）の 22 年後、趙愛武（2008）は象声詞の性質、象声詞の帰属と語類状況、音韻的規則、外国語との比較研究、古代中国語擬声語を中心とする文献の考察、現代中国語の擬声語の研究の 6 つの面から中国語擬声語の研究現状を見た上で、次のような考えを提起した。

> 总体来讲，相对于汉语的其他词类，无论是在广度上，还是在深度上，有关象声词的研究是远远落在后面的。要给象声词定性，还给象声词应有的地位，就必须对象声词的发展与演变进行系统深入的考察，从历时和共时两个层面上对汉语象声词开展研究（全体的に言って、中国語のほかの品詞と比べると、その広がりから言っても、深みから言っても、擬声語に関する研究ははるかに遅れているのである。擬声語に対して位置付けを定め、更に擬声語に対してしかるべき地位を与えるためには、擬声語の発展と歴史変化に対して系統だった、深度のある考察を行うことがぜひ必要であり、通時・共

[59]『漢語擬声詞』pp.3-4。中国語の原文は「汉语的拟声词，是一种向来未被仔细地研究过的词类，它们一直处于人们习焉不察，语言学家未及一顾的地位。其实，迄今为止，哪怕是对汉语拟声词的最基本部分的描述，也只能说是朦朦胧胧的」である。

時の面から中国語の擬声語に対する研究を展開しなければならない。—筆者訳）[60]

その意味で、中国語擬声語の基礎研究を深め広げることが必要になる。呉校華（2008）が指摘したように、擬声語の性質、分類、規範意識などの問題は長い間議論されているが、まだ統一されていない。実際、現状はこれらだけではない。中国語擬声語の研究現状のもう 1 点として、音韻変化をめぐって通時の考察を行ったものが十分でないのである。そして、古代中国語擬声語の形態構造と音韻規律の考察が多く行われるが、それらの体系的な研究は形成されていない。

②中国語擬声語を語義学や音韻学の研究視野に入れている研究が少ない

近代擬声語研究を例として見ると、古代擬声語の研究現状と同様で、特定の文献を中心としたものが一般的である。代表的な研究としては、趙愛武の「近代漢語象声詞的修辞特徴」（2013）[61]と「近代漢語象声詞結構形式的歴時演変」（2013）[62]の 2 つがある。これらの研究は概括的考察であり、歴史的擬声語の収集・整理の途上にあり、資料も代表的なものに限られる。そのため、全般の概況をはっきりさせることが難しい。さらに、近代中国語擬声語の研究現状では、中国側でも外国側でも全般の研究が足りないと同時に、研究の角度が個別の文献に現れる擬声語の簡単な考察・比較に限られ、語義学や音韻学などの多方面で中国語擬声語の全面的かつ系統的な研究を行ったものが見られない。近代以降、外国人が中国語を学習する現象は一層多くなったため、擬声語の研究視野を異なる国の文献に広げるのは有意義な試みである。

③日本の中国語教育における中国語の研究があまりない

研究現状から見ると、中国語を外国語として教授・学習する立場から中国語擬声語を中国語研究の分野に取り入れたものはないため、その研究の試みが意味を持つかもしれない。また、中国語関係書は近代中国語を記録したものと見なされるため、その中の中国語の研究は中国語の全般的な研究にとって役立つとともに、日本人の中国語教育と日本人が持つ中国語への認識の研究の一助になる。

0.4　研究の目的と意義

0.4.1　研究目的

本研究の目的は、主に近代日本の中国語関係書における中国語擬声語を研究の対象にし、その特徴を検討して、近代日本の中国語教育及びそれにおける言語の性格への再検討を行っていくことである。言い換えると、本研究は擬声語の角度から、近代日本の中国語教育における言語の実態及びその特質を考察しつつ、当時の日本の中国語観に説き及ぶ。

---

[60]「近 20 年漢語象声詞研究綜述」『武漢大学学報』61（2）pp.184-185
[61]『武漢大学学報』66（1）pp.119-123
[62]『江漢学術』32（4）pp.100-104

具体的にいえば、まず、中国語関係書における擬声語を調べまとめて、形態構造、意味分野、音韻構成、音象徴の面から擬声語の特徴を明らかにする。それによって、本研究は中国語関係書における中国語擬声語がどのような構造特徴で利用され、どのような意味特徴と音韻特徴を持っているのか、さらに中国語擬声語の音韻形式と意味分野の対応関係がどのようであるかを研究の問題点にして探究することを試みる。また、日本の中国語関係書の中の擬声語は当時の現実の中国語或は中国語擬声語の全般の特徴をどのような形で反映しているか、どのような役割を持っているか。さらに言うと、近代日本の中国語関係書は内容、編纂方法と目的などの面で様々の種類があるが、それらの所載の言葉がどの程度実際の中国語を収録しているのかが疑問となるであろう。つまり、外国語教育の場で教え学ばれる言語は語音・語彙・文法の面で、現実の言葉とのズレが存在する可能性が見られる。従って、本研究では、明治～昭和戦前期の日本の中国語教育における擬声語を研究することを通して、そのズレの解明を目指している。さらに、もう一歩進んで、中国語教育が持っている問題（例えば、言語教授・学習の方法の問題点や難点・困難など）を明らかにして、それらへの対策を考えてみる。

次に、日本の中国語関係書において擬声語が中国語教育の内容の一面として注意された目的と原因を検討してみる。擬声語は独自の語群特徴を持つ品詞である。その特徴に対応して、近代中国語教育における擬声語はどのような目的で教えられ、どのような学習動機を反映していたかが問題になる。

0.4.2　研究意義

本論文で、中国語擬声語の考察は、中国語関係書を利用しながら行う。近代日本の膨大な量の中国語関係書は多くの分野の参考とされうる価値を持つ。本研究もそれらの資料の重要性に対する重視を喚起しようと思う。また、中国語関係書の中の擬声語の実態を検討することによって近代日本の中国語教育関係書の状況とその中の言語の全般的な特徴を究明し、擬声語の教育が中国語教育において持っている独自の目的と役割を明らかにすると同時に、中国語擬声語の研究と歴史的な中国語の研究に対して信頼に足る論拠を提供することができる。

擬声語を中心になされる言語研究は、歴史的意義と現実的意義を持つ。

①この研究は歴史的な言語の状況、特に擬声語の特徴を把握して、当時の中国語認識の現状を解明する点で有意義である。近代日本の中国語関係書における中国語は当時の中国語を記録したものとして、当時の中国語の実態を反映しうる可能性を持つ。そのため、それらの資料の内容を分析して、日本の中国語教育界が認識していた中国語の特徴を説明する仕事がなされなければならない。本研究は近代日本の中国語教育における擬声語という語群の特徴を検討することを通して、日本人が認識していた中国語の特徴を明らかにする。

②擬声語は独自の品詞特徴を持つ特殊な語群として、中国語関係書の編著者たちに注意されていた。そうであるからには、擬声語の教育は、近代日本の中国語教育において、

何らかの目的を持っていたに違いない。中国語関係書における擬声語という語群の特徴を検討することによって、当時の中国語教育の時代的な特徴を論証する研究に有益な補足を提供できる。

③中国語擬声語の研究を充実させることも研究意義の１つである。擬声語の研究資料として中国語関係書を取り入れることは、中国語擬声語の研究方法と研究範囲を広げると同時に、新しい言語資料をこの研究分野に入れることにもなり、有意義である。

④管見によれば、清末以降民国の擬声語について、音韻序列、意味分野、音象徴などの角度から考察した先行研究が見られない。そのため、本研究はこれらの方面で中国語擬声語の研究を充実させると同時に、歴史的な中国語の研究の一面として、全面的な中国語研究に一役を買うことは期待される。

⑤本研究は擬声語という語群の研究の視点で、近代日本の中国語関係書を広く調べた。その過程で、本論文は先行研究において注意されていなかった多くの中国語関係書の内容を検討した。そのため、本研究はより多くの中国語関係書を研究の視野に入れた点で、役に立つと思う。

⑥絵画における中国語教育研究は中国語の対外教育を進める上で有益である。本研究は歴史的な日本の中国語教育における中国語の実態を究明する目的を持つ。その教育過程や言語教育における問題などを明確にするのは現時の研究に対して、有益な助言を与えるに違いない。

0.5　研究方法

資料の収集と論点の論証のために、本論文では、次のような分析方法を行った。

（1）データ統計・分析

主に、中国語関係書の情報を整理し、中国語関係書における擬声語の用例を調査・整理すること[63]。そして、擬声語の語数、型別の種類、声・韻・調の出現状況を統計する。

（2）語彙分析

語彙の分析は発音、語形、意味などの面で、別々異なる方法で行う。擬声語は言語音で自然の音を描写する語群である。そのため、擬声語の発音と意味の関係を重視する必要がある。これは擬声語の考察方法の特徴の１つであろう。

（3）比較分析

文献の比較、語群の比較、歴史時期の比較などを行う。

（4）その他

通時・共時の分析方法、言語学、文化学、民俗学などの多くの科学の総合分析方法も利用しなければならない場合がある。

[63] 1.2 で中国語関係書の概況を解説した後、調査資料とした中国語関係書のリストを 1.3 に掲げる

0.6　論文の独創的な点

本研究は日本の中国語教育における中国語についての考察という視点で、その中の擬声語を考察対象にし、外国の擬声語の研究方法と結果を参考としながら、近代日本の中国語関係書における擬声語の実態を検討することで、新しい試論を行う。

論文の独創的な点は次の 3 点にまとめられる。

（1）中国国外の中国語教育についての研究では、ある特定の語群を中心にした研究が極めて少ない。特に、擬声語や感嘆詞などの特殊な語類に関する研究はとても少ない。本研究は日本の中国語教育における中国語の特徴を考察することを通して、近代日本の中国語教育の特徴を明らかにする視点からみて、新しい内容を含んでいる。

（2）日本語の擬声語研究の方法を参考としながら研究を行った。その理由は、日本側の研究と比較すると、中国側の擬声語の研究方法と研究分野はまだ触れられていない部分が存在するからである。例えば、中国語擬声語の意味分野と音象徴の研究などは行われていない。そのため、本論文は中国語擬声語の研究方法と分析内容でも新しい試みである。

（3）本研究は、日本人による中国語関係書に現れる語の発音、意味の特徴を究明して、日本人がもっていた中国語に対しての認識や使用状況などを考察する。つまり、本研究は日本人が教授・学習した中国語が実態として現実の中国語の音韻と意味の特徴をどの程度反映しているかの解明を目指す。擬声語を研究対象とすることにより、中国語の擬声語の研究にも裨益するところがあると信じる。

第 1 章　近代日本の中国語関係書及びその中の擬声語

本章では日本の中国語関係書及びその中の言語の状況を紹介する。また、研究資料の選定を検討し、それらの中の擬声語を調査して挙げる。

1.1　近代日本の中国語教育の中の中国語

日本の中国語教育では、唐話、北京官話、上海語、広東語、台湾語などが対象であったが、これらの中で唐話と北京官話が最も重要な 2 つの言語である。唐話は唐通事たちが学んだ南京語や、福州語、漳州語などの中国南方の方言であり、江戸時代に始まった中国語教育の主たるものである。一方、北京官話は近代日本の中国語教育の主たるものである。本研究は主に北京官話を検討する。

明治維新になり唐話教育の主体であった唐通事は廃され、唐話も勢いを失っていった。その後、北京官話の学習が始まった。明治以降の近代日本の中国語教育は、六角恒廣（1984）によって 2 つの時期に分けられている。第一期は明治初年から 1945 年（昭 20）までの時期であり、第二期は 1945 年（昭 20）以降現在までである。「中国語教育の意義ないし目的によって」、区分された時期の特徴として、「第一期の時期には、科学的な方法論を基礎とした中国語学研究や中国語教育はほとんどみられなかった」が、「主として第二期にいたって、語学としての新しい学問的成果が生まれてきた」[64]。六角恒廣（1984）はまた、第一期において中国語が実用語として教授されていたことを強調している。

本論文で考察する中国語は明治期から 1945 年の間の時期の中国語教育における北京官話である。

1.2　資料とした中国語関係書

本節でははじめに本研究の言語資料である全体の近代日本の中国語関係書の概況、すなわちその種類や、点数、使用状況と編纂方法などを紹介する。次に、本研究が資料とした中国語関係書の選択理由を述べ、それらの資料を更に一歩深く検討する。最後に、それらの資料の中から擬声語を抜き出して統計する。

1.2.1　近代日本の中国語関係書の概況

近代日本の中国語関係書の収集・整理の研究としては、波多野太郎と六角恒廣が代表的な研究者として知られている。波多野太郎の『中国語学資料叢刊』と六角恒廣の『中国語教本類集成』は唐話と北京官話の関係書を集めて整理したものとして広く利用される。また、六角恒廣（2001）の『中国語関係書書目（増補版）』は北京官話教科書や辞書などの情

[64] 六角恒廣（1984）『近代日本の中国語教育』不二出版 p10 による。

報を整理したものであり、中国語関係書の研究の重要な参考資料である。これは近代以降（1867 年から 2000 年にかけて）出版された日本の中国語教育の関係書（大部分は北京官話のものである）を、書名、編著者、発行年月日、発行所、判型・冊数、所蔵の概説を付けて、発行年月日順に集録している。その書目は、Ⅰ部（1867 年から 1945 年まで）とⅡ部（1946 年から 2000 年まで）からなっている。更に、明治以降 1945 年までの期間に「使用された中国語教科書或いは辞書を取り上げて、それらを大まかに解題した」ものに、六角恒廣（1994）の『中国語書誌』がある。

以下に、上に挙げた資料を参考として近代日本の中国語関係書の種類及びその内容、出版数などを簡単に紹介する。

（1）テキストの種類

中国語関係書全体を分類する代表的な方法が六角恒廣（1994）の『中国語関係書書目（増補版 1867～2000）』において出されている。六角（1994）の分類は中国語関係書の内容の特徴を指摘し、各種類における中国語関係書の分布状況を示している。本論は六角（1994）の「学習書」という種類の中国語関係書を考察の資料とする。六角（1994）の分類を以下に引用する（同書 p97）。

学習書：学習初歩の段階から中級・高級段階を含めて，一般に学校教育や講習会などの各種のコースで中国語を学習するために編纂されたものを含めた。したがって，初級用のものには頭初に発音についての解説を扱ったものもある。中級・高級のものでは，中国の小説類を編集したもの，及びその訳注書類も，この項目に入れた。

時文・尺牘：普通， 時文や尺牘としてあつかわれているものは，もちろんこの項目に入れたが，中国新聞の読み方を扱ったもの，および時文に返り点や送りカナを入れたものも，時文ないし現代文という書名を附したものはこの項目に入れた。

文法・作文：書名に文法や作文が唱われたもの，および＜助辞＞・＜動字＞について書かれたものも，この項目に入れた。

発音・字音：発音の部分だけを扱ったもの，字音およびその解説や表もこの項目に入れた。

講義録・講座：書名に講義録ないし講座のつくものはこの項目に入れた。ふつう，2 冊以上から構成されるものであるが，中には 1 冊のものもある。

参考書：学習者が，教室で直接使用するのではなく，自習用として使用される性格のもの，例えば難解語句の注解をしたもの等はこの項目に入れた。また，中国語の言語学的研究に属するもの，およびその翻訳書もこの項目に入れた。

学習雑誌：台湾語の学習雑誌を除く，学習者向けの雑誌をこの項目に入れた。

台湾語：台湾語をあつかったものは，学習書・文法書・時文・辞典・学習誌を問わず，すべてこの項目に入れた。

方言：台湾語以外の各地方言をあつかったもの，たとえば上海語・福建語・広東語・海

南語等は，学習書・一般向け会話書を問わず，すべてこの項目に入れた。ただし書目（8）の「漢語跬歩」は，南京語であるが、当時日本の中国語教育は南京語であったことから，これを方言の項目ではなく，学習書の項目に入れた。

軍事・警務：軍用語・軍用会話・警務会話をあつかったものをこの項目に入れた。

実務・業務：農業・建築・医療，その他官公署等での業務上必要な単語や会話をあつかったものをこの項目に入れた。

他外国語との対照：中国語以外に，英語・ロシア語・朝鮮語・蒙古語・フィリピン語・マレー語等と対照併記したものである。この種のものは，多くは一般向けの通俗的会話書が多い。

一般向け会話書：一般向けの通俗的会話書である。その中には，一般人用の独習書を始め，戦時に便乗して出版された＜見物用語＞・＜旅行用語＞・＜早わかり＞の類はもとより，出征軍人向けの中国語＜早おぼえ＞等にいたるまで，この項目に入れた。

その他：中国語の学習書ではないが，薬品名・鉱物名など，日・中両国語を対照させたものなどをこの項目に入れた。

（2）出版数

近代日本の中国語関係書の点数について、『中国語関係書書目』の統計では、1867 年から 1911 年まで出版されたものが 316 点、大正時代から 1945 年までの間が 1121 点ある[65]。『中国語関係書書目』には、上の分類項目に対応する中国語関係書の点数が発行年別に集計され、「分類項目別発行点数表」（p100）として表示されている。これによって、「1945 年（昭和 20 年）までに発行された近代日本における中国語教育の関係書の大かたのをしることができよう」[66]。次に、その点数表を取り出して、表 1 に示した。

[65] 未見のものも存在するかもしれないから、この点数は確定的ではない。
[66] 六角恒廣（1994）『中国語関係書書目（増補版 1867～2000）』p99

表１　分類項目別発行点数表①

	年	明2																														
	1867	3	10	12	13	15	18	19	20	21	22	23	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
学習書	1	1		2	4	1		2			1	1	2		2	2		1	4	1	3	5	6	6	11	14	9	10	3	1	4	6
時文・尺牘	2																			1		2	4	3	7	6	2	1	1	1		
文法・作文			2											1			1						1		2	3			2			
発音・字音																1				1	1		2		5	2	2		1			
語彙・辞書																							2	1	2	3	4	1		1		
講義録・講座																1				2		1			2		1	1	1			1
参考書																																
学習雑誌																		1							1							
台湾語																7	9	3	2	4	2	3	4	2	5	4	2	2	3	2		2
方言													2			1									1			1				
商業																	1				1				2		2	1	1			
軍事・警務									1						2	1									3							
実務・業務																										1						
他外国語との対照							1		1	1					4	3					2				4		4	3			1	
一般向け会話書												1			1	1							1	2	8	12	7	1		1	1	
その他																					2	1				1						
計	3	1	2	2	4	1	1	2	2	1	1	2	4	1	9	17	11	5	6	9	11	12	20	14	53	46	33	21	12	6	6	9

表１　分類項目別発行点数表②

	明45														大15																				
	大1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	昭1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	計
学習書	1	2	4	4	6	2	3	5	7	9	10	9	14	8	5	7	5	7	7	13	8	9	15	14	18	14	23	35	29	22	9	8	9	1	44
時文・尺牘	1		1	2	2		3	1	1	3	3	3	5	2	4	1	1	3	2	3	2	3	4	5	2	3	10	21	15	6	5	4			15
文法・作文	1							1		3	1		1	1	1		1			1	2	3	2	3	4	7	1	5	1	6	8	3	1		6
発音・字音				1	2	2				2					2		1	1	1	1	3		3	5		2	3	3	6	5	3		1	1	6
語彙・辞書		1	2	2		2		1	1	2	2	1		1	3	1	1		2	2	5	5	2	7	4	5	2	6	5	9	5		1	2	9
講義録・講座		1	1	2			1					1				1		2	1		5	4	1		1		1	1	3	1					3
参考書													3	3	2	4	2			1	2	1	1	3	2	3	5	7	6	10	6	4	1		6
学習雑誌				1							2						1		1	1	2			1	1		1	2	1	1		1	1		1
台湾語	1	4		1	6						4	3	2	1	3	1	1	1	1	3	2		3	3	1	1	4	3			3	1			10
方言			1	1				3	2	1	2	1	1			4		1	3		2	4	2		3	1	10	13	7	3	12	5	1		8
商業			1	1			1		1			1	1	1	1		2										1	7	1	1					2
軍事・警務		1	2	2			1	1			1						1			1	1	1	2	1					2	3	3	1	2		3
実務・業務										1	1			1			1	1				2	2	2	1	1				1	3	2			2
他外国語との対照		1									1										1		1						2	1		2	1		3
一般向け会話書			1	1	1	2	1	2	3		1	1		4	3	3	1		2		17	8	6	4	10	13	26	25	13	5	7	1			19
その他					1	1				1	1	1								1		1			2		1	1			2				1
計	4	10	13	18	18	9	10	14	15	22	29	21	27	22	24	22	18	16	20	27	52	41	44	48	49	50	88	129	91	74	68	32	18	4	144

（3）使用状況

数多くの中国語関係書の使用状況は異なる。その差異は出版状況において見られる。その中には、何回か改版・増訂されたもの（例えば、『官話指南』、『北京官話談論新篇』、『官話急就篇』などがある）があり、一回の発行しかないものも多くある。また、教材として使われたものがあるが、利用されなかったものもあるであろう。実際に使われた教材の場合も、その利用団体または機構は様々であっただろう。この点に関して、六角恒廣（1989）は日本の中国語教育を 2 つの流れに分けた。「1 つは日本の学校教育制度のもとで学校に設置された教課としての中国語教育である。他の 1 つの流れは、学校教育制度の外において、個人あるいは団体がおこなった中国語教育である」[67]。当時これらの機構において使われたものは重要な研究対象とする意義がある。その中の独習（修）類、捷径類、独案内類、速成類、入門類の一部と初等（歩）類の資料は個人用のものである。これらも同様に当時の中国語の実態を反映しうる。そのため、本論文はこれらの関係書を考察の対象に入れる。

分野を問わず、誰でも使用できる資料があり、特定の団体・職業、事件、地域に限る資料もある。前者は一般学習書であり、後者は軍事・商業、時文、方言類である。後者の関係書は出現頻度と広さの点であまり重要ではないため、調査していない。

（4）多様な編纂の方式・参照関係

張美蘭（2007b）は中国語教科書の編纂の特徴を 4 種類にまとめた[68]。それらは①既存教材（『語言自邇集』）、②参考または改編された教材（『亜細亜言語集（支那官話部）』『清語進階語言自邇集』『参訂漢語問答篇日本語解』、『自邇集平仄編四声聯珠』などは『語言自邇集』を参照して編纂されたものである）、③翻訳された教材（『北京官話伊蘇普喩言』は日本語版『伊索寓言』の中国語版本で、『生財大道』は日本語版『生産道指南』の訳本である）、④新編教材（『清語教科書』などである）である[69]。

関連文献の編纂の方式・参照関係は中国語関係書の継承関係や内容の作成方法、テキストの性質に深く関わっている。そのため、継承・参照関係のある中国語関係書において、擬声語の重複現象が存在する。これは近代日本の中国語関係書における擬声語の語彙総数の統計に影響を与えている。

（5）日中の編纂者と多くの教育機構

中国語関係書の編纂・校正の協力者には日本人がいるか、中国人がいるか、それとも他の外国人がいるかという問題を考慮に入れる必要がある。中国語関係書の大部分は日本人学者によって作られたものがあるが、中国人学者に作られたものもある。中国の学者により編纂されたものは、例えば、張滋昉・林久昌[70]の『支那語』（1894）、張廷彦の『北京風土

---

67 六角恒廣（1989）『中国語教育史論考』p84

68 張美蘭（2007）の 4 つの編纂の特徴をもとにして、楊杏紅・張娜（2013）「日本明治時期北京官話口語課本的編写特点」と陳明娥（2014）『日本明治時期北京官話詞彙研究』は、「唐話教材の踏襲」という種類を加えて、5 種類に分類している。

69 張美蘭 2007「明治期間日本漢語教科書中的北京話口語詞」『南京師範大学文学院学報』第 2 期 p147 を参考。

70 林久昌「講述」という説もある

編』(1898)、孟繁英の『清語教科書』(1901)、金國璞の『北京官話士商業談便覧』(1901)、金國璞の『北京官話古今奇観』(第一編)(1904)、馮世杰の『北京笑語会話』(1908)などである。また、中国の学者により修訂された資料もある。例えば、『北京官話伊蘇普喩言』(中田敬義訳、紹古英継校閲 1879)、『官話指南』(呉啓太・鄭永邦著、金國璞校閲 1881)、『英清会話獨案内』(田中正程訳、張滋昉共校 1885)、『自邇集平仄編四聲聯珠』(福島安正編・紹古英継校閲 1886)などである。他に、『北京官話談論新篇』(金國璞・平岩道知著 1898)、『北京官話清国風俗会話篇』(馮世傑・野村幸太郎著)、『官話北京事情』(紹古英継撰・宮島吉敏編 1906)のような日中の学者の合著がある[71]。

中国の学者により編纂された中国語関係書における語彙は、日本人が編纂したものと比べて何か違いがあるかどうかが問題となる。この問題について、編纂者によって関係書を分類して、その中の語彙を考察して、その差異を説明することには意義がある。

六角恒廣(1989)は「明治初年の中国語教育創草期から、明治 30 年前後」まで[72]「日本において中国語教育をとりあげた学校ないし私塾」の漢語学所、東京外国語学院、日清社、興亜会支那語学校、東洋学館と亜細亜学館、日清貿易研究所、詠帰舎・善隣書院、東京外国語学校、南京同文書院・東亜同文書院、書肆文求堂などを詳細に紹介し、それらの設立趣意を説明して、「中国語教育の趣意」の状況を検討している。また、それらの機構の教員であった人によって作られた資料は多くある。そのため、教育機構の設立趣意、編纂者、教科書の成立の三者の関係を研究することは、教科書などの特徴を検討することに対して、試みる価値があるであろう。

テキストの種類が異なると、その中の言語特徴も異なる。そのため、中国語関係書の言語研究は上に言及された中国語関係書の概況を考えなければならない。

1.2.2 擬声語の調査資料

上に述べたように、近代日本の中国語関係書は点数が非常に多く、種類も多様である。その中から擬声語の調査テキストを選ぶことは難しいが、重要である。そのため、本節では調査資料とする中国語関係書を選択することを検討する。

(1) 調査資料の出典

本論文の調査資料は『中国語教本類集成』と『中国語学資料叢刊』所載の中国語関係書の一般学習書を主とする。

近代日本の中国語関係書は数多く作られたが、それらの教科書の質や使用割合などの歴史的な状況には差異がある。大量の関係書が編纂されたが、実際に使われたものでなければ研究する価値はないであろう。近代日本の中国語教育の質を反映するものは実際に用いられたものであるはずである。

---

71 李無未(2007)「中国語言学史如何写?(付録:中国学者与日本明治時期中国語教科書刊行)」北京外国語大学『国際漢語教学動態与研究』第 3 期を参考。

72「明治初年の中国語教育創草期から、明治 30 年前後の時期」とした理由について、六角恒廣は明治初年から明治 30 年前後の時期になると、「中国語教育についての趣意ないし意義を特に述べたものがあまりみられない」からであると述べている。

中国語関係書の量と質について、六角恒廣（2001）は『中国語関係書書目』（p108）に次のように記述している。

> 1871 年（明治 4 年）外務省によって，通弁養成を目的として発足した近代日本の中国語教育は，その後，学問やその他文化的諸分野とは無縁な場におかれ，反面，日本の中国侵略の国策に迎えられて，その命脈を保ってきた。そのため中国語教育にとかく科学性を欠如する傾向が生まれて，それを質的に高めていくことが困難であった。その結果は，ややもすれば量的に拡がる傾向をとった。この書目が示す 1400 余点という発行点教は，そのことを意味している。

膨大な数の中国語関係書には、科学性の欠如するものが存在するため、それらを研究の対象にする場合、関係書の質を区別して代表的なものを取り出さなければならない。しかし、それは至難の技である。このような中で、『中国語教本類集成』と『中国語学資料叢刊』が中国語関係書の選抜をしていることは、現時点で最も重要である。

『中国語教本類集成』に収録されている関係書は明治初年から昭和 20 年（1945 年）までのもので、「日本の中国語教学において使用された教科書を主として、それに辞典のいくつか、さらに実務用語・軍事語・会話本など」[73]である。その意味で、『中国語教本類集成』所載の中国語関係書は当時の中国語教育の代表的なものである。また、『中国語学資料叢刊』が蒐集した文献に関して、波多野太郎（1985）は『燕語社会風俗官話翻訳古典小説精選課本篇』の「序」で、「明治の十年代以来のもので、或は外人の編したものを基礎にしたもの、直接聴き取ったもの、多くは北京の中国人の目を通してあり、或は中国人が原書を改写したものもある。また大正昭和にかけてのものは、常見詞句の用例の資料となる」と述べている。これから見ると、『中国語学資料叢刊』に収録された中国語関係書は多様な面で当時の中国語を記録したものとして、重要な言語研究の価値を持つであろう。

上記により、近代日本の中国語関係書の研究の面から言うと、六角恒廣編・解題の『中国語教本類集成』と波多野太郎編・解題の『中国語学資料叢刊』は近代日本の中国語関係書を整理して収集したものであるといえる。それらの中のものを中国語関係書の代表的なものとして研究視野に入れることができる。そのため、本研究は『中国語教本類集成』と『中国語学資料叢刊』所載のものを中心にして、擬声語の調査をする。

他に、『中国語教本類集成』と『中国語学資料叢刊』所載の中国語関係書の他、本論文は『新編中等清語教科書』、『清語會話案内 上・下』、『日清会話語言類集』、『清語讀本』なども関係書を考察する。

（2）調査資料の中国語関係書の種類

本研究が用いた中国語関係書は主に『中国語教本類集成』における（一般）学習書と『中国語学資料叢刊』における白話研究のものと官話教科書である。

---

[73]『中国語教本類集成』の「序」を参考とする。

中国語関係書に多様な種類があることは 1.2.1（(1) テキストの種類）に挙げておいた。『中国語教本類集成』の各集における中国語関係書の概況（種類と点数）を簡単に下のように示す。

第Ⅰ期の各集の構成：

第一集　一般学習書（24 点）[74]

第二集　一般学習書（33 点）

第三集　英仏語版　時文　商業文（30 点）

第四集　文法書　発音・発音字典　辞典（23 点）

第五集　台湾語その他　試験問題集　実務用語　警務・軍用語　早わかり　索引（27 点）

第Ⅱ期の各集の構成：

第六集　日露戦争期の会話書（18 点）

第七集　小説、時文、翻訳語法書、単語集（24 点）

第八集　講義録（27 点）

第九集　講座、ラジオ・テキスト、学習誌（27 点）

第十集　実務用語、警務・軍用語、時局向け早わかり、教育史研究資料（32 点）

第Ⅰ期と第Ⅱ期の他に、「江戸時代の唐話篇」の補集があるが、ここに省略する。

波多野太郎編・解題（1985）の『中国語学資料叢刊』は近代日本の中国語関係書の中の重要なものを整理した。全五篇で、白話研究篇（第一篇全四巻）、燕語社会風俗・官話翻訳古典小説・精選課本篇（第二篇全四巻）、尺牘篇（第三篇全四巻）、尺牘・方言研究篇（第四篇全四巻）、『公文研究・日語中譯・聲音研究篇・補遺』（第五篇全四巻）に分類し、明治から昭和にかけての資料（145 点）を編集している。例えば、第一篇には一般学習書や、字典、文法書などが含まれ、38 点の関係書が収録されている。波多野太郎の『中国語学資料叢刊』と六角恒廣の『中国語教本類集成』所載の資料を比べて見ると、同じ資料もあるが、一方にのみ載せられるものも多くある。また、テキストの分類方法も並べ方も異なるところがある[75]。

なお、『中国語教本類集成』と『中国語学資料叢刊』の中の中国語関係書及びその情報を表「（２）『中国語教本類集成』と『中国語学資料叢刊』における中国語関係書」にして本論の後に付けた。

本論のテーマである擬声語の研究では、語の発音、用字、意味と用法などを考察する。そのため、擬声語の調査資料が一般的な教科書のようなものを主とする。上に出した様々

[74] この数字は本集の所載の教科書や辞典などの点数である。

[75]『中国語教本類集成』は時系列で、同じ種類の中国語関係書を並べているのに対して、『中国語学資料叢刊』の方法は整然としていない。

な種類の関係書には、『中国語教本類集成』の中の学習書、『中国語学資料叢刊』の白話研究篇の関係書と精選課本篇の関係書が最もふさわしいものである。他に、語彙・辞書、文法書も資料とする。軍事・経済・商業・農業・旅行などの職業性の特徴をもつ関係書は主に特定領域の言葉を記録しているため、本論の考察の対象としない。

1.3　調査資料の中国語関係書とその中の擬声語

擬声語の収載されている調査資料の中国語関係書を取り出して、発行年の時系列に次の表に示す。編纂時期がわからない写本も掲げている。また、それらの中の擬声語を資料として「中国語関係書における擬声語及びその用例・語釈」の表を本論文の最後に掲げる。

擬声語の調査資料の中国語関係書

関係書の書名	編者（著譯者）	発 行 年	発行所（出版社）
鬧理鬧	不詳	/	写本
養兒子	不詳	/	写本
官話纂	不詳	/	写本
小孩兒	不詳	/	写本
續散語串珠	不詳	/	写本
語学舉隅拔萃	不詳	/	写本
漢語跬歩（巻１～巻 4）	不詳	明治 3 年	刊本
北京官話伊蘇普喩言	中田敬義訳	明治 13 年	渡部温
新校語言自邇集散語ノ部	興亞會支那語学校	明治 13 年 4 月	飯田平作
參訂漢語問答國字解	福島九成	明治 13 年 9 月	丸善書舗
官話指南（初版）	呉啓太・鄭永邦	明治 15 年 11 月	楊龍太郎
英清會話獨案内	田中正程訳	明治 18 年 7 月	最上勝宜
自邇集平仄編四聲聯珠	福島安正	明治 19 年 4 月	陸軍文庫
自邇集平仄編四聲聯珠註釋	福島安正	明治 19 年 4 月	陸軍文庫
日漢英語言合璧	呉大五郎・鄭永邦	明治 21 年 12 月	可否茶館 丸善商社書店
亜細亜言語集支那官話部（再版）（上・下）	廣部精	明治 25 年 5 月	青山堂書房
総訳亞細亞言語集支那官話部（再版）（巻１～巻 4）	廣部精訳	明治 25 年 6 月	青山堂書房
支那語自在	豐國義孝	明治 28 年 5 月	獅子吼會
北京官話談論新篇	金國璞・平岩道知	明治 31 年 12 月	平岩道知
支那語獨習書	宮島大八	明治 33 年 9 月	善隣書院
清語會話案内　（上・下）	西島良爾	明治 33 年 11 月	青木嵩山堂
華語跬歩	柏木原太郎	明治 34 年 7 月	東亜同文會
北京官話士商業談便覧（上巻）	金國璞	明治 34 年 12 月	文求堂書店
清語讀本	西島良爾	明治 35 年 7 月	石塚猪男蔵
四聲標註支那官話字典	西島良爾・牧相愛	明治 35 年 7 月	青木嵩山堂
支那語自在	金井保三	明治 35 年 9 月	善隣書院
日清会話篇	松永清	明治 36 年 4 月	仝文社
官話篇	宮島大八	明治 36 年 9 月	善隣書院
新編中等清語教科書	西島良爾・林達道	明治 37 年 3 月	石塚書店

北京官話支那語捷径	足立忠八郎	明治 37 年 5 月	金刺芳流堂
言文対照北京紀聞	岡本正文編譯	明治 37 年 5 月	文求堂書院
北京官話今古奇観	金国璞譯	明治 37 年 6 月	文求堂書院
官話急就篇	宮島大八	明治 37 年 8 月	善隣書院
清語讀本後篇	東方語学校	明治 38 年 5 月	帝国印刷株式会社
東語士商叢談便覧	金國璞著・田中慶太郎訳	明治 38 年 6 月	文求堂
日清会話語言類集	金島苔水	明治 38 年 7 月	石塚書舗
清語正規	清語学堂速成科	明治 39 年 4 月	文求堂書店
北京官話萬物聲音	瀬上恕治	明治 39 年 12 月	徳興堂印字局
官話応酬新篇	渡俊治	明治 40 年 1 月	文求堂書店
華言問答	金国璞	明治 40 年 4 月	文求堂書院
四民実用清語集附諺語用法	中西次郎	明治 43 年 8 月	大阪屋號書店
北京官話今古奇観第二編	金国璞譯	明治 44 年 4 月	文求堂書院
華語萃編　初集	東亜同文書院編纂	大正 5 年	東亜同文書院
北京官話捜奇新編	管窺居士纂・石山福治註解	大正 5 年 11 月	文求堂書院
中華言文新編	富谷兵次郎	大正 12 年 1 月	奉天外國語学校藏版
北京市井風俗問答	岡本正文閲・加藤三郎	大正 13 年 9 月	大阪屋號書店
北京語集解	下永憲次	昭和 3 年 2 月	偕行社
支那語四週間	宮島吉敏	昭和 6 年 9 月	大学書林
談論新篇總譯	岡本正文訳・水野絮輔補訂	昭和 8 年 2 月	文求堂書店
急就篇	宮島大八	昭和 8 年 10 月	善隣書院
漢文基準支那現代文捷徑	実藤惠秀	昭和 8 年 12 月	尚文堂
続急就篇		昭和 10 年代？	（善隣書院）
支那語読本　巻 1 ～巻 2	倉石武四郎	昭和 13 年 9 月	弘文堂書房
倉石中等支那語　巻 1 ～巻 5	倉石武四郎	昭和 14 年 7 月	弘文堂書房
北京語の味	大山聖華	昭和 16 年 8 月	大阪屋號書店

第 2 章　擬声語の形態的構造

擬声語の構造は形態的構造、音韻的構造、意味構造から分析することができる。このうち、形態構造は最も形式的で扱いやすい。形態構造の研究は、擬声語の形態タイプの種類、常用の形式と特殊形式、各形態の変化特徴などから解明できる。

本章では擬声語の形態構造研究を中国語関係書における擬声語の形態タイプの種類、各形態タイプの擬声語と児化擬声語の語数及び分布特徴などから考察する。

2.1　中国語擬声語の形態タイプ及びその分類方法

中国語関係書における擬声語の形態タイプの状況を解明する前に、本節では中国語擬声語の通時的な形態特徴をその形態タイプの種類及びその歴史的な変化の概況から検討してみる。この検討は主に古代と現在という 2 つの時期から展開する。また、先行研究を参考として、中国語関係書における擬声語の形態タイプの判定方法を確定する。

2.1.1　中国語擬声語の形態タイプの歴史的な特徴

中国語擬声語の形態タイプを表記するにあたり、本稿では、擬声語を構成する各音節を A, B, C, D などのアルファベットで表すことにする。

古代の中国語擬声語の先行研究によると、その形態タイプが多くあるが、種類と使用状況で歴史的な変化が見られる。耿二嶺（1983）は中国語擬声語の 13 種の形態タイプの歴史的な変化の状況を考察して、多様化の傾向を指摘している。例えば、上古中国語の擬声語は A 式、AA 式を主とするが、AB 式と ABC 式と AABB 式が散見される。それらの型以外に、中古になると、AAB 式、ABB 式、A 里 BC 式、ABCD 式、ABBC 式などの擬声語が見られる。ABBB 式は現代語に特有であり、上古と中古にはない。耿二嶺（1983）と似て、趙愛武（2013）は、「近代漢語象声詞結構形式的歴時演変」で唐代から清代にかけての中国語擬声語の形態の通時的な変化を検討している。唐宋（『全唐詩』『全宋詞』）、元代（『元刊雑劇三十種』『元曲選』『全元雑劇』『全元散曲』）、明清（『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅詞話』『野叟曝言』『紅楼夢』『侠女奇縁』（つまり『兒女英雄伝』である））の擬声語を抜き出し、擬声語の形態別及びその使用率の状況を調べ、形態構造の歴史的な変化の特徴を明らかにした。例えば、単音節擬声語は上古では主要な形態タイプであるが、中古以降になると、減少の傾向が見られ、特に元曲にはまれである；AA 型と AB 型が主なタイプである 2 音節擬声語は唐宋以来最も常用されたもので、語彙総数も安定して増えている；3 音節擬声語は唐宋の資料にはあまり出ていないのに対して、元曲に最も多く使われている；結果として、擬声語の総数の増加、出現頻度の高まりなどの歴史的な変化は唐宋以来の中国語擬声語の特徴であると指摘した。上の代表的な先行研究において古代の中国語擬声語の形態変化の歴史的な状況が見られる。

古代の文献をめぐって行われる共時的な先行研究も多くある。趙金銘（1981）[76]は、元代の擬声語の形態タイプの種類及びその分類方法を指摘した。趙金銘（1981）は、擬声語の音節をX、Y、Zで表示して、元代の擬声語の形式を2種類の形式と9種のタイプに分けている。第一類は簡単形式で、単音節のX型、2音節のXY、3音節のXYZ、四字型[77]（XYZW）で、第二類は重畳型式で、XX型、XXX型、XYY型、XXYY型、XYYZ型などである。明代の擬声語の形態タイプに関しては野口宗親（1997）の「明代の象声詞」[78]がある。それは『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』を例とする明代小説における擬声語をまとめて、A型、AA型、AB型、ABB型、AABB型、ABAB型、ABCD型、ABAC型、ABBC型、ABC型の10種の形態タイプを見出した。清代に入っても、擬声語の形態タイプや各タイプの分布状況において、明代との間に大きな差は見られない（野口宗親(1993)）

上に述べた先行研究からみると、上古から近代まで中国語擬声語の形態タイプが歴史的な異なりを持つ。その歴史的な変化特徴の1つは形態タイプの種類が多様になる傾向を持つことである。特に新しいタイプの出現の状況が顕著である。もう1つは常用の形態タイプが時期により異なることである。例えば、上古中国語の擬声語はA型、AA型を主とするのに対して、2音節のAA型とAB型は唐宋以来最も常用される種類であり、元曲には3音節擬声語が最も頻繁に見られる。

耿二嶺（1983）などによると、上古から近代にかけて、擬声語の形態タイプが多様化する傾向がある。しかし、近代以降、その大きな変化が見られない。つまり、近代以降中国語擬声語の形態タイプは基本的に安定している。

2.1.2　現在の中国語擬声語の形態タイプの種類及びその分類方法

中国語擬声語には様々な形態タイプがあり、その分類方法も多様である。先行研究を見ると、邵敬敏（1981）[79]は、「擬声詞初探」で、構成要素と方法によって中国語擬声語の形態タイプを3つに大別し、最終的に12種に細分している。その分類は次のようである。

①単音節及びその重畳式[80]：A型、AA型、AAA型、AAAA型[81]

②2音節及びその重畳式：AB型[82]、AABB型、ABAB型、ABB型・ABBB型、AAB型

③2音節の重畳式の変形[83]： ABCD型、CDAB型、CBAB型

王力（1985）は『中国現代語法』[84]において、擬声語の形態タイプを5種に分けている。

---

[76]「元人雑劇中的象声詞」『中国語文』第2期　pp.144-146

[77] 趙金銘はこのタイプの擬声語を「四字格」と名付け、アルファベットの表記を使っていないため、筆者が（　）に入れてアルファベットを添えた。

[78]『熊本大学教育学部紀要』(通号 46) pp.1-12

[79] 邵敬敏（1981）「拟声词初探」『語言教学与研究』pp.57-66

[80] 重畳式は1つの語のすべての形態素が一体として、2回及び以上使われることによって形成された語の形態を指す。

[81] 5音節及びそれ以上の重畳型はAA型とAAA型の変異体であるとされることもある。

[82] さらにAB型を5種（AB一式からAB五式まで）に区分する。それらの五つの式は2音節の重畳式の基本式と見なしている。たとえば、AABB型はAB二式、AB三式、AB五式の重畳から構成される。

[83] 重畳式の変形は2音節擬声語の重畳式のことで、ABは一体の形態素として、重畳式を形成し繰り返し使われる時、その一部分が別の形態素になることである。

それらはそれぞれ単字型（A 型）、単字両用型（AB 型）、重畳型（AA 型）、単字+重畳型（ABB 型）、双重畳型（AABB 型）[85]である。王力（1985）は邵敬敏（1981）とほぼ同様に、擬声語の形態構造を音節構成の面で統合している。それらの相違点として、2 音節以上の擬声語の形態タイプを分類する場合、王力（1985）より邵敬敏（1981）のほうが具体的であるようである。類似の研究として、野口宗親（1995）の『中国語擬音語辞典』[86]も音節構成の特徴により擬声語の形態特徴を考察する研究である。

馬慶株（2002）は造語法の視点から、擬声語を単純語、重畳式、非重畳式の 3 種類に分けている。具体的に見ると、単純語の擬声語には、単音節擬声語と非双声[87]の 2 音節擬声語があり、重畳式の擬声語には「當當」、「扑通扑通」のような簡単な重畳型と「噼啪」、「哔嘀吧嗒」のような変音重畳型の 2 種類がある。重畳式の擬声語と非重畳式の擬声語は語の構成要素の特徴によって区別している。馬慶株（2002）の形態構造の分類は擬声語内部の音韻の特徴に基づいて行われている。擬声語は言語音で模倣対象の自然音を表示するものであるため、意味単位（意味素）によるその形態構造を判定する方法が必要である。意味単位による形態構造の判定方法は擬声語のタイプを細かく区分している。馬慶株（2002）、邵敬敏（1981）、王力（1985）を比較すると、音節特徴で擬声語の形態タイプを考察する点で大きな差がないといえる。

上述の諸氏の研究によって、中国語擬声語の形態タイプの種類が大体わかる。同時に、それらの分類方法には差異が見られる。例えば、単純語と重畳型の擬声語の関係に対する異論、複雑的な多音節擬声語[88]の判定の問題点が存在する。音節の特徴により擬声語の形態構造の特徴を検討する点で、それらの研究方法は似ている。

鈴木(1988)は中国語擬声語を 12 種の型に分けて、その内、A 式、AA 式、AB 式（ABAB 式、A 里 AB 式）、AAB 式、ABB 式、AABB 式、ABCD 式（A 里 CD 式、ABCB 式）を基本形とし、AAA 式、ABBB 式を各々A 式、AB 式の変異体変異体とし、ABC 式、ABA 式、AAAB 式を臨時形式としている。鈴木(1988)について、私見に述べれば、基本形は他の型から派生した語のタイプではないものとして、他の型と重なっても語義が変化しないものである。それに対して、変異体は基本形が変わって派生して、その意味も変わって形成したものである。このように、鈴木（1988）は擬声語の意味と音節の特徴によってその形態タイプの確定を行っている。この点は上に挙げた他の先行研究における分類方法と相違し

---

84 北京商務印書館

85 原文における名称は単字法、単字両用法、畳字法、単字加畳字法、双畳字法である。アルファベットによる型の表示は筆者がつけたものである。

86 東方書店 p.x。本書で、野口宗親は中国語の擬声語の型を「語の構成要素が 1 音節のもの」（一種の構成要素からなるもー筆者注）（例えば、A 型と AA 型）、「語の構成要素が 2 音節のもの」（2 種の構成要素からなる 2 音節以上のもの）（例えば、AB 型、ABB 型、AAB 型、AABB 型、ABAB 型）、「子音や母音の交替するもの」（例えば、BCD 型、ABAC 型、ABCB 型）の 3 種類に分けている。1 音節には A 型と A 型の繰り返しではなく単純語である AA 型のものがある。この方法は語の構成要素の種類と語における位置によって行われる。

87「非双声」は 2 つの音節の子音が異なることを指す。例えば、「嘎吧」は[k-p-]を子音とする非双声の 2 音節擬声語である。

88 AABCD 型の 5 音節語、ABBABB 型の 6 音節語、AAABCDC の 7 音節語などのような擬声語を指す。

たものである。

2.1.3　本論文の形態タイプの種類及びその分類方法

本論文は、鈴木(1988)の形態構造の判定方法を参考とし、音節形態の特徴と意味の特徴を考えながら、近代日本の中国語関係書における擬声語の形態パターンを判定する。

鈴木(1988)の基本型と変異体の分類方法と異なり、本論文は擬声語の形態タイプを基本型と特殊型にわける。基本型は主に単音節のもの、2 音節のもの、2 種類の異なる構成要素のある 3 音節のものを指す。特殊型は 3 種類の異なる構成要素のある 3 音節以上のものと 2 種類の構成要素の非対称式 4 音節以上のものを指す。本研究と鈴木（1988）を対照して擬声語の形態タイプの分類方法の差異を説明する。鈴木(1988)の基本形の A 里 AB 式、ABCD 式（A 里 CD 式、ABCB 式）と変異体の ABBB 式は本論文で特殊型に属し、鈴木(1988)の変異体の AA 式、ABB 式、AAA 式、ABB 式は本論文で基本型に属する。他に、鈴木(1988)のいう臨時形式は非定型で、語数の少ないタイプのものである。本論は基本型と特殊型の区別方法によって、その臨時形式の ABA 式を基本型と、ABC 式と AAAB 式を特殊型と見なす。この区別方法は擬声語の意味特徴によって行う。例えば、AAAA 型や ABAB 型は重畳型の擬声語であるが、一般的に自然音の 2 回以上の模倣を表わすため、基本形に戻せる簡単な重畳型と見なす。

次に、重畳型の区別を説明する。実際には、重畳型が基本型にも、特殊型にもあり、基本型と特殊型のそれぞれについて、重畳型とそうではないものとがある。それらの特徴は異なる。本論文は重畳型の擬声語をさらに具体的に区別するために、擬声語の意味特徴によって重畳型の擬声語の形態構造の特徴を次の基準によって判定している。

重畳型：1 つの形態素及び形態素の結合（例えば、AB は 2 つの形態素からなる形態素結合と見なす）が 2 回以上使われることによって形成された語の形態構造を重畳型という。

意味の特徴から見ると、重畳型の擬声語には自然音の一回を表すものがあり（例えば、AA 型、AAA 型など）、自然音の二回以上を表すものもある（例えば、ABAB 型、AAAA 型など）。一般的に、前者が単純な基本型であるのに対して、後者は基本型が重畳して派生したものである。

重畳型と関連して踊り字「々」の使い方を説明する。中国語関係書には次のような擬声語の例が見られる。「吶吶々々・吶々吶々、啊々啊々、嘍々喳々」などの擬声語における「々」の記号も自然音の伸びることと理解されるため、自然音の繰り返しの表記と見なされる。また、AAAA 型の擬声語は 1 つの種類の自然音或はある自然音の一回を表わす場合、AA 型の重畳した基本型とはみなされない。例えば、呷呷呷呷（『漢文基準支那現代文捷径』家鴨の聲）は一般的に鴨の一回の鳴き声と見なされる。そのため、すべての AAAA 型を AA 型にわけることができない。「吶吶・吶々、啊々、嘍々、嘎々、咛々」のような擬声語は分離して使えば、意味が変わる。つまり、1 音節の「吶、啊、嘍、嘎、咛」といっても、それらに対応する自然音がわからない。また、「吶吶」と聞いたら、それは蝿の声と想像

されるが、「[illegible]」の場合は何の四ゼノンを表すかを想像しがたい。これは一般的なAA型の擬声語であり、一回の自然音を模倣するものである。例えば、ABAB型の「吧嗒々々」（喫煙の音）は同一の自然音の繰り返しを表すもので、「吧嗒」の重畳型式とされても、一般的に意味が通じるため、AB型としてもかまわない。中国語関係書のものはほとんどこの種類である。

2.2　中国語関係書における擬声語の形態構造の特徴

普通の品詞と比べると、擬声語の使用習慣には独自の特徴がある。例えば、記号・符号の多様性と曖昧性、用字の不安定性、形態タイプの多様性などである。

2.2.1　擬声語の形態タイプの判定と擬声語の語数の統計に関する問題

近代日本の中国語関係書は当時の実用的な話し言葉を記録するものを主とする。この言語特徴は明確な言葉遣いの特徴だけではなく、それらの言葉に使われる表記符号にも見られる。擬声語の場合、形態表記には多くの記号・符号が使われた。それらの記号・符号は使い方と意味が様々であるため、それらを持つ擬声語の形態タイプを判別することが難しくなる場合がある。そこで、擬声語の形態タイプを判定するために、形態表記の状況、擬声語の判定方法などを説明する。

（1）記号と擬声語の形態タイプの判定

擬声語の記号について、野口宗親（1995）は引用符、感嘆符、読点、ダッシュ、省略符を取り出し、それらの意味を説明する。例えば、引用符の「“ ”」は擬声語を他の漢字と区別するために示すものである。感嘆符の「！」は強調を意味する。ダッシュの「—」は引き音を表すのに対して、短い音が連続する時には、「頓号」の「、」を用いる。省略符の「……」は擬音語が多く繰り返されることを意味する。実際には、常に使われるわけではない。句点、感嘆符、ダッシュなどの記号によって、擬声語の形態構造を判定する先行研究には徐氷若（2001）[89]などがある。

上のすべての記号が中国語関係書の中の擬声語にも見られる。『萬物聲音』の例の「嗷—嗷—」（狼の鳴き声）、「旺旺々々」（犬の鳴き声）、『倉石中等支那語』の「呼！呼！呼！」（風音）、「ㄉㄤ…儿」（『北京語の味』 ベルの音）などの例が多くある。それらの記号は擬声語の形態タイプの区別と関わる。例えば、「嗷—嗷—」の中の横線「—」は模倣した自然音の延びることを表わす。つまり、単音節の「嗷—」は狼の一回の声の全体[90]を模倣した語である。「嗷—嗷—」は不連続の叫び声の繰り返しを表わすものであるのに対して、「嗷嗷」は連続の自然音で、一回の模倣である。そのゆえ、「嗷—嗷—」はA型、「嗷嗷」（『増訂清語教科書』 人の声）はAA型とする。「咕嘟—咕嘟—（『萬物聲音』 鳩の鳴き声）と「咕嘟咕嘟（『北京語の味』 熱湯のたぎる音）」なども同様である。

---

[89]『現代漢語象声詞研究』pp.26-27

[90]『萬物聲音』の第五章・十三「嗷-嗷-」の例は「狼是嗷-嗷-的叫唤」である。

記号の現象は現実の中国語擬声語にも見られる。中国語擬声語の規範意識について、耿二嶺（1986）は擬声語の形態（語の用字の問題）、句読点の意味から述べている。例えば、形態規範は擬声語の規範の最も重要な事項であり、主に同音字（語）・近音字（語）・異体字（語）[91]の借用、簡体字と繁体字の使用問題に関している。また、擬声語の中の句読点の使用規範を明確にする必要がある。例えば、感嘆符が自然音の自然的な停頓を表すのに対して、ダッシュは突然の停頓を表す。省略符は自然音の持続・繰り返しと延長の意味である。それらの記号の意味と使い方を明確にすることが擬声語の形態タイプの判定に対しても、擬声語の規範意識を高めることに対しても有意義である。

（2）児化の擬声語

児化語は北京語において頻繁に取り扱われる現象である。擬声語の中にも、児化したものが多くある。

中国語の漢字 1 字は普通一音節に読まれる。とはいえ、「聞こえ」からすると、ある漢字はある発音現象のため独立の音節を保たなくなる場合がある。児化現象はその例である。そこで、本論は擬声語の型を分類する時、児化した擬声語は兒を独立した音節とは数えず、擬声語の「兒」を前の音節と合わせて、1 音節とする。例えば、「嗞」と「嗞兒」はともに A 型の擬声語とし、「吱兒—吱兒—」も A 型であり、「吱兒吱兒」と「歐兒嗷兒」はそれぞれ AA 型と AB 型に属する。

（3）同形異音・同音異形の擬声語

近代日本の中国語関係書における擬声語の用字は際立った一字多音の現象を持つようである。例えば、中国語関係書（『語言自邇集』、「『自邇集平仄編四聲聯珠』など）における擬声語の発音と用例の記録によると、「哈哈」の発音は/ha ha/と/ga ga/の二つがあり、「噶喳」には/ka cha/と/ga cha/の 2 種の発音がある。それらの異なる発音は指す描写対象も異なる。「噶喳」/ka cha/は「電閃雷鳴」[92]を模倣するが、「噶喳」/ga cha/は木の板が地面に落ちる音を模倣する。それゆえ、これらの同形異音の擬声語は独立の擬声語とみなす。また、同音異型の擬声語である「巴巴」と「吧吧」、「吱兒々々」と「哧兒々々」と「吃兒々々」、「旺旺」と「汪汪」は同じ自然音を表すこともあるが、用字が混用される場合と特定の意味に「専用」される場合があるため、これらを独立の擬声語と見なす。

「旺旺」と「汪汪」は文字の違いを除けば全く同一語である。「旺」は中国語に既存の漢字ではない。このような現象のため、同音異形の擬声語は中国語関係書において多く存在している。他に、擬声語の用字の特徴について、野口宗親（1995）は次のように述べている。

漢字は意味をもつ。既成の漢字の音だけを借りて擬音語の表記に用いようとすると，

[91] 同音字（語）は同じ発音の字（語）である。例えば、嘩喇と花拉（啦）がある。近音字（語）は発音の同じ或いは近似の部分があるものである。例えば、阿嚏と啊欠がある。異体字は発音が同じで、用字が異なるものである。例えば、哔と咩がある。

[92] これは雷の音を指す。

どうしても混乱がおきがちである。そこで，もっぱら擬音語だけに用いる専用の漢字が作られた。その作り方は，音を表す既成の漢字に口偏をつける（形声文字）というものである。

叭，嚓，咯，咕，咣，哗，咴，嚨，咔，啷，啌，嗵

これらは目ですぐ擬音語を表すとわかるので，便利ではあるが，一方で新しい漢字が増えるという難点もある。たとえ擬音語専用の漢字があったとしても一般化しているとはいえない。擬音語の表記は大変不安定である。あて字などがどんどん使われている[93]。

上にも述べられているように、中国語擬音語の表記には、多くの新しい擬声語の専用の漢字が作られた。これは同形異音・同音異形の中国語擬声語が出る原因の 1 つである。同時に、この現象は中国語関係書における擬声語の用字が「不安定」であることの表れである。

（4）特殊型の擬声語

本論文の 2.1 で、擬声語の特殊型を紹介したが、ここでは近代日本の中国語関係書における擬声語の例を取り上げて検討しながら、特殊型の擬声語の特徴を指摘する。

特殊型の擬声語は一般的に多音節のものである。中国語関係書において、「噶々噶蛋」(『萬物聲音』鶏の鳴き声）の AAAB 型、「咕噔嘩啦」(『萬物聲音』皿が壊れる音）の ABCD 型、「咕々呢嗷兒」(『萬物聲音』フクロウの鳴き声）の AABC 型などの特殊型の擬声語がある。

複合型は 2 種類以上の形態タイプからなるものである。例えば、AAAABAB 型の「咖咖咖唧咋唧咋」、ABABAAB 型の「ㄍㄥ ㄍㄚ ㄍㄥ ㄍㄚ ㄍㄥ ㄍㄥ ㄍㄚ/geng ga geng ga geng geng ga/[94]」などは複合型のものである。そのような擬声語は 1 種の自然音を表わすが、語形が分解される。本論文では、複合型を分解して統計する。例えば、「唿喇喇唏啦嘩啦」を ABB 型の「唿喇喇」と ABCB 型の「唏啦嘩啦」に分けて説明する。

重畳型の AAA 型の「嗡嗡嗡」と AAAA 型の「喔 喔 喔喔」は独立の型別の擬声語として、一回の自然音を模倣する擬声語である。それらはさらに細分できない基本型と見なす。

他に「ー啊ー啊」や「ー之ー之」などと表記される擬声語が中国語関係書において見られる。例えば、「叮啊噹啊」「砰啊磅啊」「嗚之嗷之」などがある。実際、「叮啊噹啊」の中の「啊」が擬声語の部分ではないため、「叮啊噹啊」は 1 つの独立の擬声語ではない。この語は「叮」と「噹」の 2 つの擬声語に分けられる。従って、「叮啊噹啊」のような擬声語は 2 つの単音節擬声語を含む特殊型である。

上述のように、近代日本の中国語関係書における擬声語の形態構造の表記方法は多様である。同時に、擬声語の形態特徴と表記方法の規則性・統一性と規範意識は弱くなる。その原因について言えば、中国語関係書が記録したのは基本的に当時の話し言葉であって、

---

[93]『中国語擬音語辞典』p.xviii

[94] これはピンインで、筆者が注記した。

複雑な話し言葉の実態を確実に記録するために、様々な方法が使われたことが考えられる。そのため、表記方法があまり規則的ではないこととなった。

（5）擬態の語彙

「喘喝喝・氣哼哼・笑嘻嘻・悠悠揚揚」などの語は自然音の出る様子・状態を表すもので、擬声語ではない。本研究はこのようなものを考察しない。

中国語関係書に出現した全ての型別の擬声語を、本論文の最後に「（3）中国語関係書における各型の擬声語」として掲げた。

2.2.2　形態タイプ

2.1.3 の考察に基づき、中国語関係書に現れる擬声語を調査してその形態特徴を判定して見ると、次のような 13 種類の形態タイプがある。

A 型、AA 型[95]、AB 型、AAA 型、AAB 型、ABA 型、ABB 型、AABB 型、ABAB 型、ABCB 型、AABC 型、ABCD 型、AAAB 型

これらの 13 種類の形態タイプは自身の特徴を持つ。A 型の擬声語（例えば、嘎-嘎-）は自然音の繰り返しを表わすのに対して、AA 型の「嘎嘎」は重畳型であるが、自然音の連続で、1 回の模倣現象を表すため、基本型のものである。同様の理由で、本論は AAA 型を独立の形態タイプのタイプとしている。その他に、重畳型の AAAA 型、ABAB 型も連続する自然音[96]を表わすものであるが、それらの大部分は AA 型と AB 型の重畳型で、自然音の 2 回以上の模倣（繰り返しの自然音）を表わすため、本論は AAAA 型の擬声語を AA 型に、ABAB 型を AB 型に入れて分析する。実際は、AAAA 型の中に、複合型である「喔 喔 喔 喔」のように分解されないものがある。本論ではそれらのものを一種としては独立させていない。AAAA 型や ABAB 型は重畳型の擬声語であるが、基本型に戻せる簡単な重畳型と見なし、もとの基本型と一緒に扱うことにする。

本論文は近代日本の中国語関係書における擬声語を統計して、13 種類の形態タイプによって整理して、論文の最後の表の「中国語関係書における各型の擬声語」に掲げておいた。

2.3　形態タイプの分布状況

本節では中国語関係書における擬声語の総語数と各型の語数を統計し、その分布状況を考察する。筆者の統計によって得た擬声語全体の総数は 392 語であり、その延べ回数は 549 回である。次に、各型擬声語の語数、割合、延べ回数を表 2 に示す。

---

[95] 本研究は AAAA 型を AA 型の重畳型と見なすため、下文の AA 型は AAAA 型を含むものを指す。しかし、AAAA 型を独立の型別として取り上げて検討する必要がある場合もある。AB 型と ABAB 型の状況もそうである。本研究では ABAB 型を独立して統計している。

[96] 連続する自然音は持続時間が長い一回の音を指す。繰り返しの自然音は何回かの声や音を指す。

表 2　中国語関係書における擬声語の形態構造のタイプ及び出現回数の分布状況

形態タイプ	A	AA	AB	AAA	AAB	ABB	ABA	AABB	ABAB	ABCB	AABC	ABCD	AAAB
異なり語数	48	134	72	22	8	10	3	24	50	14	1	5	1
比率Ⅰ（%）	12.2	34.2	18.4	5.6	2	2.6	0.8	6.1	12.8	3.6	0.3	1.3	0.3
延べ回数	61	199	86	29	11	14	8	39	76	16	1	6	1
比率Ⅱ	1.3	1.5	1.2	1.3	1.6	1.4	2.7	1.6	1.5	1.1	1	1.2	1

注：比率Ⅰ（%）は形態タイプに対応する擬声語の語数が総数に占める比率を指す。少数点第二位を四捨五入。比率Ⅱは同一の形態タイプである擬声語の延べ回数と語数の比率（延べ回数/語数）を指す。少数点第二位を四捨五入。これは一語あたりの平均出現度数擬声語の出現の重複率のことである。

本論文では、擬声語中に現れる特殊音節を除外せずに通常の音節として統計する。例えば、中国語として音韻の枠外のものである「ㄊㄨㄤ ㄊㄨㄤ t'uang t'uang(duang duang)」（鐵物相撃聲（金物））」、「小槍(小銃) ㄆㄦ ㄆㄦ p'êrh p'êrh（p…er p…er)」の「ㄆㄦ」、「汽車（自動車）ㄔㄔㄔ ch '(ih) ch '(ih) ch '(ih)（ch…ch…ch…）」の「ㄔ」などである。

2.3.1　形態タイプの全般の分布特徴

表 2 が示すように、AA 型の擬声語が最も多い。AAAA 型を AA 型に合併したこともその原因の一つであるが、AA 型の擬声語の延べ語数と異なり語数は、2 番目に多い AB 型をはるかに上回っている。他のタイプの擬声語の出現度数は AA 型と比べはるかに少ない。特に、用例がきわめて少ない ABA 型、AAAB 型、AABC 型などから見ると、擬声語の形態構造のタイプの分布は集中している傾向が見られる。表 2 の中の比率Ⅱに示したように、擬声語の全般の重複出現率はあまり高くなく、異なる型別に大きな差が見られない。

上述の 13 種類の形態タイプのうち、その出現率（重複出現の率を含む）から見て、一般的な型であるのは A 型、AA 型、AB 型（ABAB 型）、AABB 型[97]など少数である。表 2 から分かるように、2 音節のものが最も多い。つまり、異なる音節パターンの擬声語には語数の大きな差が見られ、2 音節を主とする状況が顕著である。

2.3.2　児化擬声語

次に児化擬声語を抜き出し、その比率を計算し、分布状況を考察する。児化擬声語は「兒」の位置により異なる形式タイプがあるため、次の表（表 3）は児化擬声語の種類を区別してまとめた。

表 3　児化擬声語

形態タイプ		児化擬声語
A 兒		倏兒、吱兒、嗞兒、ㄅㄨ…儿、ㄅㄤ…儿、ㄗ儿、ㄗㄨ…儿
A	AA 兒	咂咂兒

[97] AABB 型の語数はあまり多くないが、その延べ使用数から見ると、この型はよく用いられる。

A	A 兒 A 兒	嗷兒々々、哧兒々々、吃兒々々、噹兒々々、嘚兒々々、噔兒々々、喀兒々々、[illegible]兒々々、咕兒咕兒、蝈々兒、[illegible]兒[illegible]兒、嘿兒々々、呼兒々々、[illegible]兒々々、哞兒哞兒、歐兒々々、倏兒々々、颼兒々々、嗚兒々々、嘖兒嘖兒、哧兒哧兒、吱兒吱兒、嗞兒々々、ㄘㄦ　ㄘㄦ、ㄉㄦ　ㄉㄦ、ㄉㄤㄦ　ㄉㄤㄦ、ㄍㄦ　ㄍㄦ、ㄎㄦ　ㄎㄦ、ㄆㄦ　ㄆㄦ、ㄆㄚㄦ　ㄆㄚㄦ、ㄖㄦ　ㄖㄦ、ㄖㄦˊ　ㄖㄦˊ、ㄗㄦ　ㄗㄦ
A B	A 兒 B	咯兒噶、[illegible]兒呱
	AB 兒	[illegible]哨兒、蚨蝶兒、呱噔兒、呱噔兒、呢喲兒、ㄈㄨㄊ　ㄧㄢㄦ
	A 兒 B 兒	叮兒噹兒、吱兒喳兒、ㄅㄦ　ㄌㄦ、ㄗㄦ　ㄗㄚㄦ
A 兒 A 兒 A 兒		根兒根兒根兒、ㄍㄜㄦ　ㄍㄜㄦ　ㄍㄜㄦ、ㄅㄦ　ㄅㄦ　ㄅㄦ
A A B	AA 兒 B	閣閣兒咕、ㄈㄨㄈㄨㄦˊㄠ
	AAB 兒	嘎嘎蛋兒
AB 兒 AB 兒		嘎嘣兒嘎嘣兒、咕啷兒咕啷兒
AABC 兒		咕々呢嗷兒

表 3 をみると、A 型、AA 型、AB 型の児化擬声語が多くあることがわかる。児化擬声語は 62 語あり、擬声語の総数の 16.2%を占めている。形態構造の類別によって整理した児化擬声語の分布は表 4 のようである。

表 4　児化擬声語の出現状況

形態タイプ	A	AA	AB	AAA	AAB	ABAB	AABC	ABB	ABA	AABB	ABCB	ABCD	AAAB
児化擬声語の語数	7	35	11	3	3	2	1	/	/	/	/	/	/
比率Ⅲ（%）	14.6	28.7	16.4	13.6	42.9	3.9	100	/	/	/	/	/	/
延べ回数	7	47	13	3	5	2	1	/	/	/	/	/	/
比率Ⅳ	1	1.3	1.1	1	1.7	1	1	/	/	/	/	/	/

注：比率Ⅲ（%）は児化擬声語がこれと対応する形態タイプの擬声語全体に占める比率である。比率Ⅳは同一の形態タイプである児化擬声語の延べ回数と語数の比率（延べ回数/語数）を指す。これは児化擬声語の出現の重複率である。

表 4 によれば、ABB 型、ABA 型、AABB 型、ABCB 型、ABCD 型、AAAB 型などの特殊型の擬声語には、児化擬声語がない。

児化擬声語の形態特徴から言うと、児化音の位置は 2 種類ある。例えば、AA 型の「蝈々兒」と AB 型の「[illegible]哨兒・蚨蝶兒」などは「兒」が語尾に付いているのに対して、AB 型の「咯兒噶・[illegible]兒呱」と AAB 型の「閣閣兒咕」は語の前部が児化音になる。また、AB 型の児化語擬声語の「叮兒噹兒」は児化語擬声語ではない「叮噹」の前後の部分がすべて児化したものである。「嗷兒・嗷」、「嗚兒・嗚」、「嗞兒・嗞」、「哧兒・哧」などの A 型、「咕啷兒咕啷兒・咕啷々々」の AA 型の例もある。それらの例によって、児化擬声語の多様な形態が窺える。

語数からみると、近代日本の中国語関係書において、児化擬声語は頻繁に使われることがわかる。形態タイプによる分布状況から見ると、AA 型に集中している現象が顕著である。児化擬声語は「児」の位置によって多くの種類に分けられるため、その形態が多様である。

2.3.3　中国語関係書における児化擬声語の概況

表 3 に収集した児化擬声語の大部分は『萬物聲音』[98]と『北京語の味』[99]に所載のものである。この二書は擬声語を特に多く集めたもので、それぞれ 126 語と 90 語が載っている。形態タイプのタイプ及び分布状況から、それらの擬声語を中国語関係書における擬声語の全般と比べて見ると、一致しているところが見られる。これについての具体的な考察は本論文の第 4 章で『萬物聲音』と『北京語の味』を中心にして行う。

調査した他の中国語関係書にも、稀に児化擬声語が見られる。例えば、『最新支那語教科書讀本篇』[100]の「閣閣兒咕・嗞兒嗞兒・哞兒哞兒・呼兒呼兒」、『增補華語跬步』[101]の「咂咂兒・喏喏兒・咂咂兒」などである。これらは主に一般学習書である。『支那文典』（大槻文彦 明治 10 年）、『清語文典』（信原継雄 明治 38 年）、『北京官話文法』（何盛三 昭和 3 年）などの代表的な文法書の調査も行ったが、それらの中に、児化擬声語はあまり見られない。

2.4　まとめ

近代日本の中国語関係書における約 390 語の擬声語は 13 種類の形態タイプ（A 型、AA 型、AB 型、AAA 型、AAB 型、ABA 型、ABB 型、AABB 型、ABAB 型、ABCB 型、AABC 型、ABCD 型、AAAB 型）に分類できる。これらの形態タイプの擬声語は語数の大きな差を持ち、顕著な差異を持つ分布状態を呈する。その中に、A 型、AA 型、AB 型などが圧倒的に取られて、常用型と見なされる。また、2 音節（AA 型（AAAA 型）と AB 型）の擬声語は中国語関係書の擬声語の半数以上（52.6%）を占めている。これは無視できない特徴である。特殊型(例えば、AAAB 型や、AABC 型、ABCD 型など)の擬声語は少なく、少数の関係書において見られる。

児化擬声語は常用型の A 型、AA 型、AB 型において多くあるのに対して、ABB 型、ABA 型、AABB 型、ABCB 型、ABCD 型、AAAB 型などの特殊型の擬声語には見られない。

中国語関係書の擬声語は形態表記の符号の使い方において規範上の問題が存在している。

98『萬物聲音』は当時陸軍清語通訳官であった瀬上恕治の作で、明治 39 年（1906 年）11 月に北京・徳興堂印字局により刊行されたものである。本書は叙文、例書、発音表と 6 章の内容からなる。そのうち、第 2 章から第 6 章は中国語擬声語を約 126 語記録している。それは官話合声字母、ウェード式ローマ字、カタカナの 3 つの方法で、語の発音を表記している。この点は本書の特徴として、六角恒廣（1994）に注意される。

99『北京語の味』は大山聖華により編纂され、昭和 16 年（1941 年）8 月に北京・中華法令編印館により刊行された。『北京語の味』は中国の当時の社会風俗や文化、生活場面の会話などを記録したものであり、中国語の語彙、文法、修辞言語などを紹介する学習書である。本書の「擬音一覧」には注音符号で表記された 89 類の自然音を表わす擬声語が挙げられている。その他、漢字で表記された擬声語が 8 つある。

100 宮城健太郎・内之宮金城（1936）外語学院出版部

101 御幡雅文（1913）文求堂

中国語擬声語の中に、文字・発音記号や他の符号などが使われている。その中には、実存の漢字ではなく、新しく作られた用字や、ダッシュ、省略記号などが見られる。それらの記号の使用は擬声語の形態タイプが多様になる原因の一つである。この状況は擬声語の収集・記録方法、近代日本人学者の中国語の認識・習得の程度などと関わっている。さらに当時の中国語擬声語の実態を知るために、中国語の語音と意味の関わりをめぐって中国語擬声語の状況を検討する必要がある。

このように、近代日本の中国語関係書における擬声語はA型、AA型、ABなどの常用型に集中し、各型の擬声語における児化擬声語の語数と分布現象が顕著であることがわかる。それとともに、表記方法の状況から見ると、擬声語の形態の安定性と規範性が弱い。

第 3 章　擬声語の意味分野

近代日本の中国語関係書における擬声語の意味の特徴を究明するには、それらの擬声語が描写する自然音の状況を考察する必要がある。自然音が複雑で、様々な種類があるため、本章は意味分野の概念によって自然音を分類し、各意味分野に対応する各型の擬声語を統計して、その状況を考察する。それによって、近代日本の中国語関係書における擬声語の意味分野の特徴を明らかにする。

3.1　言語学での意味分野

「意味分野」という用語については、『意味の構造―成分分析』（ナイダ 1977)において、著者のユージン・A・ナイダは意味分野について以下のように述べている。

> 意味分野というものは、本質的には、ある種の意味成分を共有している語句や表現を一まとめにしたものであって、一つの語の意味に限ったものではない。一見すると、実体、生物、質量物、加工品、事象、過程、状態というようなものは、言語外の現象の体系に基づいて論理的に分類したカテゴリーのように見えるかもしれないが、実際には、何らか先験的な命名法や分類法に基づいているわけではない。いかなる言語においても、意味分野は共通の意味特徴をもった語句によって構成されている[102]。

一方、訳者の昇川潔・沢登春仁がの「訳者まえがき」の中で、「意味分野」について「関連する語群全体が占める意味空間」[103]であると説明している。また、意味分野の研究意義について、ナイダはそれが言葉の「意味を区別したり、示差的な意味成分を決めるための枠組みを提供したりする上で」[104]役立ちうると指摘している。言い換えると、意味の集団である意味分野は語の意味の差異により、同種類の意味を持つ語を集め、意味の相違のある語を区別することができるであろう。そのためには、意味の分野の解明、語の意味の分

---

[102] 同上 p172

[103] ユージン・A・ナイダ（Eugene A. Nida）著/ノア・S・ブラネン(Noah S.Brannen)監訳/昇川潔・沢登春仁訳 1977 『意味の構造―成分分析』研究社出版 p.iv を参考。この概念と類似している言い方に、意味論の「連想グループ」或いは「(意味）場」がある。「語彙素によって構成される「連想グループ」という名称で、問題にしてきた対象は、言語学の歴史で「場」という術語で議論されてきた概念に相当する」(池上嘉彦 1980.『意味論』大修館書店 p266)。池上嘉彦（1980）によれば、「連想グループ」と「場」の共通点は「意味的に密接な関連性が感じられる場合には、それらの語の意味にはたがいに共通の意味特徴が含まれている」という原則を持っているのである。そこで、「場」の概念も語彙と語の意味範囲のことを扱う。本論は「意味分野」の言い方を採用する。その理由をあげると、「場」と「意味分野」の関係を紹介する必要がある。この検討は本論では触れず、今後の機会にする。また、『意味の構造―成分分析』の「訳者まえがき」で、昇川潔・沢登春仁は意味空間の意味を説明するために、「文脈の中で語は、ある範囲の指示的意味をもつが、その範囲を総称として本書では、「意味空間」と呼」ぶと述べている。

[104] 同上

析は大変重要な作業となる。

意味分野の研究は意味を中心にするとは言え、意味分野の枠組みに入れた語彙を分析する時、あるカテゴリーに属している語の意味の特徴を明らかにしなければならない。意味の面だけに限って、意味分野の研究を行うことは難しい。実際、意味分野の研究において、語の音節形態、各意味分野においての型別による語数の分布状況、語の用法などを検討することは避けられない。

意味分野には、多様な下位の分類がある。例えば、ユージン・A・ナイダは意味分野を大きさ、階層的なレベル、属する階層の多様性、上下関係[105]、他の分野との境界線などの角度から、ほとんどすべての言語に普遍的に見られると考えられる実体、事象、抽象概念、関係概念の四つの主な意味カテゴリーに分けている。それらの意味分野には更に細かい下位分類及びその下位区分も多くある。例えば、「事象」という意味分野の下位分野には、「A.物理的なもの」、「B.生理的なもの」、「C.感覚」などの12種がある。また、区分の仕方によって、意味分野及びその下位分類が異なってくる。例えば、1つの語の意味は、ナイダ/ブラネン(1977)の意味分野の「Ⅰ.事物」或いは「Ⅱ.事象」において、それぞれ下位分類の「A.無生物」「B.生物」或いは「J.衝撃」と「K.移行」によって分類される。それゆえ、擬声語などの語彙の意味分野を考察する前に、意味分野の分類方法を提出しなければならない。

本論では、ナイダ/ブラネン(1977) と擬声語の意味分野に関する先行研究を参考としながら、近代日本の中国語関係書における擬声語の意味分野の分類を行ってみる。

3.2　擬声語の意味分野及びその分類

3.2.1　擬声語の意味分野に関連する日中の代表的な先行研究

擬声語の意味分野に関する全面的な研究は未だ形成されておらず、残っている問題点もある。例えば、擬声語の意味分野の分類が形成されておらず、各意味分野において中国語擬声語の分布状況が不明である。本部分では、擬声語の日中の代表的な関連先行研究を踏まえて、擬声語の意味分野の種類と特徴を検討する。

擬声語が描写する自然音の状況を明らかにすることを通して、擬声語の意味分野の可能な方向を考察する。そのため、次に擬声語が模倣する自然音の状況を解説する。擬声語の模倣対象について、天沼寧（1984）は『擬音語・擬態語辞典」で次のように述べている。

擬音語とは，人間の笑い声，泣き声，つばを吐いたり，ものを飲んだり，平手でたた

[105] 階層的なレベルは語義の範囲の含意関係を指す。属する階層の多様性はある語が二つ以上の階層に属することを指している。訳者の昇川潔・沢登春が属する階層の多様性について例を挙げて解釈している。現時点で、擬声語の定義は様々あるが、それらの意味が似たり寄ったりである。それらに共通しているのは、擬声語は発音と意味の関係が恣意的ではなく、音象徴の要素が存在しているということである。その解釈で、「man」は「man_1」（「人間」1)、「man_2」（「男性」2)、「man_3」（「大人の男性」3）の多様性を持っている。その中に、man_1 、man_2、 man_3 は 階層的なレベル、上下関係の区別を持っている。

いたりする時などに発する音，人間以外の生物の発する声や音，また，自然界に自然に発する音響や，無生物が，いわば自然に，あるいは，外力の作用を受けて発する音響を，音声で表現した言葉である[106]。

天沼（1984）は模倣対象の自然音の種類を区別することを通して擬声語の定義をあげている。その定義に見られる擬声語の意味分野には人間と人間以外の生物の声、自然の音響、動作の音響などがある。このような自然音を区別する方法は発声対象の性質によって行われる。さらに、天沼（1984）は、人間に関する声・音を細かく、笑い声、泣き声、つばを吐いたり、ものを飲んだり、平手でたたいたりする時などに発する音に下位区分している。このように、人間以外の生物の声、自然の音響、動作の音響も細分化する必要がある。

日向茂男（1991）の『擬音語・擬態語の読本』[107]の「第五章　音声・擬音」では、擬声語は各意味分野にまとめられており、「鳴く・啼く」、「鳴る」、「響く」、「ぶつかる」、「擦れる・軋む・引っ掻く」、「爆発する・弾ける」に分類されている。意味特徴からいうと、それらは動物の鳴き声と動作に関する音を現す分類である。また、日向は「第一章人の動き」で、「立つ・起きる」、「歩く」、「動く・動き回る」、「飲む」、「咳をする」、「言う・話す」等の人の行動に関する擬声（音）語をまとめた。実際、それらの辞書における擬声語の解説によっても、擬声語の意味分野を明白にすることは難しい場合がある。

平弥悠紀（2005）[108]は日向の分類を参考として、擬声語の意味分野別を、「声」を表す「生物が発する声」と「音」を表す「動作に関わる音」、「無生物が発する音」、「物と物とが作用して生じる音」の4つの種類に分けている。そして、それらの下位の分類も細かく挙げている。例えば、「動作に関わる音」には、さらに「息を吹く」や、「吐く」、「喉を鳴らす」、「飲む・食べる」、「踏みつける」などの動作によって発する音がある。この方法は天沼（1984）と擬声語の意味分野を自然音の発する主体の性質[109]によって判別する点で似ているが、日向（1991）とは相違している。日向（1991）の意味分野を判別する方法は声・音の性質[110]によって行われる。以上のように、擬声語の意味分野には、人間を含む生物、無生物、自然界の事物・現象・変化、動きの状態・様子などの下位分野がある。

中国語側では、擬声語の意味特徴の研究は少なく、系統的になっていない。孟琮（1983）は北京語擬声語の構成特徴、意味特徴、文法特徴を分析している。孟琮（1983）は北京語擬声語を、普通の音・声を模倣するもの、動物の鳴き声を模倣するものと特殊な音節のもの、動物を叫ぶ声を模倣するものに分けている。そのため、孟琮（1983）は擬声語の描写する自然音を分類することでも、有意義な研究である。しかしながら、孟琮（1983）の方

---

106 天沼寧（1984）『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版 p7
107 本書は尚学図書言語研究所により編纂されたものである。日向茂男は監修者である。小学館。
108 平弥悠紀（2005）「XYXY タイプの擬音語」『同志社大学留学生別科紀要』第 5 号 pp.1-15
109 これは自然音を発する物・事・現象のことを指す。
110 声・音の性質は生物の声と、無生物や事・現象などによる音のことを指す。

法は自然音の全面的な分類をしていないため、それによって擬声語の意味分野の詳しい分類を挙げるのは難しい。

陳北郊（1989）は「擬声詞散論」で、擬声語の定義を説明し、より全面的に中国語擬声語の分類を検討している。それによると、中国語擬声語は直接擬声語と間接擬声語[111]を含んでいる。直接擬声語には、「模仿人发出的自然音而形成的擬声词（人が発する声を模倣する擬声語）」、「模仿物发出的自然音而形成的擬声词（ものが発する声・音を模倣する擬声語）」、「模仿人与物接触过程中发出的自然音而形成的擬声词（人とものの触れ合いから発する音を模倣する擬声語）」の3種類がある。陳北郊（1989）の分類はより規則的であり、全面的である。ただし、擬声語の意味分野を深く検討するために、この3種類の擬声語を意味特徴によりさらに具体的に分類する必要がある。例えば、声・音を発するものを生物、無生物に分ける。

これらの他に、李鏡兒（2007）『現代漢語擬声語研究』は自然音の性質によって、中国語擬声語を人に関わるもの、動物に関わるもの、自然現象に関わるもの、物体に関わるものとそれ以外に分けている。それぞれはさらに細かく分類されている。例えば、人に関わる擬声語は気持ち（心臓や脈の鼓動）を表わすもの、動作（笑うこと、走ること、食べることなど）を表わすもの、様子（まばたき、顔が赤くなる様子）を表わすものを含めている。李鏡兒（2007）の分類方法は上述した先行研究と同様に、自然音を発する主体の性質によっている。また、音の性質による分類も李鏡兒（2007）に見える。例えば、衝撃の音、摩擦の音、破裂の音などがある。

上の紹介から見ると、先行研究において擬声語の意味分野の分類方法は多様であるが、一般的な見方が形成されていない。それに、意味分野の分類によって擬声語を集めてその特徴を詳細に検討する研究もあまり多くない。

3.2.2　意味分野の分類及びその問題点

擬声語の描写する自然音を「声」と「音」に大きく二分することができる。本章は自然音を発する主体の性質、声・音の性質という分類方法によって擬声語の意味分野の状況を考察する。多くの先行研究で、擬声語の意味分野の判別方法が多様であるため、意味分野の種類が安定していない。とはいえ、その基本的な内容は大体形成されている。つまり、いかなる言語においても、分類方法に大きい相違は見られない。概括的に見ると、一般的に意味分野は声と音の区別に基づいて、人、動物、無生物、動作などに関するものに分けられ、さらに細かい下位区分に細分されている。例えば、自然音を発する主体の性質によって、擬声語の意味分野は「人の声」、「動物の声」、「自然現象の音」、「無生物が発する音」、「物体と物体の作用によって生じる音」、「動作に関わる音」などに分けられる。本研究はこの分類方法を採用する。

---

[111] 陳北郊（1989）の解釈では、直接擬声語は「是指直接摹仿人或事物发出的声音而形成的词（直接に人や事物が発する声・音を模倣する語ー筆者訳）」であり、間接擬声語は「是指由摹仿任意词 的声音而形成的词（ある語の発音を模倣する語ー筆者訳）」である。

意味分野の境界線がないため、すべての擬声語に対応する意味分野を区別することは難しい。無生物が発する音、物体と物体の作用によって生じる音、動作に関わる音を表す擬声語の場合、それらの自然音の境界がはっきりしない。例えば、「洋喇叭」（ラッパ）の音を表わす語である「嘀々嗟–嘀々嗟」は確かに息を吹くという動作によって起る音であるが、「無生物が発する音」[112]でもある。また、無生物が発する音と物体と物体の作用によって生じる音の関係を中国語関係書の中の例で見ると、（旧式の）時計が振動する音「噶嗟々々」[113]や、太鼓をたたく音「咚咚々々」「ㄉㄨㄥ ㄉㄨㄥ」などは「無生物が発する音」と見なすこともできる。それに比べると、「撮石頭」（石を投げること）の音を模倣する「紉々」と「柔々」、磨刀声（砥石の音）（ㄘㄥ ㄘㄥ）、鉄物相撃声（金物）（ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ）の摩擦の音或は衝撃の音を模倣した語は「物と物とが作用して生じる音」を表わすものと言える。

ゆえに、本論は無生物が発する音と物体と物体の作用によって生じる音を合わせて「物の音」とする。それで、日向茂男（1991）における意味分野の分類方法を利用しながら、「物の音」の下位分野を声・音の性質の判別方法によってア.衝撃音（たたく音を含む）、イ.摩擦の音、ウ.破裂の音・破砕の音、エ.鳴る音（自発音）[114]などに分類する。また、より容易に擬声語の意味分野を判別するために、本章は動作に関わる音の下位区分を人・動物の動作に関わる音に限定する。「動作に関わる音」は「息を吹く」、「吐く」、「喉を鳴らす」、「飲む・食べる」、「踏みつける」などのような動作そのものの音を主とする。

このように、本研究は自然音を発する主体の性質と声・音の性質によって、擬声語の意味分野を「①人の声」、「②動物の声」、「③自然現象の音」、「④動作に関わる音」、「⑤物の音」などに分け、さらに「物の音」を衝撃の音、破裂の音、摩擦の音、鳴る音に分類する。

3.3　中国語関係書における擬声語の意味分野

本節では近代日本の中国語関係書における擬声語の意味分野の分布状況を検討する。それによって、中国語擬声語の形態タイプと意味分野の対応状況を解明する。

3.3.1　中国語関係書においての意味分野の関連内容

近代日本の中国語関係書の中に、擬声語の意味分野に関する内容が見られる。代表的な中国語関係書の『萬物聲音』と『北京語の味』を見てみる。

①　『萬物聲音』

『萬物聲音』は北京語の擬声語と感嘆詞を専門に集めた書である。『萬物聲音』は「例

112「無生物が発する音」の意味分野は鳴る音、雑音、響く音、機械が作動する音、機械が滑らかに動かない音などを含む。平弥悠紀（2005）「XYXY タイプの擬音語」『同志社大学留学生別科紀要』第 5 号を参考。

113 これと以下の擬声語の例はすべて中国語関係書のものである。

114 ベル、ラッパ、笛などの音は鳴る音に属するものである。

書」[115]で、各章の擬声語の意味分野について、次のように記している。

本書章を分ちて六章となし、第一章に於ては感投詞につき一々解釋をなし、其例証を加へ、第二章に於ては人の動作に因り起こる音聲を含めるものを、第三章に於ては物體と物體との摩擦により起こる音聲を含めるものを、第四章に於ては鳥類の鳴聲、第五章に於ては獣類の鳴嘯の聲、第六章に於ては蟲類の鳴く音を含める北京官話を記載したり

この記述のように、『萬物聲音』は擬声語の意味分野を人の声、動物の声、無生物が発する音、自然現象の音、物体と物体の作用によって発する音、動作に関わる音などに分ける。この分類は自然音を発する主体の性質によっている。

② 『北京語の味』

『北京語の味』は「擬音一覧」の部分で、6つのグループを収録している。意味分野に関する説明は載っていないが、用例の自然音の特徴を見ると、各グループは動物の声、人の声、無生物が発する音、物体と物体の作用によって発する音、自然現象に関わる音、動作に関わる音の意味分野によって分けられていることがわかる[116]。そのため、『萬物聲音』と同様に、『北京語の味』も自然音を発する主体の性質という分類方法によって擬声語の意味分野を区別している。

3.3.2 各意味分野に対応する擬声語の語数の統計の基準

擬声語の各意味分野における分布状況を考察するために、各意味分野における語数を統計する基準に関する事項をいくつか取り上げて説明する必要がある。それらは次のようなことである[117]。

（1）中国語関係書の調査結果から見ると、用例・語釈[118]が完全に同じである擬声語が異なるテキストに見られることがある。例えば、擬声語の「叮噹叮噹」及び用例「你聽聽外頭叮噹叮噹的, 那是甚麼聲兒」は『增訂清語教科書』、『華語跬步』、『清語會話案内（上）』、『支那語自在』（豐國義孝）、『增補華語跬步』などに見える。本論はそのような擬声語の意味分野を検討する場合、それらの擬声語を一回にして計算する。また、用例・語釈が非常に似ている擬声語もある。実際はそれらの用例が表す意味分野が同じである。例えば「涮涮」は下の表の如く三種の異なる資料に見えるが、用例は互いにごく似通っており、本論ではこれらを全て一回に数える。

擬声語	用　　例	用例を載せているテキスト

115 『萬物聲音』 p7

116 例外の場合がある。例えば、（一）には基本的に動物の声が収録されるが、「喧嘩する時」の声と「小孩兒」の声などのような人の声を表すものが見られる。

117 本節で取り上げた擬声語の例はすべて中国語関係書の中のものである。

118 下文には、語例と語釈を区別しないまま使用することもある。

涮涮	正説着、就涮涮的下起來咯	亞細亞言語集
	走沒幾步、雨就涮涮的來咯	參訂漢語問答國字解
	雨涮涮的下起來	支那語四週間

（2）次に、用字が異なる擬声語の意味分野の状況を検討する。そのような現象はは隣接の擬声語[119]の交替現象[120]である。それらの擬声語の字形或いは音形で相違している。例えば、異なる語形である「嘩楞・嘩冷・嘩愣」はそれぞれ/hua leng・hua leng・hua e/と発音する。本論はそれらを独立の擬声語として統計した。それらの擬声語は中国語関係書における語例が全く同じである[121]ため、同じ意味分野に属するものである。同一の意味分野に対応する擬声語の語数を統計する時、本論はそれらを3つの語として計算する。

（3）同一の擬声語が異なる意味分野で使われる場合がある。例えば、「嘩喇嘩喇」は自然現象の音、動作によって発する音など多種の意味分野の自然音を表す。

擬声語	用　　例・語　　釈	用例を載せているテキスト
嘩喇嘩喇	裁紙疊紙（紙を切る音と紙を折る音ー筆者注）	萬物聲音
	流水（流水の音ー筆者注）	萬物聲音
	（蝙蝠）嘩喇嘩喇的來回亂飛。（蝙蝠が飛び回る音ー筆者訳注）	支那語自在（豐國義孝）
咕咚咕咚	然後就聽見咕咚咕咚的房上跳下幾個人來。（人が何人か屋上から飛び降りる音ー筆者注）	北京官話文法
	聽見外頭咕咚咕咚的响，不大的功夫兒就見墻上挖透了一個窟窿。（壁の上に洞を掘る音ー筆者注）	北京官話搜奇新編
	就覚得咕咚咕咚的不舒服。在車裏頭打了一個盹兒。（運転中車が揺れる音ー筆者注）	清語會話案内　（上）
咿咿啞啞	小妹妹也招着手，咿咿啞啞，叫了幾聲媽媽。（幼児の妹がお母さんと呼ぶ声ー筆者注）	倉石中等支那語
	望望橋邊，辨不出咿咿啞啞的櫓聲。（パドルで水をかく音ー筆者注）	倉石中等支那語

この現象は擬声語の多義の特徴である。実際、日本語と異なり、中国語擬声語には大まかで包括的であるという傾向がある。つまり、一つの擬声語が受け持つ描写対象が日本語よりも広い。具体的な例で説明すると、武田みゆき（2001）の「擬音語の語彙化に関する

119 発音（言語音）と意味（自然音）の関係の面で、近似或いは同じ特徴を持つ擬声語を指す。

120 これは、ある中国語擬声語の全体或いは部分の用字が、同じ発音或いは意味を持っている他の用字に交替される現象を指す。中国語で、「通用現象」とも言う。

121「嘩楞・嘩冷・嘩愣」の中国語関係書における用例はそれぞれ「廚房裏嘩楞的一聲…原來是貓叨着一個耗子哪」（『支那語自在』（豐國義孝）、『增補華語跬步』）、「廚房裏嘩冷的一聲…原來是貓叨着一個耗子哪」（『清語會話案内』（上））、「聽見廚房裏嘩愣的一聲…原來是貓叨着一個耗子呢」（『華語跬步』）である。

日中両言語の特徴」[122]には次のような記述がある。

> 中国語の擬音語では、日本語のそれに比して多義のものがはるかに多く、また、一つの擬音語が表現する実態音も日本語に比べて多種にわたっている。例えば犹犹 aoao は、実態音①人の叫び声、②動物のほえ声、③風のうなる音などを表しているが、これを日本語の擬音語で表現すると、ワーワー、ガオー、ゴーゴーとなる。日本語の擬音語では、「ワーワー」は人の叫び声のみを表し、動物のほえ声を表現することも、風のうなる音を表現することもない[123]。

つまり、中国語の擬声語は言語音と自然音との一対多と多対一の写像関係の多様性を持っている。中国語関係書においても多義的な擬声語は多くある。本章は、擬声語の意味分野の分布状況を検討する場合、同一の意味分野に属する多種の自然音を表す擬声語を一回として統計し、多種の意味分野の自然音を表す擬声語をその意味分野ごとに一回ずつとして統計する。

（4）用例と語釈がない擬声語もある。例えば、『四聲標註支那官話字典』における全ての擬声語は用例と語釈が付いていないため、それらの擬声語の意味分野がわからない。本論における意味分野の検討では、そのような擬声語を取り入れない。

3.4　各意味分野における中国語関係書の擬声語の分布状況

擬声語の意味分野の判別方法と中国語関係書における擬声語の選定基準により、付録の「（1）中国語関係書における擬声語及び用例・語釈」を分析して、中国語関係書の擬声語の各意味分野に対応する各型別の語数の分布状況を次の表（表5）に掲げる。各意味分野において出現した擬声語を本章の最後に添付する。その中には、擬声語の語例・語釈はつけていない。

表5　各意味分野における中国語関係書の擬声語の分布状況表

各意味分野における型別の擬声語の語数									型別の延べ回数
型別	人の声	動物の声	自然現象の音	動作に関わる音	物の音				
					衝撃の音	破裂の音	摩擦の音	鳴る音	
A	5	12	6	11	10	2	3	3	52
AA	16	61	12	11	18	2	7	10	137
AB	3	6	6	12	33	5	3	6	74
AAA	0	9	4	0	5	0	1	3	22
AAB	1	3	0	0	2	0	0	1	7
ABA	1	1	0	0	1	0	0	0	3

[122]『多元文化』(1)名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻 編 pp.79-90
[123] 武田みゆき（2001）「擬音語の語彙化に関する日中両言語の特徴」 p82

ABB	0	0	2	1	4	1	0	2	10
AAAB	0	1	0	0	0	0	0	0	1
AABB	16	2	1	1	0	0	2	0	22
AABC	0	1	0	0	0	0	0	0	1
ABAB	3	5	10	10	17	3	6	2	56
ABCB	1	0	2	2	5	2	1	0	13
ABCD	0	0	1	2	0	1	0	0	4
各意味分野における語数	46	101	44	50	95	16	23	27	402

3.4.1　意味分野別による擬声語の分布状況

上の表が示すように、すべての意味分野において使われる擬声語の延べ回数は402である。全ての擬声語の意味分野を判別することは無理であるため、上の分布状況表の結果には不確定の部分が否めないが、中国語関係書の擬声語の概況としては、このようになる。詳細に説明すると、意味分野の擬声語の意味分野への分布には下の状況がある。

（1）全般から見ると、物の音と動物の声の2つの意味分野における擬声語が最も多く、人の声・自然現象の音・動作に関わる音の意味分野の場合と比べると、その語数に大きな差が見られる。具体的に言うと、物の音を表す意味分野の擬声語の延べ回数（161回）が一番多く、出現延べ総数（402回）の40%を占める。その意味分野の下位分類から見ると、無生物が発する音、物体と物体の作用によって生じる音の意味分野におけるものが最も多い[124]。その次に動物の声の意味分野にも擬声語が頻繁に見られる。人の声、自然現象の音、動作に関わる音の意味分野において、中国語関係書における擬声語の分布は大体同じで、語数があまり多くない。

（2）物の音の下位区分の衝撃の音、破裂の音、摩擦の音、鳴る音において、擬声語の語数の大きな差が窺える。衝撃の音、破裂の音、摩擦の音、鳴る音の境界線がないため、これらの自然音に対応する擬声語への区別は主に経験によって行われるため、それらの下位区分についての統計結果は精確なものではない。

衝撃の音、破裂の音、摩擦の音を表す擬声語の状況を較べると、衝撃の音を描写する擬声語のほうが多い。その可能な原因は、衝突・衝撃現象の発生の高い可能性[125]、それらの自然音がピッチ、強さ、音色などを用いて人間の言葉の模倣能力によって容易に感じられることなどである。また、衝撃の音を表す同音異形の擬声語が多く使われていることもその原因の一つである。

物の音という意味分野における擬声語の分布状況を見ると、衝撃の音を模倣する擬声語は95語あるに対して、破裂の音、摩擦の音、鳴る音を表す擬声語はそれぞれ16語、23語、27語であるため、あまり多くない。この統計結果によると、意味分野別に対応する擬声語

[124] 筆者の大略の考察で、この 2 つの下位分野における擬声語の述べ回数の差は大きくない。
[125] この自然音は人間に意識される或は聞こえるものである。

の分布状況は語数の差異がある。

（3）1つの擬声語が持つ意味分野は多様である。それは擬声語が多種の自然音を模倣できることである。この特徴は中国語関係書における擬声語から見られる。例えば、「嘤々嘤々」という擬声語は中国語関係書において、蠅の音[126]、蜂の音、琴[127]が発する音の3種類の自然音を描写し、「咕噜々々」は雷の音、石が転がる音、腹が鳴る音（身体音）などの3種類の自然音を模倣する。意味分野の視点から見ると、「嘤々嘤々」は動物の発する音と物の音を表わしている。「咕噜々々」は主に自然現象の音と物の音を表わしている。それによって、ある擬声語が複数の意味分野の自然音を持つ場合がある。

次に、すべての意味分野における各型の擬声語の延べ回数を統計して、各型の擬声語の語彙総数と対照すること（表6のとおり）を通して、中国語擬声語が持つ意味分野の多様性を考察する。

表6　各型の擬声語の語数及びその延べ回数・異なる意味分野の擬声語の延べ回数

型　別	A	AA	AB	AAA	AAB	ABB	ABA	AABB	ABAB	ABCB	AABC	ABCD	AAAB
語彙総数	50	134	72	29	8	10	3	24	46	13	1	5	1
各型の擬声語の延べ回数	52	137	74	22	7	10	3	22	56	13	1	4	1
各型の擬声語の使用率	1.04	1.02	1.03	1	0.88	1	1	0.92	1.22	1	1	0.8	1

注：各型の擬声語の延べ回数は意味分野全体において、ある型の擬声語の使用回数の総計である。各型の擬声語の使用率は各型の擬声語の延べ回数がそれに対応する擬声語の語彙総数に占める比率を指す。

上の表の大略の統計が示すように、擬声語の語彙総数と意味分野による擬声語の延べ回数には大差がない。A型、AA型、AB型、ABAB型の4種類の擬声語はすべての意味分野においての延べ回数が擬声語の語彙総数より少々多く、その使用率が1以上であり、他の型別の擬声語より高い。その中に、用例と語釈のない擬声語が意味分野の考察に入れられていないため、意味分野における擬声語の延べ回数が少なくなる。その結果として、1以下の使用率がある。従って、全般的に見ると、A型、AA型、AB型、ABAB型などの代表的な型別の擬声語には意味分野の顕著な多様性が見られる。

3.4.2　擬声語の意味分野と形態タイプの対応状況

擬声語の形態構造の考察によって、擬声語の形態タイプはAA型、AB型（重畳型のABAB型を含む）に集中していることが分かった。その中で、2音節のものが最も多い。形態タイプの分布特徴は語音の模倣能力、人間の言語習慣、自然音の特徴と深く関わっている。こ

[126] 蠅の羽音。同様な例で、「蜂の音」なども羽音を指す。

[127]『萬物聲音』の第三章に、「（廿四）帶琴的風箏（吻々 吻々）那帶琴的風箏 吻々 吻々的響的很有意思」という例がある。

の傾向は意味分野において、どのように反映されるか。その問題を解明してみるために、本節では、擬声語の形態タイプと意味分野の関係を検討する。

本章の最後に付録した「各意味分野における中国語関係書の擬声語の整理表」を参照し、擬声語の意味分野を型別に見ると、A型、AA型、AB型は全ての意味分野に用いられるが、それら以外の形態タイプはただ一部分の意味分野に見られる。

各意味分野における擬声語の分布状況を、語数が最も多い型別と二番目に多い型別を挙げて次の表7に示す。

表7　各意味分野における擬声語が最も多い型別と二番目に多い型別の状況

<table>
<tr><td></td><td>人の声</td><td>動物の声</td><td>自然現象の音</td><td>動作に関わる音</td><td>物の音</td></tr>
<tr><td>最も多い型別</td><td rowspan="2">AAと
AABB</td><td>AA</td><td>AB</td><td>AB</td><td>AB</td></tr>
<tr><td>二番目に多い型別</td><td>A</td><td>AA</td><td>AとAA</td><td>AA</td></tr>
</table>

中国語関係書の擬声語はあらゆる意味分野にわたっているが、型別による集中性が見られる。もともとA型、AA型、AB型の3種類の擬声語は語数が最も多く、各意味分野において最も多く用いられるものである。従って、それらは意味分野の型別による偏りが小さい。A型とAA型、AB型の擬声語はどの分野にも多く用いられるのに対して、それ以外の型別の擬声語は語数が少なく、わずかな意味分野で見られる。その意味で、自然音を模倣することで、A型、AA型、AB型は強い表現力を持つと言えよう。

次に、各型の擬声語は各意味分野別においてどのように分布しているのか。まず、A型の擬声語は動物の声と動作に関わる音の意味分野に常用されているのに対して、他の意味分野はあまり使用されていない。AA型は「動物の声」の模倣が最も多く、61語ある。他の分野の状況に比べると、表5で示したように、語数の多寡がはっきりわかる。AB型擬声語の半数以上は物の音の意味分野に属し、他の意味分野にはあまり見られない。AAA型、AAB型、ABA型などの3音節擬声語は主に動物の声、衝撃の音（物の音）の意味分野に用いられ、動作に関わる音、破裂の音（物の音）の意味分野に見られない。それに、AAB型、ABA型は自然現象の音、摩擦の音（物の音）にもないものである。一方、ABB型は主に自然現象の音、動作に関わる音、衝撃の物の音を模倣するものである。4音節の擬声語も、語数が少なく、必然的にごく一部の意味分野としか対応しない。例えば、AABB型はほとんど人の声で、多くのABCB型は物の音を表す。AAAB型、AABC型、ABCD型の擬声語は非常に少なく、大部分の意味分野において見られない。

擬声語分布の全体を見ると、意味分野による語数の差が多少あるが、型別で異なる意味分野における語数の差が著しい。その分布特徴を更に指摘すると、擬声語は全体の意味分野にバランスよく用いられるようであるが、意味分野別によって異なる型別が独自の出現傾向を持つのである。言い換えると、意味分野別においての擬声語の分布状況から見ると、異なる型別は自然音を描写する独自の特徴を持つ。

3.4.3　擬声語の各形態タイプの描写特徴

上に示した考察から見ると、各型の擬声語は意味分野別による分布状況が異なっている。この現象は各型の擬声語が描写する自然音の特徴と関わる。本節では擬声語の形態タイプとそれに対応する自然音の状況に関する先行研究を参考とすることを通して、中国語関係書における各型の擬声語が持つ描写特徴を指摘してみる。

耿二嶺（1986）は『漢語擬声詞』で、中国語擬声語の形態タイプ、各形態タイプの描写描写特徴について述べている。それらの内容をまとめて次に示す。

A式只表示一种单纯的声音。常用以显示声音短促和突然的时长特点。（訳文[128]：A式は一種の単純な自然音（声と音）だけを表す。自然音が持つ短く、突然に発生する時間特徴を表す。）

AA式表示同样的声音相连。（訳文：AA式は同様な自然音が連続することを表す。）

AB式表示两个短促的声音紧密相连，形成声音的一个自然段落。（訳文：AB式は2つの短い自然音が連続して声或いは音の自然的な一段落になることを表す。）

ABB式表示（声音）先短促而后连续。（訳文：ABB式は自然音の始めは短く、後で持続することを表す。）

AABB式表示连续不断的一串声音，往往有一種 “繁乱” 的色彩。（訳文：AABB式は連続する一連の自然音のことで、“繁雑”のイメージを持っていることを表す。）

耿二嶺（1986）は上の形態タイプの他に、AAB型、ABBB型、ABCB型、A裏BC型、A裏AC型も挙げるが、描写特徴について詳しく言及してはいない。鈴木和子（1988） は「象声詞のタイプと音声描写特長」[129]で、耿二嶺（1986）を参照して、辞書の記述や、そのほかの用例・語釈集から文例を拾い、象声詞の表れる環境に注目しながら、擬声語の型別と音声描写の間の次のような関係性を見出している。

A 式の特色は 第1に短かい音声、又は状態の描写である。

AA式：跡切れのない状態や音を描写する。

AAA 式：途中で息をつがないAAA式はAA式の変異とも考えられ、同音並列の音声効果を利用し、加速するテンポを表わす。

AB式：A式に較べ、AB式は或いは滑らかな、或いは詰まった余韻を持つ短い音と規定する。緊密につながった一つの音の描写である。

ABB式：ABB式はA、AB式と同様、短い音を表すことが判る。ABAB式に較べ緊迫した音、間隙をいれない連続した音を模倣する。

---

[128] 訳文は筆者がつけた。以下同じ。

[129]『駒澤大学外国語部論集』(通号 27) pp.121-135

ABAB式：ABB式に較べ、AB音の繰り返しが生むABAB式は継続音にゆったりしたひびきがある。

AABB式：①文言から継承された定型象声詞。②近似した音声（特に狭母音、破擦音）の連続により表される（聞こえの小さい）音はABの型が成立せず、AABBのみ。AABB式は音声の映像描写転化に特色があり、時に擬態語化する。

AAB式：AAB式のAAはBとのコントラストの強調により、意外で破格の音を表している。

ABBB式：現代語のみ、非定型の擬音語のみに見られるタイプである。

ABCD式（およびA里BC式、ABCD式、A里AC式など）：いずれも前二音節は後に続く二音節を導くための「遊び音」で、ABCD式のAB部分は、すべてCDの変韻重畳部と考えられる。この「音の遊び」を利用し、不可解な一連の音を一気呵成に表現する。

鈴木和子（1988）の研究が示しているように、擬声語の異なる形態タイプは独自の自然音の模倣偏向を持っている。また、一部の形態タイプは派生の関係を持つため、描写特徴が近似しているようである。鈴木（1988）は擬声語の型別の音声描写特長を詳細に検討しているが、意味分野を判別することと、声・音の性質を区別することが難しいため、多くの意味分野で用いられる特定の形態タイプの音声描写特長を考察することは可能であるとはいえ、難しい。

また、野口宗親（1993）は「清代北京語の「象声詞」—『紅楼夢』と『児女英雄伝』」[130]で、『紅楼夢』（前80回と後40回を別々に取り扱う）と『児女英雄伝』の二書の擬声語の語数、型別などの違いを考察した。次に、その二書に用いられる各型の擬声語の模倣特徴について下のようにまとめて挙げる。

A型：比較的短い音や動作の素早さなどを表す。現代語では普通であるが、古代語では単独で用いられることは少なく、「嗷然」「鏗爾」などと接尾辞をつけて用いられる場合が多い。

AA型：（中略：引用者）「哼哼（蚊の羽音やうめき声）、嚶嚶（犬のキャンキャン）」など人や動物の声も一般に重ねて用いられる。

ABB型：連続して鳴り響く音を象徴する。

AABB型：繰り返し反復する声や音を表す。『児女英雄伝』に見えるAABB型象声詞はすべて人の声を表すもので、物の音を表すものは1例もない。『紅楼夢』（前80回）でも大部分が人の声を表すもので、物の音は2例のみ、後40回も2語が見えるだけである。

ABAB型：AB型の繰り返しであり、2回の音又は連続した音を描写する。……（中略：

[130]『熊本大学教育学部紀要』通号 42　pp.1-11

引用者）ABAB型が強い口語性をもった象声詞の型で、清代になって徐々に多用されるようになっていく様子がうかがわれる。

ABCD型・ABCB型・ABAC型：子音や母音の交替を利用して「不ぞろいな音、多種類の音、わけのわからない音」を描写している。

耿二嶺（1986）と同様に、野口宗親（1993）もAB型擬声語の音声描写特徴に言及しているが、あまり具体的ではない。AB型の音声描写の特徴をさらに検討する必要がある。

以上の研究の他に、孟琮（1983）の「北京話的擬声詞」[131]や李鏡兒（2007）の『現代漢語擬声詞研究』[132]も中国語擬声語の形態タイプの音声描写の特徴に言及している。例えば、孟琮（1983）は動物の声を描写する擬声語が「音節自由，結構不整斉（音節が自由であり、構造が揃っていないー筆者訳）」であると指摘している。

先行研究において指摘された様々な描写特徴は擬声語の音節形態の特徴を分析することによって得られたものや、少数の擬声語に模倣された自然音の特徴を分析し得たものなどであり、全面的なものではないといえる。自然音が複雑であるため、その規則的な特徴をはっきりと指摘することも、形態タイプに対応する自然音の特徴を明らかにすることも難しい。

以上の紹介を踏まえて、近代日本の中国語関係書における擬声語の形態タイプと意味分野の関係をまとめると、A型、AA型、AAA型は動物の声に最も多く用いられ、AB型と物の音、AABB型と人の声とがそれぞれ対応している傾向がはっきりと見られる。それらの考察の結果から見ると、音色に変化がない単純な自然音を表すのに向いており、音節の重ね（A型・AA型・AAA型）によって持続時間の長さを表現できることがわかる。一方、それらの結果は中国語関係書における擬声語の実態ににによるものである。そのため、擬声語の各形態タイプの描写特徴を具体的に解明するために、さらに全面的な研究をする必要がある。

3.5　まとめ

本章は近代日本の中国語関係書における擬声語の意味特徴を明らかにするために、意味分野の視点で、擬声語が模倣する自然音の特徴及びこれと形態タイプの対応状況を検討して、各意味分野における擬声語の分布状況を指摘した。

本研究は擬声語の意味分野別を「人の声」、「動物の声」、「自然現象の音」、「動作に関わる音」、「物の音」（衝撃の音、破裂の音、摩擦の音、鳴る音の下位分類を含む）に分類して、意味分野別による中国語関係書の各型の擬声語の分布状況を考察した。その結果を大ざっぱに言えば、中国語関係書における擬声語はすべての意味分野において見られたが、意味分野別によって擬声語の語数は大きな差が見られる。

具体的に言うと、動物の声と物の音の2つの意味分野における擬声語が最も多い。物の音

[131]『語法研究和探索（01）』北京大学出版社 pp.120-156
[132] 学林出版社

の下位分類には衝撃の音の擬声語が一番多い。動物の声と物の音の2つに、意味分野における擬声語が多いのに対して、人の声・自然現象の音・動作に関わる音の擬声語が比較的に少ない。また、擬声語の意味分野を型別に見ると、それらの明らかな分布偏向が見られる。例えば、常用型のA型、AA型、AB型の3種類は全ての意味分野において分布している。かつ、その三者は意味分野別による分布の偏りが小さい。A型は動物の声と動作に関わる音の意味分野に常用され、AA型は「動物の声」の模倣が最も多いのに対して、AB型擬声語の半数以上は物の音の意味分野に属し、他の意味分野においてあまり見られない。AAA型、AAB型、ABA型などの3音節擬声語は動物の声、衝撃の音（物の音）の意味分野において最も多く見られる。ABB型は主に物の音（衝撃の音と鳴る音）を描写するものである。また、3音節擬声語の場合と似て、4音節擬声語も、語数が少なく、必然的にごく一部分の意味分野としか対応しない。例えば、AABB型はほとんど人の声で、多くのABCB型は物の音を表す。AAAB型、AABC型、ABCD型の擬声語は非常に少なく、大部分の意味分野にない。

意味分野全体における擬声語の分布状況から見ると、中国語関係書の擬声語は動物の声と物の音（衝撃の音を主とする）の2つに集中している傾向を持つ。また、常用型のA型、AA型、AB型が主な意味分野（動物の声と衝撃の音）に分布している状況がはっきりしている。

一方、意味分野の境界線がないため、はっきりと全体の擬声語を意味分野別により区別することは難しい。そのため、近代日本の中国語関係書における擬声語の中には、意味分野がはっきりしていないものが残っている。

附：各意味分野における中国語関係書の擬声語の整理表

① 人の声

型 別	擬 声 語
A	叱、呱、哇、嗚、嗷
AA	哦兒々々、嘶嘶、吁吁、哇哇 、哈々、喃喃、嗚兒々々、嗷嗷、嘶嘶、咂咂、啊々啊々、嘎嘎、嘻嘻、嘿兒々々、ㄗㄚ ㄗㄚ、ㄨㄚ ㄨㄚ
AB	ㄍㄚ ㄌㄚ、吱兒喳兒、哼哈
AAB	ㄈㄨㄈㄨㄦㄧㄠ
ABA	哼啊哼
AABB	咳咳嗽嗽、吸吸哈哈、嚬嚬 嘶嘶、抽抽噎噎、唏唏哈哈、咿咿啞啞、哼哼唧唧、哼哼嘰嘰、唧唧哇哇、唧唧咕咕、唧唧噥噥、嘍々喳々、嘟嘟喃喃、嘟嘟噥噥、嘟嘟囔囔、嘻嘻哈哈
ABAB	哼啊哼啊、嘎拉嘎拉、嘟嚕嘟嚕
ABCB	咭拉呱拉

② 動物の声

型 別	擬 声 語
A	嘒、哈、嗚、嗷、吱兒、嗎、嗞、嗞兒、嘎、旺、ㄖㄧㄥ、ㄙ…ㄙ
AA	咦咦、嚶嚶々々、嗆嗆々々、吶々吶 々、哪々哪々、喊々喊々、嘏兒 嘏兒、咿兒 咿兒、旺々旺々、哀哀、吃兒吃兒、呼兒々々、吒吒、咪咪、嘶嘶、嘎嘎、裊裊、咋々咋々、孜孜、呱呱、呷呷呷呷、啾啾、喃喃、嗷兒嗷兒、歐兒嗷兒 、汪汪、咩咩、吱兒吱兒、咕兒咕兒、咕咕咕咕、哞兒哞兒、咩咩、哼哼、唧唧、嗜嗜、啧兒啧兒、喔 喔 喔喔、喵喵、嗞兒嗞兒、嗞嗞、嗡嗡、嘎嘎、嘞嘞、噶々噶々、蝈々兒、ㄉㄦ ㄉㄦ、ㄋㄧㄠ ㄋㄧㄠ、ㄍㄚ ㄍㄚ、ㄍㄨㄚ ㄍㄨㄚ、ㄍㄨㄛ ㄍㄨㄛ、ㄏㄥ ㄏㄥ、ㄐㄚ ㄐㄚ、ㄐㄧ ㄐㄧ、ㄐㄧㄚ ㄐㄧㄚ、ㄖㄦ ㄖㄦ、ㄖㄦㄧ ㄖㄦㄧ、ㄗㄦ ㄗㄦ、ㄚㄧ ㄚㄧ、ㄡㄡ、ㄨㄤ ㄨㄤ、ㄨㄥ ㄨㄥ
AB	ㄈㄨㄊ ㄧㄢㄦ 、ㄡㄠ、咯兒噶、呢喲兒、咕嘟、蚨蝶兒
AAA	ㄍㄜㄦ ㄍㄜㄦ ㄍㄜㄦ、根兒根兒根兒、汪汪汪、吱吱吱、咕咕咕、咖咖咖、咩咩咩、喳喳喳、嗡嗡嗡
AAB	閣閣兒咕、嗡嗡哇、嘎嘎蛋兒
ABA	啊喇啊
AABB	哀哀切切、唧々咋々
ABAB	咪嗳々々、呱啊々々、唧咋唧咋、噶吱々々、ㄊㄚ ㄊㄚ
AABC	咕々呢嗷兒
AAAB	噶々噶蛋

③　自然現象の音

型　別	擬　声　語
A	ㄏㄨㄚ…、呼、倏、唿、欻、颼
AA	ㄏㄨㄚ　ㄏㄨㄚ、ㄏㄨ ㄏㄨ、ㄏㄨㄚ ㄏㄨㄚ、ㄙㄨ ㄙㄨ、呼呼、轟轟 、倏兒々々、涮涮、焀焀、焀焀々々、颼颼、喉喉
AB	ㄍㄨ　ㄅㄨ、ㄍㄨㄚ　ㄌㄚ、ㄏㄨㄚ ㄌㄚ、嘩啊、嘎喇、噶喳
AAA	嗤嗤嗤、呼呼呼、隆隆隆、颼颼颼
ABB	豁剌剌、唿喇喇
AABB	悉悉索索
ABAB	倏啦倏啦、ㄆㄚ　ㄅㄚ　ㄆㄚ　ㄅㄚ、ㄆㄧ ㄌㄚ ㄆㄧ ㄌㄚ 、嘩喇々々、呼嗚々々、咕咚咕咚、咕嘟咕嘟、咕嚕々々、唰啷唰啷、啪嗒々々
ABCB	匹剌沸剌、唏啦嘩啦
ABCD	ㄍㄚ ㄌㄚ ㄍㄨㄌㄨ

④　動作にかかわる音

型　別	擬　声　語		
A	吭、揉、吧、欻、蹭、ㄅㄨ…儿、ㄊㄨㄟ、ㄗ儿、ㄙㄚ、ㄙㄧ、ㄛ		
AA	呼呼、巴巴、喀兒々々、哕々、簌簌、ㄅㄨ　ㄅㄨ、ㄆㄚ　ㄆㄚ、ㄆㄚ儿 ㄆㄚ儿、ㄍ儿 ㄍ儿、ㄎ儿　ㄎ儿、ㄏㄨㄚ　ㄏㄨㄚ		
AB	嚐嗤、嚐嚕、咯噔、啊嚏、啊哼、噗哧、ㄅㄧㄚ　ㄗㄧ、 ㄏㄨ　ㄌㄨ、ㄍㄚ　ㄓㄖ、ㄏㄚ　ㄗ 、ㄗㄧㄙ、ㄚ　ㄊㄧㄝ		
ABAB	嗶吃々々、吧叽吧叽、吧噠々々、咕咚々々、咕啷兒々々、咕嚕々々、咕摟咕摟、嘎吱嘎吱、嘎嘣兒嘎嘣、噗騰噗騰		
ABB	啊哈々	AABB	塔塔咧咧
ABCB	匹嘍撲嘍、匹蹬撲蹬	ABCD	稀溜逛噹、咭叮咕咚

⑤　物の音・衝撃の音

型　別	擬　声　語
A	ㄗ…儿、砰、磅、咱、拍、叮、噹、澎、爬、咚
AA	吧吧、噹噹、鏑鏑、鼕鼕、咚咚々々、喟兒々々、噎噎、欻欻、鏜鏜、鼞鼞、颯颯、ㄉㄤ儿 ㄉㄤ儿、ㄉㄨㄤ ㄉㄨㄤ、ㄉㄨㄥ　ㄉㄨㄥ、ㄅㄤㄅㄤ、ㄊㄨㄤ ㄊㄨㄤ、ㄊㄨㄤ　ㄊㄨㄤ、ㄎ儿　ㄎ儿
AB	呸哨兒、叮兒噹兒、叮噹、咕嗵、嘭嗵、嘩冷、嘩愣、嘩楞、劃拉、哌打 、撲騰、呱打、呱噔兒々々、咯噠、爬（呱）噠、爬噠、聒噠、吧噠、咕咚、咕噔、咘噔、咣噹、嘎噠、噶喳、砰磅、碰瑙、ㄅㄨ ㄉㄨㄤ、ㄍㄚ　ㄉㄨㄥ…、ㄎㄚ ㄊㄚ、ㄎㄨ　ㄉㄨㄥ
AAA	滴滴滴、ㄊㄤ　ㄊㄤ　ㄊㄤ、丁丁丁、當當當、嘭嘭嘭
AAB	ㄉㄧㄥ　ㄉㄧㄥ　ㄉㄤ、ㄍㄥ　ㄍㄥ　ㄍㄚ
ABB	呼嚕嚕、咕嚕嚕、各碌碌、撲通通
ABA	吧呀吧
ABAB	花拉花拉、滴搭滴搭、咯嗒咯嗒、聒達聒達、吱吜々々、咕啷々々、咣噹々々、嘎嗒々々、嘎吱嘎吱、噶噠々々、呲噠々々、ㄉㄧㄥ　ㄉㄤ　ㄉㄧㄥ　ㄉㄤ、嗷咚嗷咚、叮噹叮噹、鼕鏜鼕鏜、咕咚咕咚、咕嗵々々
ABCB	唧噠嘎噠、唧噹剛噹、唏啷嘩啷、咭噠呲噠、唧咚咕咚

⑥　物の音・破裂の音

型　別	擬　声　語		
A	ㄗㄚ、哧	AA	ㄘㄦ ㄘㄦ、哧兒々々
AB	嘩啷、喀哧、吧叹、啪喳、噗哧	ABB	豁剌剌
ABAB	嘎吱々々、嘎吱々々、噶噠々々	ABCB	啵喇啪喇、皮剌吧剌
ABCD	咕噔嘩啦		

⑦　物の音・摩擦の音

型　別	擬　声　語		
A	ㄖㄨㄥ、哧、颼	AB	ㄗㄦ ㄗㄚㄦ、咿啞、吭叹
AA	ㄕㄚ ㄕㄚ、ㄘㄥ　ㄘㄥ、ㄙㄧㄙㄧ、柔々、紉々、ㄘㄦ ㄘㄦ、哧兒哧兒		
AAA	ㄔㄔㄔ	AABB	嗞々嗤々、咿咿啞啞
ABAB	嘩啦嘩啦、刷拉刷拉、倏喇々々、嘩喇々々、擦啦擦啦、吧喇々々	ABCB	提拉拖拉

⑧　物の音・鳴る音

型　別	擬　声　語
A	ㄉㄤ…ㄦ、ㄕㄨ…ㄦ、嗚
AA	噗噗々々、咽兒々々、嗚嗚、喏喏兒、噹兒々々、颼颼、ㄆㄦ　ㄆㄦ、ㄉㄤ　ㄉㄤ、ㄨㄚ　ㄨㄚ、ㄨㄥ ㄨ
AB	丁東、丁令、啁兒呱、ㄉㄦ ㄌㄥ、ㄍㄨ ㄉㄨㄥ、ㄗㄦ ㄗㄨㄦ
AAA	ㄅㄦ ㄅㄦ ㄅㄦ、ㄉㄚ ㄉㄚ ㄉㄚ、ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ
AAB	嘀々噠
ABB	嘩打打、丁零零
ABAB	ㄍㄥ ㄍㄚ ㄍㄥ ㄍㄚ、呼嚕々々

第 4 章　形態構造と意味分野から見る擬声語の使用状況

—『萬物聲音』[133]『北京語の味』『児女英雄伝』の比較研究

4.1　始めに

擬声語は近代日本の中国語関係書において関心を引いている。擬声語を扱った代表的な中国語関係書としては、『萬物聲音』と『北京語の味』に注目する意義がある。本章はこの両書の中の擬声語の形態構造、意味分野およびその対応関係を検討する。中国語関係書における擬声語の実態を更に解明するために、近代北京語の代表的な資料である『児女英雄伝』を取り出し、その中の擬声語の特徴を検討して、その結果を『萬物聲音』と『北京語の味』を対照して、それらの差異を指摘する。

4.2　中国語関係書の『萬物聲音』と『北京語の味』

筆者の調べた限り、『萬物聲音』の関連研究は野口宗親（1993）[134]のみに見られる。野口（1993）は『紅楼夢』（前 80 回と後 40 回を別々に取り扱う）と『児女英雄伝』の二書の擬声語の語数、音韻構造の種類を比較しながら、それらの特徴と違いをを考察した。その中に、『萬物聲音』についての僅かな記述が次のように見られる。それは児化した擬声語についての記述である

> ところで、『児女英雄伝』からほど遠からぬ 1905 年（明治 38 年）に出版された瀬上恕治（1905 年）『北京官話万物声音』に集められた象声詞は，「噹兒，根兒根兒，咕兒咕兒，嘿兒嘿兒，吱兒吱兒，咕嘟兒咕嘟兒」など，r 化の連続するものが 30 数語もある。この書は例文が会話体である。『紅楼夢』『児女英雄伝』で r 化の象声詞が少ないのは，書きことばという文体の影響もあると考えられる。象声詞の r 化は一般に軽い語気をそえることが多い。

『萬物聲音』と『北京語の味』の先行研究はそれ以外にはない。つまり、『萬物聲音』と『北京語の味』の考察について、参考となれる研究がほとんどないと言える。本論文で、『児女英雄伝』の擬声語に対する考察は野口宗親（1993）の成果を利用する場合がある。

---

[133]『萬物聲音』の全称は『北京官話萬物聲音附感投詞及發音須知』である。以下、『北京官話萬物聲音附感投詞及音須知』の略称として『萬物聲音』を使用する

[134] 野口宗親（1993）「清代北京語の「象声詞」—『紅楼夢』と『児女英雄伝』」『熊本大学教育学部紀要人文科学』第 42 号 p5

4.2.1　『萬物聲音』と『北京語の味』を取り上げた理由

『萬物聲音』と『北京語の味』は同様に近代日本の中国語関係書の一般学習書[135]であり、意識的に擬声語を記録している。『萬物聲音』は主に擬声語と感嘆詞を記録したもので、北京官話を「研究せんとする者の参考になす」という目的で編纂された。一方、『北京語の味』は「擬音一覧」という節を設け、特に擬声語を取り上げている。筆者の調べたところ、この二書ほど多量の擬声語を収載しているものは近代日本の中国語関係書の中で他にない。『北京語の味』は「何等かの意味に於て皆様の北京語研究にお役に立てば此上ない幸ひであると思つて」[136]、多くの分野にわたる中国語と中国の事物を解説したものである。また、1906 年の『萬物聲音』と 1941 年の『北京語の味』は 35 年の間隔を持って出版されている。そのため、この二書における擬声語を考察することによって、擬声語の使用状況の変化などがわかる。

本稿は上記の理由から、『萬物聲音』と『北京語の味』を選び、それらの中の擬声語を検討する。

4.2.2　『萬物聲音』と『北京語の味』の内容

『萬物聲音』は当時陸軍清語通訳官であった瀬上恕治が編纂したもので、明治 39 年（1906 年）11 月に北京・徳興堂印字局より刊行された。本著の内容は叙文 2 篇、例書 1 篇、支那官話合声字母表と支那官話字母反切表各 1 篇、官話合声発音心得 1 篇と本文の六章からなる。瀬上は「例書」に、本文の六つの章について、「第一章に於ては感投詞につき一々解釋をなし其例証を加へ第二章に於ては人の動作に因り起こる音聲を含めるものを第三章に於ては物體と物體との摩擦により起こる音聲を含めるものを第四章に於ては鳥類の鳴聲第五章に於ては獣類の鳴嘯の聲第六章に於ては蟲類の鳴く音を含める」[137]と記している。それゆえ、『萬物聲音』は擬声語の専門書であるといえる。また、『萬物聲音』の擬声語には「音解」[138]即ち発音表記がつけられている。その発音表記はカタカナ、ウェード式ローマ字、王照の官話合声字母[139]からなる。この 3 種類の発音表記形式の使用のため、六角恒廣は本

---

[135]『萬物聲音』と『北京語の味』はともに白話研究のものとして波多野太郎（1984）『中国語学資料叢刊白話研究篇』に収録されている。この点から見ると、その二書は同様な特徴を持つであろう。また、『萬物聲音』は『中国語教本類集成』にも収録されている。『中国語教本類集成』は「日本の中国語教学において使用された教科書を主として、それに辞典のいくらか、さらに実務用語・軍事語・会話本など」を収録したものである。このことから、『萬物聲音』は近代日本の中国語関係書の一般学習書と見なしてよい。同様の記述は六角恒廣（1994）『中国語書誌』にも見られる。

[136]『北京語の味』の「自序」による。

[137]『萬物聲音』p7

[138] 清国駐屯軍司令官陸軍少将の仙波太郎の作った「叙」（『萬物聲音』pp.1-3）の言葉（p2）である。原文は「巻首に王氏の合聲字母表拼音表を掲げ次に各種の感投詞と所有有生非生各物の聲音に及び一々例を示し且付するに譯語と音解を以てす」である。

[139] 王照の官話合声字母は中国清末期の 1901 年における漢語表音文字の漢字筆画式字母方案であり、中国語の発音標注記号改革の先鞭である。合声字母は漢字の偏傍を利用して文字に仕立てたもので、中国の伝統的な反切法を参照したものである。それは発音を音母(50 個）と喉音（12 個)の 2 種類に大別して、4 つの声調を加えたものである。合声字母は音母（字母）と喉音を合わせてある字音を表記する。

書を「きわめて稀な珍本」[140]であると評した。カタカナ表記は近代日本の中国語教育にかつて一般的に用いられていた。ウェード式ローマ字表記法は第二次世界大戦終了までの日本の中国語教育に採用された一般的な方法である。官話合声字母は当時北京官話の発音を記録する方法として影響力を持ち、広く使用されていたものである。周有光（2002）[141]によると、中国語の表音文字である王照の官話字母は清末の様々な漢字筆画式字母方案の 1 つとして、中国語の発音標注記号改革の先鞭であり、「提出最早，傳播最廣，成為切音字運動的主流和高潮」（最も早く作られ、最も広く伝播され、切音字運動の主流と高潮となった―筆者訳）のである。それゆえ、この「音解」は当時の擬音擬声語の実態を反映するとともに、日本人の中国語学習の状況を知ることに役立つ。

一方、『北京語の味』は大山聖華[142]により編纂され、昭和 16 年（1941 年）8 月に北京・中華法令編印館により刊行された。これは「語學修得の要諦」「會話篇」「語彙篇」「研究篇」「雑録篇」「寫真と繪圖」の 6 つの部分からなる。『萬物聲音』と比べると、『北京語の味』は中国の当時の社会風俗や文化、生活場面の会話などを記録したものであり、中国語の語彙、文法、修辞言語などを記述する学習書でもある。「研究篇」における「擬音一覧」には 89 類の自然音を表わす擬声語（90 語）が挙げられている。また、『北京語の味』に使われた表記方法も 3 つある。それはカタカナ、ウェード式ローマ字、注音符号である。注音符号は当時普及していた表音字母で、中華民国政府により 1918 年に発布されて以降、何回かの修訂・補訂があった[143]。

4.3 『萬物聲音』と『北京語の味』の擬声語

『萬物聲音』と『北京語の味』に載っている擬声語及びその対応する自然音、発音表記などを次の表（表 8『萬物聲音』の擬声語と表 9『北京語の味』の擬声語）に示す。

表 8 『萬物聲音』の擬声語

番 号	自然音（現象）	漢字表記	ウェード式表記	カタカナ	合声字母
第二章					
㈠	咬耳朵説話	嘖々喳々	chíchícháchá	チチチャチャ	ㄐㄐㄔㄔ
㈡	啞叭	啊々啊々	a a	アーアー	ㄚ ㄚ
㈢	嚏吩	啊嚏	a tì	アチィ	ㄚ ㄊ
㈣	打呼	呼呼	huhu	ホゥーホゥー	ㄏㄨ ㄏㄨ
㈤	大人哭	嗚兒々々	wuerh wuerh	ウォルウォル	ㄨㄦㄨㄦ
㈥	小孩兒哭	噶喇噶喇	kalakala	カラーカラー	ㄎㄚㄌㄚㄎㄚㄌㄚ
㈦	大人笑聲	嘎々哈々	kakahaha	カーカーハーハー	ㄎㄚㄎㄚ ㄏㄚㄏㄚ
	婦人笑聲	嗰兒々々	kenerh kenerh	ケルケル	ㄎㄣㄦ ㄎㄣㄦ・ㄎㄣㄦ ㄎㄣㄦ
	小孩兒笑聲	嘿兒々々	helerh helerh	ヘルヘル	ㄏㄟㄦ ㄏㄟㄦ・ㄏㄟㄦ ㄏㄟㄦ

140 六角恒廣（1994）『中国語書誌』不二出版 p112
141 周有光（2002）p35
142 大山聖華の基本情報は筆者が調べたかぎり、全く見当たらない。
143『周有光語文論集第一巻』の「第二章 漢字改革運動的歴史発展」を参考とする。

(八)	洋喇叭	嘀々噠—	tititata	チィチィター	
	洋喇叭	喟兒吼	wenerhwa	/	
(九)	喫煙	吧噠々々	patapata	パタパタ	
(十)	聽外國人的話	咭拉呱拉	chilakuala	チラクァラ	
(十一)	擤鼻涕（擤鼻子）	吭	hêng	ホオン	
	擤鼻涕（擤鼻子）	啊哼	ahêng	アホオン	
(十二)	打呵欠打呵勢	啊哈々	ahaha	アーハハー	
(十三)	咳嗽	喀兒々々	k'oerh k'oerh	コールコール	
(十四)	吃喝聲　吃	喘吃々々	angchih	アンチィ	
	吃喝聲　喝	咕啷兒々々	kulangerh	クラール	
(十五)	抓癢癢	哈々	kuakua	クワー	
第三章					
(一)	開水壺	嘩喇々々	hualahuala	ホァーラーホァーラ	
(二)	水煙袋	呼嚕々々	hulohulo	ホゥロホゥロ	
(三)	柳罐掉在井裏	咘噔	putêng	プトン	
(四)	電閃雷鳴	倏	shua	ショワ	
	電閃雷鳴	嘎喇	k'ala	カラ	
(五)	電閃雷鳴	咕嚕々々	kulukulu	クルクル	
	電閃雷鳴	噶喳	k'ach'a	カチャー	
(六)	錶	噶噠々々	kata	カタカタ	
(七)	鍾　大	噹兒々々	tangerh tangerh	タンル	
	鍾　中	噔兒々々	tênggerh tênggerh	トンル	
	鍾　小	嘚兒々々	têerh têerh	トル	
(八)	皂鞋	嘎吱々々	kachih	カチ	
(九)	洋爐子	焀焀々々	huhu	ホゥーホゥー	
(十)	騾子車	唧噠嘎噠	chitakata	チタカタ	
	騾子車	唧噹剛噹	chitangkangtang	チタンカンタン	
(十一)	小車子	嗞々嗤々	tzûtzûniuniu	ツゥツゥニユゥニユゥ	
(十二)	廠車	咣噹々々	kuangtagn	クワンタン	
(十三)	東洋車	嘎嗒々々	katakata	カタカタ	
(十四)	外國馬車	哧	chih	チィー	
(十五)	扁擔	嘎吱々々	kachih	カチカチ	
	扁擔	喀哧	k'ochih	コチ	
(十六)	撅竹竿子	啪喳	p'ach'a	パチャー	
(十七	木頭木板掉地	噶喳	kach'a	カチャ	
	木頭木板掉地	嗵嗵	kut'ung	クトン	
(十八)	小物件掉地	吧噠	pata	パタ	
(十九)	打樓梯掉下來	咕嗵々々	kut'ung	クトンクトン	
(二十)	磨面	噶噠々々	kata	カタカタ	
(廿一)	旗子翻風	吧喇々々	p'ala	バラバラ	
(廿二)	裁紙疊紙	哧兒哧兒	chiherh	チィルチィル	
	裁紙疊紙	嘩喇々々	hua la	ホゥワラ	
(廿三)	抖樓紙	倏喇々々	shuala	シュアラ	
(廿四)	帶琴的風箏	嘶々嘶々	jêngjêng	ジオン	
(廿五)	撮石頭	紉々	jêngjêng	ジオ゛ジオ゛	
	撮石頭	柔々	joujou	ジオジオ	
(廿六)	墻倒的	唿喇喇唏啦嘩啦	hulalashilahuala	ホゥララシィラホ	

				ゥアラ	レ
(廿七)	打大鼓	咚咚々々	tungtung	トントン	ナ ナ
	打大鼓	咕嚨々々	kulung	クロンクロン	ナ ナ
(廿八)	波浪鼓	吱哨儿	polangerh	ポラール	ル レ ル
(廿九)	鈴兒	噹兒々々	tangerh	タンルー	ル ル
(三十)	鎖上門	唏啷嘩啷	hislanghualang	シィランホゥラン	メ レ ス レ
(三十一)	關上門	吱咀々々	chihniuchihniu	チィニユー	ヒ ヒ
	關上門	咣噹	kuangtang	クワンタン	
(三十二)	衆人上房下房	咕咚々々	kutung	クトン	ナ ナ
	衆人上房下房	啷咚咕咚	chitungkutung	チィトンクタン	ナ ナ
(三十三)	火車的哨兒	門兒々々	menerh	メールメール	ル
(三十四)	火車輪子	呼嚕嚕	hulolo	ホゥロロ	ス モ モ
(三十五)	煙筒冒煙	咕嘟々々	kutukutu	クツゥクツゥ	ナ ナ
(三十六)	火車	噗噗々々	p'up'u	プゥプゥ	ス ス
(三十七)	火輪船的輪子	咕嚕嚕	kululu	クルル	モ モ
(三十八)	拿棍子打人	爬（呱）噠	p'at'a	パタ	ス ス
(三十九)	盤子碗類碎	咕噔嘩啦	kutênghuala	クトンホゥワラ	ナ ス レ
(四十)	風吹樹葉子	倏啦倏啦	shuala	ショワラ	ス レ ス レ
(四十一)	石頭片落上	爬噠	p'at'a	パタ	ス ス
	石頭片落上	咕嚕々々	kulukulu	クルクル	モ モ
(四十二)	石匠鑿石頭	叮啊噹啊	tingatanga	チンアータンア	ス ス ル ス
(四十三)	流水	嘩啊	huala	ホゥワー	ス ス
	流水	嘩喇々々	hualahuala	ホゥワラー	ス レ ス レ
(四十四)	雨聲	大 嘩啊	hua a	ホゥワー	ス ス
	雨聲	小 倏兒々々	shuaerhshuaerh	ショワル	ス ル ス ル
(四十五)	雪聲	倏兒々々	shuaerh	ショワル	ス ル ス ル
(四十六)	雹子	啪嗒々々	p'atap'ata	パタパター	ス ス ス ス
(四十七)	風聲	呼嗚々々	huwuhuwu	ホゥウ	ス 血 ス 血
	風聲	唿唿	shuashua	ショワショワ	ス ス
附 記	颼颼、颼兒々々、愢愢、呼呼、倏兒倏兒、嗚嗚				
(四十八)	撕布聲	哧兒々々	chîherhchîherh	チルチル	ル ル
(四十九)	燒爆煤	唦喇啪喇	pîlap'ala	ピラパラ	ス レ ス ス レ
(五十)	東洋屐	呱噔兒々々	kuatêngerh	クワトル	ス ス ル
第四章					
(一)	喜鵲	唧々咋々	chichichacha	チィチィチャチャ	ス ス ス ス
(二)	家雀兒	咖咖咖唧咋唧咋	chiachiachiachichachicha	チァーチァーチィチャ	ス ス ス ス ス ス ス ス
(三)	老鸛	呱啊々々	kuakua	クワークワー	ス ス
附記	老鸛	啊喇啊—啊喇啊	alaa	アラア	/
(四)	家鴨子	噶々噶々	kakakaka	カァカァ	ス ス ス ス
(五)	公雞	根兒根兒根兒	kênerhkênerh	ケルケルケール	ル ル ル
(六)	母雞	噶々噶蛋	kakakatan	カァカタァ	ス ス ス ス
(七)	雞雛・小雞兒	嗞兒々々	tzûerhtzûerh	ツルツル	ル ル
(八)	仙鶴	嘎—嘎—	kaka	カァーカァー	ス ス
(九)	老雕	吱兒—吱兒—	chiherhchiherh	チィルーチィル	ル ル
(十)	鷹	嗞儿—喟兒喟兒	tzûerhhoerhhoerh	ツルーホルホル	ル ル ル
(十一)	雁	咯儿噶—咯儿噶—	koerhkakoerhka	コルカーコルカ	ル ス ル ス
(十二)	黄莺	咕儿咕儿	kuerhkuerh	クルクル	ル ル ル ル

(十三)	燕子	啧儿啧儿	tsêerh tsêerh	ツォルツォル	ㄗㄛㄦㄗㄛㄦ
(十四)	鹦哥	咋々咋々/咋-咋-	chacha	チャ チャ	ㄔㄚㄔㄚ
(十五)	夜猫子	咕々呢嗷儿	kukuniaoerh	ククニアオル	ㄍㄨㄍㄨㄋㄧㄠㄦ
(十六)	鸽子	咕嘟—咕嘟—	kutukutu	クトークトー	ㄍㄨㄊㄨㄍㄨㄊㄨ
第五章					
(一)	貓	咪喓々々	miyao	ミヤオミヤオ	ㄇㄧㄠㄇㄧㄠ
(二)	大貓和耗子	呢喲兒	niyaoerh	ニヤオル	ㄋㄧㄠㄦ
	大貓和耗子	噶吱々々	kachihkachih	カチカチ	ㄎㄚㄔㄧㄍㄚㄔㄧㄍ
	大貓和耗子	吃兒吃兒	chîherh	チルチル	ㄔㄧㄦㄔㄧㄦ
	大貓和耗子	嗞	tsu	ツ	ㄗㄨ
(三)	狗	喊々喊々	tsangtsang	ツアンツアン	ㄗㄤㄗㄤ
(四)	狗	汪汪々々	wangwang	ウァンウァン	ㄨㄤㄨㄤ
	狗	乓々乓々	pangpang	パァンパァン	ㄆㄤㄆㄤ
(五)	馬	呼兒々々	huerhhuerh	ホゥルホゥル	ㄏㄨㄦㄏㄨㄦ
(六)	馬蹄	啪噠々々	patapata	パタパタ	ㄆㄚㄊㄚㄆㄚㄊㄚ
	馬蹄	咭噠啪噠	chitapata	チタパタ	ㄑㄧㄊㄚㄆㄚㄊㄚ
(七)	豬	吱兒吱兒	chîherhchîherh	チルチル	ㄓㄧㄦㄓㄧㄦ
(八)	驢	哼啊々々	êngaênga	オンアオンア	ㄥㄚㄢㄥㄚㄢ
(九)	老猴兒	歐兒々々	ouerhouerh	オゥルオゥル	ㄡㄦㄡㄦ
(十)	牛	哞兒哞兒	menerh	メル	ㄇㄣㄦㄇㄣㄦ
(十一)	山羊	咩々	mieh	ミユ ミユ	ㄇㄧㄝㄇㄧㄝ
(十二)	老虎	嗚—嗚—	wuwu	ウーウー	ㄨㄨㄨㄨ
(十三)	狼	嗷—嗷—	aoao	アゥ—アゥ—	ㄠㄠㄠㄠ
(十四)	狗熊	歐兒嗷兒	ouerhouerh	オゥルアゥル	ㄡㄦㄡㄦ
(十五)	駱駝	嗷兒嗷兒	aoerhaoerh	オヲルアヲル	ㄠㄦㄠㄦ
第六章					
(一)	蜜蜂	吶々吶々	jêngjêng	ジオンジオン	ㄐㄥㄐㄥ
(二)	螞蜂	嗡嗡々々	wêngwêng	ウオンウオン	ㄨㄥㄨㄥ
(三)	蒼蠅	吶々吶々	jêngjên	ジオン	ㄐㄥㄐㄣ
(四)	蚊子	嗡嗡々々	yingying	インイン	ㄧㄥㄧㄥ
(五)	蛤蟆	嘎—嘎—	kua kua	クァ—クァ—	ㄍㄨㄚㄍㄨㄚ
(六)	蝈々兒	蝈々兒	kuokuoerh	クオクオル	ㄍㄨㄛㄍㄨㄛㄦ
(七)	蛣了兒	蚨蝶兒	futieherh	フゥテール	ㄈㄨㄊㄧㄝㄦ

『萬物聲音』の第三章の（四十七）の後と第四章の（三）の後につけられた「附記」は、その前の項と関係がある別の擬声語である。発音表記が付いておらず[144]、例文もない。

表 9　『北京語の味』の擬声語

セクション	自然音（現象）[145]	擬声語（注音符号）	ウェード式表記[146]
一	狗（犬）	ㄨㄤ ㄨㄤ	wang wang
	貓	ㄋㄧㄠ ㄋㄧㄠ	niao niao
	喧嘩する時	ㄈㄨㄈㄨㄦㄧㄠ	fufuêrhyao
	鶏	ㄍㄜㄦ ㄍㄜㄦ ㄍㄜㄦ	koêrh koêrh koêrh

144 第四章の（三）の「附記」の擬声語はカナ表記のみがついている。
145 自然音（現象）の項目は原文より転記したものである。擬声語（注音符号）の欄も同様である。
146『北京語の味』「擬音一覧」にはウェード式表記はついていないが、「注音符號解説」に注音符号のウェード式表記が付いている。このウェード式表記は筆者がつけた。

	小鶏兒(ヒヨコ)	ㄐㄚ ㄐㄚ	ch(j)a ch(j)a
		ㄍㄚ ㄍㄚ	ka ka
	家雀兒(雀)	ㄐㄧ ㄐㄧ	ch(j)i ch(j)i
		ㄐㄧㄚ ㄐㄧㄚ	ch(j)ia ch(j)ia
	牛	ㄨㄥ ㄨㄥ	wêng wêng
	猪	ㄏㄥ ㄏㄥ	hêng hêng
	鴨子（アヒル）	ㄍㄨㄚ ㄍㄨㄚ	kua kua
	嗚鴨（からす）	ㄚ ㄧ ㄚ ㄧ	a yi a yi
	雁	ㄍㄨㄚ ㄍㄨㄚ ㄐㄧ	kua kua ch(j)i
		ㄡㄠ	ou ao
		ㄡㄡ	ou ou
	耗子（鼠）	ㄐㄧ ㄐㄧ	ch(j)i ch(j)i
		ㄗㄦ ㄗㄦ	tsêrh tsêrh
	騾子（馬と驢馬の雑種）	ㄜㄚ ㄜㄚ	èa èa
	驢（らば）	ㄜㄚ ㄜㄚ	èa èa
	馬	ㄙ･･･ㄙ	s(ss û)･･･s(ss û)
	髻了兒（蝉）	ㄖㄦㄧ ㄖㄦㄧ	j(ih)êrhi j(ih)êrhi
	伏天兒（蜩）	ㄈㄨㄊㄧㄢㄦ	fut'ianêrh
	蛐々兒（蟋蟀）	ㄉㄦ ㄉㄦ	têrh têrh
	蟈々兒（キリギリス）	ㄍㄨㄛ ㄍㄨㄛ	kuo kuo
		ㄗㄦ ㄗㄦ	tsêrh tsêrh
	金鐘兒（鈴虫）	ㄖㄦ ㄖㄦ	j(ih)êrh j(ih)êrh
	蛤蟆（蛙）	ㄍㄨㄚ ㄍㄨㄚ	kua kua
	蛐蟮（蚯蚓）	ㄖㄦㄧ ㄖㄦㄧ	j(ih)êrhi j(ih)êrhi
	蚊子(蚊)	ㄐㄧㄥ[147]	jing
	蜂	ㄨㄥ ㄨㄥ	wêng wêng
	小孩兒（子供）	ㄍㄚ ㄌㄚ	ka la
		ㄨㄚ ㄨㄚ	wa wa
二	打哈息（あくび）	ㄏㄚ ㄗ	ha ts
	打嗝（しゃっくり）	ㄍㄦ ㄍㄦ	kêrh kêrh
	打喷嚏（くしゃみ）	ㄚ ㄊㄧㄝ	a t'ieh
	打飽嗝兒（おくび・ゲツプ）	ㄛ	o
	打呼嚕（いびき）	ㄏㄨ ㄌㄨ	hu lu
	唾沫（つばを吐く）	ㄊㄨㄟ	t'uei
	咳嗽（せき）	ㄎㄦ ㄎㄦ	k'êrh k'êrh
	撒尿（小便）	ㄏㄨㄚ ㄏㄨㄚ	hua hua
	接吻	ㄗㄦ	tsêrh
	叫狗的（犬）をよぶ時	ㄗㄚ ㄗㄚ	tsa tsa
	巴結嘴（唇）をならす	ㄅㄧㄚ ㄗㄧ	pia tsi
	放屁（おなら）	ㄅㄨ ㄅㄨ	pu pu
		ㄅㄨ･･･ㄦ	pu･･･êrh
		ㄗㄧㄙ	tsis
	歯ぎしり	ㄍㄚ ㄓㄖ	ka ch(ih)j(ih)

147 これは通常の理解では ri ying(ピンイン)と二音節になる。一音節の ring だとすると、北京語の音韻体系から外れるが、擬声語ではあり得るかもしれない。それについて本論では詳説しない。とりあえず指摘すると、本表に掲げるにあたっては、1 音節(ring)と解釈する。下の「ㄅㄧㄚ ㄗㄧ」についても同様である。

三	大砲	ㄍㄨ ㄉㄨㄥ	ku tung
	小槍(小銃)	ㄕㄨ･･･ㄦ	shu･･･êrh
		ㄆㄦ ㄆㄦ	p'êrh p'êrh
	機關槍	ㄉㄚ ㄉㄚ ㄉㄚ	ta ta ta
	飛機	ㄨㄥ ㄨㄥ	weng weng
	火車（汽車）	ㄍㄤ ㄉㄤ	kang tang
	汽車（自動車）	ㄔ ㄔ ㄔ	ch'(ih)ch'(ih)ch'(ih)
	摩托車（自動自転車）	ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ	t'ung t'ung t'ung
	大傲車（大）八車	ㄍㄚ ㄉㄨㄥ･･･	ka tung･･･
	電車の軋る音	ㄗ･･･ㄦ	ts･･･êrh
	電車の鈴	ㄉㄤ ㄉㄤ	tang tang
	電鈴（ベル）	ㄉㄤ･･･ㄦ	tang･･･êrh
四	鼓（太鼓）	ㄉㄨㄥ ㄉㄨㄥ	tung tung
	打銅鑼	ㄉㄨㄤ ㄉㄨㄤ	tuang tuang
		ㄉㄤㄦ ㄉㄤㄦ	tangêrh tangêrh
	吹笛	ㄇㄦ ㄇㄦ ㄇㄦ	mêrh mêrh mêrh
		ㄉㄦ ㄌㄥ	têrh lêng
	胡琴（胡弓）	ㄗㄦ ㄗㄨㄦ	tsêrh tsuêrh
	喇叭	ㄨㄚ ㄨㄚ	wa wa
	九音鑼	ㄉㄧㄥ ㄉㄤ	ting tang
	打梆子（拍子木）	ㄅㄤ ㄅㄤ	pang pang
	要波浪鼓兒	ㄅㄦ ㄌㄦ	pêrh lêrh
	喚頭	ㄘㄦ ㄘㄦ	ts'êrh ts'êrh
		ㄖㄨㄥ	jung
	打冰盞兒	ㄉㄧㄥ ㄉㄤ ㄉㄧㄥ ㄉㄤ	ting tang ting tang
		ㄉㄧㄥ ㄉㄧㄥ ㄉㄤ	ting ting tang
		ㄍㄥㄍㄚㄍㄥㄍㄚㄍㄥ ㄍㄥㄍㄚ	kêngkakêngkakêngkêngka
五	雨聲 小	ㄕㄨㄚ ㄕㄨㄚ	shua shua
	雨聲 大	ㄆㄧ ㄌㄚ ㄆㄧ ㄌㄚ	p'i la p'i la
	風聲 大	ㄕㄨ ㄕㄨ	shu shu
	風聲 小	ㄙㄨ ㄙㄨ	su su
	雷聲	ㄍㄚ ㄌㄚ ㄍㄨ ㄌㄨ	ka la ku lu
	水流聲	ㄏㄨㄚ ㄌㄚ	hua la
	瀑布（瀧）	ㄏㄨㄚ･･･	hua･･･
	湯のわく音	ㄍㄨㄚ ㄌㄚ	kua la
	風が葉にあたる音	ㄕㄨㄚ ㄕㄨㄚ	shua shua
	雨が傘にあたる音	ㄆㄚ ㄉㄚ ㄆㄚ ㄉㄚ	p'a ta p'a ta
	ものの煮える音	ㄍㄨ ㄉㄨ	ku tu
六	物之下落声（物を落とした時）	ㄎㄨ ㄉㄨㄥ	k'u tung
	叫門聲（戸を叩く）	ㄆㄚ ㄆㄚ	p'a p'a
	水中投石（窓戸のあたる音）	ㄅㄨ ㄉㄨㄤ	pu tuang
	屋門關閉聲	ㄎㄚ ㄊㄚ	k'a t'a
	瓷器摩擦聲	ㄉㄨㄤ ㄉㄨㄤ	tuang tuang
	鐵物相擊聲（金物）	ㄊㄨㄤ ㄊㄨㄤ	t'uang t'uang
	拍掌聲（拍手の音）	ㄆㄚ ㄆㄚ	p'a p'a
		ㄆㄚㄦ ㄆㄚㄦ	p'aêrh p'aêrh
	筐籮筱豆聲（笊にあたる豆の音）	ㄕㄚ ㄕㄚ	sha sha
	鋸木聲（木を鋸く音）	ㄘㄦ ㄘㄦ	ts'êrh ts'êrh

	裂布聲（布を裂く音）	ㄘㄦ ㄘㄦ	ts'êrh ts'êrh
	鉋木聲（鉋をかける音）	ㄗㄦㄗㄚㄦ	tsêrh tsaêrh
	撒紙聲（紙を破る音）	ㄙㄧ	si
	釘鐵釘聲（釘を打つ音）	ㄊㄤ ㄊㄤ ㄊㄤ	t'ang t'ang t'ang
	鋼筆寫字聲（ペンの音）	ㄙㄧㄙㄧ	sisi
	切菜聲（庖丁で切る音）	ㄘㄦ ㄘㄦ	ts'êrh ts'êrh
	剪子絞布聲（鋏で布を切る音）	ㄗㄚ	tsa
	剪子絞紙聲（鋏で紙を切る音）	ㄙㄚ	sa
	磨刀聲（砥石の音）	ㄘㄥ ㄘㄥ	ts'êng ts'êng
	把嘴巴聲（頬を打つ音）	ㄆㄚ ㄆㄚ	p'a p'a
	打後背聲（背中などを叩く音）	ㄊㄨㄤ ㄊㄨㄤ	t'uang t'uang
	石の碎ける音	ㄆㄥ（砰）	p'êng

『北京語の味』では、日本語である自然音（現象）の項目だけがあるが、セクションの一～六がそれぞれいかなる自然音の分野であるかは明示されていない。

4.4 『萬物聲音』と『北京語の味』の擬声語の型別

本節では主として、語形の形態構造、意味の特徴（意味分野）から『萬物聲音』と『北京語の味』における擬声語の特徴を検討する。

4.4.1 擬声語の型別

『萬物聲音』と『北京語の味』に収載されている擬音擬声語の形態タイプは、語形の各音節を A、B、C、D で示すと、次の 11 種の型になる。

A 型、AA 型、AB 型、AAA 型、AAB 型、ABB 型、AABB 型、ABCB 型、AABC 型、ABCD 型、AAAB 型

『萬物聲音』の中に、表記符号の原因で、AB 型と ABAB 型を区別しにくい擬声語が多くあるため、本章では、ABAB 型を AB 型に含めて考察を行う。また、『萬物聲音』と『北京語の味』において、AABC 型、ABCD 型、AAAB 型及び複合型の擬声語は語数が極めて少ないため、統計する際「その他」の分類に入れている。

次に、中国語の児化語には、「兒」は一音節に数えないため、本論は擬声語の音節パターンを分類する時、児化の擬声語の「兒」を 1 音節としない。

さらに、『萬物聲音』でも、『北京語の味』でも、同一の擬声語が何回も使われる場合がある[148]。例えば、『萬物聲音』の「噹兒々々」（第三章の七と二十九）、「爬嗒/padapada/」（第三章の三十八と四十一）、「嘩啊」（第三章の四十三と四十四）や、『北京語の味』の「ㄐㄧ ㄐㄧ/ jiji /」（家雀兒(雀)・耗子（鼠））、「ㄜㄚ ㄜㄚ/ e a e a /」（騾子（馬と驢馬の雑種）・驢（ろば））などである。ほかに、『萬物聲音』の場合、漢字によって表示される擬声語は文字と発音が完全に同じであるものだけでなく、「倏喇々々/shulashula/」と「倏啦倏啦

[148] 発音が同じで、用字が異なる擬声語は重複としない。

/shulashula/」のように、発音は同じで文字遣いが一部異なるものもある。『萬物聲音』と『北京語の味』に出現した擬声語を型別に分類して表 10 に示す。複数回出現する擬声語は一回しか数えない。

表 10　形態タイプによって分類した『萬物聲音』と『北京語の味』の擬声語

擬声語 型	萬物聲音		北京語の味	
	児化していない擬声語	児化した擬声語	児化していない擬声語	児化した擬声語
A	嗷、吭、嗞、咊、倏、嘎嗚-嗚、[口寧]、咋	吱兒、嗞儿	ㄏㄨㄚ…、ㄖㄧㄥ、ㄖㄨㄥ、ㄛ、ㄆㄥ（砰）、ㄙ…ㄙ、ㄙㄚ、ㄙㄧ、ㄗㄚ、ㄊㄨㄟ	ㄅㄨ…ㄦ、ㄕㄨ…ㄦ、ㄉㄤ…ㄦ、ㄗ…ㄦ、ㄗㄦ
AA	嘎々、咵々、哈々、呼呼、咩々、柔々、颼颼、[口候][口候]、[忄困][忄困]、嗚嗚、啊々啊々、郱々郱々、咚咚々々、噶々噶々、[口豐][口豐]々々、焀焀々々、噗噗々々、[口斬]々[口斬]々、[口圭][口圭]々々、[口留][口留]々々、咋々咋々、[口威]々[口威]々	嗷兒嗷兒、吃兒吃兒、咊兒々々、噹兒々々、噔兒々々、紉々、嘚兒々々、[口艮]兒々々、咕儿咕儿、蝈々兒、喀兒々々、嘿兒々々、呼兒々々、[口門]兒[口門]兒、颼兒々々、倏兒々々、歐兒々々、嗚兒々々、嗞兒々々、吱兒吱兒、[口賁]兒[口賁]兒、啧儿啧儿	ㄐㄚ ㄐㄚ、ㄐㄧ ㄐㄧ、ㄐㄧㄚ ㄐㄧㄚ、ㄜㄚ ㄜㄚ、ㄏㄥ ㄏㄥ、ㄏㄨㄚ ㄏㄨㄚ、ㄍㄚ ㄍㄚ、ㄍㄨㄚ ㄍㄨㄚ、ㄍㄨㄛ ㄍㄍㄨㄛ、ㄋㄧㄠ ㄋㄧㄠ、ㄡㄡ、ㄆㄚ ㄆㄚ、ㄅㄤ ㄅㄤ、ㄅㄨ ㄅㄨ、ㄕㄚ ㄕㄚ、ㄕㄨ ㄕㄨ、ㄕㄨㄚ ㄕㄨㄚ、ㄙㄧ ㄙㄧ、ㄙㄨ ㄙㄨ、ㄉㄤ ㄉㄤ、ㄗㄚ ㄗㄚ、ㄘㄥ ㄘㄥ、ㄉㄨㄤ ㄉㄨㄤ、ㄊㄨㄤ ㄊㄨㄤ、ㄉㄨㄥ ㄉㄨㄥ、ㄨㄚ ㄨㄚ、ㄨㄤ ㄨㄤ、ㄨㄥ ㄨㄥ	ㄎㄦ ㄎㄦ、ㄘㄦ ㄘㄦ、ㄆㄚㄦ ㄆㄚㄦ、ㄆㄦ ㄆㄦ、ㄉㄤㄦ ㄉㄤㄦ、ㄉㄦ ㄉㄦ、ㄍㄦ ㄍㄦ、ㄗㄦ ㄗㄦ、ㄖㄦ ㄖㄦ、ㄖㄦㄧ ㄖㄦㄧ
AAA		根兒根兒根兒	ㄔㄔㄔ、ㄉㄚ ㄉㄚ ㄉㄚ、ㄊㄤ ㄊㄤ ㄊㄤ、ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ	ㄍㄛㄦ ㄍㄛㄦ ㄍㄛㄦ、ㄇㄦ ㄇㄦ ㄇㄦ
AB	啊哼、啊嚏、吧嗒、咘噔、噶喳、嘎喇、噶吱、咕嘟-咕嘟-、咣噹、喀哧、[口車]嗵、嘩啊、嘩喇、啪喳、爬（[口瓜]）嗒、喎吃々々、哼啊々々、吧嗒々々、吧喇々々、噶嗒々々、嘎嗒々々、噶喇噶喇、嘎吱々々、咣噹々々、咕嘟々々、咕嚕々々、咕嚨々々、咕咚々々、咕嗵々々、呱啊々々、呼嚕々々、嘩喇々々、呼嗚々々、[口迷]嘍々々、倏啦倏啦、倏喇々々、吱吅々々、[口兆]嗒々々、啪嗒々々	哎哏儿、蛱蝶兒、咕唧兒、咯兒噶-咯兒噶、呱噔兒、[口門]兒呱、呢喲兒、歐兒嗷兒	ㄚ ㄧ ㄚ ㄧ、ㄚ ㄊㄧㄝ、ㄏㄚ ㄗ、ㄏㄨ ㄌㄨ、ㄏㄨㄚ ㄌㄚ、ㄍㄚ ㄓ ㄖ、ㄍㄚ ㄌㄚ、ㄎㄚ ㄊㄚ、ㄍㄚ ㄉㄨㄥ、ㄍㄤ ㄉㄤ、ㄍㄨ ㄉㄨ、ㄍㄨ ㄉㄨㄥ、ㄍㄨㄚ ㄌㄚ、ㄡㄠ、ㄅㄧㄚ ㄗㄧ、ㄅㄨ ㄉㄨㄤ、ㄉㄧㄥ ㄉㄤ、ㄉㄧㄥ ㄉㄤ ㄉㄧㄥ ㄉㄤ、ㄗㄧㄙ、ㄆㄚ ㄉㄚ ㄆㄚ ㄉㄚ、ㄆㄧ ㄌㄚ ㄆㄧ ㄌㄚ	ㄈㄨㄊ ㄧㄢㄦ、ㄅㄦ ㄌㄦ、ㄗㄦ ㄗㄚㄦ、ㄉㄦ ㄌㄥ
AAB	嘀々嗒-嘀々嗒		ㄍㄨㄚ ㄍㄨㄚ ㄐㄧ、ㄉㄧㄥ ㄉㄧㄥ ㄉㄤ	ㄈㄨㄈㄨㄦㄧㄠ
AABB	唧々咋々、嘍々喳々、嗞々[口亞]々			
ABB	啊哈々、啊喇喇-啊喇喇、咕嚕嚕、呼嚕嚕々			
ABCB	叮啊噹啊、咭拉[口瓜]拉、唧嗒嘎嗒（咭嗒[口兆]嗒）、唧噹剛噹、唧咚咕咚、[口皮]喇啪喇、唏唧嘩唧			
その他	噶々噶蛋、咕噔嘩啦、啵喇喇唏啦嘩啦、咖咖咖唧咋唧咋		ㄍㄚ ㄌㄚ ㄍㄨㄌㄨ、ㄍㄥ ㄍㄚ ㄍㄥ ㄍㄚ ㄍㄥ ㄍㄥ ㄍㄚ	咕々呢嗷兒
	合計：126 語		合計：90 語	

4.4.2　各型の擬声語の分布状況

具体的に各型の擬声語の形態構造の分布状況を考察する前に、『萬物聲音』と『北京語の味』の中の特殊型、複合型[149]の擬声語を幾つか取り出して、それらの形態タイプの特徴を示す。例えば、「咕噔嘩啦/gu deng hua la/[150]」、「ㄍㄚ ㄌㄚ ㄍㄨ ㄌㄨ/ga la gu lu/」はABCD型であり、「噶々噶蛋/ga ga ga dan/」はAAAB型、「咕々呢嗷兒/gu gu ni aor/」はAABC型である。以上はいずれも特殊型である。また、「唿喇喇唏啦嘩啦」のABB+ABCB型や、「ㄍㄥ ㄍㄚ ㄍㄥ ㄍㄚ ㄍㄥ ㄍㄥ ㄍㄚ（geng ga geng ga geng geng ga）」のABAB+AAB型は複合型である。特殊型も複合型も、語形が複雑であるが、それらは1種の自然音を表わすという点で同様である。

次に、『萬物聲音』と『北京語の味』の擬声語の各型の語数と総語数に占める比率を表11に示した。

表11　『萬物聲音』と『北京語の味』の擬声語の形態タイプの分布状況

テキストの語数＼型		A	AA	AB	AAA	AAB	ABB	AABB	ABCB	AABC	ABCD	AAAB
萬物聲音	語数	11	44	49	2	1	5	3	8	1	1	1
	比率(%)	8.7	34.9	38.9	1.6	0.8	4	2.4	6.3	0.8	0.8	0.8
北京語の味	語数	16	37	26	6	4	0	0	0	0	1	0
	比率(%)	17.8	41.1	28.9	6.7	4.4	0	0	0	0	1.1	0

注：AA の表示はAAAA型の擬声語をAA型に含めているという意味である。例えば、語数の43（12）及びその比率の34.9（9.5）は前の数字はAAを示し、後ろの（ ）内はAAAAである。ABも同様である。

『萬物聲音』の擬声語の型を大まかに分類すると、2音節の擬声語はAA型とAB型が多く、これを合わせると73.8%で約4分の3を占めている。4音節の重畳型の擬声語を除くと、AA型とAB型の比率はそれぞれ25.4%と18.3%である。そのため、ABAB型はAB型より多く使われていることがわかる。3音節重畳型のAAA型は「根兒根兒根兒」と「咖咖咖」の2つのみである。この「咖咖咖」は組み合わせ型の部分として使われ、複合型擬声語「咖咖咖唧咋唧咋」が載せられている。1つだけあるAABC型の「咕々呢嗷兒」は児化語である。

『北京語の味』では、比率の第一位から第三位まではそれぞれAA型、AB型、A型である。なお、基本型のAABB型、ABCB型と特殊型のABB型、AABC型、AAAB型はない。この分布状況は『萬物聲音』の場合と同じである。また、重複型のAAAA型とABAB型の分布には大きな相違が見られる。自然音の一回か2回以上の繰り返しかを判明しにくいことがあるため、重複型の選択の自由度が高くなる。そして、繰り返しの場合のA型と一回連続の自然音を表わすAA型は、使用の規則性が明確ではない。

他に、特殊型のABCD型の擬声語は『萬物聲音』にも『北京語の味』にも1つだけある。

149 重畳型、特殊型、複合型の定義は本論文の2.1.3と2.2.1で挙げている。
150 これはピンインで、筆者が注記した。下の例の場合も同様である。

形態タイプの種類は、『萬物聲音』が 11 種なのに対し、『北京語の味』は 6 種あると、大差がある。萬物聲音』と『北京語の味』の共通点は、2 音節の AA 型と AB 型、単音節の A 型を主とすることである。『萬物聲音』において、主な形態タイプ以外の擬声語は少なく、特殊型の擬声語が僅かにあるのみである。

4.4.3　児化擬声語

北京官話の学習書である『萬物聲音』と『北京語の味』は、擬声語の児化現象が顕著である。まず、表 10 より、両書の児化語の擬声語を抜き出し、その比率を計算したものを表 12 に示す。

表 12　『萬物聲音』と『北京語の味』の児化擬声語

萬物聲音	型（語数）	A（11）	AA（44）	AB（49）	AAA（1）	総数
	児化の擬声語の語数	2	21	8	1	32
	各型の語数に占める比率（%）	18.2	47.7	16.3	/	/
	総語数に占める比率（%）	1.6	16.7	6.3	0.8	25.4
北京語の味	型（語数）	A（16）	AA（38）	AB（25）	AAA（6）	総数
	児化の擬声語の語数	5	10	4	2	21
	各型の語数に占める比率（%）	31.2	26.3	16	3.3	/
	総語数に占める比率（%）	5.6	11.1	4.4	2.2	24.4

上の表にあげた A 型、AA 型、AB 型、AAA 型のほかに、AABC 型（例 :『萬物聲音』の「咕々呢嗷兒」）と AAB 型（例 :『北京語の味』の「ㄈㄨㄈㄨㄦㄧㄠ」）の児化擬声語もあるが、1 つずつしかないため、表 12 には挙げていない。

表 12 をみると、『萬物聲音』と『北京語の味』は、児化擬声語が総数に占める比率がそれぞれ 25.4%と 24.4%で、大体一致している。語数から見ると、2 音節の AA 型、AB 型の児化擬声語が多く存在することがわかる。AA 型と AB 型の語数の比較から見ると、『萬物聲音』の擬声語は AB 型が一番多く、AA 型が二番目に多いのに対して、『北京語の味』は AA 型が最も多く、AB 型が二番目に多い。『萬物聲音』の中の「根兒根兒根兒」は雄鳥の鳴き声を模倣するものとして、一回の連続の自然音を表わすため、A 型或いは AA 型の複数型とはせず、AAA 型とする。また、AA 型の「蝈々兒」と AB 型の「㖞唳兒」、「蚨蝶兒」などは語の最後の音節が「児化」するのに対して、AB 型の「咯兒噶」と「啁兒呱」は前部が児化音になる。「哧」及びその児化語の「哧兒」は両書とも載っている。また、「嗷」「嗚」「嗞」なども児化語の形式がある。これらの状況は『北京語の味』も同様である。

『萬物聲音』と『北京語の味』では、児化した擬声語の語数が異なるが、児化語の占める比率は同じ傾向を持つ。詳細にみると、『萬物聲音』の AA 型の擬声語では、児化語はほぼ半数を占める。それに対して、『北京語の味』は約 4 分の 1 と差がある。AB 型の児化語の分布にも相違があるが、大きくない。他に、A 型、AAA 型と 3 音節以上の児化した擬声語は多くないため、取り上げない。

以上のように、『萬物聲音』と『北京語の味』は、擬声語の形態タイプの種類及び分布状況で異同を持つ。その状況は近代日本の中国語関係書における擬声語の特徴をある程度反映していると同時に、中国語擬声語の実態を一定の程度反映しているに違いない[151]。とはいえ、『萬物聲音』と『北京語の味』のみの考察では、その結果が精確であるかどうかが断言できないが、中国語の研究に対する役割があるに違いない。

4.5『萬物聲音』と『北京語の味』の各型擬声語と意味分野の対応状況

本章は 3.2 の議論に基づいて、擬声語の意味分野を「声」[152]による「生物が発する声」と「音」による「無生物が発する音」、「物と物とが作用して生じる音」、「自然現象に関わる音」、「動作に関わる音」の 5 つの種類に分け、さらに細かい下位分類も行う。例えば、「生物が発する声」を「人の声」と「動物の声」にわける。

4.5.1　擬声語の意味分野

『萬物聲音』『北京語の味』では、擬声語は自然音の性質（擬声語の意味分野）によって集められている。例えば、『萬物聲音』の「例書」[153]が記しているように、各章の擬声語に対応する自然音の種類は異なる。自然音を発するものの性質によって、『萬物聲音』の擬声語の意味分野は人の声、動物の声、無生物が発する音、自然物の音、物体と物体の作用によって発する音、動作に関わる音などに分けることができる。

『萬物聲音』と異なり、『北京語の味』には、擬声語の意味分野に関する説明はなく、ただ 6 つの部分が漢数字で標記されている。各部分の擬声語の意味特徴から見ると、それらの意味分野は動物の声（一）、人の声（二）、無生物が発する音（三）、物体と物体の作用によって発する音（四）、自然現象に関わる音（五）、動作に関わる音（六）などに分かれることがわかる[154]。それらの擬声語を後であげる表 13 に示す。

『萬物聲音』と『北京語の味』における擬声語は形態タイプの型別によって、いくつかの下位分類にまとめられる。

---

151 このことについては本論文の 4.6 において触れている。

152「声」と「音」の区別によって、擬声語を狭義の擬声語と擬音語に分ける方法がある。平弥悠紀（2005）もこの方法を採用し、意味分野の確定を行っている。本論の擬声語という用語は「声」と「音」の両方を模倣するものを指す。

153「本書章を分ちて六章となし、第一章に於ては感投詞につき一々解釋をなし、其例証を加へ、第二章に於ては人の動作に因り起こる音聲を含めるものを、第三章に於ては物體と物體との摩擦により起こる音聲を含めるものを、第四章に於ては鳥類の鳴聲、第五章に於ては獸類の鳴嘯の聲、第六章に於ては蟲類の鳴く音を含める北京官話の記載したり」。（『萬物聲音』 p7）

154 各部分に載っている擬声語は一種だけの自然音を表わすものではない。例えば、（一）に載っている自然音は基本的に動物の声であるが、「喧嘩する時」の声と「小孩兒」の声は人の声である。

表 13　『萬物聲音』と『北京語の味』における擬声語の意味分野

関係書	型／意味分野	A	AA	AB	その他[155]
萬物聲音	人の声	吭（1）[156]	嘎々、哈々、啊々啊々、嗯兒々々、嘿兒々々（5）	嗚兒々々、噶喇噶喇（2）	嘍々喳々（AABB 型）(1)、咕拉呱拉（ABCB 型）(1)
	動物の声	嘎-、吱兒-、嗞儿、咋-、嗞、嗚-、嗷-、嘎-（8）	哔々、蝈々兒、噶々噶々、嗞兒々々、呼兒々々、歐兒々々、嗲嗲々々、嚶嚶々々、嘣々嘣々、旺旺々々、喊々喊々、郭々郭々、咋々咋々、嗲兒嗲兒、咕儿咕儿、嘖兒嘖兒、吃兒吃兒、吱兒吱兒、咿兒咿兒、嗷兒嗷兒（20）	噶吱、呱啊々々、咕嘟、迷嘍々々、哼啊々々、呢喲兒々々、蚨蝶兒、咯儿噶、歐兒嗷兒（9）	唧々咋々（AABB 型）(1)、啊喇喇-啊喇喇（ABB 型）(1)、根兒根兒根兒（AAA 型）（1）、咕々呢嗷儿（AABC 型）(1)、噶々噶蛋（AAAB 型）(1)、咖咖咖唧咋唧咋（AAA 型+ABAB 型）(1)
	無生物が発する音		噹兒々々、噔兒々々、嘚兒々々、焀焀々々、咚咚々々、咿兒々々、吶々吶々（9）	喀哧、嘩喇々々、呼嚕々々、噶噠々々、咣噹々々、嘎吱々々、吧喇々々、倏喇々々、咕嗲々々、吱哨儿（11）	唧噠嘎噠、唧噹剛噹（ABCB 型）(2)、嗞々啞々（AABB 型）(1)、咕嚕嚕、呼嚕嚕（ABB 型）(2)
	物体と物体の作用によって発する音		紉々、柔々（2）	咘噔、爬噠、噶喳、嘣嗵、吧噠、咣噹、咕嚕々々、呱噔兒々々、啪喳、咕嗵々々、噶噠々々、哧兒哧兒、嘩喇々々、倏啦倏啦、吱咀々々（15）	叮啊噹啊、咭噠嗯噠、唏啷嘩啷（ABCB 型）(3)、咕噔嘩啦（ABCD 型）(1)
	自然現象に関わる音	倏（1）	嗾嗾、颼颼、愃愃、呼呼、嗚嗚、颼兒々々、倏兒倏兒（7）	嘎喇、噶喳、嘩啊、咕嚕々々、嘩喇々々、啪嗒々々、呼嗚々々、咕嘟々々（8）	唠喇啪喇（ABCB 型）(1)、唿喇喇唏啦嘩啦（ABB 型+ABCB 型）(1)
	動作に関わる音	哧（1）	呼呼、咍々、喀兒々々（3）	啊噫、啊哼、吧噠々々、咕啷兒、嗝吃々々、咕咚々々（6）	啊哈々（ABB 型）(1)、唧咚咕咚（ABCB 型）(1)
北京語の味	人の声	ㄛ、ㄊㄨㄟ、ㄗㄦ、ㄅㄨ…儿、ㄗㄧㄥ (5)	ㄨㄚㄨㄚ、ㄍㄦㄍㄦ、ㄎㄦㄎㄦ、ㄏㄨㄚㄏㄨㄚ、ㄗㄚㄗㄚ、ㄅㄨㄅㄨ (6)	ㄍㄚㄌㄚ、ㄏㄚ　ㄗ、ㄚ　ㄊㄧㄝ、ㄏㄨㄌㄨ、ㄅㄧㄚ　ㄗㄧ、ㄍㄚ　ㄓㄖ (6)	ㄈㄨㄈㄨㄦㄧㄠ (AAB 型)　(1)
	動物の声	ㄥ…ㄥ、ㄖㄧㄥ (2)	ㄅㄦㄅㄦ、ㄋㄧㄠ　ㄋㄧㄠ、ㄨㄥㄨㄥ、ㄍㄚ　ㄍㄚ、ㄍㄨㄚ　ㄍㄨㄚ、ㄍㄨㄛ　ㄍㄨㄛ、ㄏㄥ　ㄏㄥ、ㄐㄚ　ㄐㄚ、ㄐㄧ　ㄐㄧ、ㄐㄧㄚ　ㄐㄧㄚ、ㄖㄦㄖㄦ、ㄖㄦㄧ　ㄖㄦㄧ、ㄗㄦ　ㄗㄦ、ㄚㄧ　ㄚㄧ、ㄜㄚ　ㄜㄚ、ㄡㄡ、ㄨㄤㄨㄤ (17)	ㄡㄠ、ㄈㄨㄊ、ㄧㄠ　ㄋㄧㄠ (2)	ㄍㄨㄚ　ㄍㄨㄚㄐㄧ (AAB 型)　(1)、ㄍㄛㄦ　ㄍㄛㄦ　ㄍㄛㄦ (AAA 型)　(1)
	無生物が発する音	ㄗㄨ…儿、ㄗ…儿、ㄅㄤ…儿 (3)	ㄆㄦ　ㄆㄦ、ㄨㄥㄨㄥ、ㄅㄤ　ㄅㄤ (3)	ㄍㄨㄅㄨㄥ、ㄍㄤㄅㄤ、ㄍㄚㄅㄨㄥ…　(3)	ㄅㄚㄅㄚㄅㄚ、ㄔ　ㄔㄔ、ㄊㄨㄥㄊㄨㄥㄊㄨㄥ (AAA 型)　(3)
	物体と物体の作用によって発する音	ㄖㄨㄥ (1)	ㄅㄨㄥ　ㄅㄨㄥ、ㄅㄨㄤ　ㄅㄨㄤ、ㄅㄤㄦ　ㄅㄤㄦ、ㄨㄚ　ㄨㄚ、ㄅㄤ　ㄅㄤ、ㄘㄦ　ㄘㄦ (6)	ㄅㄦㄅㄥ、ㄗㄦㄗㄨㄦ、ㄅㄧㄥㄅㄤ、ㄅㄦ　ㄅㄦ、ㄅㄧㄥ　ㄅㄤ　ㄅㄧㄥㄅㄤ (5)	ㄇㄦㄇㄦㄇㄦ (AAA)　(1)、ㄅㄧㄥㄅㄧㄥㄅㄤ (AAB)　(1)、ㄍㄥㄍㄚㄍㄥㄍㄚㄍㄥㄍㄚ (ABAB+AAB)　(1)
	自然現象に関わる音	ㄏㄨㄚ (1)	ㄗㄨㄚㄗㄨㄚ、ㄗㄨㄗㄨ、ㄙㄨㄙㄨ、ㄗㄨㄚ　ㄗㄨㄚ (4)	ㄏㄨㄚㄅㄚ、ㄍㄨㄚ　ㄅㄚ、ㄍㄨ　ㄅㄨ、ㄆㄧㄅㄚㄆㄧㄅㄚ、ㄆㄚ　ㄅㄚㄆㄚ　ㄅㄚ (4)	ㄍㄚㄅㄚㄍㄨㄅㄨ (ABCD 型)　(1)

155「その他」の型別は AAB 型、ABB 型、AABB 型、ABCB 型などを含める。この類別の擬声語に具体的な型別を付けて表示した。

156 () の中の数字は対応する型別の擬声語の語数を表す。

	動作に関わる音	ㄙㄧ、ㄕㄚ、ㄙㄚ、ㄆㄥ ⑷	ㄆㄚㄆㄚ、ㄉㄨㄤㄉㄨㄤ、ㄊㄨㄤㄊㄨㄤ、ㄆㄚㄦㄆㄚㄦ、ㄕㄕ、ㄕㄕ、ㄙㄧㄙㄧ、ㄘㄥㄘㄥ、ㄆㄚㄆㄚ ⑼	ㄎㄨㄉㄨㄥ、ㄍㄨㄉㄨㄤ、ㄎㄚㄊㄚ、ㄕㄦㄕㄚㄦ ⑷	ㄊㄤㄊㄤㄊㄤ (AAA) ⑴

4.5.2　各型の擬声語と意味分野別の対応状況

本節では『萬物聲音』と『北京語の味』の擬声語が型別によってどのような意味分野の偏りを持つのかを考察する。

まず『萬物聲音』の擬声語の意味分野を型別に見ると、「吭」、「倏」、「哧」の三つを除くA 型の擬声語は「動物の声」の意味分野のみにおいて見られ、8 語あるので、最も多い。AA 型（重畳型の AAAA 型を含む）の擬声語も「動物の声」を表すものが最も多い。AB 型（重畳型の ABAB 型を含む）はすべての意味分野においてより普遍的に使われ、意味分野別による分布の偏りが小さいようである。AAA 型、AAAB 型、AABB 型、ABB 型、AABC 型などの擬声語は例が非常に少ないため、使用傾向を明らかにするのは困難なことである。全体の意味分野における語数から見ると、「動物の声」の擬声語は最も多い。意味分野と擬声語の型別の対応状況を見ると、「人の声」と「動物の声」において最も頻繁に見られる型別は AA 型であり、「無生物が発する音」、「物体と物体の作用によって発する音」、「自然現象に関わる音」、「動作に関わる音」の場合は AB 型（ABAB 型を含む）である。

次に、『北京語の味』における各型の擬声語と意味分野の対応状況を概説する。『萬物聲音』では A 型の擬声語が「無生物が発する音」と「物体と物体の作用によって発する音」の分野にないのに対して、『北京語の味』ではすべての意味分野に A 型の擬声語が見られるが、各意味分野の語数は少ない。AA 型については、約 45%が「動物の声」の意味分野に分布しており、はっきりした対応傾向を持っていると言える。それに対して、AB 型の擬声語は「動物の声」におけるものが最も少ない。「その他」は擬声語の用例数が少ないため、分布特徴が見られない。また、『北京語の味』の全体の意味分野と各型の擬声語の対応状況を言うと、「動物の声」、「物体と物体の作用によって発する音」、「動作に関わる音」には、AA 型が最もよく見られ、「人の声」、「無生物が発する音」、「自然現象に関わる音」には、AA 型と AB 型が非常に多く出現した。通観すると、『北京語の味』の AA 型は、あらゆる意味分野において常用の型別である。

両書において、「人の声」、「自然現象に関わる音」と「動作に関わる音」にはすべての型の擬声語が見られる。それらの意味分野に各型の擬声語のバランスのとれた使用の傾向があるようである。

4.6　『児女英雄伝』と中国語関係書の擬声語との対照

『萬物聲音』と『北京語の味』を例とする近代日本の中国語関係書における擬声語の形態構造と意味分野との関係が当時の現実の中国語擬声語の状況と比べるとどのような独自の実態特徴を持っていたのかを考察するために、本節では北京語の代表的な文献である清

末期の講談体（評話）の白話小説の『児女英雄伝』[157]を取り上げて、その中の擬声語の形態タイプと意味分野の特徴を明らかにして、それと『萬物聲音』、『北京語の味』の実態との比較を行う。

4.6.1　『児女英雄伝』を取り上げた理由

『児女英雄伝』は北京語で書かれており、清末期の北京語の代表的な文献であることは定説になっている。『児女英雄伝』は近代白話の使用が広がりつつあった時代のものである。この点から見ると、これは『萬物聲音』や『北京語の味』のような近代日本の会話主義の中国語関係書と近似しているといえるであろう。そのため、中国語関係書と『児女英雄伝』の言葉は同質の部分を持ち、比較研究の可能性がある。例えば、尾崎実（1966）は「清代北京語の一斑」[158]で、清末期に出版された北京語教科書の『官話類編』の語彙の特徴を語数と性質から分析して、それらの語を『児女英雄伝』と比較している。研究の結論として、『官話類編』に見られる並列記述[159]の約 80%が北京語のものであるとしている。かくして、近代日本の中国語関係書に見える擬声語には当時の現実の中国語がどの程度忠実に反映されていたのかという問題が生じる。これを知るために、本章では『児女英雄伝』と近代日本の中国語関係書の『萬物聲音』と『北京語の味』を取り上げて、それらの中の擬声語の形態タイプ、意味分野の実態及びその相違を検討する。

4.6.2　『児女英雄伝』における擬声語

野口宗親（1993）[160]は『児女英雄伝』に出てくる擬声語の調査と分析を行った。野口（1993）の集めた擬声語は次のようであった[161]。

A 型・16（56）＊：
吧（7），噌（2），嗤・哧（8），噹（2），噔（1），轟（6），呸（2），噗（8），噂（1），鏜（3），噹（4），唰（4），嗖（5），騰（1），嗡（1），吱（1）
AA 型・24（73）：
啊啊（1），吃吃（1），咈咈（1），噶噶（1），格格（1），哈哈（27），呵呵（13），哼哼（2），吶吶（1），嗚嗚（1），嘻嘻（5），吁吁（1），喁喁（2），嘁嘁（1），嘖嘖（3），噹噹（1），蓼蓼（1），格格（1），唿唿（1），拍拍（2），噗噗（1），颯颯（1），騰騰（1），突突（2）
AAA 型と AAAA 型・11（15）：

---

157 著者は文康である。『児女英雄伝』の版本は写本（39 回、年代不詳）、光緒四年(1878)聚珍堂活字初印本と光緒十四年(1888 年)上海蜚英館石印本の三つがある。
158 尾崎実（2007）『尾崎実中国語学論集』好文出版 pp.27-47
159 尾崎実（1966）の説明によって、並列記述はシャレことばの他、完全な同義・同機能語、類義的なものなどを指す。
160 野口宗親（1993）「清代北京語の「象声詞」—『紅楼夢』と『児女英雄伝』」『熊本大学教育学部紀要人文科学』第 42 号 pp.1-11。野口氏が利用した『児女英雄伝』の版本は 1991 年上海古籍出版社のものである。底本は光緒 4 年聚珍堂初刻本である。
161 これは『児女英雄伝』における擬声語だけである。紙数に限りがあるので、本論で、筆者は擬声語の用例を付けていない。そのため、この不備な点で、擬声語の意味分野はわかりにくいかもしれない。

噹噹噹（2）、蹬蹬蹬（1）、哆哆哆（1）、呵呵呵（1）、嗚兒嗚兒嗚兒（2）、嘖嘖嘖　（3）、喳喳喳（1）哆哆哆哆（1）、咯咯咯咯（1）、哼哼哼哼（1）、踏踏踏踏（1）

AB 型・28（50）：

吧喳（1）、吧嗒・吧噠（2）、哧嗰（1）、叮噹（1）、嘟囔（1）、噶啦・噶拉（2）、趷嗒（1）、咯蹬（2）、咕咚（11）、呱咭（2）、咕咭（1）、咕嚕（1）、咕噥（2）、嘩啦（1）、唿搭（1）、唧嗰（1）、喀吧（2）、吭嚓（1）吭喳（1）、鏗鏘（2）、哻哧（1）、噗通・噗通（2）、嘁測（1）、嘁喳（2）、吶嘣（1）、唏嗰（2）、窸窣（1）、吱嘍（1）

ABB 型・17（36）：

鐺啷啷・噹啷啷（5）、得楞得楞（2）、滴溜溜（1）、噶啦啦（1）、噶吱吱（1）、咕咚咚（4）、咕嘟嘟（2）、咕嚕嚕・咕哖哖（3）、撣拉拉・嘩啦啦（2）、唿嚕嚕（1）、拍喇喇（2）、鏘啷啷（3）、簌落落（1）、忒楞楞（4）、忒兒嘍嘍（1）、哇呀呀（2）、吱嘍嘍（1）

AABB 型・6（7）：

哼哼唧唧（1）、咭咭咯咯（1）、喃喃吶吶（1）、嘁嘁測測（1）、嘁嘁喳喳（1）、嗚嗚咽咽（2）

ABAB 型・11（16）：

噔楞噔楞（1），叮噹叮噹（1），咶喇咶喇（1），咕咚咕咚（2），咕嘟咕嘟（1），咕嚕咕嚕（1），咈哧咈哧（2），嘩啷嘩啷（1），唿嚕唿嚕（2），噗哧噗哧（2），忒兒嘍忒兒嘍（2）

ABCD 型・4（4）：嚐楞嗆啷（1），噔咚扎咶（1），唏溜嘩啦（1），咦溜哇喇（1）

ABCB 型・2（3）：咭噔咯噔（1），唏啷嘩啷（2）

この他：扎嘣嘣 扎嘣嘣 扎嘣扎嘣扎嘣嘣

＊注：数字は擬声語の語彙数で、（ ）内は延べ回数である。

以上の各型を合計すると 119 語になる。各型の頻度について、野口（1993）（p11）に基づき、筆者が表 14 を作成する。

表 14　『児女英雄伝』における各型の擬声語の頻度（野口 1993）

擬声語の型	A	AA[162]	AAA	AB	ABB	AABB	ABCB	ABCD
語数/比率（%）	16/13.4	28/23.5	7/5.9	39/32.8	17/14.3	6/5.0	2/1.7	4/3.4

注：語数/比率（%）はある型の擬声語の語数が『児女英雄伝』における擬声語の総数の 119 語に占める比率を意味する。

この表には、特殊型の「扎嘣嘣 扎嘣嘣 扎嘣扎嘣扎嘣嘣」[163]が入っていない。

4.6.3　『萬物聲音』『北京語の味』『児女英雄伝』における擬声語の比較

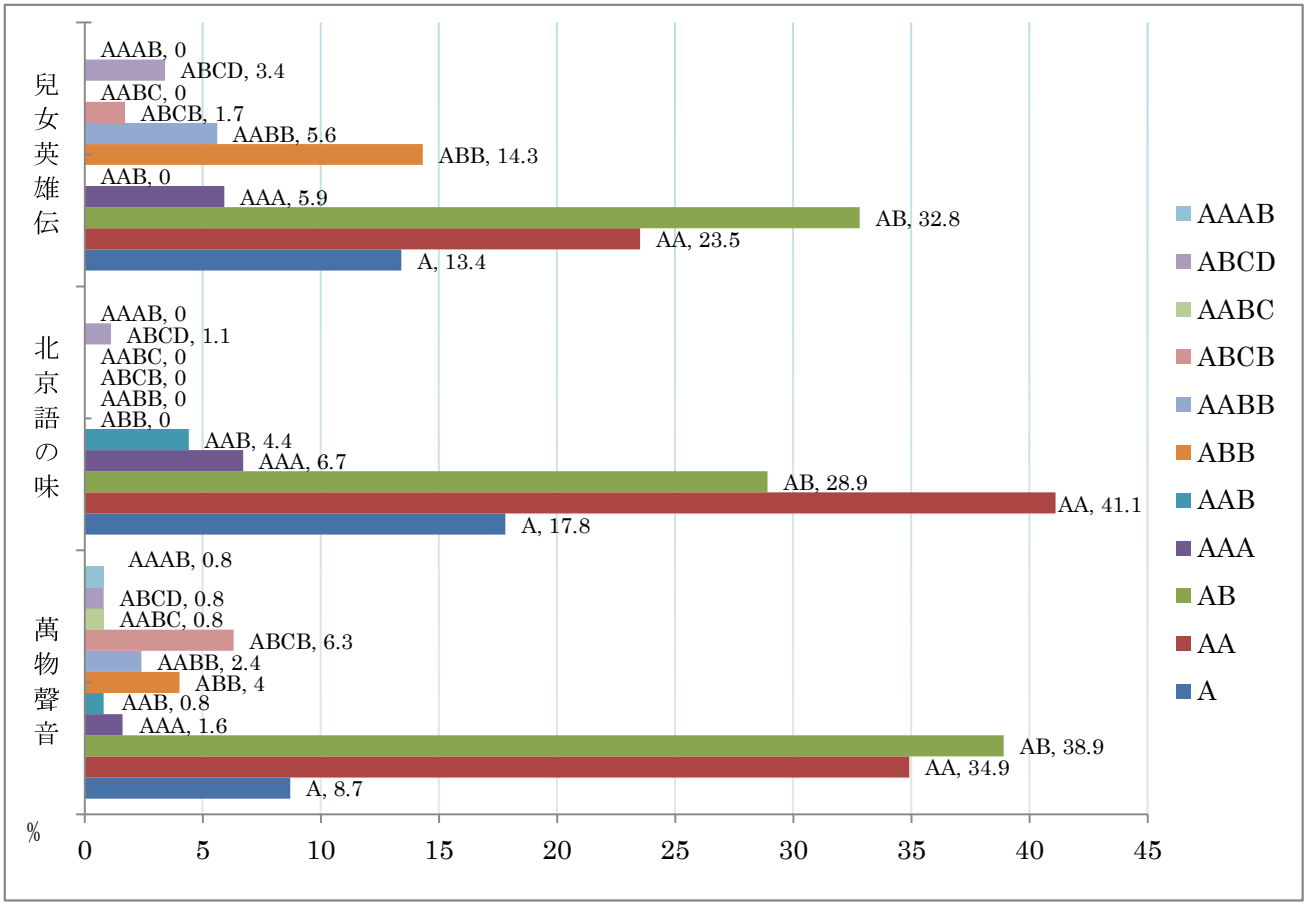
[162] 野口（1993）は AAAA 型と AAA 型を AA 型の重複型としたが、ABAB 型と AB 型は別々にしている。本表は AAAA 型と AA 型を、ABAB 型と AB 型を合わせて統計した。

[163] これは特殊型の複合型の擬声語である。これは一回の自然音（漁鼓の音）を表わすが、ABB 型と AB 型の 2 種の型で、4 つの擬声語からなる。

4.6.3.1　型別による擬声語の分布状況

『萬物聲音』にあって、『北京語の味』と『児女英雄伝』にないのは AABC 型、AAAB 型である。また、『児女英雄伝』にあって、『北京語の味』にないのは ABB 型、AABB 型、ABCB 型である。そして、『北京語の味』にあって『児女英雄伝』にないのは AAB 型だけである。全ての型別の擬声語の『児女英雄伝』『萬物聲音』『北京語の味』における分布状況を示すと次のグラフを作成する。

各型による『児女英雄伝』『北京語の味』『萬物聲音』の擬声語の分布



注：上のグラフの横棒に付けたのは『萬物聲音』『北京語の味』『児女英雄伝』の各書における擬声語の型別及びその分布比率である。

上のグラフに表示したように、A 型、AA 型、AB 型を主な型別とする擬声語は、同様に『萬物聲音』『北京語の味』『児女英雄伝』の三書において最も多い。型別の全般の使用比率を見ると、『萬物聲音』と『北京語の味』の分布は『児女英雄伝』より、変動が激しい。以上により、近代日本の中国語関係書における擬声語の使用は、各型の語数の面で、現実の中国語擬声語より大きな変動が見られる。

一方、重複使用される擬声語及びその延べ回数の状況は『児女英雄伝』『萬物聲音』『北

京語の味』の間に相違がある。例えば、『萬物聲音』では、重複使用される 16 語の擬声語が総数の 12.8%を占め、34 回出ているが、『北京語の味』には、擬声語の総数の 12.6%を占める 12 語が 28 回出ている。『児女英雄伝』の擬声語の総数及び延べ出現回数、重複使用された擬声語の語数及び延べ出現回数の状況は表 15 の通りである。

表 15　『児女英雄伝』の各型の擬声語の使用状況

型	A	AA	AAA	AB	ABB	AABB	ABCB	ABCD
擬声語全体の語数/延べ出現回数	16/56	28/77	7/11	39/66	17/36	6/7	2/3	4/4
うち重複使用された擬声語の語数/延べ出現回数	11/51	8/56	3/7	17/44	10/29	1/2	1/2	0

この統計で、重複出現した 51 語（即ち 11+8+3+17+10+1+1=51）は擬声語の総数の 43%を占め、191 回使われている。『児女英雄伝』において擬声語の重複現象が非常に顕著であることがわかる。

4.6.3.2　意味分野別による擬声語の分布状況

野口（1993）は、『児女英雄伝』の擬声語の意味分野を「人や動物の声」と「物の音」[164]に分けて、AA 型の擬声語を分析した。実際には、『児女英雄伝』における擬声語の意味分野の「人や動物の声」と「物の音」は人の声、動物の声、無生物の音、自然現象の音、動作の音と動作による音などに細分することができる。例えば、『児女英雄伝』の中に、擬声語「吧」は 7 回出ているが、それらの表す音には共通した特徴も見られるものの、それぞれの意味は違っている[165]。このような用例が『児女英雄伝』に多くある。例えば、「嗤・哧」

---

[164] 野口宗親（1993）「清代北京語の「象声詞」―『紅楼夢』と『児女英雄伝』」『熊本大学教育学部紀要人文科学』第 42 号 p4

[165] ①先打了一照“回身出來”就抬腿吧的一脚，把那小和尚的屍首踢在那拐角牆邊（訳文：様子をさぐり、ひきかえしてくると、足をあげてポンとひと蹴り、例の小坊主の死骸を目かくし塀のあたりまで蹴飛ばし―p75（上））。（第 6 回）

②用了個“葉底藏花”的架式，吧，只一個反巴掌，早打在他腕子上，揆了開去（訳文：葉底蔵花の技で、パット、反巴掌一撃、早くも痩せッポチの腕をひと打ちして、跳び退りました―p79（上））。（第 6 回）

③輪起右腿甩了一個“旋風脚”，吧，那和尚左太陽上早著了一脚！站脚不住，咕咚向後便倒（訳文：右足をクルット廻して、「旋風脚」の一技を放ち、和尚の左のこめかみをパッといち早く蹴上げましたから、何条たまりましょう、仰向けざまにダーンと倒れてしまいました―p80（上））。（第 6 回）

④這一倒!但見個東西翻在半空裡！從半空打了一個滾兒，吧，掉在地下（訳文：その途端、見れば何やら空中血まみれとなり、クルッと廻って、トンと地面に落ちて来ました―p94（上））。（第 7 回）

⑤鄧九公才聽得“十三妹”三個字，早把手裡的酒杯吧的往桌子上一放，説：“老弟，你是怎生杯曉得這個人？”（訳文：鄧九公「十三妹」ということばを聞いたとたん、手中の杯をドンと食卓の上に置き、「老弟、あんたはどうしてそのひとをご存じなのじゃ？」―p198（上））（第 15 回）

⑥不知又説了他一句什麼，他把那個的帽子往前一推，脳子上，吧，就是一巴掌（訳文：そいつは男の帽子を前へ押しやって頭の後ろをパンと平手でひっぱたく―p 117（下））。（第 32 回）

⑦些微使了點勁兒，吧，兩截兒了（訳文：ちょっと力を入れたとたん、プツンと二つに切れてしまいました―p226（下））。（第 37 回）

上の中国語の例文は北京大学中国語言学研究中心(CCL)のコーパスで調査したもので、日本の訳文は

が 8 回、「咕咚咚」が 4 回出ている。それらも 1 種類以上の意味分野に見られる。それゆえ、『児女英雄伝』は『萬物聲音』と『北京語の味』と同様で、擬声語がより幅広い意味に使われる傾向がある。

4.7　まとめ

近代日本の中国語学習の関係書である『萬物聲音』と『北京語の味』の出版は 35 年の間隔があるが、そこに収載されている擬声語は表記方法や自然音の分類、形態の特徴、使用分布などの面で似ている。

『児女英雄伝』の擬声語と比較して見ると、『萬物聲音』と『北京語の味』の中の擬声語は型別の多様性と出現頻度、意味分野においての分布状況に大きな差が見られる。型別の種類から見ると、『児女英雄伝』は 8 種あり、『萬物聲音』は 11 種あるのに対して、『北京語の味』は 6 種と、大差がある。擬声語の出現頻度から見れば、A 型、AA 型、AB 型、ABB 型の擬声語は『児女英雄伝』においてそれらの重複の比率が『萬物聲音』と『北京語の味』より高い。『萬物聲音』、『北京語の味』と異なり、『児女英雄伝』においては ABB 型の出現頻度が比較的に高い。表の「各型による『萬物聲音』『北京語の味』『児女英雄伝』の擬声語の分布」に示したように、型別全体の分布比率の幅は、『萬物聲音』と『北京語の味』より『児女英雄伝』のほうが小さい。

『萬物聲音』、『北京語の味』、『児女英雄伝』の擬声語は同様に「動物の声」と「物の音」を主な意味分野としている。また、この三書の擬声語は幅広い意味に使われる傾向を持っている。つまり、中国語関係書における擬声語は意味の多様性という点において現実の中国語擬声語と近似している。

上の考察の結果が確実であるとはいえない。理由としては、次のことが考えられる。まず、『萬物聲音』の例文が会話体であるのに対して、談話体小説の『児女英雄伝』は中国語関係書と比べて、テキストの異なりが存在している。そのため、それらのテキストは擬声語の取り方や使い方の点で異なる態度を持っていたに違いない。かくして、擬声語の特徴の相違を取り扱うことは避けられない。また、近代日本の中国語関係書は非常に多くある。『萬物聲音』と『北京語の味』の二書における擬声語のみでは近代日本の中国語関係書における擬声語の全般的特徴を明らかにすることにとって充分な資料であるとは言えない。それゆえ、近代日本人の学習した中国語擬声語の特徴を明らかにするために、さらに多くの資料を考察に入れる必要がある。

次に、中国語関係書における擬声語の考察は語の形態構造、意味分野のほか、擬声語の音節パターン・音韻構造をも検討する必要がある。特に擬声語の語義と音韻の関係を検討するのは、近代日本人（学者）が持つ中国語に対する語音認識の特徴を深く解釈することに対して重要であろう。

『中国古典文学全集 29 児女英雄伝（上）』（奥野信太郎・常石茂・村松暎 訳 平凡社 1960）と『中国古典文学全集 30 児女英雄伝（下）』（奥野信太郎・常石茂・村松暎 訳（1961）平凡社）による。

第 5 章　擬声語の音韻構成

5.1　中国語の音韻概況[166]—声母・韻母・声調

5.1.1　中国語の音韻体系

周知のように、日本語と中国語はそれぞれ違った系統に属している言語であるが、日本語において言語音が母音、子音のいずれかの要素から構成されていると同様に、中国語の言語音も声母、韻母から構成される。そして、声母と韻母のほか声調も含めて中国語の三要素としている。現代中国共通語には全部で 21 種類の声母があり[167]、39 個の韻母がある。中国語の声調には第 1 声、第 2 声、第 3 声、第 4 声及び軽声[168]がある。

中国語の発音は上述の三要素によって表記される。例えば、中国語の「大」は「dà」と表記される。「dà」は中国語の 1 つの語音単位—音節として、声母の「d」、韻母の「a」、第 4 声の声調記号「ˋ」からなる。

以上は本章のテーマに関わる中国語音韻の非常に簡単な紹介である。本章では中国語ピンインを利用するため、「(4) 中国語の声母表[169]」と「(5) 中国語の韻母表[170]」を作って本論文の末尾に付録として付けている。

5.1.2　中国語の音声特徴

本節では外国語教育の角度から、日本語と較べながら、中国語の音声的特徴について簡単に説明する。

(1) 中国語の有気音と無気音

中国語では、有気音—無気音は語の意味を区別するという作用を持つ。しかし、日本語では、有気音—無気音の対立は弁別的ではなく、有声—無声の対立が意味の区別に用いられる。例えば、中国語の共通語で、無声無気音である/ｂ/（[p]）は、無声有気音の/ｐ/（[p‘]）と区別される。同様に、破裂音（閉鎖音）の/ｇ/（[k]）—/ｋ/（[k‘]）・/ｄ/[t]—/ｔ/（[t‘]）、破擦音の/ｚ/（[ts]）—/c/（[ts‘]）・/zh/（[ʈʂ]）—/ch/（[ʈʂ‘]）・/j/（[ʨ]）—/q/（[ʨ‘]）なども無声無気音—無声有気音の対立の例である。

実際、有声・無声、有気・無気は語音上の区別を持つ他に、語義の表現でも一定の相違持つ可能性もある。例えば、擬声語の場合、有気音・無気音の対立のペアの例として、足音を描写する/badabada/と/padapada/、水中に飛び込む音を表す/kutong/と/gudong/の 2 つ

---

166 本章で、「中国語」或いは「現代中国語」は中国の共通語である普通話を指す。他に、北京官話或いは北京語などを話題とする場合、異なる名称を区別し使用する。

167 零声母を除く。

168 調号も固定の調値もない。

169 この表は『現代漢語』（増訂第四版）（黄伯榮・廖序東（2007） 高等教育出版社）、『中国語概論』、『中国語学概論』（改訂版）（王占華・一木達彦・苞山武義（2011）駿河出版社）などを参考として作成。

170『中国語学概論』（改訂版）（p56）による。

のペアはそれぞれ同じ自然音を模倣するものであるが、自然音の軽重と緩急の差異が体験されるであろう。そのような有気・無気の対立も確かに存在するが、具体的な語例が少ない。これらの例によって、中国語の有気・無気が持つ対立する意味を区別する試みが有意義であることがわかる。

他に、中国語の/m，n，l，r/が有声性のものであるが、無声音との対立はない。中国語では、有声無声の対立は弁別的ではない。

（2）中国語の音韻の枠外のもの

中国語の音節は 21 の声母と 39 の韻母の組み合わせで構成されたものであるが、普通声母（子音）だけで構成することができない。そして、声母と韻母の結合にも規則があるが、まれに規則の例外となる組み合わせを持った音節が現れる。それらの言語現象は中国語擬声語において多く存在している。例えば、bia・biang・duang・mer・pia・tiang などである。具体的な語の例をあげると、唇をならす/biaji/や、磁器を摩擦する/duang duang/などがある。これらの擬声語は現行の言語系統から離れた組み合わせで現実の自然音を表すものである。耿二嶺（1986）はこの現象を「超系統」（非現行体系ー筆者訳）[171]の音節の組み合わせと言っている。

「超系統」の言語現象は中国語の音節が自然音を描写する制限のあることを反映している。日本語と比べることを通して、その現象を見れば、武田みゆき（2001）[172]の論述が挙げられる。武田（2001）は「中国語の擬音語は日本語のそれに比して、より実態音が意識されており、同時に一般の語彙からは遠くなり、その結果として語彙化の弱い傾向をみてとることができる。反対に日本語の擬音語は言語によって概念された対象がより意識されて一般の語彙に近くなり、語彙化の強い傾向を見てとることができる」[173]と指摘している。その意味で、自然音を語彙化する点で、日本語と比べて、中国語はその傾向が弱いと考えられる。

中国語の音韻の枠外のものは一般的に擬声語において用いられる。とはいえ、そのような擬声語は多くない。このように、自然音を語彙化する点において、中国語の音韻体系の能力は制限されているといえる。

5.1.3 近代以降の中国語音韻体系の特徴

現代中国語は古代中国語から、音声・音韻の面で大きく変化した。その変化も非常に長い時期を経た結果である。現代中国語の時期は 20 世紀初期以降或いは 1919 年「五四運動」以降という具体的な時点によって区分されることがあるが、その時点の前と後とで、中国

---

[171] 耿二嶺（1986）は「超系統」を「非児化音節」と「児化音節」とに分け説明する。例えば、「非児化音節」の「超系統」は「声+韻+調」の「biā ・piā・tià・biàng」と、「調+（声+韻)」の「niāo・kà」などがある。「児化音節」の「超系統」は「声+児化韻+調」の「dēnr」と、「調+（声+児化韻)」の「zīr・cīr・rěnr・bénr dóngr」などがある。

[172]「擬音語の語彙化に関する日中両言語の特徴」『多元文化』(1)名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻 編 pp.79-90

[173]「擬音語の語彙化に関する日中両言語の特徴」『多元文化』名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻編（1） p83

語に大きな変化があるわけではない。

近代日本の中国語教育は明治時代から昭和時代にかけて広がってきた。近代日本の中国語教育における北京官話の音韻体系は、現代の中国語の音韻体系と全く同様なものと見てよい。本論は現代中国語の音韻体系によって、中国語関係書における擬声語の音韻状況を考察し、現代中国語擬声語との比較を行うことを試みる。

5.2　中国語擬声語の音韻構造

5.2.1　中国語擬声語の音韻特徴の研究現状

本論文の 0.3.4 で述べたように、中国語擬声語の音韻の関連研究は第二期[174]から始まった。第一期（1898 年～1949 年）の研究は方言の擬声語[175]を中心にして、異なる形態タイプの擬声語の音韻構成、音節の特殊な使用現象、模倣の自然音の特徴についての研究が顕著である。

従来の研究は擬声語の音韻構成の要素の分析をめぐって深く行われてきた。朱德熙、孟琮、耿二嶺、馬慶株、竺家甯、石毓智、王洪君などの研究者が関連する研究を発表している。

まず、擬声語の音節構造における代表的な音声の使用状況と音節形態の研究が際立っている。朱德熙（1982）[176]は擬声語の音韻結構を論述した最初の研究である。この研究は方言の研究で、「C_1V_1—C_1V_2—C_2V_2」の音韻構成である潮陽話重疊式の擬声語と「C_1V_1—C_2V_1—C_1V_2—C_2V_2」の音韻構成の北京語擬声語を比較して、両者の関係を「形式相似而構造不同」[177]と指摘している。竺家甯（1995）は擬声語の声母の種類、異なる言語の擬声語の側面音、異なる歴史時期の中国語擬声語の音韻構成における l 声母の使用状況を全面的に説明する。朱德熙（1982）、竺家甯（1995）に類する研究である冉啓斌（2012）は孟琮（1983）が収録する北京語擬声語を分析の対象とし、擬声語における側面音声母/l/の使用位置、頻度、音声特徴が持つ意味特徴を検討する。儲泰松（2012）は『現代漢語詞典』（第 5 版 2006 年発行）の擬声語の声母と韻母の使用分布を考察し、擬声語の声調の特徴を論じている。それらの他、王洪君（1996）の「漢語語音詞的韻律類型」、石毓智（1995）の「論漢語的大音節結構」などのような多くの研究は音声学や音韻学の面で、擬声語の音韻構成の状況及びその原因を論述している。それらの研究は異なる視点から、北京語擬声語などの音韻構成を検討しているが、系統的な研究状況が形成されておらず、研究方法も重複しているようである。

次に、中国語擬声語の音韻構成の一般的な特徴を「声・韻・調」から整理する方向の代

---

174 中国語擬声語の研究時期の画分が本論文の 0.3.4 で挙げている。
175 北京話を代表とする方言擬声語が注目された。他のは潮陽話などがある。
176「潮陽話和北京話重疊式象声詞的構造」『方言』第 3 期 pp. 174-180
177 形式は近似しているが、構造は異なる一筆者訳。

表的な研究として、孟琮（1983）の「北京話的擬声詞」[178]と馬慶株（1987）の「擬声詞研究」[179]が擬声語研究の代表的なものとして、その形態構造、音韻構造、意味分野などの研究を詳細に行った。

孟琮（1983）では548語[180]の北京語擬声語をA型・AB型・ABCD型・ABB型・AABB型に分類して、それらの音韻構成を声母の全般の使用特徴、声母の組み合わせの規則、声調の変化と児化現象、擬声語の意味特徴などの面から考察した。孟琮（1983）は次のように指摘している。

①A型の声母には/b・c・d・g・h・j・k・p・s・t・w・y・z/などがあり、/l・m・q/が少なく、/f・x・n/はない。A型の韻母は、-aを主母音とするもの及び-ngを韻尾とするものが最も多く、-nを韻尾とするものがない。A型北京語擬声語の音韻の枠外のものはbiā・piā・diā・tiā・biāng・tiāng・duāng・tuāng・kiū・rōuなどである。韻母のない擬声語にはz・c・s・ch・sh・dr・tr（rははじき音である)などがある。A型の声調は主に第1声である。

②AB型の第1音節の声母は大体A型の場合と一致している。第2音節の声母はb・c・ch・d・j・k・l・p・t・zh・zが比較的多いが、c・zは少ない。韻母の圧倒的多数はa・u・i・ong・eng・angである。AB型の2つの音節とも第1声を主としている。第2音節の語気がやや強くなる。

③ABCD型のABとCDはともに双声擬声語である例がある。この場合、Cの声母がg・k・hである場合、Aの声母は一般的にj・q・xである。全体から見ると、A・Cの声母には、b・d・g・h・j・k・p・q・t・xが見られるのに対して、B・Dの声母にはl・d・z・zh・c・chがあり、そのうち、lとdの例が最も多い。ABCD型の擬声語の対があり、この2つの擬声語のA・Cの声母に派生関係が見られる場合がある。孟琮（1983）はこれを「変体」としている。例えば、哔滴叭哒（/bi di ba da/）と劈梯啪踏（/pi ti pa ta/）はb～pの「変体」であり、滴里哒啦（/di li da la/）と梯里踏啦（/ti li ta la/）はd～tの「変体」である。他には、j～qがある。A・Cが一致しない「変体」もある。例えば，唧丁咯當（/ji ding ge dang/）と齊听咯當(/qi ting ge dang/)はj・qの「変体」である。韻母の状況を見ると、CDの韻母が単韻母である時、ABの韻母はiの韻母である。CDの韻母が鼻韻母である時、ABの韻母も鼻韻母である。韻母の「変体」はa～eがある（例えば、兵丁梆當/ping ding bang dang/・兵丁崩登/ping ding beng deng/、乒零乓啷/ping ling pang lang/・乒零蓬楞/ping ling peng leng/など)。声調については、ABCD型のBの声調は一般的に軽声である。

馬慶株（1987）は一般言語学の視点で、主に現代北京語擬声語の音韻構成要素及びそれ

178「北京話的擬声詞」『語法研究和探索（一）』北京大学出版社

179『著名中年語言学家自選集・馬慶株巻』1998　安徽教育出版社 pp.229-261

180 このデータは冉啓斌（2012）(『当代語言学』14（4）p355）が孟琮（1983）の所収の擬声語を統計したものである。

と意味分野の関係、単純語擬声語と重畳型の擬声語の音韻構成の特徴を検討している。擬声語の音韻構成の特徴に関する馬慶株（1987）研究結果については次のようにまとめられる。

①単音節擬声語と非双声 2 音節擬声語を含む単純擬声語の声母は破裂音を主とし、声母全体の出現度数の 51%を占める一方、声母 l は 21%を占め、破擦音は 15%を占め、それ以外はあまり多くない。韻母の場合、2 音節単純擬声語の 43%は畳韻擬声語であり、2 音節畳韻単純擬声語の 57.7%が l を 2 番目の音節の声母とするものである。

②単音節擬声語の声母は破裂音を主とする。それらは b・p・d・t・g・k などである。n・l のものは非常にめずらしく、f の擬声語はない。破裂音・側面音・破擦音の使用割合はそれぞれ 51%、21%、15%である。単音節擬声語の単韻母の中では、舌面高母音が 42%、舌面半高母音が 19%、舌面低母音が 33%、舌尖母音が 6%を占める。-i[i]韻尾の擬声語はなく、ü のものは少ない。35%の単音節擬声語は-ng のものである。-n は重言のみに用いられる。

③大部分の AB 型は非双声 2 音節擬声語である。A の声母は k・g・p・b・h・d・t の順に多い。他に、非双声 2 音節擬声語の全般から見ると、第 1 音節が破裂音であるものは 78%であり、破擦音と摩擦音はそれぞれ 10%であり、鼻音と零声母は合わせて 2%である。韻母の場合、AB 型の 43%が畳韻の擬声語であり、2 音節畳韻単純擬声語の 57.7%が l を 2 番目の音節の声母とするものである。

④重畳型は簡単重畳型（AA 型と ABAB 型など）と変音重畳型（双声型、畳韻型、近似双声型、近似畳韻型）に分かれる。

孟琮（1983）と馬慶株（1987）はいずれも北京語擬声語を詳細に研究している。それらは北京語の形態構造、音韻構成、意味特徴の内のある一面を重点にする傾向が見られるため、全般的かつ繊細な考察を行う必要がある。

それらの研究を基礎に、近年学位論文を中心に多くの研究が発表されている。例えば、姚潔清（2004）の「漢日擬声詞比較研究」、李鏡兒（2007）の『現代漢語擬声詞研究』、呉校華（2008）の「現代漢語擬声詞研究」、余哲（2010）の「現代漢語擬声詞新探」[181]などである。

姚潔清（2004）は孟琮（1983）に収載されている北京語擬声語の語音、語義、文法の特徴を検討しているが、音韻構成の考察は単音節擬声語の音韻の組み合わせの状況に限っている。

李鏡兒（2007）は姚潔清（2004）とは異なり、『現代漢語詞典』（第 5 版）を主としながら、現代・当代[182]の文学作品と他の辞書を調査して得た 845 語の擬声語を考察するもので

[181] 李鏡兒（2007）は博士論文を基にする著作である。それ以外は修士論文である。
[182] 中国文学の現代は 1919 年の「五四運動」から 1949 年の間を指す。中国文学の当代は 1949 年以降を

ある。李鏡兒（2007）によると、約 400 個の中国語の音節のうち、擬声語の音節として用いられるのは 128 個である。中国語の単音節擬声語は声母が破裂音であるものがもっとも多く、次に摩擦音、破擦音、鼻音、l 声母の順番である。常用される声母は「b・c・d・k・t・p・s・z・zh」であり、あまり多くないのは「m・g・q」で、「f・r」の擬声語はない。韻母の場合、単音節擬声語の韻母は単韻母を主し、韻尾が鼻音である中国語擬声語は少ない。鼻音韻尾字を持つ擬声語の中で、-ng 韻尾字の擬声語は-n 韻尾字の擬声語より多い。また、2 音節擬声語の重言[183]・双声・畳韻の現象と l 声母の活発な特徴を指摘した。李鏡兒（2007）は現代中国語擬声語の全体の特徴を多様な視点から考察しているものであり、より全面的な研究であるといえる。

呉校華（2008）は『現代漢語詞典』（第 5 版）における擬声語（227 語）を単音節・2 音節・多音節[184]のものに分類して、それらの声・韻・調を考察の方向としているものである。比較して見ると、呉校華（2008）は単音節擬声語の分析方法と考察の結果において、李鏡兒（2007）と大体一致しているが、2 音節・多音節擬声語の研究で更に詳細に声母・韻母・声調の状況を検討している。呉校華（2008）は、AB 型擬声語は「破裂音+破裂音」の組み合わせが最も多く、畳韻の擬声語が非畳韻より多いと指摘している。それに、2 音節擬声語の AA 型と多音節擬声語（10 語）の使用状況を検討している。余哲（2010）も『現代漢語詞典』（第 5 版）の擬声語を考察の対象として、次の結果を得た。現代中国語の擬声語の声母は破裂音を主とし、摩擦音と破擦音はやや多く、鼻音が少なく、辺音 l の現象が顕著である。韻母は単韻母と鼻韻母を主とし、-n 韻尾より-ng 韻尾のほうが頻繁に用いられている。声調の使用は非常に明らかな傾向が見られ、第 1 声（陰平）は 77.6%を占めているのに対して、第 3 声（上声）と第 4 声（去声）はそれぞれ 2.1%と 7.0%である。

上に出した余哲（2010）の考察結果に先たち、王武英（1988）は次のように述べている。

①擬音語が母音でおわる、つまり開音節の場合は単母音—a o e i u で終わるのが圧倒的多数を占め、双母音の場合はごく少数である。

②擬音語が子音で終わる、つまり閉音節の場合は-ng で終わるのが圧倒的多数をしめ-n で終わるのはごく少数である。[185]

この考察も中国語擬声語の韻母の一般的な状況を指摘している。王武英（1988）の指摘は中国語擬声語の先行研究に出ている結論と一致して、本研究の参照できるものである。

古代中国語擬声語の音韻研究は管見によれば、わずかである。李雨颯（2017）の「古代

指す。

[183] 重言の定義については本論文の 5.2.2 で紹介している。

[184] これは 2 音節以上のものを指す。

[185]「中日両国におけるオノマトペの比較研究ー主としてその語構成的な成分においてー」 大阪外国語大学修士論文 p42

漢語象声詞研究」[186]はその一例である。李雨颯（2017）によれば、古代中国語擬声語は来母（側面音/l/）の出現度数が比較的高いが、最も多いのは衝撃の音、たたく音などを表す破裂音で、次が摩擦音である。韻母には陽声韻（鼻音韻尾（-n・-m・-ŋ））、入声韻（韻尾［-p]，[-t]，[-k]の韻母）、陰声韻（非子音韻尾の韻母と韻尾のない韻母）が用いられる。声調は平声（54%）と入声（29%）を主とし、去声と上声がそれぞれ 8.2%と 7.9%である。

上に取り上げた先行研究は主に中国側のものである。それらの成果によって、中国語擬声語の声・韻・調の構成状況が概観できる。中国以外の研究については、ここで詳細に取り上げることはしないが、以下の文で、必要に応じて紹介あるいは引用することもある。

5.2.2　擬声語の重言・双声・畳韻の現象

中国語の音韻パターンの重言・畳韻・双声の現象は擬声語・擬態語の研究でも注目されている。簡単に言うと、重言とは、同じ字を重ねた熟語であり（例えば、鏑鏑、咩咩など）、双声は語頭子音が同じである二音節の語であり（例えば、叮噹、砰磅など）、畳韻は韻母類を同じくする音節を二つ組み合わせて作ったものである（例えば、吧嗒、丁令など）[187]。

重言・双声・畳韻の擬声語は中国語擬声語において多くあり、擬声語研究において触れられている。例えば、馬慶株（1987）は、畳韻の擬声語は 2 音節擬声語の 43%を占めると指摘する。余哲（2010）の研究では、『現代漢語詞典』の擬声語の中に、重言、双声、畳韻のものは総計して 135 語[188]あり、それぞれ 63 語（46.7%）、40 語（29.6%）、32 語（23.7%）がある。そのうち、重畳、双声、畳韻の現象を含める 4 音節擬声語は 9 語（例えば、AABB 型の叽叽嘎嘎、叽叽喳喳、哜哜嘈嘈、嘁嘁喳喳と ABCD 型の丁零当啷、叽里咕噜、叽里呱啦、噼里啪啦、稀里哗啦など）ある。畳韻擬声語の出現頻度では、余哲（2010）は呉校華（2008）と接近している。以上から見て、重言・双声・畳韻の考察は擬声語全体の音韻特徴を解明することにとって重要である。

中国語関係書の擬声語において、重言・双声・畳韻の擬声語がどのような分布状況を持つのか、またそれらの声母と韻母の状況がどのようであるか。中国語関係書の擬声語の音韻状況を解明するために、これらの問題を検討する必要がある。

他に、本論文で用いられる用語の重言、AA 型、重畳型の使い方を説明する。これらは定義で非常に接近するが、本論文における使用の場合が違う。重言は音韻構成の要素の特徴を表す言い方であるのに対して、AA 型は音節形態或いは形態タイプの言い方であり、重畳型は主に意味特徴を区分する場合において用いられるものである。

5.2.3　中国語関係書の擬声語の音韻考察の提起

中国語擬声語の音韻研究は声母・韻母・声調の使用状況を巡り行われている。特に現代

---

186 湖北師範大学修士論文。他に、施向東（2004）の「『詩経』象声詞的音韻分析」（『南開語言学刊』（2）pp.130-137）のような研究もあるが、古代の擬声語は本論の対象外であるから、ここで詳しい紹介はしないことにする。

187 重言、双声、畳韻の定義に関する以上の日本語文を作成するにあたっては『日本国語大辞典』（第二版）を参考にした。

188 この語数は『現代漢語詞典』の擬声語の半数以上（約 59.5%）を占める。

語について、成果が豊富である。しかし、近代・古代中国語擬声語の研究はあまり多くないため、関連の考察を進める必要がある。また、先行研究においては、中国語関係書における擬声語については触れられていない。中国語擬声語の音韻考察を通じて、近代日本の中国語教育における中国語の習得状況と、近代日本人学者の中国語に対する認識を明白にすることが期待される。

5.3　中国語関係書における擬声語の音韻状況

5.3.1　中国語関係書における発音表記方法

近代日本の中国語関係書における擬声語の音韻構成を考察するためには、まず擬声語の発音を確定しなければならない。中国語関係書の中において、多様な発音表記の方法と符号が使われているため、発音の確定のために、発音表記の方法と発音表記の符号という 2 つの面の使用状況を検討する必要がある。

（1）発音表記の方法

発音表記を確定するために、本論は下の 3 つの事項に注意する。

①擬声語の発音が不明である場合がある。多音字・異読字・異体字の使用のため、擬声語の発音状況を判断しにくい場合、辞書や教科書を参考として、その字の常用音を採用する。

②資料中に発音表記に関する内容が何もない場合、当時の代表的な辞書や教科書を参考としてローマ字の表記を付ける。

③中国語関係書が載せている発音表記の方法には何種類かがある。近代日本の中国語教育は中国の清末と民国の時期にまたがり、その頃、中国の言語文字改革に伴って、様々な表記方法が作られ、広く採用されていた。この間の事情は日本の中国語教育においても投影されている。最も一般的に使われたものに、イギリスの表音符号であるウェード式ローマ字表記、官話合声字母[189]と注音符号[190]、日本の表音符号である（カタ）カナ表記などがある[191]。中国語関係書において、「西洋のアルファベット」「日本の假名文字」「支那の注音符號などがある」という言い方がある[192]。このほか、「国語羅馬

---

189 王照の官話合声字母は中国清末期の 1901 年における漢語表音文字の漢字筆画式字母方案である。合声字母は日本語の仮名文字を参考にし、漢字の偏傍を利用して文字に仕立てたもので、中国の伝統的な反切法を参考にしている。それは音母(50 個）と喉音（12 個)の 2 種類に大別される。ある字音を表記する方法は、ある音母（字母）と喉音を合わせ、4 つの声調を加えることである。当時官話合声字母は広く受け入れられて使われた。

190 これは中国語の表音の字母で、1913 年 3 月に民国教育部の読音統一会で統一され、1918 年 11 月に公布された。その後、幾度か修訂された。「注音符号」という名前は 1930 年から使われ始めた。それ以前は、注音字母と呼ばれたこともある。実際、この表記方法を用いる近代日本の中国語関係書はあまり多くないとはいえ、それは当時広く受け入れた方法であるとともに、擬声語を収録する中国語関係書の『北京語の味』に採用されているため、本論の 4.3.2 でそれを取り上げた。

191 これらの方法の他、国語ローマ字、ラテン字母式、速記符号式の注音方案などが存在していたが、あまり普及していなかった（魚返善雄（1942）を参考）ため、本論ではそれらを取り上げない。

192 魚返善雄（1942）『支那語の發音と記號』三省堂

字」などの表音手段も作られたが、広く行われたことはない。次の表（表 16）に、各資料で採用されている表記方法を示す。

表 16　中国語関係書が採用している表記方法の状況

記号の説明：●ウェード式ローマ字、◎官話合声字母、■注音符号、★（カタ）カナ

書　　名	著　　者	出版年	出　版　社	表記方法
亞細亞言語集支那官話部（再版）	廣部精	1892 年	青山堂書房	★
萬物聲音[193]	瀬上恕治	1906 年	徳興堂印字局	●◎★
四民実用清語集附諺語用法	中西次郎	1910 年	大阪屋號書店	★
標準支那語教本初級篇	鈴木擇郎編	1934 年	東亜同文書院支那研究部	●■★
倉石中等支那語	倉石武四郎	1939 年	弘文堂書房	■
北京語の味	大山聖華	1941 年	中華法令編印館	●■★

一方、発音表記が付いていない資料も多くある。例えば、『鬧理鬧』（写本・不詳）『養兒子』（写本・不詳）、『北京官話伊蘇普喩言』[194]、『自邇集平仄編四聲聯珠』[195]などである。

（2）発音表記の記号

子音や母音の表記の他、さまざまな符号が擬声語の発音描写にかかわっている。例えば、声調表記の符号や特殊な発音の標識符号などがそれである。

①声調表記の符号

筆者の調査によると、中国語関係書において用いられた声調の標識符号は主に 2 種類ある。例を挙げながら説明すると、次のような状況がある。

第一種の声調表示法は、文字の四角に付けられる圏点（○）であり、最も一般的に用いられるものである。『初等支那語会話』はこれを「点声法」と称している。この種の声調表記法を採用する文献は、『自邇集平仄篇四声聯珠』、『日漢英語言合璧』、『華語跬歩』、『萬物聲音』、『支那語学捷径』、『北京語の味』、『急就篇を基礎とせる支那語獨習』など多くがある。

第二種の声調表示法は、数字の 1・2・3・4 を用いる。その 4 つの数字は四声の標記として、発音表記の記号或いは漢字の右上につけている。この声調表示法も非常に普遍的である。この方法は『新校語言自邇集散語ノ部』、『日清字音鑑』、『羅馬字急就篇』、『支那語学捷径』などに見られる。

上に述べた圏点と数字の声調表示法の特徴を示すために、『支那語学捷径』における図を取り出して図 1[196]に示した。

193 これは『北京官話萬物聲音附感投詞及發音須知』の略称である。

194 中田敬義・1880 年・渡部温出版。北京官話の一般学習書で、日本語版『伊蘇普喩言』の翻訳書である。多くの寓話・物語の文章からなる。

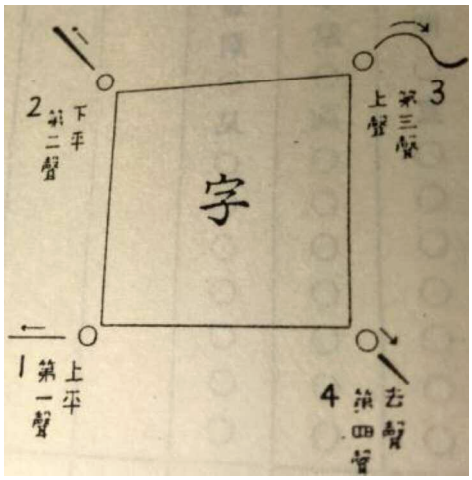
195 福島安正・1886 年 ・陸軍文庫

196『支那語学捷径』（p45）（『中国語学資料叢刊 燕語社會風俗官話翻譯古典小説・精選課本篇』p532）による。

②発音指導の符号

まず、中国語関係書において、「●・○」は重音・有気・無気を現す場合がある。例えば、『支那語独習書』では、「無氣音は「○」、有氣音は「●」（黒點）を附ける。但し書寫の際は有氣音は之を「◎」（二重圏）、又は、「∅」とする方が便利である」[197]という記述がある。つまり、「●」と「○」はそれぞれ有気音と無気音の符号である。

図１　『支那語学捷径』における声調表示



また、中国語関係書においては、他にも多様な有気音の符号が用いられる。その内、「‘」と「h」は一般的にローマ字の発音表記の傍につけ最も頻繁に見られる。この 2 つの他、一部の中国語関係書においては、「○」も有気音の符号として用いられている。例えば、『萬物聲音』の中で、「○」は中国語の発音を表記する日本語カタカナとローマ字に付いて、有気音を表す。この方法は『支那語学捷径』、『支那語難語句例解』などにも見られる。

他に、主に日本語カタカナ表記に付けられ、中国語発音の特徴を表明するための符号もある。例えば、「˘」は「チ・シ・ジ」の上に付けて、捲り舌音を表示する。「△」も捲り舌音の符号として『急就篇を基礎とせる支那語獨習』で使われる。それらの他、「~・▲・⊙」などの符号がそれぞれ喉音、撮口呼、舌音などの発音特徴を表示するのに用いられる。

近代日本の中国語関係書において、このような発音指導の符号は他に多くあり、それらの使い方と規則が統一されていないため、複雑である。それらの表記方法の特徴と表記符号の意味を明らかにすることは、中国語関係書における擬声語の発音を確定する上で重要である。

5.3.2　中国語関係書における擬声語の音節表

（1）発音表記法の統一と音韻表記の対照表

上述踏まえ、本論では次の３点を基準に中国語関係書における擬声語の発音表記を統一し、発音を確定する。

①擬声語の発音表記が付いている場合、発音と声調をそのまま利用する。

②擬声語の発音表記が付いていない場合、当時の代表的な中国語教科書や辞書を参考として、その字の常用音を調べて使用する。同時に、擬声語の声調を明確にした。参考としたものは Thomas Francis Wade（1859）『尋津録』[198]、『語言自邇集』（「字音表」・

[197]『支那語独習書』では、重音は有気音であり、軽音は無気音であると述べている。『支那語独習書』における「重音・軽音」の定義と異なり、『官話指南・初版』（呉啓太・鄭永邦編 1882 年 楊竜太郎出版）の説明によれば、軽重音とは「軽音即ち窄音　重音即寛音」であり、つまり、軽音は韻尾が/n/、重音は韻尾が/ng/のものである。

[198] Thomas Francis Wade（1859）ホンコン発行

「音節表」）[199]、『日清字音鑑』[200]、『井上支那語辞典』[201]、『支那声音字彙』[202]などである。

③表記方法を統一する。近代日本の中国語教育において最も広く用いられた表記方法はウェード式ローマ字である。そのため、①と②の場合、中国語関係書における擬声語の発音表記はウェード式表記方法に統一する。その上で、現代中国語擬声語の対照研究をわかりやすくするために、本論文はウェード式表記に対応する中国語ピンイン表記を付ける。また、中国語関係書において出ている表記方法の注音符号、官話合声字母も対応する中国語ピンイン表記に転写する。官話合声字母の表記法は『萬物聲音』のみに見られる。そのため、官話合声字母の発音表記を示すために、『萬物聲音』における「官話合聲字母表」を出して、図 2[203]に示す。『萬物聲音』及びそのほかの代表的な中国語関係書[204]、『周有光語文論集』などを参考としつつ、注音符号をウェード式、ピンイン、国際音声を対応させ、「注音符号、ウェード式、ピンインの対照表」（表 17）を作成する。

表 17　注音符号、ウェード式、ピンインの対照表[205]

	音韻		注音符号	ウェード式	ピンイン	国際音声字母[　]
声母	両唇音	破裂音	ㄅ	p	b	p
			ㄆ	p‘	p	p‘
		鼻音	ㄇ	m	m	m
	唇歯音	摩擦音	ㄈ	f	f	f
			万	v		
	舌尖音(歯茎音)	破裂音	ㄉ	t	d	t
			ㄊ	t‘	t	t‘
		鼻音	ㄋ	n	n	n
		側面音	ㄌ	l	l	l
	舌根音(軟口蓋)音	破裂音	ㄍ	k	g	k
			ㄎ	k‘	k	k‘
		摩擦音	ㄏ	h	h	x
	舌面前音	破擦音	ㄐ	ch	j	tɕ

199 Thomas Francis Wade・Walter Cain Hillier（1886）『語言自邇集』(再版) 総税務司統計局発行

200 伊澤修二（1895）　並木善道

201 井上翠（1928）文求堂書店

202 岡本正文編（1929）文求堂書店

203『北京官話萬物聲音附感投詞及發音須知』p11 による。

204 代表的な中国語関係書には、『注音符號詳解』と『支那語の發音と記號』のような発音表記法に関するものがあり、『急就篇發音（改訂版）』(1935)、『支那語四週間』(1937)、『標準支那語教本初級篇』(1937)、『標準支那語會話』(1939)、『新訂増補支那語捷徑發音篇』(1939)、『華語基礎讀本』(1943)、『日常支那語圖解』(1943) などのように、ローマ字・注音符号・カタカナなどの発音対照表や、発音表、発音解説文などがついている教科書もある。

205 黄伯榮・廖序東（2007）の『現代漢語』（上冊 p28）を参考とする。実際、同様の対照表は多くの中国語関係書においても見られる。例えば、『萬物聲音』『急就篇發音篇』『標準支那語教本初級篇』『新訂増補支那語捷径發音篇』『日常支那語図解』『華語基礎讀本』などである。

	（歯茎硬口蓋音）		ㄑ	ch‘	q	tɕ‘
		摩擦音	ㄒ	hs	x	ɕ
	そり舌音	破擦音	ㄓ	ch(ih)	zh	tʂ
			ㄔ	ch‘(ih)	ch	tʂ‘
		摩擦音	ㄕ	sh(ih)	sh	ʂ
			ㄖ	j(ih)	r	ʐ
	歯音（舌葉音）	破擦音	ㄗ	ts/tz	z	ʦ
			ㄘ	ts‘/tz‘	c	ʦ‘
		摩擦音	ㄙ	s/ss	s	s
韻母	単韻母		ㄧ	(y)i	(y)i	i
			ㄨ	(w)u	(w)u	u
			ㄩ	u	(y)ü	y
			ㄚ	a	a	ɑ
			ㄛ	o	o	o
			ㄜ	ê	e	ə
			ㄝ	e（h）	e	e/ɛ
	複（合）韻母[206]		ㄞ	ai	ai	ai
			ㄟ	ei(êi)	ei	ei
			ㄠ	ao	ao	aʊ
			ㄡ	ou	ou	ou
			ㄢ	an	an	an
			ㄣ	ên	en	ən
			ㄤ	ang	ang	aŋ
			ㄥ	êng	eng	əŋ
			ㄦ	erh	er	ər/ɚ

[206] 中国語関係書で、韻母を単韻母、複韻母、附聲韻母、児化韻母、結合韻母に分けることがある。複韻母は ai、ei(êi)、ao、ou など、附聲韻母は an、ên、ang、êng など、児化韻母は êrh を指す。ia、iao、ui、ung、uang、iung などは結合韻母の例である。『標準支那語教本初級篇』にも結合韻母という項目を載せている。

中国語の多様な発音表記方法は言語記録の一面として、中国語関係書において目立った現象であるといえる。例えば、『萬物聲音』はカタカナ、官話合声字母、ローマ字の 3 種の発音表記を用いるがゆえに、六角恒廣（1994）はこの書を「きわめて稀な珍本」[207]であると評している。ゆえに、中国語関係書の発音表記方法の研究は近代日本の中国語関係書の言語研究に対して有意義であろう。

図 2　『萬物聲音』における官話合聲字母表

（2）中国語関係書における擬声語の音節表

中国語関係書における擬声語の音韻の状況をはっきりと示すために、中国語関係書における擬声語の音節表の付録「(6) 中国語関係書における擬声語の音節表」を作成した。この表は、資料中に出現した 390 語の擬声語をその音型ごとに分類した上、それぞれに発音表記をつけ、アルファベット順に並べたものである。

5.4　中国語関係書における擬声語擬声語に用いられた声母・韻母・声調の特徴

本節では中国語関係書における擬声語の音韻構成の要素である声母・韻母・声調の使用状況を検討して、擬声語の全体の音韻特徴を説明する。次に、擬声語の音節数を単音節（48 語）、2 音節（255 語[208]）と多音節（99 語）にまとめ、それらの各構成要素の特徴を具体的に検討する。

5.4.1　単音節擬声語の声・韻・調の状況

（1）声母の状況

単音節擬声語の声母の出現度数を表 18 に示す。

表 18　単音節擬声語の声母の出現度数

声母	破裂音						破擦音						摩擦音						鼻音		側面音	/
	無気音			有気音			無気音			有気音												
	b	d	g	p	t	k	z	zh	j	c	ch	q	f	s	sh	r	x	h	m	n	l	w･y[209]
語数	2	2	4	6	1	0	5	2	0	1	3	0	0	4	3	3	0	6	1	0	0	5
比率	4.2	4.2	8.3	12.5	2.1	/	10.4	4.2	/	2.1	6.3	/	/	8.3	6.3	6.3	/	12.5	2.1	/	/	10.4

[207]『中国語書誌』不二出版 p112
[208] この中で、ABAB 型を AB 型に入れている。
[209] 零声母の状況を含んでいる。

*1																						
総計	15・31.3%*2						11・23%						16・33.3%						1・2.1%		0	5・10.4%

注：＊1 はある声母の出現度数が単音節擬声語の声母の総計に占める比率（%）を指す。

＊2 はある種類の声母及びその比率の総数を指す。

表 18 によると、単音節擬声語の声母の状況は次のとおりである。

①声母の種類から見ると、摩擦音と破裂音が同じくらい頻繁に使われる。破擦音の擬声語も多い。零声母のものが少なく、鼻音と側面音がほとんどない。

②声母の出現頻度が高いのは、破裂音の p・g、破擦音の z、摩擦音の h・ s がある。それに対して、単音節擬声語に見られない声母は k、j、q、f、x、鼻音 n、側面音 l などである。

③語数が最も多いのは破裂音では p、破擦音では z、摩擦音では h である。一方、語数が１つだけであるのは破裂音では t、破擦音では c、鼻音では m である。単音節擬声語全体の分布状況から見ると、各声母の出現度数に大きな差は見られない。

まとめて見ると、単音節擬声語の場合、破裂音では p・g、破擦音では z、摩擦音では h の特定の声母に集中する傾向が顕著である。鼻音は 1 つあるのみである。出現頻度が高い声母とほとんど見られない声母があるという状況は現実の中国語擬声語の状況と似ている。

（2）韻母の状況

次に、韻母の状況を考察するために、擬声語のパターンを、零声母型とそれ以外の声韻型に分けて、韻母パターンを単韻母、複合韻母、鼻韻母にわける。同時に、児化韻母の擬声語の状況を統計する。

本節では、上記の区分方法によって中国語関係書の単音節擬声語の韻母状況を統計して表 19 に示す。中国語関係書の単音節擬声語は多くなく、それらの韻母の種類も少ない。そのため、単音節擬声語の韻母の状況を明確に示すために、表 19 ではすべての韻母を掲げることがせず、単音節擬声語に実際に出現した韻母だけを掲げる。

表 19　単音節擬声語の韻母状況

	語　　数				
韻母パターン／音韻パターン	単韻母	複合韻母	鼻韻母	児化韻母	単音節擬声語全体に占める割合（%）
零声母型	a・o・u・1[210]	ao・1	ang・1	/	10.4
声韻型	a・10、i・u・4、e・1[211]	ai・1、ou・2、ua・4、ui・1、	ang・ing・ong・1、eng・5、	e・i・u・2、ua・ang・1	79.6
	計：48				

[210]「a・o・u・1」は韻母 a、o、u の韻母型単音節擬声語がそれぞれ 1 語あることを示す。

[211] これは注音符号で表記された無韻母の擬声語「ㄙ…（s(ssu)）」を含む。

この統計によると、単韻母 a（11）、u（7）、i（6）が最も頻繁に見られ、使用度が顕著である。複合韻母は 5 種類（韻尾ゼロの ua、韻尾-u の ao、ou、韻尾-i の ai、ui）あるが、ua の出現度数は複合韻母の半数を占め、最も多い。鼻韻母の単音節擬声語は 10 語ある。それらはすべて-ng 韻尾字のものである。また、児化韻母も声韻型においてのみ出現する。全般から言うと、単音節擬声語は韻母の種類が多様であるが、単韻母と鼻韻母（-ng）を主としている傾向が明らかである。

（3）声調の状況[212]

単音節擬声語がいかなる声調を取るかについて、中国語関係書に現れる 35 語を対象に統計すると、第 1 声が 28、第 2 声は 3、第 3 声は 0、第 4 声は 4 となって、第 1 声のものが圧倒的に多い（80%）。なおこの統計には、『北京語の味』の単音節擬声語 13 語は含まれていない。『北京語の味』の注音符号で表記された擬声語には声調が表記されていないからである。

5.4.2　2 音節擬声語の声・韻・調

（1）声母の状況

2 音節擬声語は AA 型と AB 型の 2 種類がある。2.2.2 で述べたように、AAAA 型、ABAB 型はそれぞれ AA 型と AB 型の重畳型と見なされる。そのため、本節では AAAA 型を AA 型に、ABAB 型を AB 型に入れて、擬声語の音韻構成を検討する。

次に、「（6）中国語関係書における擬声語の音節表」に基づいて、2 音節擬声語の AA 型と AB 型の音韻状況を統計する。本節では、AA 型の声母の状況を表 20 の「AA 型擬声語の声母の統計」に掲げて、AB 型の声母の組み合わせの状況を表 21 の「AB 型擬声語の声母の組み合わせの統計」に掲げる。

212 中国語関係書における漢字で表記した擬声語の声調について、音標が引用の原文についている場合、本論文はそのまま利用することにする。原文に音標がついていない場合、中国語関係書の参考書や辞書など（例えば、『語言自邇集』（「字音表」・「音節表」）、『日清字音鑑』、『井上支那语辞典』 、『支那声音字彙』などがある）を調べて、その発音及び声調を明確にする。また、『北京語の味』の擬声語は注音符号で表記されている。その場合、擬声語の声調を判定できないため、本論ではそれらの擬声語の声調の状況を検討しない。

表 20　AA 型擬声語の声母の統計

	破裂音						破擦音						摩擦音						鼻音		側面音	/	
声母	無気音			有気音			無気音			有気音													
	b	d	g	p	t	k	z	zh	j	c	ch	q	f	s	sh	r	x	h	m	n	l	w	y
語数	5	11	15	4	5	1	9	3	7	2	4	0	0	8	6	6	2	10	6	5	1	11	9
	41						25						32						11		1	20	

表 21　AB 型擬声語の声母の組み合わせの統計

声母				第 2 音節																					
				破裂音						破擦音						摩擦音						鼻音		側面音	/
				無気音			有気音			無気音			有気音												
				b	d	g	p	t	k	z	zh	j	c	ch	q	f	s	sh	r	x	h	m	n	l	w・y[213]
第1音節	破裂音	無気音	b		6			1		1		1													
			d		7																			2	
			g	1	23	2		2	1		2			1										8	
		有気音	p		3		1	5						3										4	
			t					1																	
			k		1			1			1			3										1	
	破擦音	無気音	z							1							1								
			zh								1												1		
			j									1													
		有	c																					1	

213 零声母の状況を含んでいる。

	気音	ch																						
		q																						
	摩擦音	f		1			1																	
		s																					4	
		sh																						
		r																						
		x																						
		h								1										1			9	1
	鼻音	m																						1
		n																						1
	側面音	l																						
	/	w/y					2						1							1				4

注：表 21 の表記の規則は次のとおりとする。

①横軸には第 1 音節の声母の統計状況を配し、縦軸には第 2 音節の声母の統計状況を配した。

②各欄の数字は当該の声母の組み合わせを取る擬声語の語数である。

① AA 型擬声語の声母の状況

表 20 に示されたように、AA 型擬声語の声母は、破裂音が最も多く、摩擦音が二番目に多い。破擦音と零声母も多くある。一方で、側面音のものは極めて少ない。側面音以外の声母の状況から言うと、AA 型の声母分布はあまり大きな差がない。

声母の組み合わせを見ると、破裂音の/g-g-/・/d-d-/・/b-b-/・/t-t-/、破擦音の/z-z-/・/j-j-/、摩擦音の/h-h-/・/s-s-/・/sh-sh-/・/z-z-/、鼻音の/m-m-・n-n-/、零声母の/w-w-/は比較的に頻繁に使われる。k、c、x、l などの AA 型擬声語はわずかである。q と f のものはない。

②AB 型擬声語の声母の状況

表 21 における AB 型（ABAB 型も含む）の状況を表 22 にまとめて示す。

表 22　AB 型の擬声語の声母の状況

声母の種類		AB 型擬声語の A と B の声母の組み合わせ/双声擬声語の語数					
		第 2 音節（B）					
		破裂音	破擦音	摩擦音	鼻音	側面音	他[214]
第 1 音節（A）	破裂音	55/11[215]	13	0	0	15	0
	破擦音	0	4/2	1	1	1	0
	摩擦音	2	1	1/1	0	13	4
	鼻音	0	0	0	0	0	2
	側面音	0	0	0	0	0	0
	他	2	2	1	0	0	5/2

上の表を見ると、AB 型擬声語の声母の組み合わせ種類は多くない。AB 型擬声語の声母の組み合わせは破裂音+破裂音に集中していることがわかる。この組み合わせは AB 型擬声語の声母の組み合わせの約半数になる。破裂音+破擦音と破裂音+側面音の組み合わせも比較的多い。以上から、破裂音が最も多く用いられていることがわかる。他の組み合わせは主に破擦音同士、摩擦音+側面音である。

AA 型の場合と較べると、AB 型は A・B いずれにおいても鼻音がまれである。一方、側面音は多く現れるが、そのすべてが第 2 音節（B）においてある。それらの側面音はすべて第二音節においてである。また、AB 型擬声語における双声の組み合わせは 13%を占めるが、大部分は/d-d-/のものである。AB 型全般に見られる声母の組み合わせの状況は AA 型より更に著しい集中性をもっている。

AA 型と AB 型の 2 音節擬声語の声母は破裂音を主とし、双声のものが多い。

（2）韻母の状況

[214] /w,y/と零声母の状況を含んでいる。

[215] /を挟んだ左側は非双声語、右側は双声語の語数である。/を挟んでおらず、数字のみがあるのは非双声 AB 型擬声語の声母の組み合わせ数を指す。

2 音節擬声語の韻母の状況を統計して、韻母の組み合わせを表 23 に掲げる。AA 型擬声語の第 1 音節と第 2 音節は同じ音節であるため、表 23 では、その唯一の韻母を表記する。

表 19 の表示方法と同様に、表 23 ではすべての韻母を掲げることがせず、2 音節擬声語に実際に出現した韻母だけを全部掲げて計算する。

表 23　2 音節（AA 型と AB 型）擬声語の韻母の状況

			語数						
型別	韻母パターン／音韻パターン		単韻母	複合韻母	鼻韻母	児化韻母			語彙総数に占める比率（%）
						単韻母児化韻尾	複合韻母児化韻尾	鼻韻母児化韻尾	
AA	零声母型		a・4、u・o・1[216]	ai・2、ao・ou・1	ang・eng・3、（y）ing・1	u・1	ao・ou・1	0	15.2
	声韻型		a・16、e・2、i・8、u・8、ü・1	ei・ia・iu・uo・1、iao・ie・4、ou・2、ua・8	an・1、en・2、ang・9、eng・5、ong・4	a・2、e・10、i・8、u・3	ei・uo・ou・2	ang・en・2、eng・1	84.8
	計：132								/
AB	AB の第 2 音節（B）								
	第 1 音節（A）	単韻母	a+a・21、a+i・5、e+a・3、i+a・4、e+i・i+i・1、u+a・3、u+i・2、u+u・9	i+ie・u+ou・i+ao・i+iu・1	a+an・a+ang・a+eng・a+ong・u+ang・1、e+eng・2、u+eng・4、u+ong・8	a+i・1	i+ao・u+ie・u+ian・1	a+eng・o+ang・u+ang・1	/
		複合韻母	ai+a・ia+i・ua+e・uo+a・1、ua+a・11	iu+iu・ou+ao・1	ua+eng・2	0	0	ua+eng・1	
		鼻韻母	ang+i・1、eng+a・4	0	ang+ang・3、ing+ang・5、eng+ang・ing+ing・ing+ong・ong+ang・1	0	0	0	

[216] 例えば、「a・4、u・o・1」は韻母が a である零声母型の AA 型擬声語が 4 つあり、韻母が u、o である零声母型の AA 型擬声語がそれぞれ 1 語あることを示す。

		児化韻母	単韻母児化韻尾	e+a・1	0	0	e+e・1、i+a・2	0	0	
			複合韻母児化韻尾	0	0	0	0	0	0	
			鼻韻母児化韻尾	en+a・1	0	0	0	0	ing+ang・1	
	計：122									

①AA 型擬声語の韻母の状況

声韻型の総数は 118 語である。そのうち、複合韻母児化韻尾と鼻韻母児化韻尾のものが比較的に少ないのを除き、それ以外は一定数がある。零声母型では単韻母（6 語）と鼻韻母（7 語）が比較的に多い。鼻韻母児化韻尾の零声母型の擬声語はない。

単韻母が最も多く、全体の 49.2%（児化韻母のものを含むと 65 語ある）を占める。そのうち、a が 22 語あり、一番多い。他に、i（17 語）、u（13 語）、e（12 語）も常用されている。

複合韻母は 34 語ある。ao、ou、ie 、iu 、ua などが常用された種類である。鼻韻母は 33 語ある。-n 韻尾のものは 5 つしかない。また、児化韻母の擬声語は、単韻母、複合韻母、鼻韻母のものがそれぞれ 23 語、10 語、5 語である。このように、単韻母が最も常用の韻母であることがわかる。

②AB 型擬声語の韻母の状況

AA 型と同様、AB 型も単韻母の組み合わせが最も多い。使用比率から見ると、AB 型の単韻母擬声語（53 語）は 43.4%であり、AA 型の 49.2%より低い。

単韻母かつ AB 型が 40.2%（49 語）、複合韻母かつ AB 型が 1.6%（2 語）、鼻韻母かつ AB 型が 9.8%（12 語）であって、単韻母が圧倒的に多い。

AB 型の畳韻は少ない。畳韻の状況を具体的に言うと、単韻母は a（21 語）、u（9 語）、i（1 語）e（1 語）の 4 つがあり、複合韻母は iu の 1 語だけあり、鼻韻母の ing と ang の 1 語ずつある。AB 型の韻母の主な種類は以上である。

異なる韻母パターンの韻母からなる結合型（例えば、単韻母+複合韻母（4 語）、単韻母+鼻韻母（19 語）、鼻韻母+単韻母（5 語）などのものである）は 54 語あり、44.3%を占める。単韻母を含むものが比較的に多い。

このように、AA 型擬声語と AB 型擬声語の韻母はともに単韻母を主とし、鼻韻母も多くあるが、複合韻母が少ないことが窺える。

（3）声調の状況

AA 型も AB 型も、1+1（第 1 声+第 1 声）の声調の組み合わせがともに約 80%を占める。1+2（9 語）、4+4（8 語）、2+2（5 語）も数語ある。稀に見られる声調の組み合わせもある。

例えば、「颯颯（2+3）」(『支那語四週間』)、「喉喉（4+4）」と「嘗兒嘗兒（4+4）」(『萬物聲音』)、「嘩愕（1+0）」(『華語跬步』)、「倏喇々々（4+1）」(『萬物聲音』）などの他、1+3、1+4 などもある。稀に見られる声調の組み合わせは規範意識と使用習慣から議論する意義があるであろう。第 1 音節が第 3 声のものはない[217]。全般的に見ると、2 音節擬声語の声調の組み合わせは単音節擬声語の状況と同様に、第 1 声を主とする。

（4）2 音節擬声語の声・韻・調の特徴

声母について、全体の状況を言うと、破裂音(特に双声語の声母として)が多く、鼻音と側面音が少ない。ただし、細部の状況は AA 型と AB 型では相違がある（AB 型の B が例外的に側面音が多い)。韻母について、単韻母は最も広く使われる。鼻韻母の擬声語は常用されるが、ほとんど-ng 韻尾字のものである。2 音節擬声語の声調については、第 1 声が最も頻繁に見られる。第 1 声同士の組み合わせ以外の声調組み合わせは種類が多様であるが、語数が少ない。

5.4.3　多音節擬声語の声・韻・調

本論文では付録の統計表の「(3) 中国語関係書における各型の擬声語」に示しているように、多音節擬声語を 3 音節の AAA 型・AAB 型・ABA 型・ABB 型と、4 音節の AAAB 型・AABB 型・ABCB 型・AABC 型・ABCD 型に分けて考察する。

（1）3 音節擬声語の声・韻・調の統計表

まず 3 音節擬声語の声母と韻母の状況を統計する。42 語の 3 音節擬声語には、4 種類の型別がある。そして、各型の語数はあまり多くない。そのため、本節では、3 音節擬声語の音韻状況はすべての声母と韻母を掲げることがせず、実際に出現した音韻を掲げて考察する。3 音節擬声語の音韻状況の統計方法については次のようである。AAA 型の 3 つの音節は同じであるため、その音韻状況は 1 つの音節の声母と韻母を掲げることによって表記できる。AAB 型、ABA 型、ABB 型も、同様に同じ音節があるため、それらの音韻の組み合わせは「A+B」として表記できる。各型の 3 音節擬声語の声母と韻母の組み合わせ状況は表 24 の「3 音節擬声語の音韻状況」に示すとおりである。

表 24　3 音節擬声語の音韻状況

型別	声母の状況	韻母の状況
AAA 型	p・j・l・1、t・zh・ch・h・m・w・2、g・3、d・4	en・ia・ie・ing・1、a・e・ong・eng・2、u・ang・3、i・4
AAB 型	f+y・g+d・g+j・w+w・1、d+d・g+g・2	u+iao・a+an・e+u・ua+i・i+a・ing+ang・1、eng+a・2
ABA 型	零+l・b+y・h+g・1	a・2、eng+a・1

[217] 辞書などを参考としても、発音を判定することが難しい場合がある。たとえば、「嘆咚」の「嘆」は本論文で第 1 声にするが、第 3 声の可能性もある。

ABB 型	零+h・d+l・h+d・p+t・1、h+l・3、g+l・2	a・ing・u・e+u・ua+a・u+e・uo+a・u+ong・u+a・1

注：表の中の数字は声母と韻母の組み合わせ数を表す。例えば、「p・j・l・1」は声母 p、j、l の AAA 型擬声語がともに 1 つであることを表す。「f+y・g+d・g+j・w+w・1」は f+y、g+d、g+j、w+w という声母の組み合わせの AAB 型擬声語がともに 1 つであることを表す。また、零声母は「零」で示す。

①3 音節擬声語の声母の状況

破裂音声母の組み合わせの 3 音節擬声語は 16 語あり、3 音節擬声語の語彙総数（42 語）の 38.1%を占める。その中で、AAA 型の/d-d-d- /（6 語）と/g-g-g-/（5 語）の組み合わせが最も多い。

異なる声母の組み合わせには、破裂音+側面音（3 語）・摩擦音+側面音（3 語）・摩擦音+破裂音（2 語）が多い。側面音の 3 音節擬声語が 8 語あり、零声母（/w,y/を含む）の擬声語が 7 語あるところから見ると、側面音及び零声母の出現状況が多いといえる。それに対して、破擦音の組み合わせは見られない。

第 1 音節が鼻音と側面音である 3 音節擬声語は僅かであり、破擦音の組み合わせはなく、摩擦音を含む 3 音節擬声語は 3 つある。それによって、AAA 型以外の 3 音節擬声語には破擦音と摩擦音のものが少ないことがわかる。

全般から見ると、3 音節擬声語の声母は破裂音と摩擦音を主とすることがわかる。また、AAA 型以外の 3 音節擬声語はあまり多くないため、音韻の使用特徴をはっきりと判定することが難しい。

②3 音節擬声語の韻母の状況

畳韻の 3 音節擬声語の状況から見ると、単韻母 a（5）・i （4）・u（4）と鼻韻母 ang（3）のものは比較的多いことがわかる。

韻母の組み合わせ全体では、鼻韻母のある 3 音節擬声語が 15 語あり[218]、3 音節擬声語の 35.7%を占める。a・i ・u を含む韻母の組み合わせの擬声語はそれぞれ 13 語、6 語、10 語であり、他の韻母の場合より頻繁に見られる。

このように、3 音節擬声語の大部分は単韻母を持っていることがわかる。特に、AAA 型は大部分が単韻母のものである。ほかには、-ng 韻尾字が比較的に多い。まとめて言うと、3 音節擬声語の韻母は単韻母と-ng 韻尾の韻母を主とする。

③3 音節擬声語の声調の状況

3 音節擬声語は 1+1+1 の組み合わせを主とし、約 80%を占める。AAA 型の「隆隆隆（2+2+2）」（『最新支那語教科書讀本篇』）、AAB 型の「嘎嘎蛋兒（4+4+4）」（『自邇集平仄編四聲聯珠』）、ABB 型の「嘩打打（1+3+3）」（『倉石中等支那語』）、「啊哈々（3+1+1）」（『萬物聲音』）などの組み合わせが見られるが、少ない。

（2）4 音節擬声語

[218] その中に、−n 韻尾のものが 1 つしかない。

4 音節擬声語は 45 語[219]で、中国語関係書における擬声語の 11.5%を占め、あまり多くない。型別には、AAAB 型、AABB 型、AABC 型、ABAB 型、ABCB 型、ABCD 型などがある。そのうち、語数が多いのは AABB 型（24 語）と ABCB 型（14 語）である。声母・韻母の使用状況は以下のようである。

まず声母の状況を述べる。4 音節擬声語の常用の声母は/ｄ・p・ｔ・ｇ・ｊ・ｓ・ｎ・ｌ/などで、半数が破裂音である。ABAB 型は/ｊ・ｓ・ｎ・ｄ/を主とするのに対して、ABAB 型以外の 4 音節擬声語の声母は/ｄ・p・ｇ・ｌ/　を主とする。また、声母の組み合わせの主な種類は破擦音+破裂音と破裂音+側面音である[220]。具体的に言うと、側面音を含む AABB 型は 2 つで、少ないが、鼻音は 7 語あり、多い。AABB 型以外の 4 音節擬声語には、鼻音のものはあまりなく、側面音のほうが多い。

次に韻母について分析する。出現頻度が最も高いのは単韻母、中では/i・a/である。すべての音節が単韻母である 4 音節擬声語も 10 数語ある。単韻母音節はすべての 4 音節擬声語に見られるが、この特徴は他の形態タイプの擬声語においてはない。つまり、擬声語の音節数が多くなるに伴い、単韻母を含む擬声語の出現頻度は高くなるようである。それにも関わらず、単音節・2 音節・3 音節擬声語においても、4 音節擬声語においても、単韻母が主な韻母の種類として見られるのは同様である。が中国語関係書の擬声語において、単韻母が常用されるかつ実用しやすい特徴を持つようである。

声調については、4 音節擬声語の声調は第 1 声の組み合わせを主とする。第 1 声の他、声調の組み合わせには第 4 声のものが第 2・3 声よりやや多い。第 1 ・2・3・4 声の 2 種類或いは 3 種類からなる声調の組み合わせも見られるが、少ない。例えば、「提拉拖拉（2121）[221]」・「稀溜逛噹（3224）」・「匹嘍撲嘍（2313）」・「匹蹬撲蹬（2414）」・「匹剌沸剌（1444）」（『四民実用清語集附諺語用法』）、「咕々呢嗷兒（4412）」・「噶々噶蛋（4444）」（『萬物聲音』）、「咿咿啞啞（1133）」（『倉石中等支那語』）などである。

5.5　中国語関係書における擬声語の音韻構成の特徴

本節では、5．4 で検討した近代日本の中国語関係書における擬声語の音韻の特徴について、主に耿二嶺（1986）[222]、孟琮（1987）の「北京話的擬声詞」と馬慶株　（1987）の「擬

---

[219] この総計は ABAB 型の擬声語の語数を含んでいない。

[220]「(6) 中国語関係書における擬声語の音節表」によると、4 音節擬声語の声母の組み合わせを統計した状況は次のようである。破裂音：噶々噶蛋、匹蹬撲蹬；笛笛咕咕。破擦音：嘍々喳々、唧唧喳喳　唧唧咋咋。摩擦音：唏唏哈哈、吸吸哈哈、嘻嘻哈哈、悉悉索索。破擦音+破裂音：咭噠𠸄噠、唧噠嘎噠、唧噹剛噹、唧咚咕咚、唧叮咕咚、咭叮咕咚；唧唧咕咕。破裂音+摩擦音：哼哼唧唧、哼哼嘰嘰、咳咳嗽嗽、嚬嚬嘶嘶。破裂音+側面音：皮剌吧剌、𠸄喇啪喇、提拉拖拉、ㄍㄚ ㄌㄚ ㄍㄨㄌㄨ、咕噔嘩啦；搭搭咧咧。破擦音+側面音：咭拉呱拉、匹嘍撲嘍。摩擦音+側面音：唏唧嘩唧、唏啦嘩啦。破裂音+鼻音：搭搭咧咧、塔塔咧咧、咕々呢嗷兒。破擦音+鼻音：嗞々𠸄々、唧唧噥噥。破裂音+破擦音+摩擦音：匹剌沸剌。破裂音 +摩擦音+側面音：稀溜逛噹。ほかの少数は零声母及び他の組み合わせの擬声語である。

[221] これは声調の組み合わせの表示である。

[222] 孟琮（1983）、耿二嶺（1986）、馬慶株（1987）と本研究の結果の大略をまとめて、本章の最後にして

声詞研究」を代表とする中国語擬声語の先行研究と対比しつつ、両者の相違を検討することにより、中国語関係書の擬声語の音韻状況を明らかにする。

（1）声母の状況

中国語関係書における擬声語には一部分の声母が頻繁に用いられている。例えば、破裂音（k を除く）と少数の破擦音（j・z・c）は最も常用される。特に破裂音の p、g はすべての型別の擬声語にある。この分布状況は中国語擬声語の先行研究においてはっきりと見られる。摩擦音の s・h と側面音も常用される。あまり用いられない声母には、破擦音の q、摩擦音の f、r、x がある。

中国語関係書の擬声語には、鼻音のものが極めて少ない。この状況も中国語擬声語の先行研究において見られる。また、鼻音は 2 音節擬声語の AA 型においてある多く現れることから見ると、中国語関係書の擬声語には、型別による音韻の状況の差異が存在することがわかる。側面音もこの分布状況を持つ。実際、AB 型擬声語の側面音は多く現れるが、そのすべてが第 2 音節（B）においてある。しかし、中国語関係書における擬声語全体から見ると、側面音は少ない。これに対して、側面音は現実の中国語擬声語において頻繁に用いられることが先行研究により指摘されている。

零声母は現実の中国語擬声語において声母全体の約 15%を占め[223]、頻繁に用いられる。一方、中国語関係書の単音節擬声語と 2 音節擬声語の中において、零声母は常用声母の一種であるといえる。

（2）韻母の状況

声母の使用状況と同様、韻母の使用状況の集中的な傾向も顕著である。現代中国語擬声語と中国語関係書における擬声語は単韻母・-ng 韻尾を含むのもを主とする。特に単韻母の a・u・i を中心とする傾向が明らかである[224]。複合韻母の状況は擬声語の型別により異なる傾向を持っている。全般の使用状況から見ると、複合韻母の出現頻度は低い。

中国語関係書の擬声語の韻母パターンは現代中国語の擬声語におけるよりも豊富である[225]。また、中国語関係書では、単韻母及び-ng 韻尾を含む韻母以外の大部分は出現度数が小さい。例えば、ian・in の擬声語はそれぞれ 1 つのみである。

中国語関係書における擬声語と現実の中国語擬声語の音韻状況には同様に、すべての声母が見られる。しかし、常用音韻（破裂音・一部分の破擦音、単韻母など）と非常用音韻（摩擦音、複合韻母など）の出現度数の差は、現実の中国語擬声語の場合より中国語関係書の場合のほうが顕著である。理由の一つとして、哼哼唧唧・哼哼嘰嘰、唧叮咕咚・咭叮咕咚のような同音異形（近音異形）の擬声語は中国語関係書において多く存在するため、

付した（付：中国語擬声語に関する代表的な音韻研究と本研究における音韻状況の概況）。

[223] 李鏡兒（2007）で、零声母単音節擬声語の比率は 10.1%で、零声母 2 音節擬声語の比率は 5.86%である。

[224] 李鏡兒（2007）による。

[225] 中国語関係書の擬声語に出た韻母には、全ての単韻母の a,o,e,i（[ɿ] と[ʅ]を含む）,u,ü,er(児化韻母)、複韻母の ai, ei,ao,ou,ia, ie,ua, uo, iao、鼻韻母の an, en,ang, ian,iang ,uang, eng, in ,ing,ueng,ong がある。複韻母の üe, iou, uai, uei と鼻韻母の uan, üan, uen,ün,iong が見られない。

重複して計統すると、ある声母・韻母の出現度数が高くなる可能性が挙げられる。このようなものを統計に入れた結果は音韻状況の真実を反映しているかどうかについて、議論されるべき問題点が残っているかもしれない。

（3）声調の状況

中国語関係書の擬声語では、第 1 声が最も普遍的に用いられる声調である。この特徴は現実の中国語擬声語と同じである。第 2・3・4 声の出現頻度は第 1 声と比べ、遥かに大きい。

中国語関係書の 4 音節擬声語に出現する第 1・2・3・4 声の組み合わせの現象について分析するには、孟琮（1987）における関連内容を参考にすることができる。孟琮は北京語擬声語の声調が陰平調に限らないことに言及する中で、「有时会超出四声的范围，按说话人的想象模仿出其他声调来（（擬声語は—筆者注）四声の種類を超え、話者の想像により四声以外のものが模倣されることがある—筆者訳）」と指摘して、3 つの例[226]を挙げた。この現象は中国語関係書の擬声語においても見られる。

中国語関係書の擬声語と現実の中国語擬声語の音韻特徴を声・韻・調の状況から考察したことによって、中国語関係書の擬声語は常用の声母、韻母、声調に集中する音韻特徴を持つことがわかる。具体的にいうと、一部の破裂音声母、単韻母と-ng 韻尾の韻母、第 1 声を主とする音韻構成の状況がある。この特徴から窺えるのは近代日本の中国語教育における中国語が実用性の言葉、普通の語彙、わかりやすい音韻要素を中心とするものであるということである。言い換えると、近代日本の中国語教育は容易に受け入れられる中国語を教える状況である。これは近代日本の中国語実用主義的教育と対応している。

付：中国語擬声語に関する代表的な音韻研究と本研究における音韻状況の概況

音韻調の使用		本研究	孟琮（1983）	耿二嶺（1986）	馬慶株（1987）
声母	単音節	①[227]p、g、z、s、h。摩擦音と破裂音 ②k、j、q、f、x。側面音と鼻音 他に、韻母ない声母 p・z・s・ch・l・r	①b・c・d・g・h・j・k・p・s・t・w・y・z ②f・x・n 他に、韻母ない声母 z・c・s・ch・sh・dr・tr	韻母ない声母 s・ch・c	①破裂音 b・p・d・t・g・k ②n・l。f の擬声語はない
	2 音節	①d・b・g（双声・重言）。破裂音と摩擦音 ②q・f、側面音 他に、零声母と双声・顕著、型別による異なる傾向がある。	①第 1 音節 b・c・d・g・h・j・k・p・s・t・w・y・z。第 2 音節 b・ch・d・j・k・l・p・t・zh		
	多音節	①破擦音+破裂音と破裂音+側面音。3 音節擬声語：破裂音と摩擦音、d・g・h。4 音節擬声語：d・	①l と d		①第 1 音節：破裂音 k・g・p・b・h・d・t

[226] 3 つの例は「儿阿儿阿 ēr ā ēr ā　驴叫，阿气 ā qì　打喷嚏声，呜儿哇 wūr wā　唢呐声，“哇”低平且延长」である。

[227] ①②は声母と韻母の使用情況を説明するための表記である。①は頻繁に使われること或いは主な要素と代表する。②はあまり使わない或いは少ないことを表す。

		p・t・g（j・s・n・l） ②鼻音 他に、破擦音ない			②零声母（2%）
韻母	単音節	①a、u、i、ua；-ng。単韻母。 他：複合韻母 ao、ai、ou、ou もある。枠外の音節にある韻母 ing・uang ・r[228]i・ia・ēi	①a・-a・-ng ②-n 他に、枠外の音節にある韻母 ia・iang・uang・iu・ou	③枠外の音節にある韻母 ia・iang・uang・iu・ou	①舌面高母音と舌面低母音。-ng ②-i がない。ü は極めて少ない。
	2音節	①単韻母。a・u・兒化韻母。鼻韻母の ing・ang だけ。 ②複合韻母。AB 型の畳韻。	①a・u・i・ong・eng・ang		①畳韻（43%）。側面音の畳韻（57.5%）
	多音節	①3 音節：単韻母。a・u・i。-ng 韻尾の韻母。4 音節：i・a 他に、全ての擬声語には単韻母がある。	①i・鼻韻母		
声調	単音節	①1 声（約 75%） ②第三声	①第 1 声		
	2音節	①第 1 声約 80%。4 と 2 の AB 型多い。 ②規範・難しい	①第 1 声		
	多音節	第 1 声（約 80%） 他に、特殊の変化がある。		①軽声：4 音節擬声語の第 2 音節	

228 これは児化音の表記である。

第 6 章　擬声語の音象徴

本章では、音象徴の視点から近代日本の中国語関係書における擬声語の語例を解釈しながら、それらの擬声語の音韻がもつ意味やイメージを検討する。

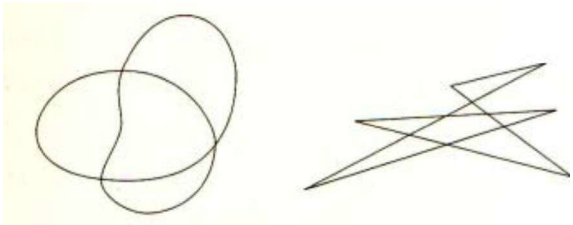
6.1　音象徴の定義と音象徴語

6.1.1　音象徴の定義と内容

日本語には、例えばものが「転がる」音を模写するのに、/karakara/（からから）と/garagara/(がらがら)がある。それらの微妙な違いについて、「/karakara/（からから）より/garagara/(がらがら)のほうが例えば「重そうだ」、といった感じを、音の交替が支えている」[229]という見解がある。これと類似する体験は中国語の「転がる」の音を表す「咯噔咯噔/gedenggedeng/・咕咚咕咚/gudonggudong/」や、「落ちる・たたく」の「吧（嗒）/ba(da)/・啪（嗒）/pa（/da/)」などの言葉でも感じられる。このような音（言語音）と意味の間の関係は、言語学・心理学の分野で音象徴と言われている。

音象徴はsound symbolism[230]の訳語で、ヨーロッパで発足した研究の分野である。音象徴研究の初期は主に実験の手法で行われた。例えば、Sapir(1929)の/mal/と/mil/という無意味語の考察が広く知られている。この研究において、/mal/と/mil/のどちらを大きなテーブルの名に当てるか、どちらを小さなテーブルの名に当てるかを実験参加者に求めた結果として、実験参加者はほぼ例外なく、/mal/を大きなテーブルに対応させ、/mil/を小さなテーブルに対応させるという選択をした。 それによって、 Sapir(1929)は、/a/は/i/より大きさが感じられ、「大きい」イメージを喚起することができるという傾向が見られるとした。また、Sapir(1929)と同様に、Köhler(1929、1947) の図形実験も、音象徴の研究として広く知られている。この研究では、/maluma/と/takete/という2つの無意味語がそれぞれ曲線で構成された丸の図形と直線で構成された角張った図形(参照図3[231]) のどちらに相応しいかを実験参加者に尋ねる。大多数の実験参加者は丸の図形に/maluma/を、角張った図形に/takete/を選択した[232]。

図 3



従来の解釈では、音象徴は音声がどの

[229] 野間秀樹（2008）「音と意味の間に」p58

[230] 秋田喜美（2013）（「オノマトペ・音象徴の研究史」（篠原和子・宇野良子（2013）『オノマトペ研究の射程近づく音と意味』ひつじ書房 p363））によると、この術語の他、英語の文献では「phonetic symbolism」(spair 1929 以降、特に言語学以外において)、「peonosymbolism」（語源学を代表とする通時的研究において）、「phon(a)esthesia」などもある。

[231] ブレント・バーリン（篠原和子・川原繁人訳）（2013）p20 による。

[232] Sapir(1929)と Köhler(1929、1947)の実験に関する部分はブレント・バーリン（篠原和子・川原繁人訳）（2013）を参考にした。

ようなイメージを伴い、語の意味との関係がどのようであるかということと定義されている。日本側の音象徴研究は比較的早くから広く行われたため、次にそれを参考としながら音象徴の定義を検討する。音象徴の意味については、日本側の研究にはさまざまな説明が見られる。例えば、田守・ローレンス（1999）は「ある音声が、たまたまそれを含む特定の語の固有の意味とは別の象徴的な意味、すなわち一般的に想定されている語と意味の慣習的な関係を超える意味を示唆することがある[233]」を音象徴という。この解釈は語の面からある音声及びその意味を検討すると同時に、音象徴の分析方法を指摘している。この解釈は音（或いは音声）があるイメージを持つことを指すという音象徴の一般的な説明より詳細に音象徴の内容を明らかにしたが、音（言語音）と意味という音象徴の主体の関係を指摘する点ではあまりはっきりしていないと言える。

先行研究では、音象徴研究と音韻象徴研究[234]に分けて音象徴の研究を行うことがある。実際、Sapir(1929) とKöhler(1929・1947)はそれぞれ音韻象徴と音象徴の研究分野に属するものであるとして知られている。しかし、音象徴研究の現状において、平田佐智子（2011）は「音象徴と音声象徴を明確に区別していない研究も多数ある」と指摘する。

平田氏は音象徴と音韻象徴の差異を解説する前に、無意味語、既存の語彙に含まれる意味を持つ語、オノマトペなどを刺激とする音象徴研究の方法の2つの問題点を取り上げる。1つは、言語の恣意性のため、音象徴研究の立証が非常に困難な点である。問題の恣意性の影響を回避するためには既存の語彙に含まれる有意味語以外を刺激として用いる必要があるということである。もう1つは無意味語におけるターゲット以外の音声の影響である。その影響の結果として、無意味綴りを「語」と認識させた上で刺激とするのは問題があるとしている。そして、音象徴と音韻象徴の区別について、平田氏は次のように述べている。

> 音韻象徴は単独の音節・音素がある感覚経験とつながりを持つ状態であるとする。例えば/a/が大きさ、/i/が小ささというイメージをもつ状態を指す。ここでは単独の音節・音素などの語彙的意味を持たない単位の音声と、感覚経験の結びつきを指していることが重要である。対して音象徴は、単語あるいはオノマトペに含まれる音と、その意味との間に非恣意的関係が存在することであるとする。この場合は既存の語彙的意味と、それを示す音列との関係性を指している。音象徴と音韻象徴は、「ある音声があるイメージを伴っている」という点において共通している。音韻象徴は音声がどのようにあるイメージをもたらすのかという点について言及しているのに対し、音象徴はさらに範囲を広げ、その音声のイメージが、その音声が含まれる語の指示的意味にまで影響を及ぼすと考える[235]。

---

[233] 田守・ローレンス スコウラップ（1999）『オノマトペー形態と意味』くろしお出版 p7

[234] 先行研究で、音韻象徴は音声象徴（phonetic symbolism）とよばれる場合もある。以下では、音韻象徴の言い方を採用する。

[235]「音韻象徴における文字の形態・音声の発音と音韻体系の影響」博士学位論文 p6

上記の引用を見ると、音象徴研究と音韻象徴研究の相違点と共通点が存在することがわかる。実際には、音韻象徴と音象徴の相違点を明らかにすることは難しい。その理由は、音声がもたらすイメージの境界線が容易に引けないからである。このことから、音象徴の研究は音韻象徴への言及が避けられない場合もある。そのため、音象徴と音韻象徴を合わせて検討するのは試みるに値する。

6.1.2　音象徴語

音象徴語とは音象徴性のある言葉であるとされているものである。だが、音象徴語は何の語を指すか。先行研究から見ると、オノマトペと狭義の擬声語は比較的よく見られる音象徴語の研究対象である。

オノマトペが周知される音象徴語である原因というと、言語の有契性、つまり言語音（言語の音声）と自然音とのある関連性が音象徴語とオノマトペが持つ共通性のような存在であるからである。

一般的に、外来語のオノマトペは広義の擬声語[236]（擬音語ともいう）のことを表す。つまり、オノマトペの中に、「語源的に自然界の音や、人間を含めた生物の発した音声を直接模した擬音語、あるいは本来は音声を伴わない抽象的な様態を間接的に描写した擬態語」[237]がある。音象徴研究においては、狭義の擬声語と擬態語とも音象徴語として検討されているが、擬声語のほうが音象徴語の主たる位置に立つとされている。本論文で「音象徴語」は擬声語を指す。

6.2　音象徴の先行研究

本節では、言語普遍性と言語個別性の視点から音象徴の研究現状を検討する。

6.2.1　音象徴の言語普遍性と言語個別性

近年、多言語の音象徴の実験的研究と比較研究が言語学・心理学・脳科学・医学などの分野の課題として行われ、「音象徴に関するこれまでの諸研究から、音象徴の持つ通言語的共通性が読み取れる」[238]という認識が得られる。例えば、/a/の音象徴の言語普遍性は英語、日本語、中国語、韓国語などの言語で検証されている[239]。ことばの意味から音象徴の言語普遍性を見ると、野間秀樹（2008）は「オノマトペのうち擬声語については、言語の違いをある程度超えた共通するところがあることが予想される。言語外現実の音が同じで

---

236 広義の擬声語は、狭義の擬声語と擬態語を含める。狭義の擬声語は擬声語・擬音語のことで、「物の音や声などを表わすことば」（『日本国語大辞典』）である。本論文では特に説明しない場合、「擬声語」を狭義に用いる。

237 角岡賢一(2004)「日本語オノマトペ語彙の語源について」龍谷大学国際センター研究年報 第 13 号 p15

238 篠原和子・川原繁人（2013）「音象徴の言語普遍性　「大きさ」のイメージをもとに」（篠原和子・宇野良子（2013）p43）

239 篠原和子・川原繁人（2013）はいくつかの先行研究取り上げ、/a/の音象徴の言語普遍性の例外を指摘している。例えば、韓国語のオノマトペでは、「明るい音」である「陽母音」の群[a，o]は「「軽い、小さい、速い」などのイメージを表す。

あれば、音そのものは概ね同じように聞こえるだろうからである」[240]と論説している。つまり、自然音の客観性に基づく言語音の模倣は聞こえで近似する可能性を持つ。この可能性は「言語の違いをある程度超えた共通する」存在であろう。それは言語の音象徴普遍性において現れるに違いないと思われる。

秋田喜美（2013）によって、音象徴の言語普遍性の研究現状が、日本語と英語などの言語の対照をめぐって行われていると同時に、中国語、英語、日本語、ポーランド語、ヘブライ語の多言語の音象徴の普遍性に関する基礎実験として、Brown・Black・Horowitz(1955)、Brackbill・Little(1957)がある。それらの研究における結果の1つは、/a，i/などの音象徴普遍性がいくつかの言語で検証されているのである。

音象徴の普遍性が特定の言語における状況についての研究もある。飯田香織（2012）は「同一の母語話者もしくは異なる言語話者間で特定の音韻が同じイメージを引き起こす傾向があるかどうか」という「音象徴の普遍性」の問題を検討して、「音象徴語は言語と独立した共通の認識次元を持つ様な普遍的なものではなく，同一の音韻であっても異なる母語話者間ではその音韻について感じる印象には違いがあり，音象徴語の言語普遍的側面は同一の母語話者間でのみ共有される限定的なものである」[241]と結論した。つまり、音象徴語には言語普遍性が存在するとはいえ、同一の母語話者間に限られる場合がある。

現在でも、全面的な研究成果と方法論的な洗練が非常に足りない。このように、音象徴の言語普遍性の研究は十分に展開していない現状が見られる。他に、音象徴の言語個別性の考察も英語、日本語などのわずかの言語においてのみ頻繁に行われているが、もっと多くの他の言語を音象徴研究の視野に入れる必要がある。中国語の関連研究はきわめて少ないため、この研究を進める必要がある。

6.2.2　音象徴研究の着眼点と内容

音象徴に関する従来の研究はある音がどのようなイメージを持つか、またどのようにそのイメージをもたらすかに着眼している。この研究目的を達するために、具体的な着眼点と研究方法が提起されている。

（1）「音」の単位

音象徴研究に見られる言語音の単位は多様で、音節、音素、音声などがある。例えば、田守育啓・ローレンス スコウラップ（1999）は音象徴の「音」の要素は単音と音素の他、音節、子音のグループ（例えば、清音・濁音または有気音・無気音などがある）などであるとしている。また、秋田喜美（2013）は音象徴の研究史を考察することによって、音象徴研究において未解決となっている根本的な問題の中心である「「音象徴の「音」とは何か」という問い」をめぐって、音象徴的意味と結び付く単位を「周波数なのか（例：F_0の周波数）、音声素性（摩擦音）なのか、音声（[ʃ]）なのか、音素（例：/s/）なのか、モー

[240] 野間秀樹（2008）「音と意味の間に」『国文学』第 53 巻第 14 号 p62

[241] 飯田香織（2012）「音象徴語をめぐる言語普遍性と言語個別性」『ことばの科学』名古屋大学言語文化研究会編（25）p31

ラ（例：/si/）なのか、音節（例：/sin/）なのか、あるいはこれらの組み合わせ・パターンなのか」[242]などの方面から検討している。上述の単位は音象徴研究において異なる目的と方法を用いて分析することができる。

音象徴研究の方法は単一ではない。例えば、日本語擬声語の音象徴研究の場合、第1音節にある子音（C_1V_1（C_2V_2）タイプのC_1）を考察の対象とし、語彙的意味に基づく分析方法があり、計算機科学の分野などの音声を処理する方法もある。このように、評価性の研究方法の主観性と計算機科学に基づく研究方法の客観性という相違がある程度窺える。それらは併存し、孤立しない。ある音の音象徴的意味の分析はその音の素性の1つについて行われるが、他の素性を分析することが避けられない場合もある。

本章は中国語関係書における擬声語の用例・語釈を解釈しながら、擬声語の語頭音節の意味特徴を検討して、その中の音韻の音象徴的意味を説明する。

（2）性状表現

音象徴研究では、「音」が象徴するものの普遍的な特徴を深く究明するために、個々の「音」の特性に対する具体的な性状表現を規定して取り上げることが一般的である。Sapir(1929)の実験的研究に出された母音[a]のイメージ「大きい」と母音[i]のイメージ「小さい」は性状表現の内容の例である。

秋田喜美（2013）は、「大きさ」という性状表現を取り上げ、「これまでの研究を見渡す限り、大きさの音象徴は音と意味の直接的関係が想定し易い分、最も原始的で中核的な音象徴として扱われてきたように思われる」[243]と述べている。これは指摘している。また、共感覚的音象徴研究[244]においては、性状表現を聴覚、視覚、触覚などに分類している場合がある。例えば、音の大きさや強さ、物の形状と硬さ、運動の快さと強さ、手触りの快さなどがある[245]。

現時点では、性状表現の一般的な分析方法は形成されていない。また、音象徴の評価は性状表現の分類が様々あるため、共感覚の分野によって異なる。それゆえ、性状表現の研究方法の主観性が議論されている。とはいえ、研究現状から見ると、共感覚を用いた性状表現の研究は複雑な音象徴語の特徴を明らかにすることにとって比較的適切な方法である。

6.2.3　中国語擬声語の音象徴の先行研究

中国語擬声語の音象徴研究は日本語擬声語の音象徴研究と比べ、ずっと少ない。しかも、

---

[242] 篠原和子・宇野良子（2013）p339

[243] 秋田喜美（2013）p338。この解説文は「意味尺度」についての内容である。実際、先行研究に性状表現と意味尺度がほとんど同様な概念とされている。秋田喜美（2013）では、意味尺度の言い方を用いている。本論文では性状表現の言い方を採用する。

[244] これは擬声語と擬態語を含む音象徴語の研究である。共感覚は音象徴語を聞くと 2 つ以上の感性体験視覚、触覚、臭覚、味覚）が連想されることである。共感覚的音象徴の性状表現については次の節で先行研究の例を出して検討する。

[245] 例をあげると、触覚の評価尺度は温かい－冷たい・硬い－柔らかい・ヒヤッとして－ヒヤッとしない・すべすべした－すべすべしない」の粗さ感、冷温感、乾湿感、硬軟（坂本真樹・渡邊淳司 2013）「大きさ感・摩擦感・粘性感或いは粗滑・硬軟・乾湿（秋田喜美 2013）がある。ほかに聴覚での「大きさ・高さ・長さ」がある。これに関して、意味評定を行う SD 法（意味微分法）は広く用いられている。

日中言語対照研究において行われることが一般的である。それらの対照研究によれば、日本語と中国語の持つ音象徴には共通性がある。そのため、中国語擬声語の音象徴研究の背景を紹介するとともに、日本語の関連研究を取り上げる必要がある。

張恒悦（2013）は「ABCDタイプ中国語擬声語重ね型の認知論的分析」[246]で「中国語の擬声語においても、音声の違いが意味の違いに対応する音象徴の原理が応用されていることが確認できる」と指摘していると同時に、「従来、音象徴の視点から中国語の擬声語を研究することはあまり行われてこなかった」[247]という研究現状を述べている。確かに関連の研究は日本側の研究に散見され、中国側にはあまりない。筆者の調べた限り、朱文俊（1996)の「声音的象徴意念」は音象徴の一般研究として、音象徴の実験的研究、音象徴と言語の起源の研究を検討し、中国語に音象徴があるかどうかに言及した。とはいえ、中国語音象徴の検討は言語研究の理論面に限られており、具体的な内容はない。呉校華（2007）は「漢語象声詞理拠初探」で、中国語擬声語の有契性を外部（語の表記符号と方法など）と内部（語の形態、発音、意味）から論じている。その中で、中国語擬声語の音象徴の有契性を韻母・声母の音象徴性及び特徴の面から簡単に指摘している。この研究は単韻母と声母の一部分を取り出して、それらの音象徴的な意味を擬声語の例を挙げながら検討したが、音象徴的な意味についての論説が不充分で、論証も足りず、音象徴的意味の内容が具体的ではないといえる[248]。陳太勇・謝好（2015）は中国語と日本語の擬声語・擬態語の形態と意味を対照し分析している。論文では、日本語擬声語擬態語の形態特徴を分析し、日本語の性状表現を音韻ごとによりまとめているのに対して、中国語擬声擬態語については、の形態種類及びその語例を示すだけで、音韻に関する内容は見られない。

韓紀星（2015）は日本語と中国語の発音と意味のつながり及びそれらの差異を明らかにするために、丹野眞智俊（2005）[249]と呉川（2005）の研究に基づいて日本語と中国語の母音・子音の性状表現を簡単に比較して、一部の中国語音韻の音象徴的意味を指摘している。

次に先行研究に言及した呉校華（2007）と韓紀星（2015）によって導き出された音象徴の考察結果を表25に示す。

表25　呉校華（2007）と韓紀星（2015）によって導き出された中国語擬声語の音象徴

研究者	韻　母	声　母

[246]「ABCD タイプ中国語擬声語重ね型の認知論的分析」『立命館言語文化研究』24 巻 3 号 pp.175-187

[247]『立命館言語文化研究』24 巻 3 号 p184

[248] 中国語の音象徴の研究現状を示すように、本章は先行研究における具体的な考察結果を取り出して上げる。呉校華（2007）の音象徴研究を表 1 にまとめた。

[249] 丹野眞智俊（2005）の音象徴の検討は日本語の子音の清音、濁音、半濁音に焦点をおいている。

呉校華（2007）	[a]：大きい、明るい。[i]：鋭い、小さい。[u]：重い、暗い、苦しい。[e[250]]：消極的なもの。[o]：内包的なもの。	[t，t‘]：大きい衝撃の音（硬いものの音）。[k，k‘]：人の声と物の音。[t，t‘] より小さい音。[s]：摩擦の音、細い。[m]：やわらかい、婉曲。[p，p‘]：破裂の音。[ŋ]：音の延長。
韓紀星（2015）	/a/：破裂音や打ち当たる音。/ ang /：大きい音や金属音。/ong，eng/：大きい音の響き。	/z，c，ch，sh/ ：摩擦の音。/b・p/：物が打ち当たったりして出す音や、爆発の音。

游韋倫（2014）は「コーパスを用いた音象徴語の分析—中国語を対象に—」で、コーパス（北京大学中国語学研究所　http://ccl.pku.edu.cn/corpus.asp）を利用して出現頻度の高い中国語擬音語（70語）の頭子音が持つ音象徴的意味を考察している。游韋倫（2014）は「中国語の擬音語体系において、有気音と摩擦音は速さという側面に結びつきやすい」、「動きにおける強さと速さは、同一の経験基盤において同時に起こる」、「擬音語に関して、日本語では＜強さ＞という側面を、中国語では＜速さ＞という側面をとる言語である」と結論する。中国語擬声語の音象徴に触れる研究論文は他にもあるが、全面的な研究がないので、その紹介をしない。

中国語擬声語の音象徴の既存研究をみると、論文などの研究成果は少なく、研究方法も形成されておらず、全面的なものも大変欠乏している。研究現状では、大部分の中国語音韻の音象徴的意味に触れられておらず、語の意味分野を解釈するだけで、理論的な分析成果が非常に少ない。それゆえ、理論的研究と音韻個体の音象徴の検討を推し進めるべきである。

中国語の場合と較べ、日本語の音象徴の研究はより深く進められている。田守育啓・ローレンス スコウラップ（1999）は日本語と英語に共通した音象徴（例えば、肥満・突出と唇音性との音象徴的対応、両唇閉鎖音・粗擦音と水しぶきとの対応、粗擦音と乾燥したものが触れ合う音との対応、無声声門閉鎖音と急な終わり方との対応など）のに基づき、1モーラを基本形に持つオノマトペ及び2モーラの語基を持つオノマトペの第1モーラにおける特定の母音と語頭子音を考察した。その考察では、日本語と英語の音象徴的な対応に関する類似性を指摘しつつ、「日本語のほうが英語よりも音象徴的対応をより規則的かつ集中的に利用している」という相違も明らかにしている。これはHamano（1986）の研究を参考として焦点が英語との比較にある一般的な議論を行ったもので、異なる言語の対照研究の方面でいうと詳細かつ全面的な研究である。しかし、田守育啓・ローレンス スコウラップ（1999）の研究に対しては、浜野祥子（2014）は「日本語のオノマトペ特有の、位置によるシステマティックな意味の分化がはっきりしない」と評し、「日本語のオノマトペ研究の観点から見ると、残念なことである」[251]と述べている。他に、田守育啓・ローレンス ス

[250] [e]は中国語単韻母にはない発音である。文章の意味により、筆者は[e]を単韻母/e/の IPA 表記 [ɤ]に書き直すべきであると思われる。
[251] 浜野祥子（2014）p20

コウラップ（1999）は取り出した例に対して解釈する点において、課題を残す。

一方、浜野祥子（2014）は「Hamano（1998）[252]の位図[253]に沿い、語根の種類と語根内での位置に注意しながら音と意味のつながりを検討」[254]して、日本語の子音と母音の音象徴を系統的に考察した。それによって、「子音、特に阻害音は、位置によって象徴的な意味が違うことが多い」ことや、「位置によってまったくいみが変わらないのは口蓋化である」こと、母音が子音ほど音象徴的に重要な役割を持っていないかもしれないことを指摘している。また、浜野（2014）は音象徴の研究方法の点でも日本語の音象徴的意味を明らかにしたことでも非常に詳しく行っているものであるといえる。しかし、子音と母音の音象徴的意味について、具体的な解釈が十分に与えられていない。他に、実験的手法を用いている丹野（2005）は語彙的意味に基づく研究である田守育啓・ローレンス スコウラップ（1999）及び浜野祥子（2014）と異なり、日本語の50音を刺激語とし、実験の参加者に呈示し、その音韻を聞いて「どのようなイメージが浮かぶか」の結果を分析して、日本語音韻に存在すると思われる音象徴が「音・声」「運動の状態」「運動主体」「成立している状態」によって捉えられていると指摘している。

田守育啓・ローレンス スコウラップ （1999）、丹野眞智俊（2005）、浜野祥子（2014）などの研究は音象徴的意味の分類方法、音象徴の分析方法、日本語の子音と母音の音象徴的意味の検討で、筆者が調べた他の関連研究より詳しくかつ系統的である。日本語の研究現状と比べ、中国語の関連研究は方法や成果などの面で非常に多くの問題点が残っているため、外国語の研究の方法や関連の成果を利用して進められる必要があるであろう。

研究現状から見ると、音象徴研究の方法は人の感性の定量化にせよ、言語の構成の分析にせよ、現在形成中である。中国語音象徴の考察は日本語や英語の場合から見ると、必要な予備研究が非常に多く残っている。例えば、擬声語の語根の種類と語根内での位置による意味の分化を明確にする必要がある。それによって、中国語の音象徴研究が推し進められるであろう。音象徴の言語普遍性の研究と言語個別性の研究において、通言語の研究方法を確立するために、先行研究における方法を利用し、先行研究の成果に基づいて研究現状を前進させる必要がある。

6.3　中国語関係書における擬声語の音象徴

本節では、中国語関係書における擬声語を対象として、それらの音韻構成を考えながら、代表的な擬声語の用例・語釈への解説に基づいて中国語の音象徴の実態を考察する。それ

---

[252] 浜野祥子（2013）の「方言における擬音語・擬態語の体系的な研究の意義」によれば、Hamano（1998）（*The Sound-Symbolism of Japanese.Stanford:CSLIP Publications*）は日本語の中央方言の擬音語・擬態語の意味構造を記述し分析したものであり、それ以前の研究と比べる決定的な違いは擬音語・擬態語の語基を CV と $C_1V_1C_2V_2$ に分け、それぞれの意味構造を明らかにしたことである。秋田喜美（2013）は、「Hamano（1998－筆者中）は、日本語オノマトペの音象徴を実際の言語データに基づき実証的かつ網羅的に精査した」（p358）と述べている。

[253] この位図についての関連情報は 6.3.1 に上げている。

[254]『日本語のオノマトペ　音象徴と構造』くろしお出版 p20

によって、中国語の音韻が持つ音象徴的意味を明らかにする。

6.3.1　音象徴の考察の方向

音象徴の研究は言語音の持つ潜在的な意味の解明を目指すものである。中国語の場合、声母・韻母が意味とどのように結び付いているかが音象徴研究の考察の対象の１つである。本節では、代表的な型別の擬声語の語頭に現れる声母・韻母及び語全体の声調パターンの音象徴的意味を考察してみたい。

擬声語の音韻形態は多様である。中国語関係書における擬声語の形態構造は基本型である単音節のA型、2音節のAA型とAB型及びそれらの重畳型（すなわち、AAAA型とABAB型）を主とする。また、重畳型のAAAA型とABAB型はそれぞれ対応する2音節基本型のAA型とAB型と意味特徴の点で似ているため、本章はこの2つの重畳型を2音節基本型に含めて検討する。従って、中国語の音象徴の一般性研究として、本章の考察は上の基本型の擬声語の音韻構成を巡り行う。本節の分析対象は基本型の第一音節Aの声母と韻母及び各型の声調となる。

音韻形態の意味構造の視点で擬声語の音象徴研究を展開するものは、中国語に関しては見られないが、日本語に関してはHamano（1998）がある。Hamano（1998）は日本中央方言の擬音語・擬態語の意味構造を記述し分析するものであり、それ以前の研究と比べての決定的な違いは擬音語・擬態語の語基をCVと$C_1V_1C_2V_2$に分け、それぞれの意味構造の特徴を指摘したことである。Hamano（1998）における意味構造に対する説明として、浜野祥子（2013）は下の図4と図5のように示している。

この方法の基礎として、語根の「位置によるシステマティックな意味の分化」をはっきりさせることが必要である。浜野祥子（2014）もこの研究方法に従うもので、浜野祥子（2013）と似ている図を載せている。比較して見ると、浜野祥子（2014）は浜野祥子（2013）の位図における「触覚」を「触感」に、「V－運動の形/大きさ」を「V－形/大きさ」に、「C_1V_1」を「CV」に、「C_2V_2」を「CV」に、「V_1－大きさ」を「V_1－形/大きさ」に書き換えている。それによって、両者の主な変化は$C_1V_1C_2V_2$のV_1とV_2の音象徴的意味が大きくなった点であることがわかる。

図 4　CV タイプの語基の意味構造
（浜野祥子　2013）

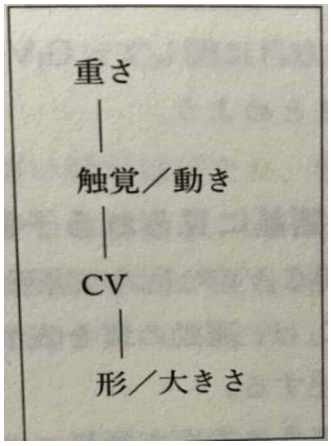
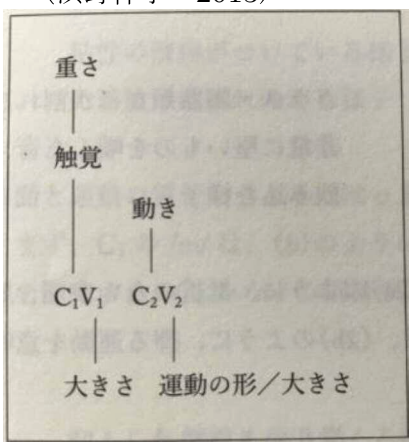


図 5　$C_1V_1C_2V_2$ タイプの語基の意味構造
（浜野祥子　2013）



また、擬声語の音象徴のイメージは多次元なものである。ある言語音の音象徴を認識する時、共感覚的音象徴による意味評価が行われる。関連の先行研究がその意味評価が評価見られる。例えば、ブレント・バーリン（2013）（篠原和子・川原繁人訳）は実験参加者に2つの図[255]を見せて、それに合う無意味語を自由に考えさせる方法で、架空の言語であるドロイド語[256]の子音と母音の使用分布から実験の結果をまとめ、それらの音の使用の理由を実験参加者に質問する。次に、実験参加者から得られた理由と実験結果における音との関係を分析して、音の共感覚的音象徴の知覚的特性を指摘した。その共感覚的音象徴の意味評価の内容について、ブレント・バーリン（2013）は結果を表27のようにまとめている[257]。

表27　ブレント・バーリン（2013）における共感覚的音象徴の意味次元

音声素性	共感覚的音象徴の意味次元		
	動き	形	大きさ
前舌母音、無声子音	速い、素早い、突然、短い	長い、直線的な、ギザギザした、痩せた、鋭い、薄い、尖った、ほっそりした、角張った、平らな、	小さい
後舌母音、有声子音	遅い、不活発な、のしのし歩く、よたよたする、不格好な、滑らかな	球体の、短い、ずんぐりした、太った、丸い、詰まった、がっしりした、たくましい、円形の、滑らかな	大きい

255 前述した Köhler(1929)の丸い図形と角張った図形。
256『ドロイドの帰還』という映画の中のドロイドたちが話すことば。ブレント・バーリン（2013）に、「ドロイド語の音韻体系」という表がつけてある。
257 ブレント・バーリン（2013）「動物名称に見られる共感覚的音象徴」（篠原和子・宇野良子（2013）p23）

6.3.2　声母の基本的な音象徴

これまで注目されてきた音象徴の性状表現は多様で多数あるが、子音と母音の音象徴の意味分類に対する区別が重点的に行われているものは見られない。本節では、先行研究における研究方法の状況を全面的に考慮し、中国語擬声語の主たる基本型の単音節と2音節擬声語の語頭を分析の対象として、声母の音象徴的な意味を共感覚に関する多視点、すなわち運動、形、触覚、様態などの視点から考察する。

6.3.2.1　破裂音と破擦音の有気音・無気音の声母

日本語の音韻体系では有声音・無声音の対立が意味を区別する意義を持つのに対して、中国語の音韻体系には、有気音(/p，t，　k，c，ch，q/)・無気音(/b，d，g，z，zh，j/)の対立がある。本節では有気音・無気音の音象徴を対比・検討する。

（1）両唇破裂音/b，p/

・/b/

bを第一音節の声母に持つ単音節擬声語は少ない。その用例・語釈は次のようである。

A型（①，②）

①吧/ba/[258]　吧的一聲、就打了蕎麥一個嘴巴。【訳文[259]：蕎麥は吧と横っ面を打たれた】

②ㄅㄨㄦ/bur/　放屁（おなら）

AA型擬声語はAが重畳されたとすることができるため、単音節擬声語（A型）と合わせて考察する。次の例を見てみよう。

AA型（③ - ⑥）

③巴巴/baba/　小孩子家別那們嘴巴巴的【訳文：子供だから、いつも巴巴と喋ることがだめである】

④吧吧/baba/　什麼吧吧的響、是在隔壁兒拏斧子劈柴火呢【訳文：何の音が吧吧としているか。隣の人が斧で薪を割っている】

⑤ㄅㄨ ㄅㄨ/bubu/　放屁（おなら）

⑥邦々/bangbang/　打梆子（拍子木）、犬の声

上の例から感じとれるのは打撃（①・④・⑥）や、爆発、突破の運動（②・③・⑤）の状態である。/b/の特徴は次のAB型擬声語にも同様に明らかに見られる。

AB型（⑦ - ⑪）

⑦吧嗒/bada/　小物件掉地【訳文：小さいものが地面に落ちる】・喫煙・馬蹄【訳文：馬の走る音】

---

[258] 本章の全ての擬声語の用例・語釈は中国語関係書から取り出したものである。それらの用例や語釈及び出典は「中国語関係書における擬声語及び用例・語釈」の表に上げている。そのため、下文の用例・語釈の出典はつけない。音素表記は筆者がつけた。

[259] 本章で中国語関係書における擬声語の用例・語釈の「訳文」と「訳」はすべて筆者が付けた。原文には、日本語が付いた語例を翻訳せず、そのまま転記する。

⑧吧叽吧叽/bajibaji/　吧叽吧叽的吃【訳文：吧叽吧叽の音を立てて食べる】

⑨波哨兒/bolangr/　波浪鼓【訳：でんでん太鼓】

⑩ㄅㄨ ㄅㄨㄤ/buduang/　水中投石【訳文：水に投石する】

⑪ㄅㄧㄚ ㄗㄧ/biazi/　巴結嘴（唇をならす）

①－⑪の単音節擬声語・AA型・AB型の擬声語の全体から見ると、/bの多数は物体に打ち当たる音や衝撃の音を表している。例えば、①④⑥⑦（小物件掉地・馬蹄）⑨⑩の自然音は物体と物体の衝撃によるもので、対抗する状態を表している。上の６つの例と②③⑤⑦（喫煙の場合）⑧⑪と対照してみると、これらの共通点は力と緊張感のある衝突の運動状態を表すことである。相違点は、②③⑤⑦（喫煙の場合）⑧⑪のグループと比べて、①④⑥⑦（小物件掉地・馬蹄）⑨⑩のグループは持つ衝突の運動の突破感が更にはっきりとする。それによって、/b/の主な音象徴は打撃・衝撃の運動によって発するものを表すことが窺える。

第一音節の声母/p/の例には次のようなものがある。

・/p/

A型（⑫－⑭）

⑫咱・拍・爬/pa/　醒木拍的一響【訳文：拍と拍子木を打ち鳴らす】・就聽見咱的一聲鐵尺一響【訳文：咱と鉄の尺を打ち鳴らす音を聞いた】・爬的一聲把（烏龜）身子摔得粉碎了【訳文：亀が爬と落ちてかめの甲が粉々に砕かれた】

⑬磅/pang/　錘鐵之聲【訳文：鉄を鍛える音】

⑭砰・ㄆㄥ・澎/peng/　石の碎ける音・錘鐵之聲【訳文：鉄を鍛える音】・澎的一聲掉在一個窟窿裏【訳文：澎と穴に落ちる】

AA型（⑮－⑱）

⑮ㄆㄚ ㄆㄚ/pa pa/　打嘴巴聲（頬を打つ音）

⑯ㄆㄚㄦ ㄆㄚㄦ/paer paer/　拍掌聲（拍手の音）

⑰ㄆㄦ ㄆㄦ/per per/　小槍(小銃)

⑱噗噗/pu pu/　火車【訳：汽車】

AB型（⑲－㉔）

⑲啪嗒・ㄆㄚ ㄉㄚ・哌打/pada/　雹子【訳：雹】・雨が傘にあたる音・拍物聲【訳文：物を叩く音】

⑳碰璫/peng dang/　碰璫的一聲把門關上了【訳文：碰璫とドアを閉めた】

㉑砰磅/ping pang/　大擊聲【訳文：強い衝撃の音】・拍物聲【訳文：物を叩く音】

㉒ㄆㄧ ㄌㄚ/pi la/　大雨聲【訳文：大雨の音】

㉓噗騰・撲騰/pu teng/　心裏還噗騰噗騰的直跳了【訳文：胸は噗騰噗騰と動悸する】・撲騰的一聲，掉在水裏去了【訳文：撲騰と水に落ちた】

㉔ㄅㄦ ㄌㄦ/per ler/　摇波浪鼓兒【訳文：でんでん太鼓を振る】

意味分野別から見ると、⑲（雹子）及び㉒などは自然現象の音を模倣し、他の/p/の単音

節擬声語と2音節擬声語（⑫ - ㉔）の大部分は物の音と動作にかかわる音を表すものである。それらはほとんど拍子木を打ち鳴らす音や、頬を打つ音、物を叩く音、鉄を鍛える音、でんでん太鼓の音、大雨の音などのような打撃または衝撃の自然音である。これらの自然音の力強さが感じられるし、物体と物体の対抗する運動状態が見られる。この点で、/p/の音象徴的傾向は/b/と似ている。

⑫～㉔の例を比較すると、⑰⑱などは空間の限界を突破する運動によって生成される自然音の現象を表すのに対して、それら以外は衝撃の運動状態によって生成される自然音の減少が多い表すことがわかる。全般の特徴として、/p/は力のある、衝突のような運動で生成される音を表している。

以上をまとめると、両唇破裂音/b，p/の擬声語は物の音や動作にかかわる音などの意味分野に集中した分布を示し、音象徴的特徴は非常に近似している。/b，p/の擬声語は物の音における衝撃の音を中心とする意味分野において頻繁に出現している。それらは物体に打ち当たる運動の状態を表すことを主とし、衝撃・打撃の運動で生成される自然音を表す。また、人や動物の声、自然現象の音を模倣するものが少ない概況から見ても、対抗の運動における衝撃・突破の状態が/b，p/の主な音象徴的意味であることがわかる。

（2）歯茎破裂音/d，t/

舌尖音破裂音の/d，t/は両唇破裂音/b，p/と同様に擬声語の常用音韻である。

/d/を第一音節の声母に持つ擬声語は次の例がある。

・/d/

A型（①，②）

①ㄉㄤ ㄦ/dangr/　電鈴（ベル）

②咚/dong/　烏龜就從天空裏掉下來，咚的一聲把身子摔的粉碎【訳文：亀が咚と空から落ちてかめの甲が粉々に砕かれた】

AA 型（③ - ⑧）

③ㄉㄤ ㄉㄤ/dang dang/　電車の鈴 ・ 那噹噹的響是在隔壁兒拏斧子劈柴火呢【訳文：ㄉㄤ ㄉㄤと響いているのはが隣の人が斧で薪を割っている音である】 ・ 我剛纔聽見自鳴鍾噹噹的打了兩下兒似的【訳文：私は先ほど自鳴鐘が「噹噹」と2回響いた音を聞いた】

④ㄉㄤㄦ ㄉㄤㄦ/dangrdangr/　打銅鑼【訳文：銅鑼を叩く】

⑤嘚兒々々/der der/　鐘（小）

⑥鏑鏑/deidei/　小鑼兒鏑鏑的聲兒【訳文：銅鑼が鏑鏑と打ち鳴らされる音】

⑦咚咚・ㄉㄨㄥ ㄉㄨㄥ/dongdong/　鼓（太鼓）

⑧ㄉㄨㄤ ㄉㄨㄤ/duangduang/　打銅鑼 / 瓷器摩擦聲【訳文：磁器が摩擦する音】

AB 型（⑨ - ⑫）

⑨叮噹/dingdang/　院子裏又是刀鎗叮噹的響【訳文：庭ではまた刀や矛などの音が叮噹と鳴り出した】・你聽聽外頭叮噹叮噹的那是甚麼聲兒【訳文：聞いてみて、外で叮

噹叮噹と音がしている。あれは何の音か】・打冰盞兒[260]【訳文：冰盞兒（碗）を叩く】

⑩丁東/dingdong/　丁東，丁東，水來彈琴魚來聽【訳文：丁東、丁東、河水が琴の音のように流れ、魚がその音を聞く】

⑪丁令/dingling/　丁令，丁令，風來搖鈴鳥來聽【訳文：丁令、丁令、風が鈴を吹き動かし、鳥がその音を聞く】

⑫ㄉㄦ ㄌㄥ/der leng/　吹笛【訳文：笛を吹く】

/d/の擬声語の例には、ベル、時計、銅鑼、鼓、琴などのような「叩く」音を発するものが多く見られる。他に、「丁東」という水の流れる音、「ㄉㄦ ㄌㄥ」の笛の音がある。張力のある面で生成される打撃の音と比べていうと、これは弛緩した運動との関係が明らかである。

第一音節の声母が/t/である擬声語はあまり多くない。

・/t/

A型（⑬）

⑬ㄊㄨㄟ/tui/　唾沫（つばを吐く）

AA 型（⑭）

⑭噹噹・鏜鏜・ㄊㄤ ㄊㄤ/tangtang/　但是賣的鑼大些兒，噹噹的響【訳文：しかし、売っている銅鑼は大きく、噹噹と音がする】・鏜鏜的鑼聲兒【訳文：鏜鏜とした銅鑼の音】・釘鐵釘聲（釘を打つ音）

AB 型（⑮）

⑮鼕鏜/tongtang/　處處聽得鼕鏜鼕鏜，打鼓敲鑼的聲音【訳文：あちこち鼕鏜鼕鏜とした銅鑼の音が聞かれる】

声母が/t/である擬声語は主に銅鑼や太鼓（鼓）などの自然音を模倣する「叩く」音である。この点で、/t/の音象徴的意味は/d/との差異が明らかではない。

/d，t/の擬声語の例の⑩⑫⑬以外すべては打撃のイメージを持つものである。それによって、/b，p/が持つ強い衝撃のイメージと異なり、/d，t/の叩く強さがやや弱いと感じられるであろう。⑩（液体の流動）、⑫⑬（進められる運動状態）から見ると、/d，t/の音象徴的イメージは打撃・衝突の運動状態を表しているというより、摩擦・突破の運動状態の印象を持つというほうが相応しい。

⑨の「叮噹」、⑭の「噹噹・鏜鏜」、⑮の「鼕鏜」は双声型AB型擬声語である。自然音を表す場合、AB型の第2音節Bの声母の/d，t/の音象徴には、Aの声母がイメージを継続し、自然現象の状態や性質が変わっていない意味がある。つまり、それはAの声母とBの声母の

[260] 街頭で「酸梅湯」という飲み物を売る人は持つ木または鉄または銅の物である。それを叩いて振動して響く音によって客寄せをする－筆者注

音象徴的意味が同じであることを意味する。

ベルや銅鑼、鼓などが最も頻繁に見られる模倣対象である現状から、/d，t/の音象徴的意味を概括すると、/b，p/と比べ、/d，t/は「叩く」の印象が明らかで、力強くない運動を表す状況が顕著である。/d，t/の衝突・衝撃の運動のイメージが弱くなると同時に、力の弱くなる、摩擦する運動状態が出ているようである。例えば、流体的な運動を表す対象とするものが見られる。しかし、/d/と/t/の音象徴的意味にははっきりした差異はが区別されない。

音を作り出す運動の状態から/ b，p，d，t/の差異を見ると、/d，t/で始まる擬声語が描写している自然音は運動の力強さ或いは対抗する運動が持つ張力の点で、/b，p/の場合より弱いことがわかる。つまり、/d，t/が描写する自然音は主に張力の弱いまたは弛緩した表面において、軽く叩かれるような運動によって生成される。

（3）軟口蓋破裂音/g，k/

舌根破裂音の/g/が第一音節の声母である擬声語は中国語関係書において極めて多い。それに対して、/k/が第一音節の声母で始まる擬声語はごくわずかである。その原因はそれらの音象徴的意味の差異にあるのか。それについて、擬声語の用例・語釈を分析することを通して検討する。

・/g/

A型（①，②）

①哈・嘎/ga/　天鵞哈的一驚，高叫了一聲【訳文：白鳥は驚いて、哈と叫び出した】・仙鶴【訳：鶴】

②嘎・呱/gua/　有一個孩子呱的哭了起來【訳文：一人の子供が呱と泣き出した】

AA 型（③ - ⑦）

③嘎嘎・嘎々・噶々・ㄍㄚ ㄍㄚ/gaga/　家鴨子【訳：鴨】・小鶏兒(ヒヨコ)・ 猿鳴聲【訳：猿の啼き声】・打草堆裏跳出一個長毛紅臉的東西，嘎嘎的説【訳文：草薮から飛び出した長い毛と赤い顔のあるものが嘎嘎と叫ぶ】・大人笑聲【訳文：大人の笑い声】

④喂兒喂兒・根兒根兒/genr/　婦人笑聲【訳文：婦人の笑い声】・公雞【訳：雄鶏】

⑤咕儿咕儿/gurgur/　黄莺【訳：黄鳥】

⑥ㄍㄨㄚ ㄍㄨㄚ/guagua/　 鴨子（アヒル）・蛤蟆（蛙）・抓癢癢【訳文：むずむずするところをかく】・雁【訳：雁】

⑦蝈々兒/guo guor/・ㄍㄨㄛ ㄍㄨㄛ/guo guo/　蟈蟈兒（キリギリス）

以上は/g/を第一音節の声母に持つ単音節擬声語とAA型擬声語の例である。意味分野の分布から見ると、それらの語例は人の声或いは動物の声を模倣するもので、動物の声のもののほうが多い。/b，p，d，t/の物・自然現象・動作などによる力のある運動というイメージと比べ、/g/は生物の発声というような内部の運動形式[261]と生物の発声主体を表す印象を持

[261] 近似の言い方は浜野祥子（2014）において日本語子音の/k，g/の音象徴を考察する場合、「外と中の間の運動」として出されている。浜野（2014）が指摘したように、「外と中の間の運動」は具体的には「上

つ。

次にAB型擬声語（⑧ - ㉖）の例を挙げる。

⑧噶喳/gacha/　電閃雷鳴【訳文：稲妻が走り、雷が鳴る】・木頭　木板掉地 【訳文：木片　板が地に落ちる】

⑨嘎噠・咯噠/gada/　斑鳩撞在玻璨上,嘴尖兒嘎噠的一聲【訳文：斑鳩の口先が嘎噠とガラスにぶつがる】・咯噠一聲翻了【訳文：咯噠と倒れる】

⑩ㄍㄚ ㄉㄨㄥ/gadong/　大敞車（主に貨物の運送に用いられる、荷台を備えた自動車のようなものを指すー筆者注）・八車

⑪ㄍㄚ ㄌㄚ/ga la/　小孩兒（子供）[262]

⑫嘎吱/gazhi/　扁擔【訳：天秤棒】・皂鞋【訳：纏足の靴】・靴下・皮鞋にて歩くカチカチと云う様な音

⑬ㄍㄚ ㄓㄖ/gazhir/　歯ぎし

⑭咯噠・咯嗒/geda/　咯噠一聲翻了【訳文：咯噠と倒れる】・時計のカチカチと云ふ音

⑮ㄍㄥ ㄍㄚ/gengga/　打冰盞兒【訳文：「冰盞兒」を叩く】

⑯咯儿噶/gerga/　雁【訳：雁】

⑰咕噔/gudeng/　車聲也、車之顛簸言【訳文：車の音、車が揺れた音】

⑱咕咚/gudong/　聽見咕咚一聲兩個人都掉在河裏去了【訳文：咕咚と二人が川に落ちた音が聞こえた】・衆人上房下房【訳文：多くの人が屋根に上り、屋根から下りる】

⑲咕嘟/gudu/　鴿子【訳：鳩】 / 煙筒冒煙【訳文：煙筒から煙が出る】・熱湯のたぎる音

⑳咕嚕/gulu/　石頭片落下（石塊が落ちる）・他餓的肚子裏咕嚕咕嚕的【訳文：彼はお腹がすいて、咕嚕咕嚕と鳴った】・電閃雷鳴【訳文：稲妻が走り、雷が鳴る】

㉑咕摟/gulou/　咕摟咕摟嚥【訳文：咕摟咕摟と飲み込む】

㉒咕嚨/gulong/　打大鼓【訳文：「大鼓」をたたく】

㉓咕啷兒/gulangr/　吃喝聲【訳文：食べる音、飲む音】

㉔咕嗵/gutong/　打樓梯掉下來【訳文：階段から落ちる】

㉕聒噠・呱打/guada/　聒噠一聲（泥丸子）放下去【訳文：聒噠と泥団子が落ちる】・拍物聲【訳文：物を叩く音】・大擊聲【訳文：強い衝撃の音】

㉖咣噹/guangdang/　關上門【訳文：戸を閉める】・廠車（主に貨物の運送に用いられる、荷台を備えた自動車のようなものであるー筆者注）

AB型擬声語は、単音節擬声語及びAA型擬声語と比べると、/g/によって表現された音象徴的意味が多様である。例えば、外と中の間の運動によって発する声・音を模倣する例は⑪（子供の声）、⑯（雁の鳴き声）⑲（鳩の鳴き声）、⑳（お腹から発する音）などである。

下ないしは、外から中へ、あるいは中から外への運動」（浜野祥子 2014　p29）を指す。

[262]「ㄍㄚ ㄌㄚ」は『北京語の味』の語である。「小孩兒（子供）」はそれについた語釈である。『北京語の味』における擬声語のまとめ方によって、「ㄍㄚ ㄌㄚ」は子供の声を描写するものであると思う。

衝撃・「叩く」の運動状態は自然現象の音、動作にかかわる音、物と物の作用により発する音などの意味分野を表す例である⑧⑨⑭⑮⑰⑳㉒㉔㉕㉖において見られる。張力の弱い表面または空洞を通る運動で生成される音は⑫⑬㉑㉓において模倣されている。このように、/g/の自然音と運動状態の種類が多様であることがわかる。/g/が持つ多様なイメージにおいて見られる共通点は音・声の厳しさ、動作・状態の確実さ、力のある運動、物の重さ・頑丈さなどである。

有気音/ k/の擬声語の用例・語釈は非常に少ない。

AA型（㉗，㉘）

㉗ㄎㄦㄎㄦ /ker ker/　咳嗽（せき）

㉘喀兒々々/ker ker/　咳嗽【訳文：せき】

AB型（㉙ - ㉟）

㉙噶喳/kacha/　電閃雷鳴【訳文：稲妻が走り、雷が鳴る】

㉚ㄎㄚ　ㄊㄚ/kata/　屋門關閉聲【訳文：ドアを閉める音】

㉛㕣㕣/kecha/　　㕣㕣的給一聲，我就結了【訳文：㕣㕣と私は殺される】

㉜喀哧/kechi/　扁擔【訳：担い棒】・電閃雷鳴【訳文：稲妻が走り、雷が鳴る】

㉝ㄎㄨ　ㄉㄨㄥ/ku dong/　物之下落声（物を落とした音）

㉞㾆嗵/kutong/　木頭木板掉地【訳文：板が地に落ちる】

㉗㉙㉜の突破の感じ、㉘㉚㉛の自然音の確実さ、㉙の力を注ぐ動作の確実さなどの例は、/g/と同様、音・声・動作の「厳しさ、きつさ、確実さ」のイメージを持つ。つまり、/g/と/k/の共通の音象徴的イメージは自然現象や自然音、動作などの確実さである。さらに言うと、/g/と/k/の自然音とも持つ。また、/k/と/g/は表す模倣対象と状態が多様であるが、「重い」イメージが比較的よく見られるが、この集中的傾向は弱い。

（4）歯音破擦音/z，c/

/z，c/は気流が歯と舌尖の隙間をすり抜ける摩擦のある音である。それらを第一音節の声母とする擬声語は中国語関係書において多く見られる。例えば、「①ㄗㄦ/zir/　接吻【訳文：口付ける】・電車の軋る音・耗子（鼠）、②ㄗㄦ　ㄗㄚㄦ/zir zar/　鉋木聲（鉋をかける音）、③ㄗㄦ　ㄗㄨㄦ/zir zur/　胡琴（胡弓）、④ㄘㄦ　ㄘㄦ/cer cer/ 喚頭・鋸木聲（木を鋸く音）・切菜聲（庖丁で切る音）・裂布聲（布を裂く音）」などである。それらの音韻象徴的な意味には、障害の感じが存在しているようである。つまり、声の力や動作の強い摩擦感などのイメージが感じられる。特に、力のある張った表面で運動する状態、摩擦しながら前進するイメージが明らかである。また、/z，c/の音象徴的意味は音節の/zi/[263]と近似する例が見られる。例えば、「⑤嵫（兒）嵫（兒）・孜孜/zizi/　大貓和耗子【訳文：大きい猫と鼠】・鷹・小雞兒、⑥ㄗㄧㄙ/zi s/　放屁（おなら）、⑦嵫嵫嘰嘰/ziziniuniu/　小車子【訳文：小さい車】」、「⑧ㄗㄚ/za/　剪子絞布聲（鋏で布を切る音）などがある。⑨擦啦/cala/　就聽見擦啦擦啦的彷彿有人走道兒似的　⑩ㄘㄥ・蹭/ceng/　蹭一聲上了房【訳文：蹭と屋根に

[263] /ci/の例は中国語関係書にないため、本文の中に出さない。

跳ぶ】・磨刀聲（砥石の音）」の/c/の例と比べ、/z/の摩擦感のある運動状態には、強力のある感じが取られる。更に/z/と/c/の音象徴的意味の差異をいうと、/c/は摩擦する運動の速さを表しているのに対して、/z/の音象徴的意味の重点はその状態の力強さにおいている。

（5）捲り舌音破擦音/zh，ch/

捲り舌音/zh /の例（① - ②）を下に示す。

①吱兒吱兒/zhi（r）zhi（r）/　耗子・老雕【訳：鼠・わし】・裁紙疊紙【訳文：紙を断裁し、折る】

②喳喳・咋々/zhazha/　小鳥の声・鸚哥【訳文：鸚鵡】

③吱兒喳兒/zhir zhar/　小的幾個，每天吱兒喳兒的【訳文：小さい子供たちは毎日吱兒喳兒と騒ぐ】

上の例から見ると、歯音/z/が主に物の音と動作にかかわる音を模倣するのと異なり、捲り舌音/zh /は動物（鼠・鳥）の声を中心にする。/zh/は模倣する自然音が気流や運動などの障害を突破した結果とするもので、/z/と似ている。

/z/の場合に似て、/ch/は舌尖母音/-i/（[ʅ]）と組み合わさる擬声語が数多い。

④哧・叱・嗤/chi/　外國馬車・像个罵狗一樣叱的一聲罵他出去【訳文：犬をののしるような「チッ」という声でののしって彼を出て行かせた】・哧的一聲，刀入肉之聲【訳文：哧という音，包丁が肉を挿入した音】・哧的一聲，把麥子割了一下子【訳文：哧と音をさせて一回麦刈りをした】

⑤哧兒哧兒・吃兒吃兒/chir chir/　撕布聲【訳文：布を裂く音】・大貓和耗子【訳文：大きい猫と鼠】

⑥嗤嗤嗤・彳彳彳/chi chi chi/　嗤嗤嗤，快來救火！【訳文：嗤嗤嗤、速く消火して】・汽車（自動車）

動物の声を主な模倣対象とする/zh/と違って、/ch/の大部分の例は動作にかかわる音と物の音を模倣する。/ch/が描写する動作は/zh/より力強い障害を突破するイメージを持つようである。上の例の他に、その突破した状態は「⑦欻/chua/　一条狗害怕，欻一聲跳过墻去【訳文：１匹の犬が怖がって欻と牆壁を飛び越えた】・把肉丁兒和佐料兒往鍋裏一倒，欻的一聲【訳文：さいの目に切った肉と調味料を鍋の中に入れると、欻という音がした】・沸きたる油に物を浸けたる時の音　⑧欻欻/chua chua/　忽聽見窗戸紙欻欻的響【訳文：突然に障子紙が欻欻と響いてきた】」の例においてよりはっきりと感じられる。

このように、自然音の摩擦のイメージという意味要素は/zi（r），zhi（r），chi（r）/において見られる。しかも、/z，c/の場合と較べ、/zh，ch/のイメージは柔らかくなる。また、/z，c/より、/zh，ch/のイメージは運動の強さの点で弱いようである。

（6）硬口蓋破擦音/j，q/

中国語関係書における擬声語の中には、第一音節の声母が有気音/q/のものが見られない。無気音/j/は、第一音節において、/ji/音節がほとんどである。例えば、

①唧唧・ㄐㄧ　ㄐ/ㄧji ji/　家雀兒(雀）・耗子（鼠）・小耗子唧唧的叫了一聲【訳文：小さ

い鼠が唧唧と鳴いた】・蟲聲唧唧【訳文：唧唧という虫の声】

②唧唧咕咕/jijigugu/　你們倆人唧唧咕咕的説什麼呢【訳文：お2人は何を唧唧咕咕としゃべっているか】

③唧唧噥噥/jijinongnong/　他那広唧唧噥噥的，聽不出來説什麼【訳文：彼がそのように唧唧噥噥と話して、何が言ったのかが聞き取れない】

④唧唧哇哇/jijiwawa/　小孩子們你別唧唧哇哇的亂鬧【訳文：子供のみんな、唧唧哇哇と大騒ぎをしないでください】

⑤唧咋/jiza/　家雀兒【訳文：雀】

⑥嘜嘜・咖咖・ㄐㄧㄚ ㄐㄧㄚ/jia jia/　小鶏兒(ヒヨコ)・鵲雀の鳴聲【訳文：鵲と雀の鳴き声】

/j/を第一音節の声母とする擬声語は人と動物の声を模倣するものである。それらの自然音はきつい感じを持ちかつ細い話し声（こそこそ話）や虫・鳥の鳴き声などである。それらの自然音には、運動の抑圧の状態または力のある状態が窺える。その運動は内部に発生した現象や中から外への運動である。

（7）まとめ

破裂音の/p，b/、/t，d/、/k，g/、破擦音/c，z/、/ch，zh/、/q，j/の音象徴的意味には差異が見られる。有気音・無気音の声母の音象徴には、それらの対立が運動（打撃・衝撃・叩く・流動など）の強さの程度や状態（対抗・突破・進めるなど）の変化で弁別される。破裂音と破擦音の音象徴的差異は、破裂音は主に強い対抗の運動を表すのに対して、破擦音は力弱い摩擦のような運動を模倣する傾向がある。

6.3.2.2　摩擦音の声母

破裂音・破擦音と較べ、摩擦音は狭くなった音声器官を通る気流がよりスムーズになり、摩擦を生じさせて発する音である。そのため、流動・滑り・転がる運動の状態のイメージがある。ここでは摩擦音の唇歯音/f/、歯音/s/、捲り舌音/sh/、捲り舌音/r/、硬口蓋音/x/、軟口蓋音/h/ の音象徴の特徴の異同を検討する。

（1）唇歯音/f/

「①ㄈㄨ ㄈㄨㄦ ㄧㄠ/fu fur yao/　喧嘩する時 ②ㄈㄨㄊ ㄧㄢㄦ/fu tianr/　伏天兒（蜩）」の第1音節が描写している人と蝉の声は力強くなく、激しくなく、緩く運動するイメージを持つ。その音象徴的イメージは阻害のあるが、順調に推進される前進の運動の初発状態におけるものであることが窺える。

上の2例のみから/f/の音象徴の一点でも明白にすることは難しい。しかし、摩擦音全体の音象徴から/f/の音象徴の可能な傾向を検討するのは一つの試みの方向である。

（2）歯音/s/と捲り舌音/sh/

歯音/s/が第一音節の声母である擬声語には次の用例・語釈がある。

①ㄙㄚ/sa/　剪子絞紙聲（鋏で紙を切る音）

②ㄙ…ㄙ/si si/　馬

③嘶嘶・ㄙㄧㄙㄧ/si si/　撒紙聲（紙を破る音）・嘶嘶的叫狗【訳文：嘶嘶と犬を呼んでいる】・鋼筆寫字聲（ペンの音）

④颼/sou/　颼的一聲抽出一把刀來【訳文：颼と刀を引き出す】

⑤颼兒/sour/・颼颼/sou sou/　風聲【訳文：風音】（颼颼的風）【訳文：颼颼と吹いている風】

⑥簌簌・ㄙㄨ ㄙㄨ/su su/　簌簌的掉下眼淚來【訳文：簌簌と涙が落ちる】

①－⑥の自然音は摩擦のような障害を伴う運動がどんどん進められる過程に発したものである。それらは気流の運動で発されるものや（馬の啼き声、涙が落ちる音）、物と物の摩擦による生成される音（紙を切る音、ペンの音、刀を引き出す音など）であるが、抵抗が弱く、なめらかな発声の運動で生成されるものと見なされる。また、それらの流動や突き進む運動に持っている抵抗が弱くなると同時に、力の強さも弱くなる。

捲り舌音の/sh/はスムーズに運動できるイメージを表す点で、歯音/s/と近似した特徴を持つ。用例・語釈を挙げると、次のようなものがある。

⑦ㄕㄚ ㄕㄚ/sha sha/　筐籮簸豆聲笊にあたる豆の音

⑧倏/shua/　電閃雷鳴【訳文：稲妻が走り、雷が鳴る】

⑨倏兒/shuar/　雪聲・雨聲【訳文：雪の音・雨音】

⑩倏喇・倏啦/shua la/　抖摟紙・砂土聲・風吹樹葉子【訳文：紙を振る・砂土の音・風が葉にあたる音】

⑪涮涮・ㄕㄨㄚ ㄕㄨㄚ/shua shua/　風が葉にあたる音・雨聲【訳：雨音】・風聲【訳：風の音】

上の例で示した豆の音、雷・雨の音、風の音などはすべて流動・転がりの運動の状態である。その状態には、/sh/が自然音を生じる運動の順調さを表していることがみられる。/sh/は運動の障害がより弱くなると同時に、ゆったりと運動するというイメージを表す。

このように、/s/と/sh/の音象徴的イメージを比較すると、/s/のきつい感じと異なり、/sh/の音象徴的イメージはもっと広い空間において発生した接触による音を表している。

（3）捲り舌音/r/

/r/は有声音である。これは/sh/と異なる点である。

①ㄖㄦ ㄖㄦ/r(i) r(i)r/　金鍾兒（鈴虫）

②ㄖㄦㄧ ㄖㄦㄧ/r(i)r yi r(i)r yi/　髻了兒（蝉）・蛐蟮（蚯蚓）

③吒吒/renren/　吒吒的轉着飛的蚊子【訳文：吒吒と飛び回る蚊】

④紉々・吶吶/rengreng/　撮石頭【訳文：石塊を投げる】・蒼蠅【訳：蝿】・蜜蜂（蜂）・琴的風箏 【訳文：琴が付いた凧】

⑤ㄖㄧㄥ/ring/　蚊子(蚊)

⑥揉/rou/　撮石頭【訳文：投石する音】・忽然疾過之聲【訳文：突然に速く通る】・揉的一聲【訳文：揉という一声】

⑦ㄖㄨㄥ/rong/　喚頭（訳文：街頭で品物を売り歩く人が持つ木または鉄の物である。そ

れを叩いて客寄せをする－筆者注）

①②④（蝿・蜂）の自然音は動物の声であり、③④⑤⑥は動作にかかわる音であり、④（琴の音）⑦は物の音である。それらの例からうかがえるのは運動状態と空間が多様であることである。例えば、人或いは動物の動作、物体と物体の作用などの状態があり、また、その運動の空間が表面或いは内部の 1 つのみに限られていないようである。そのため、/r/の音象徴には集中的なものが見にくい。

（4）硬口蓋音/x/

第一音節が/x/である擬声語において、その/x/は主に/i/と結合して/xi/音節を構成する。

①唏啦嘩啦/xilahuala/　墻倒的【訳文：牆壁が倒れる音】

②唏啷嘩啷/xilanghualang/　鎖上門【訳文：戸締りする】・唏啷嘩啷的把門都鎖上了【訳文：戸締りする・唏啷嘩啷と家の戸を閉ざした】

③稀溜逛噹/xiliuguangdang/　街上的雪都化了道兒上稀溜逛噹的不好走【訳文：通りの雪が融けて、道路が稀溜逛噹と歩きにくい】

④嘻嘻・嘻嘻哈哈・吸吸哈哈・唏唏哈哈/xixihaha/　笑【訳文：笑う（笑い声）】

⑤悉悉索索/xixisuosuo/　樹葉只能悉悉索索發幾陣悲涼的聲響【訳文：葉が（揺らされて）悉悉索索と悲しい音を立てる】

⑥吁吁/xuxu/　腳伕吁吁帶喘的追了來【訳文：脚夫は吁吁と喘ぎながら追ってきた】

①－⑥における自然音はそれぞれ①②やぶつかり合う音、③滑り音、⑤摩擦の音、④笑い声、⑥喘ぎ声）で、多様な運動状態で生成されるものである。それらの音象徴的イメージは運動の自然的な変化を含んでいる。そして、その運動が力強くなく、緩いのである。

（5）軟口蓋音/h/

①唿・颼・（呼）/hu/　唿的一聲、屋門開了【訳文：唿と家の戸が開く】・可巧一陣風颼的一聲，就把假頭髮給颳跑了【訳文：折よく一陣の風が颼と吹いてきて、かつらか吹き飛んだ】

②ㄏㄨㄚ/hua/　瀑布（瀧）

③吭/heng/　擤鼻涕（擤鼻子）【訳文：鼻をかむ】

/h/の例は少なく、描写の自然音もあまり多くない。自然音は風音と滝の音を主とする。実際、風の音は/s/と/sh/の例にも見られる。それらを比べて言うと、音声の印象が持つ運動状態の摩擦感、緊張感などの点で、/h/は/s/と/sh/より弱い印象が容易に感じられる。模倣の自然音を表す点で、/h/はなめらかな流動の状態と自然音の「多量」というイメージが感じられる。

6.3.2.3　鼻音の声母

（1）両唇鼻音/m/

中国語関係書における鼻音/m/を第一音節の声母に持つ擬声語に次のものがある。

①ㄇㄦ ㄇㄦ/mer mer/　吹笛（笛の音）

②㖞兒㖞兒/menr menr /　火車的哨兒【訳文：電車の汽笛】・牛の聲

③喵喵/miaomiao/　猫の鳴聲

④咪嘤/miyao/　猫の聲

⑤咩々/miemie/　羊の鳴聲

⑥哞兒哞兒/mourmour/　牛の聲

模倣対象は①②以外動物の声を表すものである。笛の音でも、動物（牛、猫、羊など）の声でも、それらの共通点として、発声の運動が抑制される感じは明らかである。具体的に見ると、物の音/mer，menr/は力のある、激しくない発声状態による音である。近似の発声特徴は牛の声/mour/にも見られる。また、/mi・mie/の描写特徴は、声の大きさを表すというよりその明暗を表す感じのほうがはっきりしているといえる。これによって、/m/のイメージは落ち込む状態を表している。

（2）歯茎鼻音/n/

両唇鼻音/m/と較べ、歯茎鼻音/n/は出現頻度がより低い。

①喃喃/nannan/　老燕便喃喃的教小燕子説話【訳文：親鳥の燕は喃喃と子供の燕に話しを教える】

②嚷嚷・ㄋㄧㄠ ㄋㄧㄠ/niaoniao/　貓叫【訳文：猫の鳴き声】

③喏喏兒/nuonuor/　鈴鐺就喏喏兒響【訳文：鈴が喏喏兒と鳴る】

猫の声を表す擬声語である歯茎鼻音/n/の/niaoniao/と両唇鼻音/m/の/miaomiao/から見ると、/n/と/m/の音象徴的イメージにははっきりした相違が区別できない。ただし、他の例によると、/n/は澄む感じが/m/より強い。また、/n/は鳥・猫の声や鈴の鳴る音などの大きさ或いはピッチが現れるイメージより、動物の鳴き声のような自然音の低いかつ重い感じをもつ音色を表すイメージが鮮明である。

6.3.2.4　側面音の声母と零声母

第一音節の声母が歯茎側面音/l/である擬声語は極めて少ない。①「隆隆隆/longlonglong/隆隆隆！隆隆隆！誰在打大鼓？不！這是雷響」【訳文：隆隆隆、隆隆隆、誰かが太鼓を叩いているのか。そうではない。これは雷の音である】から見ると、/l/の例は強さのある転がる運動を描写する。②「嘞嘞/lele/　豚の鳴聲」と①の共通点が自然音の濁る音色のイメージである。

零声母/y，w/の音象徴はそれぞれ単韻母/i，u/に非常に近い特徴を持つ。それらの意味を詳細にいうと、/yiyiyaya，yingying/のわずかな擬声語において、零声母/y/は動作の「軽い・微か」のイメージを持つが、/wawa，wu，wowo，wang，wengweng/などの擬声語のもつ/w/のイメージは内に発生することを表す、緩く動く運動の状態、力を入れる感じがある。

/l/、零声母が第一音節の声母である擬声語は少ない。それらの音象徴の特徴を考察しても、全面的な結果を出すことが難しい。それゆえ、さらに多くの種類の擬声語を考察する必要がある。また、本研究は中国語関係書における擬声語の意味と語頭の声母との関係を考察することを通して、声母が持つ一般的な音象徴的イメージを検討するものである。これは試論のようなもので、中国語の全面的な音象徴特徴のほんの一部である。

6.3.3　韻母の基本的な音象徴

本節では単韻母と一部の複合韻母・鼻韻母の基本的な音象徴を考察する。その中で、児化韻/-r/にも触れる。考察の対象は中国語関係書の単音節擬声語とAA型擬声語の韻母である。

先行研究において母音の基本的な音象徴的イメージはまだ全面的にはっきりしていないが、大体の方向が見られる。秋田喜美（2013）の「オノマトペ・音象徴の研究史」は関連の先行研究における英語、日本語、セマイ語（オーストロ・アジア語族）、韓国語などの言語の母音の音象徴に関する研究結果について「通言語的には母音象徴による語彙的対立の方が一般的なようである」[264]が、同時に一般的な意味分類・性状表現が見られると指摘している。例えば、篠原和子・川原繁人（2013）は「どの言語でも（一部の例外を除き）共通の音象徴的反応を引き起こした」（1）母音の開口度、（2）母音の前舌性・後舌性、（3）子音の有声性、という3要素から、中国語・英語・日本語・韓国語の4言語における「大きさ」の母音音象徴を認知実験によって対照している。考察によって、「母音の後舌性が通言語的に「大きさ」のイメージを喚起すること、母音の開口度も、やや弱いものの「大きさ」のイメージに関与すること、また子音の有声性も通言語的に「大きさ」のイメージを喚起する傾向があることがわかる」[265]という結果を出している。先行研究から見ると、母音の音象徴は形、広がり、運動（状態）などのイメージから論述されている。それらの音象徴的意味は中国語擬声語の韻母の音象徴を考察するために研究の方向を提供できる。

韻母の音象徴を考察するための擬声語の例が基本的に声母の音象徴を検討した場合（本章の 6.3.2）において取り上げられているため、下文に擬声語及びその用例を挙げる必要がある場合、上に出現した場所を示すことにする。

（1）単韻母/a，e，i，o，u ，ü ，［ɿ］，［ʅ］/ [266]

中国語関係書における擬声語の韻母状況を調査することを通して、/a/は最も普遍的に用いられる韻母であることがわかる。零声母の音節にも、/ba/ （6.3.2.1（1）の①③④[267]の例参照）/pa/ （6.3.2.1（1）の⑫⑮）、/ga/ （6.3.2.1（3.）の①⑧⑨⑪）、/ka/（6.3.2.1（3の㉙㉚）、/sa/（6.3.2.2（2）の①⑦の例参照）などが第 1 音節である単音節と畳韻 2 音節擬声語には、/a/の「目立つ或いは大きい」の特徴が明らかである。/a/の擬声語の用例において、音象徴的イメージは、自然音の大きさ、場面の広さ、動態の激しさ、刺激と反応の強さ、対立の厳しさ、印象の深さ、状況あるいは情景の緊張感などの面で、他の単韻母と較べ、より明らかに見られる。次に、/b，p/の擬声語を例として、/a/の状況を見る。

---

[264] 秋田喜美（2013）は同時にこれは「音韻類型論との関係を含め今後検証が必要である」と指摘している。

[265] 「音象徴研究の普遍性ー大きさのイメージをもとに」（篠原和子・宇野良子（2013）『オノマトペ研究の射程　近づく音と意味』pp.43-57）　p45

[266] 特殊な母音として、舌尖母音の[ɿ]は z、c、s の後ろの-i の発音であり、舌尖母音の[ʅ]は zh、ch、sh、r の後ろの-i の発音である。ピンインでは、舌尖母音の[ɿ，ʅ]と舌面母音の[i]がともに i で表記される。ウェード式表記では、舌尖前韻母の[ɿ]は舌尖声母 tz[ts]、tz‘[tsh]、ss[s]としか結合せず、「û」と表記される。舌尖後韻母[ʅ]は声母の ch‘[tʂ h]、ch[tʂ]、sh[ʂ]、j[ʐ]としか結合せず、「ih」と表記させる。

[267] 擬声語の例は本論文での場所の表示である。

/b/は打撃・衝撃の運動で発するものを表すのに対して、/p/は力のある、衝突のような運動で生成されるものである。/b/の場合と比べ、/p/の音象徴的意味において感じられる「大きい・重い」のイメージは/a/などの韻母の意味特徴に深く関わっているようである。

/i/は/p，r，x，m/を第1音節の声母とする擬声語において見られる。例えば、ㄆㄧ ㄌㄚ/pi la/（大雨聲【訳文：大雨の音】）、咪嗂/miyao/（猫の聲）の他、6.3.2.2（3）の①②と6.3.2.2（4）の①②③④⑤などがある。韻母 [ɿ]・[ʅ]は単音節擬声語とAA型擬声語において声母種類が主に破擦音声母の/z，zh，c，ch，j/と摩擦音声母の/s，sh/の後ろに現れる。舌尖母音の[ɿ]は/zi，ci/（6.3.2.1（4）の①③⑤⑥⑦）、/si/（6.3.2.2（2）の②③）の擬声語にあり、舌尖後韻母[ʅ]は/zhi，chi/（6.3.2.1（5）の①④⑤⑥））、/ji/（6.3.2.1（6）の①②③④⑤）の例がある。それらの例から見ると、自然音・物などの小さい部分または小さい現象を表す特徴が明白である。例えば、人や動物の小さい声、自然現象の音・物の音・動作によって発する音の初発階段の部分などがある。舌尖母音の[ɿ，ʅ]と舌面母音の[i]の自然音には、同じ要素があり、それらの音象徴的イメージも非常に接近する。まとめてみると、舌尖母音の[ɿ，ʅ]と舌面母音の[i]の「小さい」の音象徴的意味には、細い・鋭い・きつさのあるイメージが窺える。

/u/は出現頻度が非常に高い単韻母である。単韻母/u/の単音節擬声語の大部分は/b, g, sh, s，x，h/と零声母などを声母とする音節のものであるが、畳韻のAB型擬声語に頻繁に用いられる。例えば、/bu(r)/（6.3.2.1（1）の②）、/pu pu/（6.3.2.1（1）の⑱）、/gu gu/（6.3.2.1（3）の⑤）、/su su/（6.3.2.2（2）の⑥）、/hu/（6.3.2.2（5）の①）、/gu du/（6.3.2.1（3）の⑱）、/gu lu/（6.3.2.1（3）の⑲）などがある。上の例が表している自然音には、汽笛の音、雷の音、熱湯のたぎる音、お腹からでた音などがある。これらの自然音は物・現象の中から突き出るものであるイメージが強い。また、突き出るものもの「多い・重い」の印象が見られる。他に、/u/の音象徴において、大きさのイメージも見られる特徴であるが、その顕著さが/a/より弱く、/i/より強い。

/e/と/o/はあまり常用されていない韻母である。まず、単韻母/e/で始まる/e a/（小孩兒哭・驢と騾子（馬驢の雑種））の他、/e/は単音節擬声語とAA型の2音節擬声語(例えば、/derder/鍾（小）・/gerger/鶏（の鳴き声)・/lele/豚の鳴声・/mermer/吹笛・/zerzer/燕子（燕の鳴き声）)を主とし、/ge，ke/のAB型擬声語もある。それらの自然音は全てが動物の声で、鈍い発声の状態をもつようで、穏やかかつ活発ではないものである。

単音節擬声語に単韻母/o/を持つ例はあまりない。/wo/（/o/）打飽嗝兒（おくびゲップ）と鶏の声の例がある。それらによって引き起こされた感じは広くない・大きくない状態、内包的かつ中性の性格などである。/o/の音象徴的イメージは/e/、/u/とはっきりと区別されないこともある。

中国語関係書において、/ü/の用例は「吁吁/xuxu/　腳伕吁吁帶喘的追了來【訳文：脚夫は吁吁と喘ぎながら追ってきた】」しかない。この例の分析によって/ü/の音象徴を明らかにすることは難しいため、本論文では/ü/を詳細に考察しない。

（2）少数の複合韻母

中国語関係書の擬声語の状況から見ると、介音＋主母音の/ ie，iu，ia，iao，ua，uo，uei /と主母音＋韻尾の/ai，ao，ou/などは常用の複合韻母である。そのうち、音象徴的意味が比較的明白であるものは、/ua/が１つだけである。/ua/の音節には、/gua/（6.3.2.1（3）の㉕）、/shua/（6.3.2.2（2）の⑧⑨⑩⑪）、/hua/（6.3.2.2（5）の②）などが多い。これらの例はほとんど自然現象の音を主な模倣対象とするものである。この点から見ると、/ua/の擬声語が模倣する自然音の主な特徴は広い表面に発生した目立った出来事ということであろう。更にその特徴を指摘すると、それらの自然音に反映している大きい・広い・強いイメージ、また、盛り上がるイメージがある。

（3）鼻韻母/-n/と/-ng/

鼻韻母/-n/と/-ng/の使用状況から見ると、/-ng/を主とする状況が窺える。音象徴的イメージにおける/-n/と/-ng/の相違も明らかである。/bang/（拍子木の叩き音）（6.3.2.1（1）の⑥）、/pang/　（鉄の打つ音）（6.3.2.1（1）の⑬）、/guangdang/（戸を閉める音）（6.3.2.2（3）の㉖）、/peng/（石の砕ける音・鉄を鍛える音・ものが穴に落ちる音など）（6.3.2.1（1）の⑭）などの/-ng/の例の共通点をいうと、自然音の大きさより、その力強さのイメージのほうが明らかである。/genr genr/（公雞・婦人笑聲）（6.3.2.1（3）の④）と/geng ga/（叩き音）（6.3.2.2（3）の⑮）、/pin pin si si/（話し声）と/ping pang/（強い衝撃の音・物を叩く音）（6.3.2.1（1）の㉑）などの韻母/-n/と/-ng/の例によって/-n/と/-ng/のイメージを比較すると、/-n/より/-ng/のほうが大きい・力強いイメージが顕著である。とはいえ、/-ng/と/-n/はともに運動の力強さのイメージを持つことがわかる。

（4）　児化韻/-r/

中国語関係書において、布を裂く音・大きい猫と鼠/chir chir/、鐘の音を表す/dangr/、ラッパの鳴る音の/menr wa/などの児化擬声語が多くある。それに、ある音韻の組み合わせ及びその児化韻の組み合わせの擬声語は同じ自然音を模倣する場合がある。例えば、/dangr/と/dang/はともに鐘の音を表すものであり、/zhir zhir/と/zhi zhi /は鼠の声を模倣するものである。これらの例から見ると、児化韻母の音象徴的イメージは自然音の控えめな感じを柔らかにすることである。児化擬声語が描写した自然音の特徴について、野口宗親（1995）は児化語が「音の小ささ，軽快さ，歯ぎれのよさなどを示す場合が多い」[268]と述べている。

6.3.4　声調の音象徴

まず、中国語の声調の描写特徴からすると、声調は自然音（客観）の確実さを強化し、表現（主観）の程度を深める機能を持つ。例えば、第1声の/chi/は一般的に、ものを切る・引き裂く音を表す。例えば、「哧（/chi/）的一聲、把麥子割了一下子」【訳文：哧（/chi/と、麦刈りをする）などがある。この場合、第1声は動作の順調さを表明しているイメージが強い。つまり、麦刈りという動作が容易に行われる。それに対して、第4声の「哧（/chi/）」

[268]『中国語擬音語辞典』p.xv

のイメージは動作の速さと確実さを中心にすることが明らかである。つまり、麦刈りという動作は速くできて、緊張感を持つのである。また、自然音の確実さも声調による感じの差異もある。1111[269]（第1声の声調組み合わせ）の/pi la pa la/（啵喇啪喇）は1種の自然音を記録するものである。それに対して、2313の声調型の/pi lou pu lou/（例えば、匹嘍撲嘍）は声調の原因で、自然音の本来の様子を模倣することに拘る印象を与える。1111の声調型の/pi lou pu lou/と比べると、2313の声調型の強化の作用が明らかである。4444型の/ga ga ga dan/、2444型の/pi la fei la/、2414型の/pilabala/などの例も同じである。

限られた言語音声によって複雑な自然音を模倣することは難しい。そして、/gu dong gu dong/の3131型の「嗵咚嗵咚」（腰かける音）と1111型の「咕咚咕咚」（馬車の揺れる音）のように、発音あるいは一部の発音が同じで、声調が異なる擬声語は見られる。その中のいくつかの擬声語は同一自然音を表す場合、声調の相違によって音象徴的イメージの曖昧さを区別できないことが避けられない。中国語関係書の擬声語には、第1声を取るものが最も多い。第2・3・4声と比べ、抑揚のない第1声は持続的・穏やかなイメージを持つ。第1声の音象徴的イメージと比べ、第2・3・4声は変化に富む自然音の鮮明な音色を模倣する傾向を持つ。122型の/dinglingling/（鈴の音）と2型の/peng/（穴に落ちる音）などにおいて、第2声は小さい・軽い・弱く遠くなるイメージを持つのに対して、3型の/bur/（気体の漏れる音）に見られる第3声のイメージは強いが高くなく、緩いことである。114型の/gagadaner/（鶏の鳴き声）と444型の/gagadaner/（お腹が鳴る音・鶏の鳴き声）、1型の/wa/（泣き声）と4型の/wa/（泣き声）、11型の/guangdang/と24型の/guangdang/の対照によって、第4声が持つ硬い・速い・はっきりするイメージが感じられる。また、上に出された例の声調現象において、擬声語の声調の使用が持つ主観的な傾向も見られる。例えば、話者の態度と心持ちなどがある。この現象は擬声語の模倣の重点と深く関わっている。つまり、第1声は自然音の内容に対して基本的な模倣をすることを方向にするのに対して、第2・3・4声は自然音を再現する意識を持っているようである。

6.4　中国語関係書における擬声語の音象徴の全般的傾向

これまで中国語関係書における擬声語の用例・語釈を考察しながら、擬声語の声・韻・調の音象徴を簡単に検討した。次に、中国語関係書における擬声語の音韻構成の特徴から、それらの擬声語の音象徴の特徴を簡単に考察する。考察の結果により、中国語関係書における擬声語に反映した中国語に対する認識の特徴及びその原因を指摘する。

6.4.1　中国語関係書における擬声語の音韻構成から見て

第5章で指摘したように、中国語関係書の擬声語における音韻の出現状況は次の通りであ

[269] 1111 の声調型の数字「1」は第 1 声の意味である。同様に、下の声調型における 2、3、4 はそれぞれ第 2 声、第 3 声、第 4 声を指す。下の 4 音節擬声語の音標は引用の原文に付いていたものである。原文に音標が付いていない擬声語の声調の状況について、1 つずつ注で説明する。

る：声母は/p，g/を代表とする破裂音（kを除く）が最も多く用いられ、/j，z，c/なども常用されている；/c，q，f，r /などはあまり使われない。韻母の面では、単韻母/a, u, i/と韻尾/-ng/を含む韻母の選択傾向が顕著である。声調は、第1声が一般的に使われる。

次に、中国語関係書における擬声語の音韻構成の実態から音象徴の使用特徴を検討する。まず破裂音の/b，p，d，t，g/に共通する音象徴的イメージを説明する。物体に打ち当たる運動の状態を表す音象徴的意味の面においては、/b，p，　d，t/は一致する点を持つ。/b，p/の衝撃・衝突のイメージは/d，t/の叩く程度より激しいと感じられる。/g/の音象徴的意味は多様であるが、強い・激しい動作や運動の表現が著しい。これは/b，p，d，t /に似ている点である。摩擦音全体の音象徴には摩擦・流動・転がり・滑りのイメージが比較的はっきりしているが、摩擦音声母のぞれぞれは非常に明らかな独自の音象徴を持っていない。側面音と零声母が第1音節の声母である擬声語が少ない。それらの擬声語には側面音と零声母の音象徴的意味がやや窺えるが、非常に不十分である。そのため、摩擦音、側面音と零声母の音象徴をさらに検討する必要がある。

韻母の音象徴を見ると、/b，p，d，t，g/と組み合わせる音節の中に、単韻母の/a，u/の「大きい・重い・明らかな」イメージが比較的はっきりと窺える。また、ほとんど舌面母音/i/と/j，z，c/を組み合わさる音節に見られる母音のイメージには、力のある運動[270]、小さい・細い・鋭いことがはっきりと感じられる。他に、鼻韻母は模倣した自然音が抑圧の発声状態による動物の声で、一般的に活発ではない物である。韻母の音象徴の全般状況から見ると、最も常用される音象徴的イメージは/a，u/の「大きい」と/i/の「小さい」であある。

中国語関係書における擬声語の声母には、一部のものが活発に使われる。つまり、常用される声母が少ない。破裂音、少数の破擦音と摩擦音の声母においては、ある一致する音象徴的イメージが見られる。例えば、破裂音の声母は主に強い対抗の運動を表し、破擦音は力ある摩擦のような運動を模倣する傾向がある。摩擦音の音象徴に摩擦のない運動（例えば、流動や転がりなど）のイメージが見られる。声母全体の音象徴から見ると、音象徴の特徴は声母の性質と関わっているようである。語数の多少や語例の意味分野の広さなどの原因で、中国語関係書の擬声語における声母・韻母全体の音象徴の傾向を明らかにすることは難しくない。そのため、現実の中国語擬声語との対照による結果を考慮に入れて音象徴の検討を行う必要がある。

6.4.2　音韻構成の対照から見て

本小節では第5章における擬声語の音韻構成の検討結果に基づき、中国語関係書における擬声語と現実の中国語擬声語全般との音象徴の特徴を検討する。

まず、音韻構成の対照状況を概説する。現実の中国語擬声語と比べると、中国語関係書における擬声語の声母は破裂音を主とし、零声母と一部の破擦音・摩擦音も常用されている。単韻母/a，u，i/と韻尾に/-ng/を持つ韻母が常用される韻母であるという点は共通の傾

[270] この運度は大きい或いは重い物体の移動や、速い衝撃、突破の運動などを指す。

向である。鼻音と側面音が中国語関係書の擬声語にあまり用いられていないという対照的な状況も存在する。中国語関係書の擬声語は複合韻母が豊富であるが、全般の使用度はあまり高くない。中国語関係書の擬声語の音韻全体から見ると、すべての声母・韻母の間に、出現度数の差が非常に顕著である。つまり、音韻の使用度の差異が明らかである。

上の対照結果から、中国語関係書における擬声語の音象徴の特徴を検討して、近代日本人の学者たちが持っていた中国語擬声語の言語音に対する認識を考察してみる。結果を以下に示す。

まず、常用された音韻の音象徴の特徴がはっきりと窺えた。破裂音と一部分の破裂音の声母と単韻母/ a，u，i/・複合韻母/ua/・鼻韻母は中国語関係書の擬声語の常用音韻と見なされる。それによって、それらの音韻に対応する音象徴の状況は指摘される。打撃・衝突のような力強い対抗の運動状態を表す破裂音の音象徴が最も頻繁に窺える。摩擦のような障害のある前進状態、流動・転がりの運動と突き出た状態がそれぞれ破裂音と摩擦音を声母とする擬声語の主な音象徴である。また、単韻母/a/と/i/はそれぞれ大きさ、小ささのイメージを表し、その対立現象が明らかに見られる。/u/の大きさのイメージが/a/に接近している。他に、/ua/には広い表面に発生した目立った出来事というイメージが見られる。/-ng/の音象徴には、自然音の大きさより、その力強さのイメージのほうが強い。このイメージは/-n/にもみられるが、/-ng/の場合より弱い傾向がある。他の性状表現の状況から見ると、場面の広さ、状況あるいは情景の激しさなどを表す/a/の音象徴と、線状・細さ・きつさのイメージに傾いている/i/の音象徴には、大きさのコントラストがはっきりと示されている。

次に、一部の声母と一部の韻母においてそれぞれ共通の音象徴的意味が見られる。例えば、/b，p，d，t，g/は同様に対抗の運動状態或いは（力）強さのある運動というイメージをある程度持っている。常用韻母の/a，u，ua，-ng/などは大きさ・強さ及びそれらの対立のイメージが普遍的に見られる。これらの音韻が描写する自然音の特徴からそれらの音象徴の共通点を見ると、認識されやすく、言語音で表現されやすいことが分かる。擬声語の選択状況から見ると、それらの利用頻度のアンバランスと集中的な傾向が窺える。さらに、近代日本人（学者）が持っていた中国語擬声語に対する認識からいうと、中国語の一部の声・韻・調の集中的な出現状況及び習得の差異が存在しているであろう。

6.5　終わりに

以上は中国語関係書における擬声語の語頭音節の声・韻・調の実態から中国語の音象徴の大略の状況を検討するものである。しかし、全体の声母の音象徴がはっきりしていない。原因は幾つかある。例えば、音象徴の性状表現を判定する基準が主観的であること、語頭以外の音韻を考察に含めていないことなどがある。ゆえに、中国語関係書における擬声語の音象徴の実態を十分に検討するために、もっと広い視野で、さらに具体的かつ論理的な考察を行う必要がある。

本論は近代日本の中国語関係書における擬声語の音象徴への認識傾向を検討した試論で

あるが、考察は中国語関係書と現実の中国語との比較に基づいて行った。その比較の結果、音韻の音象徴的意味に対して、理論的研究と用例の分析を通して系統的で具体的な考察がさらに行われる必要があるこあとが分かった。また、中国語関係書における擬声語の音象徴研究を進めるために、現実の中国語の音象徴の特徴を究明しなければならない。中国語関係書における擬声語の音象徴の考察にはまだ多量の作業が残されている。

終 章

7.1　論文の各章の要約

擬声語は、言語音で自然音（物や現象の声・音）を模倣することばである。言語体系によって音韻体系が異なるため、同一の自然音を模倣するにしても、その結果としての擬声語の表現は言語ごとに異なり得る。この現象が外国語教育にどのような影響を与えているのかが問題になる。それゆえ、本論文は近代日本の中国語教育関係書を研究対象とし、日本人（学者）が認識した中国語擬声語、さらに、中国語の状況を検討した。

本研究は明治以降昭和20年までの近代日本の中国語教育の関係書における擬声語を研究の対象とし、その形態構造、意味分野、音韻構成、音象徴の特徴から擬声語の実態を考察した。この研究は語群の語形、語義、音韻から、それらの擬声語の使用の全般的な特徴を究明することを通して、近代日本の中国語教育の中の擬声語または中国語の習得状態と中国語の使用に対する認識状況を指摘した。

序章は論文の研究テーマ、先行研究、問題の在りか、研究の目的と意義である。近代日本の中国語関係書の歴史的特徴（関係書の利用実態、当時の教育方法と目的に応じた特徴）、関係書の中の擬声語の位置づけ、日中の関係書の研究現状と中国語擬声語の関連の先行研究を見た。この考察によって、近代日本の中国語関係書における擬声語の研究の可能性を提起した。それらの擬声語に対する研究の構想として、本論は中国語関係書において、中国語擬声語がどのような構造特徴で利用され、どのような意味特徴と音韻特徴を持っているのかを究明することを試みた。

第1章では近代日本の中国語関係書の歴史的な使用度、種類の多様性、研究価値の確実さなどに鑑みて、主に六角恒廣編・解題の『中国語教本類集成』と波多野太郎編・解題の『中国語学資料叢刊』所載の関係書の情報を紹介し、それらのものを本論文の調査対象にした理由を分析した。本章の最後に、『中国語教本類集成』と『中国語学資料叢刊』の所載の擬声語の調査書である一般学習書及びその中の擬声語（用例・語釈を含む）を取り出して付けた。

第2章では、擬声語の音節パターンの特徴を各型別の擬声語の分布状況と使用特徴から考察した。形態構造は擬声語の最も直観的な要素である。形態構造の使用特徴の考察は、擬声語の音節パターンの分類及び語数の分布、特殊な形式（例えば、児化擬声語）の分析を巡って行った。結果として、中国語関係書における擬声語は基本型のA型、AA型、AB型を常用の型別としていた。また、2音節の擬声語と特殊型の擬声語の語数には大きな差がある。特殊型の擬声語は語数は少なく、使用度もあまり高くないが、種類の多さが顕著であった。擬声語の表記の規範については、中国語の漢字、発音の表記、発音指導のための符号が多

様な形式で使われていた。そのため、中国語関係書において、不規則な形態の擬声語が見られ、語形態タイプの安定性と規範性を欠いた状況があった。このことは語の収集・記録方法、使用方法、中国語の認識・受容の程度と関わっているからである。

第3章では、近代日本の中国語関係書における擬声語の意味分野の分類方法、意味分野別と擬声語の型別との対応状況を検討した。考察を通して、A型、AA型、AB型の擬声語は最も頻繁に使われる3種類であり、意味分野別による使用の偏りが小さい。AA型とAAA型は動物の鳴き声に最も多く用いられ、AB型は物の音、AABB型は人の声が多いというような対応関係も明瞭に見て取れる。このように、異なる型別の擬声語は独自の音声描写特徴を持っている。これらのことから、各意味分野における擬声語は語数の差があるが、異なる意味分野において用いられる擬声語の分布状況から見て、各型別の語数及び比率（使用述べ数及び重複率を含む）の差も著しい。それによって、中国語関係書の擬声語全体は各意味分野において不均衡に用いられていることが分かる。しかし、意味分野の境界線がないため、全部の擬声語の意味分野をはっきりと判別すること、異なる型別の擬声語と意味分野の対応関係を明らかにすることの難題が残っている。

第4章は近代日本の中国語関係書における擬声語の形態構造、意味分野の使用状況と現実の中国語擬声語の使用特徴の対照である。『萬物聲音』や『北京語の味』のような中国語関係書において、擬声語は独立の語群として注目を引いている。そのため、本章は『萬物聲音』と『北京語の味』を代表的な関係書として取り上げて、それらの中の擬声語の形態構造、意味分野を検討し、清代後期の北京語の代表的な文献の『児女英雄伝』における擬声語の使用特徴と対照して、近代日本の中国語関係書における擬声語の音節形態、意味分野の実態を解明した。『萬物聲音』と『北京語の味』の出版は35年の間隔があるが、擬声語の場合、自然音に対する分類、音節パターンの種類及びその分布状況の面で一致していた傾向が見られる。一方、『児女英雄伝』より、『萬物聲音』のほうが擬声語の型別が多様であるが、各型の使用割合の差が大きい。『北京語の味』の場合、『児女英雄伝』より型別がすくなく、各型の使用割合も非常に顕著な差が出た。そういう意味で、『児女英雄伝』における擬声語と近代日本の中国語関係書における擬声語はその音節パターンの使用自由度及び意味分野に対応する分布状況で一定の相違が見られる。近代日本の中国語教育の目的・方法や関係書の編纂状況の他に、その可能な原因の1つは、中国語関係書と『児女英雄伝』という中国の小説が持つ言語的性質の差異である。

第5章では、中国語関係書の擬声語の音韻構成を声母・韻母・声調の面から検討し、その結果を現実の中国語擬声語の研究と対照して、擬声語の音韻構成の状況を述べた。考察では擬声語の音韻パターンを単音節、2音節（AA型及びその重複型、AB型及びその重複型）と多音節（3音節及び以上）にわけ、具体的に声母、韻母、声調の組み合わせの使用状況をみた。中国語関係書において、擬声語に用いられている全体の声母の使用割合に言えば、常用されるあ少数の声母（例えば、破裂音（kを除く）と少数の破擦音（j・z・c）がある）、常用されない声母（例えば/c，q，f，r /などがある）との間に、使用度の点で大きな差があ

る。韻母の場合、単韻母の/a・i・u/と鼻韻母の-ng韻母が最も頻繁に見られ、他の韻母の出現頻度が非常に少ない。このように、音韻構成の全般的特徴をいうと、中国語関係書の擬声語の音韻は、少数の声母と韻母の組み合わせを主とする傾向がある。声調については、中国語関係書においても、現実の中国語においても、擬声語は第一声が最も多いという点は同じであった。本章の考察によって、中国語関係書の擬声語では経済的・便利的な音韻が使われていたことがわかった。このような音韻の選択傾向は近代日本の中国語実用語の教育に応じている。

第6章では、中国語関係書における擬声語に現れた中国語音韻の音象徴の実態を検討した。これは近代日本人の学者が持っていた中国語の言語音の意味に対する認識の考察が目的である。そのため、中国語関係書における擬声語の音象徴の特徴がすなわちこの語群の特徴であり、中国語の擬声語ひいては中国語一般の現実の状態であるかどうかが再検討されなければならない。本考察は語頭音節の声母、韻母、声調の音象徴的な意味を解釈した。それによって、中国語関係書における擬声語の音象徴は認識されやすく、言語音で表現されやすい自然音を表す特徴があることが明らかになったことが分かった。

7.2　結論

本論文は、近代日本の中国語教育における言語の実態の特徴を考察するために、音節形態（音節パターン）、音韻（音・韻・調）構造、意味分野、音象徴的な意味の面から擬声語の状況を検討して、現実の中国語擬声語との簡単な比較を行った。更に、中国語関係書における擬声語が、現実の中国語擬声語の特徴をどの程度現しているのか、また、中国語擬声語の実態に反映した近代日本の中国語教育がどのような教育目的を持っていたのかを指摘した。

まず、近代日本の中国語関係書における擬声語を形態タイプにより13種類（A型、AA型、AB型、AAA型、AAB型、ABA型、ABB型、AABB型、ABAB型、ABCB型、AABC型、ABCD型、AAAB型）に分けた。A型、AA型、AB型などの常用の型別に集中している分布状況において、形態タイプの擬声語の語数には大きな差があり、明らかな傾向的な分布状態を呈する。他に、中国語関係書の擬声語は、形態表記の符号の使い方において見られる規範問題から見て、安定性と規範性が弱い。

中国語関係書の擬声語には、現実の中国語擬声語と相違する形態特徴が見られた。例えば、形態構造の不活発な特徴、各形態パターンの擬声語の語数及び意味分野別と型別の明らかな集中的な対応傾向がはっきりと見られる。それは近代日本の中国語擬声語の教育が形態構造の簡単かつ規則的なもの、また、常用の中国語または実用語の中国語を中心とした教育特徴に傾いていることを意味しているといえる。

次に、擬声語がの描写する自然音を「声」と「音」に大きく二分したことに基づき、自然音を発する主体の性質の分類方法によって、中国語関係書の擬声語の意味分野別を「人の声」、「動物の声」、「自然現象の音」、「動作に関わる音」、「物の音」（衝撃の音、

破裂の音、摩擦の音、鳴る音の下位分類を含む）に分類して、意味分野別による各型の擬声語の分布状況を考察した。意味分野全体における擬声語の分布状況から見ると、中国語関係書の擬声語は動物の声と物の音（衝撃の音を主とするもの）の2つに集中している傾向がある。つまり、動物の声と物の音の2つの意味分野における擬声語が最も多い。意味分野別による擬声語の語数には大きな差が見られる。また、常用型のA型、AA型、AB型が主な意味分野（動物の声と衝撃の音）に分布している状況がはっきりしている。それに、その三者は意味分野全体において分布し、主な意味分野別における分布の偏りが小さい。

中国語関係書の擬声語と現実の中国語擬声語は形態構造と意味分野においてどのような分布相違を持っていたのかを考察するために、擬声語を扱った代表的な中国語関係書の『萬物聲音』と『北京語の味』、近代北京語の代表的な資料である『児女英雄伝』を選び、研究を行った。この考察によって、擬声語の型別の分布の状況（A 型、AA 型、AB 型が最も頻繁に見られる型別であること）と意味分野に対応する分布状況（「動物の声」と「物の音」を主な意味分野とし、幅広い意味に使われる傾向を持つこと）は『萬物聲音』、『北京語の味』、『児女英雄伝』の三書に共通しておる。しかし、擬声語の型別の多様性、出現頻度、意味分野においての分布状況は『萬物聲音』、『北京語の味』、『児女英雄伝』において、差異が見られる。例えば、型別の種類から見ると、『児女英雄伝』は 8 種あり、『萬物聲音』は 11 種あるのに対して、『北京語の味』は 6 種しかない。擬声語の出現から見れば、A 型、AA 型、AB 型、ABB 型の擬声語は『児女英雄伝』においてそれらの重複の比率が『萬物聲音』と『北京語の味』より高い。『児女英雄伝』においては ABB 型の出現頻度が『萬物聲音』、『北京語の味』より高い。型別全体の分布比率の幅は、『萬物聲音』と『北京語の味』より『児女英雄伝』のほうが小さい。これによって、中国語関係書の擬声語が使用方法・習慣において現実の中国語との相違が存在することが想像できる。他に、この考察の結果の確実さを考えると、会話体である中国語関係書と小説の『児女英雄伝』のテキストの性質や日本の中国語教育の方法と目的といった要素は無視できない。

次に、中国語関係書の擬声語の音韻状況を考察した。考察の結果として、破裂音（kを除く）と一部分の破擦音（j・z・c）の声母が常用されることがわかった。その内、破裂音のp、gは全ての型別の擬声語にある。それに対して、鼻音は極めて少なく、主に2音節擬声語において出現する。一方、現実の中国語擬声語の場合と比べ、常用音韻（破裂音・一部分の破擦音、単韻母など）と非常用音韻（摩擦音、複合韻母など）の出現度数の差は、中国語関係書の擬声語のほうが顕著である。このように、中国語関係書における擬声語の音韻構成は現実の中国語擬声語の特徴をある程度反映していると同時に、近代日本の中国語教育が持っていた言語教育の傾向を示している。

更に近代日本の中国語教育における中国語の音韻状況を知るために、音韻の意味構造つまり音象徴の視点で中国語関係書の主たる基本型の単音節と2音節擬声語の語頭の音韻を考察した。声母の音象徴は運動、形、触覚、様態などの性状表現の面で分析されるのに対して、母音の音象徴は形、広がり、運動（状態）などのイメージの面において分析される。

こうした音象徴的意味は中国語擬声語の韻母の音象徴を考察するための研究の方向を提供しうる。中国語擬声語の音韻分布状況に基づく音象徴の考察では、中国語関係書におけるその使用傾向を分析した。例えば、常用声母の破裂音の/b，p，d，t，g/は物体に打ち当たる運動の状態を表す点では、一致する点を持っているが、強さのイメージがあまり明らかではない。つまり、/b，p/の衝撃・衝突のイメージは/d，t/の叩く程度より激しいと感じられる。/g/の音象徴的意味は多様であるが、強い・激しい動作や運動の表現が著しい。また、摩擦音全体の音象徴には摩擦・流動・転がり・滑りのイメージが比較的にはっきりしているが、摩擦音声母には非常にはっきりとした特徴が見られない。常用韻母の/a，u，ua，-ng/などは大きさ・強さ及びそれらの対立のイメージが普遍的に見られる。自然音の特徴から見ると、それらの共通点が認識されやすく、言語音で表現されやすいのである。擬声語の声・韻・調の選択状況を総合的に見ると、それらの利用頻度のアンバランスと集中的な傾向が窺える。

まとめてみると、中国語関係書の言語研究を通して、近代日本の中国語教育において、中国語の語音を重要な地位に位置づけることが見られたが、語音特徴と実用の特徴の面でよく理解された音韻組み合わせなどが少数である。語音要素の使用状況から見ると、擬声語が反映した中国語の習得・認識の成果はあまり高い水準にはない。また、現実の中国語擬声語の音韻状況と比べて、その構成及び分布状況は音韻の種類とその出現頻度の相違が存在していることがわかる。実際、中国語関係書の擬声語の形態構造、意味分野、音韻構成、音象徴の実態からみると、近代日本の中国語教育における中国語の認識は語彙の範囲・広さ、語と音韻の認識の深度・全面性などの方面で不充分な面がある。つまり、近代日本の中国語教育は一定の程度中国語実用語の習得に限らず、ある程度言語研究の努力もしていたのである。この考察の結果は中国語関係書の言葉の確実さ・真実さ、つまり、中国語関係書における語彙はどのようであるか、またそれらの資料は当時の北京語口語の実態を反映する点で、全面的であるかどうかという問題に対するある程度の解答となり得ている。

擬声語の考察のみを通して近代日本の実用的中国語教育においての語音、語義の実態を見ると、外国語教育における言語習得には困難が存在していることが見られる。日中の言語に差異が存在しているため、近代日本人（学者）が中国語教育を行った場合、中国語に対する理解・認識は日中言語の差異の障壁を避けられないという状況は予想できる。つまり、日本語の「その言語集団の文化とその根底に潜在している言語使用者たちの思考形態」[271]が異言語の受け入れに影響を与えるかもしれない。日中言語が持っている音韻（言語）、文化（体験）の差異が中国語関係書における擬声語の実態に反映されている。さらに、その差異は中国語の習得、（近代）日本人が持っていた中国語に対する理解に困難を与えるに違いない。擬声語の一点に絞っていうと、一言語は子音・母音の組み合わせによって、複雑な音響も模倣できることは確かであるが、現実の音響と言語表現の対応特徴から見る

[271] 宋正植（2003）「比較語彙研究について『意味分野別構造分析法』による『天声人語』の語彙分析を通して」『語彙研究会叢書 4 比較語彙研究の試み 14』（2006） p26-29

と、民族間の根本的な感覚の相違はともかく、ある程度の隔たりが存在している。そして、異言語の教育・学習において、その隔たりを克服することは難しい。従って、異言語に対する全面的或いは系統的な認識のためには、異文化に対する理解がどうしても必要である。

7.3　研究展望

本研究の今後の課題として、日本の中国語関係書の渉猟と考察、擬声語の音象徴分析、擬声語の全般的特徴の原因の検討を引き続き行う必要があげられる。

本論文の調査資料は教科書を主とした近代日本の中国語関係書であるが、それらの調査資料は全体の膨大な量からすれば少数である。しかも、一般学習書の他、中国語関係書には文法書や辞書などもある。特定の一種或いは少数の関係書を調査の対象とする考察は全面的ではないに違いない。それゆえ、今後の研究ではより多くの中国語関係書を調査の範囲に入れる必要がある。

中国語擬声語の音象徴の研究には、まだ不明の部分が多く存在している。現時点では、中国語の音象徴の理論的研究と音韻の音象徴的な意味の研究は極めて少ない。本論文の音象徴の先行研究をさらに充実させる必要がある。また、音象徴研究は対照研究、データ分析の研究、実験の研究などの方法を活かすことも重要で、かつ可能である。今後は音韻の音象徴特徴についての詳細かつ系統的な研究を進めていきたい。

また、国と国の間の文化差異の視点から言語現象を検討する研究方向も試みたい。中国語関係書における擬声語の音節形態、音韻構成の特徴、音象徴への認識状況を全面的に解釈するには、言語の視点からのみでなく、文化差異、社会背景を考慮に入れる必要がある。そのため、日本語と中国語の言語差異の比較研究に基づいて、本論の考察結果を文化理解の面で再検討することも今後の研究課題である。

日本の中国語教育の通時研究の視点としては、唐話の教育及び唐話以前の中国語教育を考察することによって、日本人が教授した中国語及びそれに対する認識の変遷を研究することができる。

一方、近代日本の中国語関係書における俗語、感嘆詞、語気詞も興味をひく内容である。本研究の間、俗語、感嘆詞、語気詞は中国語関係書において注意されている語群であることがわかった。日本の中国語関係書の研究現状から見ると、それらの語群についての研究はほとんどないため、この分野も筆者の今後の課題である。

付録

（1）中国語関係書における擬声語及び用例・語釈

擬声語の出典	擬　声　語	用　　例・語　　釈
鬧理鬧	各碌碌	走到梯子中間一腳踏錯了。各碌碌滚將過來
養兒子	叱	像个罵夠一樣叱的一聲罵他出去
	笑嘻嘻	笑嘻嘻對和尚説道
小孩兒	豁剌剌	那梯子的板豁剌剌響
北京官話伊蘇普喻言	唧唧	小耗子唧唧的叫了一聲
	唿	唿的一聲、屋門開了
	哀哀	這鸛哀哀的聲兒説我不是仙鶴
	嚷嚷	叫好兒、嚷嚷的了不得
	吒吒	有一個在牛腦袋周圍、吒吒的轉着飛的蚊子
	嘻嘻	那位神一瞧、就嘻嘻的笑着
	吃吸	若是你貼近我、吃吸的給一聲、我就結了
	氣哼哼	一個送殯的、氣哼哼的對他説
	咯噠	震得打網咯噠一聲翻了
	嗷咚嗷咚	簡直的奔去、嗷咚嗷咚的一齊坐下
	吁吁	腳伕吁吁帶喘的追了來
	嘎噠	（斑鳩）撞在玻璃上、嘴尖兒嘎噠的一聲、翅膀兒也傷了
	颼	可巧一陣風颼的一聲、就把假頭髮給颳跑了
	哀哀切切	那豬哀哀切切的叫喚
	聒噠	聒噠一聲（泥丸子）放下去
	哈	天鵞哈的一驚、高叫了一聲
亞細亞言語集	哼啊哼、唏唏哈哈、砰磅	
	哈哈的笑	嘎嘎的笑
	欻	一条狗害怕、欻一聲跳过墻去
	焓焓	忽然自己焓焓的都着了
	嚐嚕	（家雀）嚐嚕的一聲飛咯
	唧叮咕咚	猴兒似的、唧叮咕咚的鬧
	涮涮	正説着、就涮涮的下起來咯
	吸吸哈哈	都是站不住、個個兒是吸吸哈哈的跑
	揉	揉的一聲
	嘎嘎笑的聲、雞嘎嘎蛋兒	
	喃喃	喃喃囈語
	嚷嚷	嚷嚷的貓叫
	喵喵	喵喵的貓叫
	咩咩	咩咩的羊叫
	嘶嘶	嘶嘶的叫狗
	鏑鏑	小鑼兒鏑鏑的聲兒
	鼕鼕	鼕鼕的鼓聲兒

	蹭	蹭一聲上了房
新校語言自邇集散語部	哼啊哼啊	哈哈的笑；嘎嘎的笑
	哈哈的笑、嘎嘎的笑	
參訂漢語問答國字解	吱兒喳兒	小的幾個、每天吱兒喳兒的、吵鬧得不歇
	涮涮	走沒幾步、雨就涮涮的來咯
	呼呼	颳（舌）的那樹上、呼呼的有聲音
	焀焀	焀焀的都着了火
	噌噜	（雀）噌噜的一聲飛出去咯
	噗哧	我差一點兒噗哧的曉出來了
	哼啊哼	哼阿哼的、張着嘴、瞪着眼
官話指南	噹噹	我剛纔聽見自鳴鐘噹噹的打了兩下兒似的
自邇集平仄編四聲聯珠	哼啊哼	他嘴裏哼啊哼的、也就快死的樣子
	哼啊哼	口內呻吟之聲
	哈哈	
	哼哈	連哼哈一聲都沒有、人不知不覺的、就刺了
	揉	揉的一聲、就能去當差的(p26 形容聲音之詞、此指物之忽然疾過之聲)
	嘎嘎	叫你嘎嘎的笑
	咕嚕咕嚕	他餓的肚子裏咕嚕咕嚕的、彷彿雞嘎嘎蛋兒似的
	嘎嘎蛋兒	腹中作鳴也（雞下卵亂叫之聲）
	咕嚕咕嚕/嘎嘎蛋兒	腹中作鳴也（雞下卵亂叫之聲）
	吧	把的一聲、就打了蕎麥一個嘴巴
	哧	哧的一聲、把麥子割了一下子
	喵喵	街坊家裏有喵喵的貓叫的聲兒、就害怕
	咩咩	咩咩的羊叫喚
	喃喃	喃喃囈語、彷彿說夢話似的
	嘟嘟囔囔	嘴裏嘟嘟囔囔的
	哼哼唧唧	沈吟窩語)也有哼哼唧唧的、也有故意兒拿着那龍鳳餅
	袅袅	学袅袅的貓叫喊的
	咭叮咕咚	像我這樣咭叮咕咚的走(P36 行走急慌革履隨步作響聲)
	呱打/砰磅	擱東西呱打砰磅的響(P56 拍物聲/大擊聲)
	嘶嘶	（那娘兒們）嘶嘶的叫狗
	噹噹	但是賣的鑼大些兒、噹噹的響
	鏑鏑	是小鑼兒鏑鏑的聲兒
	鏜鏜	鏜鏜的鑼聲兒
	鼕鼕	鼕鼕的鼓聲兒
	蹭	也不用蹭的一聲上了房
	吧呀吧	木板相擊之聲)我看見大街上手裏拿兩塊板兒、吧呀吧的打
	叮兒噹兒	那挑挑兒的有小銅鑼、叮兒噹兒的(P20 此銅鑼相擊之聲)
	咕噔	車聲也、車之顛簸言
	刷拉刷拉	砂土聲
	咂咂	鼓舌讚美聲
北京官話談論新篇	咱	就聽見咱的一聲鐵尺一響
	唏啷嘩啷	唏啷嘩啷、的把門都鎖上了
	咕咚咕咚	然後就聽見咕咚咕咚的解房上跳下幾個人來

	唧咚咕咚	又聽見賊唧咚咕咚的又都上了房了
	叮噹	院子裏又是刀鎗叮噹的響
增訂清語教科書	唏唏哈哈	唏唏哈哈的笑
	叮噹叮噹	你聽聽外頭叮噹叮噹的那是甚麼聲兒
	噹噹	那噹噹的響是在隔壁兒拏斧子劈柴火呢
	嗷嗷	窮乏の狀
	咕咚	聽見咕咚一聲兩個人都掉在河裏去了
附錄清語教科書續編	塔塔咧咧	塔塔咧咧豬來了
	噌噌	裁一到手、（家雀）噌噌的一聲飛了
	爬	爬的一聲把（烏龜）身子摔得粉碎了
東語士商業談便覧	咯噔	咯噔一天比一天有起色
官話篇	嘎嘎	打草堆裏跳出一個長毛紅臉的東西。嘎嘎的說。我是猴兒。
	欻	把肉丁兒和佐料兒往鍋裏一倒。欻的一聲。
	咕嘟咕嘟	擱點兒水就這麼咕嘟咕嘟。咕嘟的功夫越大越好。
急就篇	吐	道旁兒忽然吐的一聲出來了一條狗
	欻欻	忽聽見窗戶紙欻欻的響
支那語四週間	簌簌	簌簌的掉下眼淚來
	颯颯	紙窗叫風吹得颯颯的響
	淅淅	雨淅淅的下起來
	滴滴滴	時辰鐘，滴滴滴，一分一秒又一刻
	呼呼呼	到了冬天呼呼呼的冷風從北方吹來。
漢文基準支那現代文捷径	咿啞	櫓の聲
	咕咕咕咕	鳩の聲
	嗡嗡	蜂蠅の飛ぶ聲
	喔 喔 喔喔	鶏の聲
	嗎	羊の聲
	咪咪	猫の聲
	喳喳 喳	小鳥の聲
	呷呷呷呷	家鴨の聲
	汪汪汪	犬の聲
	丁零零	鈴の聲
最新支那語教科書讀本篇	嗡嗡嗡	蜜蜂出來採蜜：嗡嗡嗡
	咕咕咕	鴿子出來吃糧食：咕咕咕
	當當當	鐵匠起來打鐵：當當當
	丁丁丁	丁丁丁石匠起來鑿石頭
	咩咩咩	小羊在野地裏叫：咩咩咩
	吱吱吱	小鳥在樹枝上叫：吱吱吱
	吐吐	狗
	喵喵	貓
	嗞兒嗞兒	耗子
	哞兒哞兒	牛
	呼兒呼兒	馬
	嘞嘞	豬
	閣閣兒咕	雞

	呱呱	老鴉
	隆隆隆	隆隆隆 隆隆隆！ 誰在打大鼓？不！這是雷響。
	撲騰	撲騰的一聲，掉在水裏去了。
	嘻嘻哈哈	大家就嘻嘻哈哈的，大笑了一番。
支那語讀本・卷1	拍	忽聽得布幔裏，醒木拍的一響
	鼕鼕	少停，布幔裏更鼓鼕鼕報了三下。
	呱	有一個孩子呱的哭了起來
	唧唧	缸外蟲聲唧唧，落葉蕭蕭
	豁剌剌	凜冽的北風豁剌剌的刮得利害。
	撲通通	撲通通滿車的瓦甕都翻到了山下去了。
	嗚嗚	另一個吹口琴，嗚嗚地響着。
	悉悉索索	秋風把樹葉吹落在地上，它只能悉悉索索發幾陣悲涼的聲響。
	抽抽噎噎	眼裏含着淚，抽抽噎噎的說道。
	嗚嗚	遠遠的又有一輛汽車嗚嗚的叫。
倉石中等支那語・卷1	嘩打打	喇叭嘩打打，吹到小山下。
	嘭嘭嘭	嘭嘭嘭！嘭嘭嘭！請你開開門。
	喳喳喳	（小麻雀）也找不到一粒米，喳喳喳叫肚飢。
倉石中等支那語・卷2	叮噹叮噹	鐵匠整天家叮噹叮噹的大鐵鍬。
	丁令	丁令，丁令，風來搖鈴鳥來聽。
	丁東	丁東，丁東，水來彈琴魚來聽。
	嗤嗤嗤	嗤嗤嗤，快來救火！
	咿咿啞啞	望望橋邊，辨不出咿咿啞啞的櫓聲。
	鼕鏜鼕鏜	處處聽得鼕鏜鼕鏜，打鼓敲鑼的聲音。
	呼呼呼	呼呼呼，北風撲面吹來。
倉石中等支那語・卷3	喃喃	老燕便喃喃的教小燕子說話。
	孜孜	討食吃的聲音，孜孜的叫
	啁啾	欲入空巢裏，啁啾終夜啼。
	啾啾	（老燕）啾啾的整日整夜的悲啼。
	咿咿啞啞	小妹妹也招着手，咿咿啞啞，叫了幾聲媽媽。
	呼，呼，呼，	呼，呼，呼，一陣狂風。
	嗡嗡嗡	嗡嗡嗡，（蚊蟲）唱着戰歌向前衝。
	滴搭滴搭	壁上鐘聲，滴搭滴搭，也聽得格外清楚。
	嘭嘭嘭	嘭嘭嘭，有人敲門了。
	汪汪汪	阿黃也汪汪汪，吠了幾聲。
北京語集解	哼哼唧唧	那哼哼唧唧的、那是怎麼了。
四民実用清語集附諺語用法	皮剌吧剌	那屋裏是放炸炮麼皮剌吧剌的直響啊
	提拉拖拉	你是拿着的甚麼東西下邊兒提拉拖拉的吊銷來了
	匹剌沸剌	那個茶壺的水匹剌沸剌的是開了罷
	稀溜逛噹	街上的雪都化了道兒上稀溜逛噹的不好走
	嗚之嗷之	你們鬧甚麼嗚之嗷之的
	嚬嚬嘶嘶	他和你倆嚬嚬嘶嘶的沒甚麼正經的
	嘻嘻哈哈	那個人嘻嘻哈哈的很愛說笑話哪
	咳咳嗽嗽	你怎麼咳咳嗽嗽的是傷風了麼
	匹嘍撲嘍	那個貓匹嘍撲嘍的是抓着耗子了罷
	匹蹬撲蹬	那邊兒屋裏匹蹬撲蹬的是甚麼鬧的呀

	唧唧哇哇	小孩子們你別唧唧哇哇的亂鬧了
	嘟嘟喃喃	你嘴裏嘟嘟喃喃的說甚麼呢
	唧唧咕咕	我說的話你們倆怎麼唧唧咕咕的是不是不願意麼
四聲標註支那官話字典	叮噹叮噹、搭搭咧咧、嘎嘎、唧唧咕咕、笛笛咕咕、哼哼、嘩啦嘩啦、嘩楞、颼颼、颼刺	
自邇集平仄編四聲聯珠俗語註釋	哼啊哼	嘴裏哼啊哼的/口內呻吟之聲
	揉	形容聲音之詞，忽然疾過之聲
	嘎嘎	嘎嘎的笑
	咕嚕咕嚕	肚子裏咕嚕咕嚕的/腹中作鳴也
	雞嘎嘎蛋兒	雞下卵亂叫之聲
	砰啊磅	錘鐵之聲
	吧	吧的一聲就打了蕎麥一個嘴巴
	哧	哧的一聲 刀入肉之聲
	刷拉刷拉	砂土聲
	哼哼唧唧	沈吟竊語
	咭叮咕咚的走	行走急慌，鞵履隨步作響聲
	啪打	拍物聲
	砰磅	大擊聲
	嘛嘛	嘛嘛的叫狗（呼犬之聲）
	咂咂	鼓舌讚美聲
	蹭	蹭的一聲上了房 蹭者躍起之聲，言躍而登屋也
	吧呀吧	木板相擊之聲
	叮兒噹兒	此銅鑼相擊之聲
北京語の味	**擬声語**	**用例・語釈**
	ㄏㄨㄚ…	瀑布（瀧）
	ㄖㄧㄥ	蚊子(蚊)
	ㄖㄨㄥ	喚頭
	ㄛ	打飽嗝兒(おくびゲップ)
	ㄅㄨ…儿	放屁（おなら）
	ㄙ…ㄙ	馬
	ㄙㄚ	剪子絞紙聲（鋏で紙を切る音）
	ㄕㄨ…儿	小槍(小銃)
	ㄙㄧ	撒紙聲（紙を破る音）
	ㄅㄤ…儿	電鈴（ベル）
	ㄗ…儿	電車の軋る音
	ㄗㄚ	剪子絞布聲（鋏で布を切る音）
	ㄗ儿	接吻
	ㄊㄨㄟ	唾沫（つばを吐く）
	砰 ㄆㄥ	石の碎ける音
	ㄆㄚ儿 ㄆㄚ儿	拍掌聲（拍手の音）

	用例・語釈	**擬声語**	**用例・語釈**
	瀑布（瀧）	ㄘㄦ ㄘㄦ	裂布聲（布を裂く音）
	蚊子(蚊)	ㄘㄦ ㄘㄦ	切菜聲（庖丁で切る音）
	喚頭	ㄉㄨㄤ ㄉㄨㄤ	打銅鑼
	打飽嗝兒(おくびゲップ)	ㄉㄨㄤ ㄉㄨㄤ	瓷器摩擦聲
	放屁（おなら）	ㄊㄨㄤ ㄊㄨㄤ	鐵物相擊聲（金物）
	馬	ㄊㄨㄤ ㄊㄨㄤ	打後背聲(背中などを叩く音)
	剪子絞紙聲（鋏で紙を切る音）	ㄉㄨㄥ ㄉㄨㄥ	鼓（太鼓）
	小槍(小銃)	ㄨㄚ ㄨㄚ	小孩兒（子供）
	撒紙聲（紙を破る音）	ㄨㄚ ㄨㄚ	喇叭
	電鈴（ベル）	ㄨㄤ ㄨㄤ	狗（犬）
	電車の軋る音	ㄨㄥ ㄨㄥ	牛
	剪子絞布聲（鋏で布を切る音）	ㄨㄥ ㄨㄥ	蜂
	接吻	ㄨㄥ ㄨㄥ	飛機
	唾沫（つばを吐く）	ㄔ ㄔ ㄔ	汽車（自動車）
	石の碎ける音	ㄍㄛ儿 ㄍㄛ儿 ㄍㄛ儿	鶏
	拍掌聲（拍手の音）	ㄅ儿 ㄅ儿 ㄅ儿	吹笛

ㄚㄧ ㄚㄧ	烏鴨（からす）	ㄉㄚ ㄉㄚ ㄉㄚ	機關槍
ㄐㄚ ㄐㄚ	小鶏兒(ヒヨコ)	ㄊㄤ ㄊㄤ ㄊㄤ	釘鐵釘聲（釘を打つ音）
ㄐㄧ ㄐㄧ	家雀兒(雀)	ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ	摩托車（自動自転車）
ㄐㄧ ㄐㄧ	耗子（鼠）	ㄈㄨㄈㄨㄦㄧㄠ	喧嘩する時
ㄐㄧㄚ ㄐㄧㄚ	家雀兒(雀)	ㄍㄨㄚ ㄍㄨㄚ ㄐㄧ	雁
ㄘㄚ ㄘㄚ	騾子（馬と驢馬の雑種）	ㄉㄧㄥ ㄉㄧㄥ ㄉㄤ	打冰盞兒
ㄘㄚ ㄘㄚ	驢（ろば）	ㄚ ㄊㄧㄝ	打喷嚏（くしゃみ）
ㄏㄥ ㄏㄥ	猪	ㄈㄨㄊ ㄧㄢㄦ	伏天兒（蜩）
ㄏㄨㄚ ㄏㄨㄚ	撒尿（小使）	ㄏㄚ ㄗ	打哈息（あくび）
ㄖㄦ ㄖㄦ	金鐘兒（鈴虫）	ㄏㄨ ㄌㄨ	打呼嚕（いびき）
ㄖㄦㄧ ㄖㄦㄧ	蛐蟮（蚯蚓）	ㄏㄨㄚ ㄌㄚ	水流聲
ㄖㄦㄧ ㄖㄦㄧ	髻了兒（蝉）	ㄍㄚ ㄓㄖ	歯ぎしり
ㄍㄚ ㄍㄚ	小鶏兒(ヒヨコ)	ㄍㄚ ㄌㄚ	小孩兒（子供）
ㄎㄦ ㄎㄦ	咳嗽（せき）	ㄎㄚ ㄊㄚ	屋門關閉聲
ㄍㄨㄚ ㄍㄨㄚ	鴨子（アヒル）	ㄍㄚ ㄉㄨㄥ…	大敞車（大）八車
ㄍㄨㄚ ㄍㄨㄚ	蛤蟆（蛙）	ㄍㄤ ㄉㄤ	火車（汽車）
ㄍㄨㄛ ㄍㄨㄛ	蟈蟈兒（キソギリス）	ㄍㄦ ㄍㄦ	打嗝（しゃつくり）
ㄋㄧㄠ ㄋㄧㄠ	貓	ㄍㄨ ㄉㄨ	ものの煮える音
ㄡㄡ	雁	ㄍㄨ ㄉㄨㄥ	大砲
ㄆㄚ ㄆㄚ	叫門聲（戸を叩く）	ㄎㄨ ㄉㄨㄥ	物之下落声(物を落とした時)
ㄆㄚ ㄆㄚ	拍掌聲（拍手の音）	ㄍㄨㄚ ㄌㄚ	湯のわく音
ㄆㄚ ㄆㄚ	把嘴巴聲（頬を打つ音）	ㄡㄠ	雁
ㄅㄤ ㄅㄤ	打梆子（拍子木）	ㄅㄦ ㄌㄦ	要波浪鼓兒
ㄆㄦ ㄆㄦ	小槍(小銃)	ㄅㄧㄚ ㄗㄧ	巴結嘴（唇）をならす
ㄅㄨ ㄅㄨ	放屁（おなら）	ㄅㄨ ㄉㄨㄤ	水中投石(窓戸のあたる音)
ㄗㄚ ㄗㄚ	筐籮簸豆聲笊にあたる豆の音	ㄉㄦ ㄌㄥ	吹笛
ㄗㄨ ㄗㄨ	風聲 大	ㄉㄧㄥ ㄉㄤ	九音鑼
ㄗㄨㄚ ㄗㄨㄚ	雨聲 小	ㄗㄦ ㄗㄚㄦ	鉋木聲（鉋をかける音）
ㄗㄨㄚ ㄗㄨㄚ	風が葉にあたる音	ㄗㄦ ㄗㄨㄦ	胡琴（胡弓）
ㄙㄧㄙㄧ	鋼筆寫字聲（ペンの音）	ㄗㄧㄙ	放屁（おなら）

	ㄙㄨ ㄙㄨ	風聲 小	ㄍㄥ ㄍㄚ ㄍㄥ ㄍㄚ ㄍㄥ ㄍㄥ ㄍㄚ	打冰盞兒
	ㄉㄤ ㄉㄤ	電車の鈴	ㄆㄚ ㄉㄚ ㄆㄚ ㄉㄚ	雨が傘にあたる音
	ㄉㄤㄦ ㄉㄤㄦ	打銅鑼	ㄆㄧ ㄌㄚ ㄆㄧ ㄌㄚ	雨聲 大
	ㄉㄦ ㄉㄦ	蛐蛐兒（蟋蟀）	ㄉㄧㄥ ㄉㄤ ㄉㄧㄥ ㄉㄤ	打冰盞兒
	ㄗㄚ ㄗㄚ	叫狗的（犬）をよぶ時	ㄍㄚ ㄌㄚ ㄍㄨ ㄌㄨ	雷聲
	ㄘㄥ ㄘㄥ	磨刀聲（砥石の音）	嘎吱嘎吱	嘎吱嘎吱嚼
	ㄗㄦ ㄗㄦ	耗子（鼠）	咕摟咕摟	咕摟咕摟嚥
	ㄗㄦ ㄗㄦ	蟈蟈兒（キソギリス）	吧叽吧叽	吧叽吧叽的吃
	ㄘㄦ ㄘㄦ	喚頭	嘎嘣兒嘎嘣	嘎嘣兒嘎嘣兒吃
	ㄘㄦ ㄘㄦ	鋸木聲（木を鋸く音）	唧唧咕咕、唧唧喳喳、嘟嘟喃喃	
			碰璫	碰璫的一聲把門關上了
言文對照北京紀聞	喃喃	佈子口内喃喃曰此物仍在君室		
官話北京事情	咕咚	坐車怕咕咚下來		
京華事略	吱兒吱兒	小耗子上燈台偷油喝下不來吱兒吱兒叫		
北京風俗問答	嘩喇嘩喇	（蝙蝠）嘩喇嘩喇的來回亂飛		
	嘟嚕嘟嚕	兩個人嘟嚕嘟嚕的説個不了		
	噗哧	就聽見棺材裏頭噗哧的一聲，死人的肚子就叫雷給震破了		
北京官話今古奇觀	颼颼	他那件舊夏布大褂兒叫凉風兒一吹颼颼的響		
	颼	颼的一聲抽出一把刀來		
	喘吁吁	跑了一身汗，喘吁吁的就來了		
	颼	颼的一聲吧寶劍就拔出來		
北京官話今古奇觀（第二編）	噗騰噗騰	王生見那個賣薑的走了，心裏還噗騰噗騰的直跳了		
北京官話搜奇新編	咕咚咕咚	聽見外頭咕咚咕咚的响，不大的功夫兒就見墻上挖透了一個窟窿		
華言問答	噗騰噗騰	小的就行了，心裡噗騰噗騰的直跳		
續散語串珠	聒達聒達	風臌的那箇门聒達聒達的響。		
	哼哼嘰嘰	這兩天不舒服，不大愛幹事，哼哼嘰嘰的。		
語学学隅拔萃	唧唧咕咕	你們倆人唧唧咕咕的説什麽呢		
	嘟嘟噥噥	他嘴裏嘟嘟噥噥的就出去了		
	唧唧噥噥	他那宏唧唧噥噥的聽不出來説的是什宏		
	花拉花拉	就聽見花拉花拉的鎖練子响。		
	擦啦擦啦	就听见擦啦擦啦的彷彿有人走道兒似的		
	巴巴	小孩子家别那們（麽-筆者註）嘴巴巴的		
	（笑嘻嘻）	起老遠的笑嘻嘻的就過來了		
華語萃編 初集	嗚	嗚的一聲，眼看着車開了。		
中華言文新編	澎	澎的一聲掉在一個大樹根兒底下一個窟窿裏		
	撲騰	有一個小孩兒站在缸沿兒上忽然失腳可就撲騰一聲掉下去了。		

	劃拉	忽然有一宗東西打上頭劃拉的一聲罩下來了
華語跬步	嘩愣	聽見廚房裏嘩愣的一聲…原來是貓叨着一個耗子呢
	叮噹叮噹	你聽聽外頭叮噹叮噹的那是甚麼聲兒
	唏唏哈哈	唏唏哈哈的笑
	颼颼颼	風颳的颼颼颼
	吧吧	什麼吧吧的響、是在隔壁兒拏斧子劈柴火呢
新編中等清語教科書	哼哼	野豬遍地找尋竟沒有一個、就急得哼哼的起來
	咚	烏龜就從天空裏掉下來、咚的一聲把身子帥的粉碎
	咕咚	咕咚一聲、兩個人都掉在河裏去了
清語會話案內上　明治 33 年	叮噹叮噹	您聽聽外頭叮噹叮噹的、那是什麼聲兒
	嘩冷	廚房裏嘩冷的一聲…原來是貓叨着一個耗子哪
	唏唏哈哈	滿屋裏那麼唏唏哈哈的笑
清語會話案內下	颼颼颼	風颳的颼颼颼
	咕咚咕咚	就覺得咕咚咕咚的不舒服。在車裏頭打了一個盹兒。
	哇	哇的一聲就站起來跑出來了
支那語自在豐國義孝　明治28年 獅子吼會	嘩楞	廚房裏嘩楞的一聲…原來是貓叨着一個耗子哪
	叮噹叮噹	您聽聽外頭叮噹叮噹的、那是什麼聲兒
	唧唧咕咕、笛笛咕咕	
	嘩啦嘩啦	嘩啦嘩啦的開
清語讀本　西島良爾	塔塔咧咧	塔塔咧咧豬來了
	哼哼	（野豬）就急的哼哼起來/聽見廟裏的鐘聲兒悠悠揚揚的出來了
	嚐嚕	（家雀）嚐嚕的一聲飛咯
	汪汪	這狗就衝着賊汪汪的亂咬
	爬	爬的一聲把（烏龜）身子摔得粉碎了
日清会話語言類集	颼颼	颼颼的風
	嘎嘎	嘎嘎的笑
	咂咂兒	
增補華語跬步	喏喏兒	鈴鐺就喏喏兒響
	咂咂兒	
	嚐嗤	倒叫人看着嚐嗤的一笑
	嘩楞	廚房裏嘩楞的一聲… 原來是貓叨着一個耗子哪
	叮噹叮噹	你聽聽外頭叮噹叮噹的那是甚麼聲兒
	唏唏哈哈	唏唏哈哈的笑
	颼颼颼	風颳的颼颼颼的
	吧吧	什麼吧吧的響、是在隔壁兒拏斧子劈柴火呢
北京官話文法	喵喵	猫の鳴聲
	汪汪	犬の鳴聲
	咩咩	羊の鳴聲
	嘞嘞	豚の鳴聲
	嘎嘎	猿の鳴聲
	嗞嗞	鼠の鳴聲
	喳喳	鵲雀の鳴聲
	咦咦	家鴨の鳴聲
	呱呱	鳥の鳴聲
	嗡嗡	蚊蝿等の鳴聲

	嗡嗡哇	蟬の一種の鳴聲		
	咕嘟咕嘟	熱湯のたぎる音		
	欻	沸きたる油に物を浸けたる時の音		
	吧叉	陶器玻璃等のバチヤツと粉碎する音		
	嘩啷	同上音ガランと云ふ音		
	嘎吱嘎吱	皮鞋にて歩くカチカチと云う様な音		
	咕咚咕咚	コトンコトンと云う足音など		
	咯嗒咯嗒	時計のカチカチと云ふ音		
	唰啷唰啷	サラサラなど云う秋風などの音		
	轟轟	雷の音など		
	哇哇	小兒の泣聲		
	哈哈	笑聲		
萬物聲音	**擬声語**	**用例・語釈**	**擬声語**	**用例・語釈**
	嘍々喳々	咬耳朵説話	咕嘟々々	煙筒冒煙
	啊々啊々	啞叭	噗噗々々	火車
	啊嚏	嚏吩	咕嚕嚕	火輪船的輪子
	呼呼	打呼	爬（呱）噠	拿棍子打人
	嗚兒々々	大人哭	咕噔嘩啦	盤子碗類碎
	噶喇噶喇	小孩兒哭	倏啦倏啦	風吹樹葉子
	嘎々哈々	大人笑聲	爬噠	石頭片落上
	嘬兒々々	婦人笑聲	咕嚕々々	石頭片落上
	嘿兒々々	小孩兒笑聲	叮啊噹啊	石匠鑿石頭
	嘀々噠々−嘀々噠	洋喇叭	嘩啊	流水
	嘲兒吼	洋喇叭	嘩喇々々	流水
	吧噠々々	喫煙	大 嘩啊	雨聲
	咭拉呱拉	聽外國人的話	小 倏兒々々	雨聲
	吭	擤鼻涕（擤鼻子）	倏兒々々	雪聲
	啊哼	擤鼻涕（擤鼻子）	啪嗒々々	雹子
	啊哈々	打呵欠打呵勢	呼嗚々々	風聲
	喀兒々々	咳嗽	嗾嗾	風聲
	嗝吃々々	吃喝聲　吃	颼兒々々	颼颼
	咕啷兒々々	吃喝聲　喝	哧兒々々	撕布聲
	哈々	抓癢癢	嗞喇啪喇	燒爆煤
	嘩喇々々	開水壺	呱噔兒々々	東洋屐
	呼嚕々々	水煙袋	唧々咋々	喜鵲
	咘噔	柳罐掉在井裏	咖咖咖唧咋唧咋	家雀兒
	倏	電閃雷鳴	呱啊々々	老鸛
	嘎啦	電閃雷鳴	啊喇啊−啊喇啊	老鸛
	咕嚕々々	電閃雷鳴	噶々噶々	家鴨子
	噶喳	電閃雷鳴	根兒根兒根兒	公雞
	噶噠々々	錶	噶々噶蛋	母雞
	噹兒々々	鐘　大	嗞兒	雞雛・小雞兒
	噔兒々々	鐘　中	嘎−嘎−	仙鶴
	嘚兒々々	鐘　小	吱兒 吱兒	老雕

	嘎吱々々	皂鞋	嗞兒/嘎兒嘎兒	鷹
	焀焀々々	洋爐子	咯兒噶 咯兒噶	雁
	唧噠嘎噠	騾子車	咕兒咕兒	黃莺
	唧噹剛噹	騾子車	啧兒啧兒	燕子
	嗞々咂々	小車子	咋々咋々/咋 咋	鸚哥
	咣噹々々	廠車	咕々呢嗷兒	夜猫子
	嘎嗒々々	東洋車	咕嘟咕嘟	鸽子
	哧	外國馬車	咪喓々々	貓
	嘎吱々々	扁擔	呢喲兒々々	大貓和耗子
	喀哧	扁擔	噶吱	大貓和耗子
	啪喳	撅竹竿子	吃兒吃兒	大貓和耗子
	噶喳	木頭木板掉地	嗞	大貓和耗子
	嘩嗵	木頭木板掉地	喊々喊々	狗
	吧噠	小物件掉地	旺旺々々	狗
	咕嗵々々	打樓梯掉下來	郱々郱々	狗
	噶噠々々	磨面	呼兒々々	馬
	吧喇々々	旗子翻風	噠々々	馬蹄
	哧兒哧兒	裁紙疊紙	咭噠呱噠	馬蹄
	嘩喇々々	裁紙疊紙	吱兒吱兒	豬
	倏喇々々	抖樓紙	哼啊々々	驢
	吶々吶々	帶琴的風箏	歐兒々々	老猴兒
	紉々	撮石頭	咽兒咽兒	牛
	柔々	撮石頭	哔々	山羊
	唿喇喇唏啦嘩啦	墻倒的	嗚-嗚-	老虎
	咚咚々々	打大鼓	嗷-嗷-	狼
	咕嚨々々	打大鼓	歐兒嗷兒	狗熊
	哎哨儿々々	波浪鼓	嗷兒嗷兒	駱駝
	噹兒々々	鈴兒	吶々吶々	蜜蜂
	唏啷嘩啷	鎖上門	號號々々	螞蜂
	吱吜々々	關上門	吶々吶々	蒼蠅
	咣噹	關上門	嗲嗲々々	蚊子
	咕咚々々	衆人上房下房	嘭嘭	蛤蟇
	啷冬咕冬	衆人上房下房	蝈々兒	蝈々兒
	咽兒々々	火車的哨兒	蚨蝶兒	蛣了兒
	呼嚕嚕々	火車輪子		

（2）『中国語教本類集成』と『中国語学資料叢刊』における中国語関係書[272]

関係書の出書		関係書の書名	編者（著譯者）	発 行 年	発行所（出版社）
中国語教本類集成	第一集第一巻	鬧理鬧	不詳		写本
		養兒子	不詳		写本
		官話纂	不詳		写本
		小孩兒	不詳		写本
		漢語跬歩（巻１～巻 4）	不詳	明治 3 年	刊本
		北京官話伊蘇普喩言	中田敬義訳	明治 13 年	渡部温
		亜細亜言語集支那官話部（再版）上・下	廣部精編	明治 25	青山堂書房
		総訳亞細亞言語集支那官話部（再版）（巻１～巻 4）	廣部精訳	明治 25	青山堂書房
		新校語言自邇集散語ノ部	興亞會支那語学校	明治 13 年	飯田平作
	第一集第二巻	參訂漢語問答國字解	福島九成	明治 13 年	丸善書舗
		官話指南（初版）	呉啓太・鄭永邦	明治 15 年	楊龍太郎
		官話指南總譯	呉泰壽	明治 38 年	文求堂書店
		英清會話獨案内	田中正程訳	明治 18 年	最上勝宜
		日漢英語言合璧	吳大五郎・鄭永邦	明治 21 年	可否茶館 九善商社書店
	第一集第三巻	自邇集平仄編四聲聯珠	福島安正	明治 19 年	陸軍文庫
	第一集第四巻	北京官話談論新篇	金國璞・平岩道知	明治 31	平岩道知
		談論新篇總譯	岡本正文訳・水野絮輔補訂	昭和 8 年	文求堂書店
		支那語獨習書	宮島大八	明治 33 年	善隣書院

272 ここは『中国語教本類集成』と『中国語学資料叢刊』における中国語関係書の並べ順を解説する。全般から見ると、一般学習書として『中国語教本類集成』の第 1 集と第 2 集に収録された中国語関係書の並べ順が関係書の初版発行年月日の時間順である。しかし、日本語訳本の中国語関係書、「急就篇」の一連の関係書の並べ方が特別である。まず、中国語関係書の訳本が、一般的に原著の次に並べ、時間順ではない。例えば、『中国語教本類集成』（第 1 集第 2 巻）における 3 番目の関係書が『官話指南總譯』（明治 38 年 1 月）である。それは『官話指南』の訳本であるため、2 番目の関係書の『官話指南』（明治 14 年 12 月）の後ろに並べている。4 番目の関係書が『英清會話獨案内』（明治 18 年 7 月）である。また、第 2 集第 1 巻は「急就篇」及び訳本の一連の関係書を独立に取り出して、時間順より並べている。その中に、『官話急就篇総訳』（杉本吉五郎 大正 5 年 7 月）、『急就篇を基礎とせる支那語独習』（折田重治郎 大正 13 年 12 月）、『官話急就篇詳訳』（大橋末彦 大正 6 年 9 月）の以外の 7 点は宮島大八の「（官話）急就篇」及び訳本の関係書である。しかし、第 2 集第 1 巻の他の関係書と異なり、『急就篇を基礎とせる支那語独習』は「急就篇」または訳本の一連の関係書を参考として作られたものである。

『中国語学資料叢刊』には中国語関係書の並べ順が時間順ではなく、他の規則的な並べ順も見られていない。

		清語教科書並續編（増訂版）	西島良爾	明治 34 年	石塚猪男蔵
		北京官話士商業談便覧（上巻）	金國璞	明治 34 年	文求堂書店
		東語士商叢談便覧	田中慶太郎訳	明治 38 年	文求堂書店
		支那語自在	金井保三	明治 35 年	善隣書院
		官話篇	宮島大八	明治 36	善隣書院
		北京官話支那語捷径	足立忠八郎	明治 37 年	金刺芳流堂
	第二集第一巻	官話急就篇	宮島大八	明治 37 年	善隣書院
		官話急就篇総訳	杉木吉五郎	大正 5 年	満書堂書籍部
		官話急就篇詳訳	大橋末彦	大正 6 年	上山松蔵・文求堂
		急就篇	宮島大八	昭和 8 年	善隣書院
		急就篇総訳	宮島大八	昭和 9 年	善隣書院
		羅馬字急就篇	宮島大八	昭和 10 年	善隣書院・文求堂
		急就篇發音	宮島大八	昭和 16 年	善隣書院・文求堂
		続急就篇		昭和 10 年代？	（善隣書院）
		続急就篇	宮島大八	昭和 16 年	善隣書院・文求堂
		急就篇を基礎とせる支那語独習	打田重治郎	大正 13 年	大阪屋號書店
	第二集第二巻	清語正規	清語学堂速成科	明治 39 年	文求堂書店
		官話応酬新篇	渡俊治	明治 40 年	文求堂書店
		支那語の講義	青砥頭夫	明治 43 年	小林又書店
		生財大道	鄧永邦	大正 5 年	島田太四郎・文求堂
		華語萃編 初集～四集	東亜同文書院	大正 5 年	東亜同文書院
		現代支那語読本	飯河道雄	大正 12 年	大阪屋號書店
	第二集第三巻	注音対訳簡易支那語会話篇	秩父固太郎	昭和 3 年	大阪屋號書店
		支那語四週間	宮島吉敏	昭和 6 年	大学書林
		魯迅創作選集	田中慶太郎	昭和 7 年	文求堂書店
		漢文基準支那現代文捷徑	実藤惠秀	昭和 8 年	尚文堂
		最新支那語教科書 風俗篇	宮越健太郎・井上義澄	昭和 10 年	外語学院出版部
		最新支那語教科書 読本篇	宮越健太郎・内之宮金城	昭和 11（上巻）、13 年（中巻）	外語学院出版部
		初等支那語教科書	宮原民平・土屋明治	昭和 13 年	東京開成館
		支那語読本　巻１・巻２	倉石武四郎	昭和 18 年	弘文堂書房
		支那語繙訳篇　巻１・巻２	倉石武四郎	昭和 15 年	弘文堂書房
	第二集第四巻	標準支那語会話	橋本泰次郎	昭和 14 年	丸善書舗
		初等支那語会話	内之宮金城	昭和 14 年	日本放送出版協会
		周作人隨筆抄	田中慶太郎	昭和 14 年	文求堂
		倉石中等支那語　巻１～	倉石武四郎	昭和 16 年	弘文堂書房

		巻 5			
		華語教程	吉野美弥雄	昭和 14 年	平野書店
		標準支那語会話教科書	青柳篤恒吳主惠	昭和 15 年	松邑三松堂
		華語基礎讀本	魚返善雄	昭和 16 年	三省堂
		日常支那語圖解	加賀谷林之助	昭和 18 年	東京開成館
中国語学資料叢刊・白話研究篇	第一巻	支那語異同辨	原口新吉	明治 37 年	文求堂書店
		譯註重念聲音附支那語難語句例解	飯河道雄	大正 13 年	大阪屋號書店
		支那語疑問例解	張毓靈・權寧世	昭和 2 年	大阪屋號書店
		中国慣用語句例解	三原増水著	昭和 31 年	第三書房
		支那諧謔語彙研究	河野通一	大正 14 年	燕塵社
		支那諧謔語彙	河野通一	昭和 17 年	満洲・大連日日新聞社
		北京俗語兒典	下永憲次	大正 15 年	偕行社
		北京語集解	下永憲次	昭和 3 年	偕行社
		満洲国礼俗調査彙編	満洲国文教部礼教司	康徳 3 年	満洲国文教部礼教司
		必携満洲土語解説	河瀬侍郎	昭和 12 年	大阪屋號書店
	第二巻	北京語の味	大山聖華	昭和 16 年	大阪屋號書店
		北京土語集	佐藤博	昭和 25 年	松山外大中国語研究会
		四民実用清語集附諺語用法	中西次郎	明治 43 年	大阪屋號書店
		北京官話俗諺集解	鈴江萬太郎・下永憲次	大正 14 年	大阪屋號書店
		支那常用俗諺集	田島泰平・王石子	昭和 16 年	文求堂書店
		北京官話常言用例	小路真平・茂木一郎	明治 38 年	文求堂書店
		自邇集平仄編四聲聯珠註釋	福島安正	明治 19 年	陸軍文庫
		四聲標註支那官話字典	西島良爾・牧相愛	明治 35 年	青木嵩山堂
		支那語助辞用法附應用問題及答解	青柳篤恒	大正 10 年	善隣都院藏版文求堂書店
	第三巻	支那語動字用法	張廷彦	明治 37 年	文求堂書店
		動字分類大全	張廷彦	明治 39 年	文求堂書店
		支那語動詞形容詞用法	皆川秀孝	大正 9 年	文求堂書店
		華語助字の活用（第 20 版）	中谷鹿二	昭和 17 年	善隣社
		華語助字の活用　前編（第 19 版）	中谷鹿二	昭和 18 年	善隣社
		華語助字の活用　後編	中谷鹿二	昭和 15 年	善隣社
		華語慣用助動語の用法（第 7 版））	中谷鹿二	昭和 15 年	善隣社
		支那語慣用句用法	桜井徳兵衛	大正 13 年	同文社
		簡単なる支那語常用語詞例註解	本田善吉	昭和 14 年	外語学院出版部
		最新支那語教科書會話篇附録慣用語應用会話	宮越健太郎・杉武夫	昭和 9 年	外語学院出版部
		助動語解			稿本
		中国語常用虚詞辞典	鈴木直治・望月八十吉・山岸共	昭和 31 年	江南書院

	第四巻	華語助動詞の研究	鳥居鶴美	昭和 22 年	養徳社
		官話萃珍	冨善原著・石山福治校訂	大正 4 年	文求堂書店
		華語要訣	宗内鴻	昭和 13 年	三省堂書店
		北京官話萬物聲音	瀬上恕治	明治 39 年	徳興堂印字局
		北京官話聲音之区別	市川瀬之助	大正 6 年	偕行社
		北京聲音辨	宮原民平	大正 10 年	文求堂書店
		支那破音字典	宮原民平・土屋明治	昭和 7 年	文求堂書店
		華語破音字例解	田中秀・鳥居鶴美	昭和 31 年	永和語学社
中国学資料叢刊・燕社風俗話譯典官翻古小説・精選課本篇	第一卷・燕語社風俗・官話翻譯古小説典	支那語教科書北京風土編	張廷彦	明治 31 年	哲学書院
		言文対照北京紀聞	岡本正文編譯	明治 37 年	文求堂書院
		官話北京事情	英継選・宮島吉敏	明治 39 年	文求堂書院
		京華事略	金醒吾		
		北京市井風俗篇			写本
		北京風俗問答	岡本正文閲・加藤三郎著	大正 13 年	大阪屋號書院
		北京官話今古奇観	金国璞譯	明治 37 年	文求堂書院
		北京官話今古奇観第二編	金国璞譯	明治 44 年	文求堂書院
		三国選萃支那最新通用官話	張廷彦譯	大正 7 年	文求堂書院
		北京官話捜奇新編	管窺居士纂・石山福治註解	大正 5 年	文求堂書院
中国学資料叢刊・燕社風俗話譯典官翻古小説・精選課本篇	第二卷・精選課本（1）	自邇集平仄編四聲聯珠	福島安正	明治 19 年	陸軍文庫
		亜細亜言語集支那官話部（再版）	廣部精編	明治 25 年	青山堂書房
		燕語生意筋絡	桂林先生校閲・御幡雅文譯	明治 36 年	文求堂書院
		改訂官話指南	呉啓太・鄭永邦・金国璞	明治 36 年	文求堂書院
		北京官話虎頭蛇尾	金国璞	明治 40 年	北京日本人清語同学会
		華言問答	金国璞	明治 36 年	文求堂書院
	第三卷・精選課本（2）	中国語	写本		
		官話	写本		
		官話續急就篇	写本		
		北京官話話條子	写本		
		續散語串珠	写本		
		燕京雑話	写本		
		語学舉隅拔萃	写本		
		北京笑話會話	馮世傑	明治 42 年	上海日本堂書店
		華語萃編 初集	東亜同文書院編纂	大正 5 年	東亜同文書院
		華語萃編 二集	東亜同文書院編纂	大正 14 年	東亜同文書院
		華語萃編 三集	東亜同文書院編纂	大正 14 年	東亜同文書院
		華語萃編 四集	東亜同文書院編纂	大正 8 年	東亜同文書院
		最新官話談論篇	張廷彦・李俊漳著	大正 10 年	文求堂書店
		最新官話談論篇訳本	石山福治訳	大正 11 年	文求堂書店
	第四卷・精	中華言文新編	富谷兵次郎	大正 12 年	奉天外國語学校藏版

	選課本（3）	標準支那語教本 初級篇	鈴木擇郎	昭和 9 年	東亜同文書院支那研究部
		標準支那語教本　高集編	鈴木擇郎	昭和 10 年	東亜同文書院支那研究部
		中等官話談論新篇	李俊漳選輯	昭和 12 年	文求堂書院
		中等官話談論新篇總譯	近藤子周譯	昭和 16 年	文求堂書院
		改訂支那語基礎	吉野美彌雄	昭和 13 年	甲文堂書店
		適用支那語解釋	木全德太郎	昭和 14 年	文求堂書院
		新訂增補支那語捷徑	石橋哲爾	昭和 14 年	平野書店
		高級華語新集	王化編	昭和 16 年	文求堂書院
		高級華語新集總譯	小川壽一譯	昭和 16 年	文求堂書院
國立國會圖書館からダウンロードした中国語関係書		支那語自在	豐國義孝	明治 28 年	獅子吼會
		清語會話案內 上・下	西島良爾	明治 33 年	青木嵩山堂
		華語跬步	柏木原太郎	明治 34 年	東亜同文會
		清語讀本	西島良爾	明治 35 年	石塚猪男蔵
		日清会話篇	松永清	明治 36 年	仝文社
		新編中等清語教科書	西島良爾・林達道	明治 37 年	石塚書店
		新編支那語會話讀本	青柳篤恒	明治 36 年	合資会社丸利商會
		日清会話語言類集	金島苔水	明治 38 年	石塚書舗
		清語讀本後篇	東方語学校	明治 38 年	帝国印刷株式会社
		日清会話	粕谷元	明治 38 年	帝国印刷株式会社

（3）中国語関係書における各型の擬声語

①　単音節・A 型の擬声語（48 語）

嗷	嘎	咱	颼	ㄅㄨ…儿	儿）
吧	呱	爬	旺	ㄉㄤ…儿	ㄗㄚ
蹭	嘣	拍	哇	ㄏㄨㄚ…	ㄕㄨ…儿
哧	吭	磅	嗚	ㄖㄧㄥ	ㄙㄧ
叱	唿	澎	吱/吱兒	ㄖㄨㄥ	ㄊㄨㄟ
欸	颼	砰	嗞/嗞兒	ㄙ…ㄙ	ㄛ
咚	呼	揉	喳	ㄙㄚ	
哈	嗎	倏/倏兒	咋	ㄗㄦ（ㄗ…	

②　2 音節擬声語（206 語）

AA型*1（132語）：

啊々啊々	嗷兒々々	咿々（咿々）	欸欸
哀哀	巴巴	哧兒々々*2	噹兒々々
嗷嗷	吧吧	吃兒々々	噹噹

嘚兒々々	喵喵	哇哇	ㄉㄨㄥ ㄉㄨㄥ
噔兒々々	咪咪	噥噥々々	ㄉㄨㄤ ㄉㄨㄤ
鏑鏑	哔哔	嗡嗡	ㄍㄚ ㄍㄚ
咚咚々々	咩咩	旺旺（々々）	ㄍㄦ ㄍㄦ
哈哈	哞兒哞兒	汪汪	ㄍㄨㄚ ㄍㄨㄚ
嘎嘎	喃喃	喔喔喔喔	ㄍㄨㄛ ㄍㄨㄛ
嘎々	嘊嘊	嘻嘻	ㄏㄥ ㄏㄥ
哈々	裊裊	嗚兒々々	ㄏㄨㄚ ㄏㄨㄚ
噶々噶々	喏喏兒	嗚嗚	ㄐㄚ ㄐㄚ
喀兒々々	歐兒々々	咦咦	ㄐㄧㄚ ㄐㄧㄚ
嘬兒々々	噗噗々々	吁吁	ㄐㄧ ㄐㄧ
咕兒咕兒	吒吒	噔噔々々	ㄎㄦ ㄎㄦ
咕咕咕咕	嚷嚷	咂咂	ㄅㄧㄠ ㄅㄧㄠ
呷呷呷呷	吶吶々々	喊喊々々	ㄡㄡ
呱呱	紉々	咂咂兒	ㄆㄦ ㄆㄦ
哕々	柔々	嘖兒嘖兒	ㄆㄚㄦ ㄆㄚㄦ
蝈々兒	颯颯	咋々咋々	ㄆㄚ ㄆㄚ
哈哈	愐愐	哧兒哧兒	ㄖㄦ ㄖㄦ
嘎兒嘎兒	倏兒々々	吱兒吱兒	ㄖㄦㄧ ㄖㄦㄧ
嘿兒々々	涮涮	嗞兒々々	ㄕㄚ ㄕㄚ
哼哼	嗔嗔	嗞嗞	ㄕㄨㄚ ㄕㄨㄚ
轟轟	嘶嘶	孜孜	ㄙㄧㄙㄧ
呼兒々々	嘶嘶	ㄚㄧ ㄚㄧ	ㄕㄨ ㄕㄨ
呼呼	颼兒々々	ㄅㄤ ㄅㄤ	ㄙㄨ ㄙㄨ
焀焀々々	颼颼	ㄅㄨ ㄅㄨ	ㄊㄨㄤ ㄊㄨㄤ
唶唶	簌簌	ㄘㄦ ㄘㄦ	ㄨㄤ ㄨㄤ
唧唧	鏜鏜	ㄘㄥ ㄘㄥ	ㄨㄚ ㄨㄚ
啾啾	噹噹	ㄉㄦ ㄉㄦ	ㄨㄥ ㄨㄥ
嘞嘞	鼕鼕	ㄉㄤ ㄉㄤ	ㄗㄦ ㄗㄦ
嘭兒々々	鼕鼕	ㄉㄤㄦ ㄉㄤㄦ	ㄗㄚ ㄗㄚ

*1 AA型及び重畳型を含む。

*2 下線を引く擬声語は同形異音のものである。

AB型（74語）：

啊嚏	吧叹	咘噔	叮兒噹兒	噶喳
啊哼	呲噠々々	叮噹	丁令	嘎噠
吧噠	哎哨兒	丁東	蚨蝶兒	咯兒噶

咯噠	哼哈	歐兒嗷兒	吱兒喳兒	ㄍㄨ ㄉㄨㄥ
咯噔	嘩啊	啪喳	ㄚ ㄊㄧㄝ	ㄍㄨ ㄉㄨ
聒噠	嘩愕	咴打	ㄅㄧㄚ ㄗㄧ	ㄏㄚ ㄗ
呱打	劃拉	爬噠	ㄅㄨ ㄉㄨㄤ	ㄏㄨㄚ ㄌㄚ
呱噠	嘩楞	碰瑙	ㄉㄦ ㄌㄥ	ㄏㄨ ㄌㄨ
呱噔兒	嘩啷	砰磅	ㄉㄧㄥ ㄉㄤ	ㄎㄚ ㄊㄚ
咣噹	嘩冷*	噗哧	ㄈㄨㄊ ㄧㄢ	ㄍㄚ ㄓㄖ
咕噔	噶喳	嚐嗤	ㄦ	ㄎㄨ ㄉㄨㄥ
咕咚	嘎喇	嚐嚕	ㄍㄚ ㄉㄨㄥ	ㄡㄠ
咕嘟	吮叹	撲騰	ㄍㄚ ㄌㄚ	ㄅㄦ ㄌㄦ
咕嚨	喀哧	啁兒呱	ㄍㄤ ㄉㄤ	ㄗㄦ ㄗㄚㄦ
嘩嗵	呢喲兒	咿啞	ㄍㄨㄚ ㄌㄚ	ㄗㄧㄙ

③　3 音節擬声語（44 語）

AAA型（22語）：

嗤嗤嗤	根兒根兒根兒	咖咖咖	汪汪汪
當當當	咕咕咕	隆隆隆	嗡嗡嗡
滴滴滴	呼呼呼	哔哔哔	喳喳喳
丁丁丁	颼颼颼	嘭嘭嘭	吱吱吱

ㄔ ㄔ ㄔ	ㄇㄦ ㄇㄦ ㄇㄦ	ㄊㄤ ㄊㄤ ㄊㄤ
ㄍㄜㄦ ㄍㄜㄦ ㄍㄜㄦ	ㄉㄚ ㄉㄚ ㄉㄚ	ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ

AAB型（8語）：

嘀々噠	嗡嗡哇	ㄉㄧㄥ ㄉㄧㄥ ㄉㄤ
閣閣兒咕	ㄍㄨㄚ ㄍㄨㄚ ㄐㄧ	ㄍㄥ ㄍㄥ ㄍㄚ
嘎嘎蛋兒	ㄈㄨㄈㄨㄦㄧㄠ	

ABA型（3語）：

啊喇啊—啊喇啊	吧呀吧	哼啊哼

ABB型（9語）：

啊哈々	各碌碌	唿喇喇	嘩打打	撲通通
丁零零	咕嚕嚕	呼嚕嚕	豁剌剌	

④　4 音節擬声語（94 語）

AAAB型（1語）：

噶々噶蛋

AABB型（24語）：

哀哀切切	抽抽噎噎	嘟嘟囔囔	嘟嘟喃喃	嘟嘟噥噥

哼哼唧唧	唧唧噥噥	咳咳嗽嗽	塔塔咧咧	悉悉索索
哼哼嘰嘰	唧唧哇哇	嚬嚬 嘶嘶	唏唏哈哈	咿咿啞啞
唧唧咕咕	唧唧喳喳	嘍々喳々	吸吸哈哈	嗞々啞々
笛笛咕咕	唧唧咋咋	搭搭咧咧	嘻嘻哈哈	

AABC型（1語）：

咕々呢嗷兒

ABAB型（49語）：

嘟吃嘟吃	嘎拉嘎拉	咕摟咕摟	唧咋唧咋	ㄜㄚ ㄜㄚ
咿噠々々	噶喇噶喇	咕嚕咕嚕	咪嚶々々	ㄅㄧㄥ ㄅㄤ
吧噠々々	嘎吱々々	嘟嚕嘟嚕	啪嗒々々	ㄅㄧㄥ ㄅㄤ
吧叽吧叽	噶吱々々	聒達聒達	吧喇々々	ㄍㄥ ㄍㄚ
擦啦擦啦	咯嗒咯嗒	咕嗵々々	噗騰噗騰	ㄍㄥ ㄍㄚ
滴搭滴搭*	呱啊々々	哼啊哼啊	倏喇々々	ㄆㄚ ㄅㄚ
叮噹叮噹	咣噹々々	花拉花拉	刷拉刷拉	ㄆㄚ ㄅㄚ
哼啊々々	嗷咚嗷咚	嘩喇嘩喇	倏啦倏啦	ㄆㄧ ㄌㄚ ㄆ
嘎嘣兒嘎嘣兒	咕咚咕咚	嘩啦嘩啦	唰啷唰啷	ㄧ ㄌㄚ
噶噠々々	咕嘟咕嘟	呼嚕々々	鼕鏜鼕鏜	
嘎嗒々々	咕啷兒々々々	呼嗚々々	吱吜々々	

ABCB型（14語）：

叮啊噹啊＊1	唧噹剛噹	匹蹬撲蹬	坡喇啪喇	唏啦嘩啦
咭噠咿噠	唧咚咕咚	皮剌吧剌	匹嘍撲嘍	唏啷嘩啷
唧噠嘎噠	咭拉吖拉	匹剌沸剌	提拉拖拉	

＊1　論文の中に、この語は「叮」と「噹」という２つの擬声語と分けられている。実際には、一般的に「叮啊噹啊」は１つのグルーるとして使われる。そのため、本論文でそれをABCB型の型別に入れる。

ABCD型（5語）：

咕噔嘩啦	唧叮咕咚	咭叮咕咚	稀溜逛噹	ㄍㄚ ㄌㄚ ㄍㄨㄌㄨ

（4）中国語の声母表

調音方法＼発音方法			唇音		舌尖前音	舌尖中音	舌尖後音	舌面（前）音	舌根音
			両唇音	唇歯音	歯音	歯茎音	捲り舌音	硬口蓋音	軟口蓋音
破裂音（閉鎖音）	清音	無気	b[p]			d [t]			g[k]
		有気	p[p‘]			t[t‘]			k[k‘]
破擦音		無気			z [ts]		zh[ʈʂ]	j[tɕ]	
		有気			c[ts‘]		ch[ʈʂ‘]	q[tɕ‘]	
摩擦音	無声（清音）			f[f]	s[s]		sh[ʂ]	x [ɕ]	h[x]
	有声（濁音）						r[ʐ]		
鼻音	有声（濁音）		m[m]			n[n]			
側面音	有声（濁音）					l[l]			

（5）中国語の韻母表

	開口呼	斉歯呼	合口呼	撮口呼
単韻母（10）		i [i]	u [u]	ü[y]
	a[a]	ia[ia]	ua [ua]	
	o[o]		uo[uo]	
	e[ɤ]			üe[yɛ]
	ê[ɛ]	ie[iɛ]		
	-i[ɿ/ʅ]			
	er[ər]			
複合韻母（13）	ai[ai]		uai[uai]	
	ei[ei]		uei[uei]	
	ao[au]	iao[iau]		
	ou[ou]	iou[iou]		
鼻音韻尾（16）	an[an]	ian[ian]	uan[uan]	üan[yan]
	en[ən]	in[in]	uen[uən]	ün[yn]
	ang[aŋ]	iang[iaŋ]	uang[uaŋ]	
	eng[əŋ]	ing[iŋ]	ueng[uəŋ]	
	ong[uŋ]	iong[yŋ]		

（6）中国語関係書における擬声語の音節表

擬声語	ウェード式	ピンイン	擬声語	ウェード式	ピンイン
A型					
嗷	ao	ao	爬	p‘a	pa
ㄅㄨ…儿	pu…erh	bur	磅	p‘ang	pang
吧	pa	ba	砰	p‘êng	peng
蹭	ts‘êng	ceng	ㄖㄧㄥ	jiêng	rieng
叱	ch‘ih	chi	ㄖㄨㄥ	juêng	rueng
哧	ch‘ih	chi	揉	jou	rou
欻	ch‘ua	chua	ㄙ(i)	s(ssû) (i)	s(i)
ㄉㄤ…儿	tangerh	dangr	ㄙㄚ	sa	sa
咚	tung	dong	ㄙㄧ	si	si
嘏	kua	gua	颼	sou	sou
呱*	kua	gua	ㄕㄨ…儿	shu erh	shur
哈	ka	ga	倏	shu	shu
嘎	ka	ga	倏兒	shuerh	shur
喝 兒	hoerh	he r	ㄊㄨㄟ	t‘ui	tui
ㄏㄨㄚ	hua	hua	哇	wa	wa
呼	hu	hu	嗚	wu	wu
吭	hêng	heng	旺	wang	wang
唿	hu	hu	ㄗㄚ	tsa	za
颼	hu	hu	ㄗ儿	ts(i)erh	z(i)r
嗎	ma	ma	嗞	tsu	zi
ㄛ	o	o	嗞儿	tzûerh	zir
怕	p‘a	pa	咋	cha	za
拍	pai	pai	吱兒	chiherh	zhir
澎	p‘êng	peng	喳	cha	zha
AA型					
啊々啊々	a a	a a	嘎嘎	niaoniao	niaoniao
哀哀	aiai	aiai	裊裊	niaoniao	niaoniao
嗷兒嗷兒	aoerh aoerh	aor aor	喏喏兒	nuonuoerh	nuonuoer
嗷嗷	aoao	aoao	歐兒々々	ouerh ouerh	our our
巴巴	papa	baba	噗噗々々	p‘u p‘u	pupu
吧吧	papa	baba	ㄖ儿 ㄖ儿	j(ih)erh j(ih)erh	r(i)r r(i)r
啷々啷々	pang pang	bangbang	ㄖ儿ㄧ ㄖ儿ㄧ	j(ih)erhyi j(ih)erhyi	r(i)ryir(i)ryi
哧兒々々	ch‘iherh ch‘iherh	chir chir	吶吶	jêng jêng	rengreng
吱兒吱兒	ch‘iherh ch‘iherh	chir chir	紉々	jên jên	ren ren
吃兒吃兒	ch‘iherh	chir chir	吒吒	jênjên	ren ren
欻欻	ch‘uach‘ua	chuachua	柔々	jou jou	rou rou
噹兒々々	tangerh tangerh	dangr dangr	颯颯	sasa	sa sa

噹噹	tangtang	dang dang	嘶嘶	sêsê	se se
嘚兒々々	têerh têerh	der der	ㄕㄚ ㄕㄚ	sha sha	sha sha
鏑鏑	teitei	deidei	倏兒々々	shuerh shuerh	shur shur
噔兒々々	têngerh têngerh	dengr dengr	嗾嗾	shua shua	shua shua
咚咚々々	tung tung	dongdong	ㄕㄨㄚ ㄕㄨㄚ	shua shua	shua shua
哈々	kaka	gaga	涮涮	shuashua	shua shua
嘎嘎	kaka	gaga	ㄕㄨ ㄕㄨ	shu shu	shushu
嘎々	kaka	gaga	ㄙㄧㄙㄧ	sisi	sisi
噶々噶々	ka ka ka ka	gagagaga	嘶嘶	ssûssû/sê	sisi
喀兒々々	k'oerh k'oerh	ger ger	颼兒々々	ssouerh	sour
嗯兒々々	kenerh kenerh	gen er	颼颼	sousou	sousou
咕儿咕儿	kuerhkuerh	gur gur	ㄙㄨ ㄙㄨ	su su	susu
呱呱	kuakua	guagua	簌簌	susu	susu
咵々	kua kua	guagua	噹噹	t'angt'ang*	tangtang
咕咕咕咕	kuku…	gugu…	鏜鏜	t'angt'ang	tangtang
蝈々兒	kuo kuoerh	guo guor	鼕鼕	t'êngt'êng	tengteng
哈哈	haha	haha	鼕鼕	t'ungt'ung	tongtong
嘏兒嘏兒	hoerh hoerh	her her	ㄊㄨㄤ ㄊㄨㄤ	t'uang t'uang	tuangtuang
嘿兒々々	heierh heierh	heir heir	ㄨㄤ ㄨㄤ	wang wang	wangwang
哼哼	hênghêng	hengheng	汪汪	wangwang	wangwang
轟轟	hunghung	honghong	旺々旺々	wang wang	wangwang
呼兒々々	huerh huerh	hur hur	ㄨㄚ ㄨㄚ	wa wa	wawa
呼呼	huhu	huhu	哇哇	wa wa	wawa
焀焀々々	hu hu	huhu	嚶々嚶 々	wêng wêng	wengweng
喈喈	chiehchieh	jie jie	ㄨㄥ ㄨㄥ	wêng wêng	wengweng
呷呷	chiehchieh	jiejie	嗡嗡	wêngwêng	wengweng
唧唧	chichi	jiji	喔 喔 喔喔	wowo	wowo
啾啾	chiuchiu	jiujiu	嗚兒々々	wuerh wuerh	wur wur
嘞嘞	lêlê	lele	嗚嗚	wuwu	wuwu
們兒々々	menerh	menr	嘻嘻	hsihsi	xixi
喵喵	miaomiao	miaomiao	吁吁	hsühsü	xuxu
咩咩	miehmieh	miemie	哎哎	yaya	yaya
咩咩	miehmieh	miemie	噯噯々々	ying ying	yingying
咪咪	mimi	mimi	ㄗㄦ ㄗㄦ	tserh tserh	z(i)r z(i)r
哞兒哞兒	mouerhmouerh	mour mou	喊々喊々	tsang tsang	zangzang
喃喃	nannan	nan nan	咂咂	tsatsa	zaza
ㄅㄤ ㄅㄤ	pang pang	bang bang	咂咂兒	tsatsaerh	zazar
ㄅㄨ ㄅㄨ	pu pu	bu bu	啧儿啧儿	tsêerh tsêerh	zer zer
ㄘㄦ ㄘㄦ	ts'erh ts'erh	c (i)r c(i)r	咋々咋々	cha cha	zhazha
ㄘㄥ ㄘㄥ	ts'êng ts'êng	ceng ceng	哧兒哧兒	chiherh	zhir
ㄉㄤ ㄉㄤ	tang tang	dang dang	吱兒吱兒	chiherhchiherh	zhir zhir
ㄉㄤㄦ ㄉㄤㄦ	tangerh tangerh	dangr dangr	嗞兒々々	tzûerh tzûerh	zir zir

ㄉㄨㄥ　ㄉㄨㄥ	tuêng tuêng	dong dong	孜孜	tsutsuû	zizi
ㄉㄦ ㄉㄦ	terh terh	d(e)r d(e)r	嗞嗞	tsutsu	zizi
ㄉㄨㄤ ㄉㄨㄤ	tuang tuang	duang duang	𠢕𠢕		
ㄍㄦ ㄍㄦ	kêrh kêrh	g(e)r g(e)r	ㄐㄧ　ㄐㄧ	ch(j)i　ch(j)i	jiji
ㄍㄚ　ㄍㄚ	kaka	gaga	ㄎㄦ　ㄎㄦ	k'êrh　k'êrh	kerker
ㄍㄨㄛ　ㄍㄨㄛ	kuo kuo	guoguo	ㄋㄧㄠ　ㄋㄧㄠ	niaoniao	niao niao
ㄏㄥ　ㄏㄥ	hêng hêng	heng heng	ㄚㄧ　ㄚㄧ	ai ai	ai ai
ㄏㄨㄚ　ㄏㄨㄚ	hua hua	huahua	ㄗㄚ　ㄗㄚ	tsatsa	za za
ㄐㄚ　ㄐㄚ	ch(j)a ch(j)a	j(i)aj(i)a	ㄡㄡ	ouou	ou ou
ㄐㄧㄚ　ㄐㄧㄚ	ch(j)ia ch(j)ia	jiajia	ㄆㄦ　ㄆㄦ	p'êrhp'êrh	p(e)r p(e)r
ㄆㄚ　ㄆㄚ	p'a　p'a	papa	ㄆㄚㄦ ㄆㄚㄦ	p'aêrh p'aêrh	par par
AB 型（ABAB 型）					
嘩愕	huaê	hua e	嘩喇嘩喇	hualahuala	hualahuala
啊哼	a hêng	a heng	嘩啦嘩啦	hualahuala	hualahuala
吧噠	pa ta	ba da	啾啾	chiuchiu	jiujiu
𠯑噠	pa ta	ba da	刷拉刷拉	shualashuala	shualashuala
𠯑噠々々	pa ta pa ta	badabada	唰啷唰啷	shualangshualan g	shualangshualan g
吧噠々々	pa ta pa ta	badabada	叮噹	tingtang	dingdang
吧叽吧叽	pachipachi	bajibaji	丁東	tingtung	dingdong
呸哨儿	po langêrh	bo langr	叮噹叮噹	tingtang	dingdang
咘噔	pu têng	bu deng	哼啊々々	êng a êng a	eng a eng a
擦啦擦啦	ts'alats'ala	calacala	咣噹	kuang tang	guangdang
滴搭滴搭	titatita	didadida	咣噹々々	kuang tang	guang dang
嘎嘣兒嘎嘣兒	kapêngêrhkapêngerh	ga bengr ga bengr	劃拉	huala	huala
噶喳	ka ch'a	gacha	砰磅	p'ingp'ang	ping pang
嘎噠	kata	gada	鼕鏜鼕鏜	t'ungt'ang	tong tang
咯噠	kêta	geda	吱兒喳兒	chiherhchaerh	zhir zhar
咯噔	kêtêng	gedeng	叮兒噹兒	tingerhtangerh	dingr dangr
咕噔	kutêng	gudeng	蚨蝶兒	fu tieherh	fudier
咕咚	kutung	gudong	撲騰	p'ut'êng	puteng
咕嘟	ku tu ku tu	gudugudu	噗騰噗騰	p'ut'êng	puteng
噶噠々々	ka ta	gada	丁令	dingling	dingling
嘎嗒々々	ka ta ka ta	gadagada	咿啞	yiya	yiya
咕咚咕咚	kutungkutung	gudonggudong	呱打	kuata	guada
咕嘟咕嘟	kutukutu	gudugudu	喟兒呱	wen erh wa	wenr wa
嘟嚕嘟嚕	kulukulu	gulugulu	啊噫	a t'i	a ti
咯嗒咯嗒	kêtakêta	gedageda	吧叹	pat'an	batan
呱啊々々	ku a ku a	gu agu a	噶喳	k'a ch'a	kacha
咕嚨	ku lung	gulong	咪嚶々々	mi yao	miyao

嘎拉嘎拉	ka la	gala	嘟吃々々	ang ch‘ih	angchiangchi
噶喇噶喇	ka la ka la	galagala	嗷咚嗷咚	kutungkutung	gudonggudong
咕啷兒々々	ku langerh	gulang er	倏喇々々	shu la	shula
咕摟咕摟	kuloukulou	gulougulou	倏啦倏啦	shu la	shulashula
咕嚕咕嚕	kulukulu	gulugulu	哌打	p‘aita	paida
嘩嗵	ku t‘ung	gutong	碰璫	p‘êngtang	peng dang
咕嗵々々	ku t‘ung	gutong	咯儿噶	kêerhka	ger ka
嘎吱々々	ka chih	gazhi	ㄚ　ㄊㄧㄝ	a　t‘ieh	ati e
噶吱々々	ka chih ka chih	gazhigazhi	ㄅㄨ ㄉㄨㄤ	pu tuang	buduang
嘩啊	hua　a	hua a	ㄊㄚ　ㄊㄚ	êa　êa	e a e a
呼嚕々々	hu lo hu lo	huluhulu	ㄈㄨㄊ　ㄧㄢㄦ	fut‘ianerh	fu tianr
呼嗚々々	hu wu hu wu	huwuhuwu	ㄍㄚ　ㄉㄨㄥ…	ka tuêng…	gadong
唧咋唧咋	chi cha chi cha	jizhajizha	ㄍㄨ ㄉㄨ	ku tu	gudu
咯吸	ch‘êch‘a	kecha	ㄍㄨ ㄉㄨㄥ	ku tuêng	gudong
喀哧	k‘o ch‘ih	kechi	ㄍㄚ ㄌㄚ	ka la	gala
嘎喇	k‘a la	kala	ㄏㄨ ㄌㄨ	hu lu	hulu
呢喲兒	ni yaoerh	ni yaor	ㄏㄚ ㄗ	ha ts(i)	ha z(i)
啪喳	p‘a ch‘a	pacha	ㄆㄨ ㄉㄨㄥ	k‘u tuêng	kudong
噗哧	p‘uch‘ih	puchi	ㄆㄚ ㄊㄚ	k‘a t‘a	kata
噼嗤	p‘uchih	puchi	ㄍㄚ ㄓㄖ	ka ch(ih)j(ih)	ga zhir
啪嗒々々	p‘a ta p‘a ta	pa da pa da	ㄆㄧ ㄌㄚ ㄆㄧ ㄌㄚ	p‘i la p‘i la	pilapila
噼嚕	p‘ulu	pulu	ㄆㄚ ㄉㄚ ㄆㄚ ㄉㄚ	p‘atap‘ata	pa da pa da
吧喇々々	p‘a la	pala	ㄗㄧㄙ	tsis(ssû)	zi s
呱嗟	p‘a t‘a	pata	ㄅㄧㄚ ㄗㄧ	pia　tsi	biazi
爬嗟	p‘a t‘a	pata	ㄍㄨㄚ ㄌㄚ	kua　la	guala
吱咀々々	chih niu chih niu	zhiniu	ㄏㄨㄚ ㄌㄚ	hua la	huala
聒嗟	kuata	guada	ㄡㄠ	ouao	ou ao
呱噔兒々々	kua têngerh	guadengr	ㄉㄧㄥ　ㄉㄤ	tiêng　tang	dingdang
聒達聒達	kuotakuota	guodaguoda	ㄉㄧㄥ ㄉㄤ ㄉㄧㄥ ㄉㄤ	tiêngtangtiêngtang	dingdangdingdang
哼啊哼啊	hêngahênga	hengahenga	ㄍㄤ　ㄉㄤ	kang tang	gangdang
哼哈	hêngha	hengha	ㄍㄥ ㄍㄚ ㄍㄥ ㄍㄚ	kêng ka kêng ka	genggagengga
嘩楞	hualêng	hualeng	ㄉㄦ ㄌㄥ	terh　lêng	d…r leng
嘩冷	hualêng	hualeng	ㄅㄦ ㄌㄦ	perh lerh	p(e)r l(e)r
花拉花拉	hualahuala	hualahuala	ㄗㄦ ㄗㄚㄦ	tserh tsaerh	zir zar
AAA 型					
嗤嗤嗤	ch‘ihch‘ihch‘ih	chichichi	咖咖咖	chia chia chia	jiajiajia
ㄔ ㄔ ㄔ	ch‘(ih)　ch‘(ih) ch‘(ih)	chichichi	隆隆隆	lunglunglung	longlonglong

ㄉㄚ ㄉㄚ ㄉㄚ	ta tata	dadada	ㄇㄦ ㄇㄦ ㄇㄦ	merh merh merh	m(e)r m(e)r m(e)r
當當當	tangtangtang	dangdangdang	咩咩咩	miehmiehmieh	miemiemie
滴滴滴	tititi	dididi	嘭嘭嘭	p‘êngp‘êng	peng peng peng
丁丁丁	tingtingting	dingdingding	ㄊㄤ ㄊㄤ ㄊㄤ	t‘angt‘angt‘ang	tang tang tang
ㄍㄜㄦ ㄍㄜㄦ ㄍㄜㄦ	koerh koerh koerh	ger ger	ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ	t‘uêng t‘uêng t‘uêng	tong tong tong
根兒根兒根兒	kênerh kênerh	genr genr genr	汪汪汪	wang wang wang	wang wang wang
咕咕咕	kukuku	gugugu	嗡嗡嗡	wêng wêng wêng	weng weng weng
呼呼呼	huhuhu	huhuhu	喳喳喳	chachacha	zha zhaz ha
颼颼颼	huhuhu	huhuhu	吱吱吱	chichichi	zhi zhi zhi
AAB 型					
嘎嘎蛋兒	kakatanerh	gagadanr	ㄍㄥ ㄍㄥ ㄍㄚ	kêng kêng ka	genggengga
閣閣兒咕	kêkêerhku	geger gu	ㄉㄧㄥ ㄉㄧㄥ ㄉㄤ	tiêng tiêng tang	ding ding dang
嘀々噠	tititita	dididа	ㄈㄨㄈㄨㄦㄧㄠ	fu fuerh yao	fu fur yao
嗡嗡哇	wêngwêngwa	weng weng wa	ㄍㄨㄚ ㄍㄨㄚ ㄐㄧ	kuakuach(j)i	gua gua ji
ABA 型					
啊喇啊	a la a	ala a	哼啊哼	hêngahêng	heng a heng
吧呀吧	payapa	bayaba			
ABB 型					
啊哈々	a haha	a haha	呼嚕嚕	hulolo	hulele
丁零零	tinglingling	ding ling ling	豁刺刺	huo la la	huolala
各碌碌	kêlulu	ge lu lu	撲通通	p‘ut‘ungt‘ung	putongtong
咕嚕嚕	kululu	gu lu lu	唿喇喇	hulala	hulala
嘩打打	huatata	hua da da			
AAAB 型					
噶々噶蛋	ka ka ka tan	gagagadan			
AABC 型					
咕々呢嗷兒	ku ku ni aoerh	gu gu ni aor			
AABB 型					
哀哀切切	aich‘iehch‘ieh	aiai qieqie	咳咳嗽嗽	k‘êk‘ê sousou	kekesousou
抽抽噎噎	chouchouyehyeh	chouchou yeye	嚬嚬 嘶嘶	p(‘)inp(‘)in sêsê	pinpinsisi
嘟嘟囔囔	tutunangnang	dudu nangnang	嘍々喳々	ch‘i ch‘i ch‘a ch‘a	qiqichacha
嘟嘟喃喃	tutunannan	dudu nannan	搭搭咧咧	tata liehlieh	dadalielie
嘟嘟噥噥	tutunungnung	dudu nongnong	塔塔咧咧	t‘at‘a liehlieh	tatalielie
哼哼唧唧	hênghêngchichi	hengheng jiji	唏唏哈哈	hsihsi haha	xixihaha
哼哼嘰嘰	hênghêng chichi	hengheng jiji	吸吸哈哈	hsihsi haha	xixihaha
唧唧咕咕	chichikuku	jiji gugu	嘻嘻哈哈	hsihsi haha	xixihaha
笛笛咕咕	titikuku	didi gugu	悉悉索索	hsihsi soso	xixisuosuo
唧唧噥噥	chichinungnung	jiji nongnong	咿咿啞啞	yiyi yaya	yiyiyaya
唧唧哇哇	chichiwawa	jiji wawa	唧唧咋咋	chichi tsatsa	jijizaza

唧唧喳喳	chichich(‘)achi(‘)a	jijizhazha（chacha）	嗞々嗤々	tsutsu niu niu	ziziniuniu
ABCB 型					
叮啊噹啊	ting a tang a	ding a dang a	皮剌吧剌	p‘ilapala	pi la ba la
咭噠噠	chi ta pa ta	jidabada	匹剌沸剌	p‘ilafeila	pilafei la
唧噠嘎噠	chi ta ka ta	jida gada	啵喇啪喇	p‘i la p‘a la	pi la pa la
唧噹剛噹	chi tang kang tang	jidang gangdang	匹嘍撲嘍	p‘ilou p‘ulou	pi lou pu lou
唧咚咕咚	chiting kutung	jiding gudong	提拉拖拉	t(‘)ila t‘uola	ti la tuo la
咭拉呱拉	chi la kua la	jilaguala	唏啷嘩啷	his lang hua lang	xilang hualang
匹蹬撲蹬	p‘itêng p‘utêng	pideng puteng	唏啦嘩啦	shila huala	xi la hua la
ABCD 型					
唧叮咕咚	chitingkutung	jiding gudong	咕噔嘩啦	ku têng hua la	gudeng huala
咭叮咕咚	chitingkutung	jiding gudong	ㄍㄚ ㄌㄚ ㄍㄨㄌㄨ	ka la kulu	galag ulu
稀溜逛噹	hsiliukuangtang	xiliu guangdang			

参考文献

参考文献の並べる順序は著者の音序とする。中文の部はピンインのabc順、日文の部は五十音順、欧文の部はアルファベット順とする。

Ⅰ　中文文献（ピンインのabc順）

1　辞典類

龔良玉（1991）『象声詞詞典』貴州教育出版社

阮智富・郭忠新　（2009）『現代漢語大詞典』　上海辞書出版社

『辞海』（第六版）（2009）　上海辞書出版社

『現代漢語詞典』（第 5 版）（2005）商務印書館

『現代漢語規範詞典』（2004）　外語教学与研究出版社　語文出版社

『現代漢語異形詞規範詞典』（2002）上海辞書出版社

2　研究書・研究論文

①研究書

陳承澤（1922）『国文法草創』北京商務印書館

陳明娥（2014）『明治期北京官話教科書詞彙研究』厦門大学出版社

耿二嶺（1986）『漢語擬声詞』港北教育出版社

黄伯榮・廖序東（2007）『現代漢語』（増訂第四版）高等教育出版社

黎錦熙（1924）『新著国語文法』北京商務印書館

李鏡兒（2007）『現代漢語擬声詞研究』学林出版社

呂叔湘（1942）『中国文法要略』北京商務印書館

呂叔湘（1999）『現代漢語八百詞』（増訂版）商務印書館

呂叔湘・王海棻　編（2005）『馬氏文通』讀本』世紀出版集団　上海教育出版社

馬慶株（1987）「擬声語研究」（『著名中年語言学家自選集・馬慶株巻』（1998）安徽教育出版社 ）

孫錫信（1997）「『官話指南』語法拾零」『漢語歴史語法叢稿』漢語大詞典出版社

孫錫信（1999）『近代漢語語気詞—漢語語気詞の歴史考察』語文出版社

王力（1943・1985）『中国現代語法』商務印書館

王占華・一木達彦・苞山武義（2004）『中国語学概論』駿河台出版社

王照『小航文存』沈龍雲主編（1966）『近代中国史料叢刊第二十七輯』文海出版社

魏薇（2013）『北京官話教科書詞彙研究』吉林大学出版社

文康/著、奥野信太郎・常石茂・村松暎/訳（1960）『児女英雄伝』平凡社

呉川（2005）『オノマトペを中心とした中日対照言語研究』白帝社

楊杏紅（2014）『日本明治时期北京官話課本語法研究』厦門大学出版社

葉寶奎（2001）『明清官話音系』厦門大学出版
張美蘭（2011）『明清域外官話文献語言研究』東北師範大学出版社
周有光（2002）『周有光語文論集・第一巻』 上海文化出版社

②研究論文

陳北郊（1989）「擬声詞散論」『語文研究 』第1期 pp.17-21
陳明娥・李無未（2012）「清末民初北京話口語詞汇及其漢語史価値－以日本明治期間北京話課本為例」『厦門大学学報』第2期 pp.56-63
陳明娥（2014）『明治時期北京官話課本詞彙研究』厦門大学出版社
陳明娥（2015）「从詞彙角度看清末域外北京官话教材的語言特点」『国際漢語学報』第6巻第1輯 pp.68-75
陳珊珊（2009）「『語言自迩集』対日本明治期中国語的教科書的影響」『吉林大学社会科学学報』第49巻第2期 pp.117-123
儲泰松（2012）「普通話擬聲詞的語音規律及其例外」『安徽師範大学学報』40（1） pp.107-112
段曹林（2009）「論擬声詞、歎詞、語気詞皆“摹声”」『湖北師範学院学報』29（6） pp.7-10
李無未・陳珊珊（2006）「日本明治期的北京官話会話課本」『世界漢語教学』pp.121-132
李無未・李逊（2007）「中国学者与日本明治期中国語教科書」国際漢語教学動態与研究』第3期
李無未（2007）「日本明治期北京官話教科書研究的基本問題」『吉林師範大学学報』第1期 pp.83-88
李無未・邸宏香（2007）「日本明治期北京官話語音課本和工具書」『漢語学習』第6期 pp.88-94
李無未（2008）「日本漢語口語語法研究的先声—読1877年刊行的『支那文典』」『語言学論業』第37輯 商務印書館
李無未・楊杏紅（2011）「清末民初北京官話語気詞例釈—以日本明治期北京官話課本為依拠」『漢語学習』第1期 pp.96-103
李無未・孟廣潔（2015）「日本漢語教科書的学術価値」『中国社会科学報』第007版
林鶴鳴（2015）「『説文解字』擬声詞研究」長春師範大学修士論文
馬慶株（1984）「擬声詞研究」『著名中年語言学家自選集・馬慶株巻』1998 安徽教育出版社 pp.229-261
孟琮（1983）「北京話の擬声詞」『語法研究和探索（一）』 北京大学出版社
斉燦（2014）「19世紀末南北京官話介詞、助詞比較研究—以『官話指南』『官話類編』注釈為例」北京外国语大学修士論文
喬秋穎（2002）「『詩経』擬声詞研究－漢語表音詞的暦時研究之一」『徐州師範大学学報』28（1）pp.14-17
冉啓斌（2012）「論漢語擬声詞中的邊音」『当代語言学』14（4）pp.354-364
邵敬敏（1981）「拟声词初探」『語言教学与研究』pp.57-66

石毓智（1995）「論漢語的大音節結構」『中国語文』第3期 pp. 230-240
王洪君（1996）「漢語語音詞的韻律類型」『中国語文』第3期 pp.167-171
王順洪（1989）「日本漢語教育的歴史与現状」『言語教学与研究』第4期 pp.26-41
呉校華（2007）「漢語象声詞理据初探」『新余高専学報』第 12 巻第 2 期 pp.70-72
呉校華（2008）「現代漢語擬声詞研究」南昌大学修士論文
徐麗（2014）「日本明治期漢語教科書研究—以『官話指南』『談論新篇』『官話急就篇』為中心」北京師範大学博士学位論文
徐氷若（2001）『現代漢語象声詞研究』黒龍江大学修士論文
楊杏紅（2013）「日本明治期北京官話課本中的児化詞」『長春師範大学学報』第1期 pp.41-45
楊杏紅・張娜（2013）「日本明治時期北京官話口語課本的編写特点」『佳木斯大学社会科学学報』pp.100-103
饒勤（2000）「現代漢語擬声詞研究綜述」『首都師範大学学報』pp.39-45
余哲（2010）『現代漢語擬声詞新探』華中師範大学修士論文
袁明軍（2007）「『現代漢語詞典』里的擬声詞」『語文研究』第1期 pp.38-41
張美蘭・陳思羽（2005）「清末民初北京口語中的話題標記—以100多年前幾部域外漢語教材為例」『世界漢語教学』第2期 pp.63-73
張美蘭（2007a）「『語言自邇集』中的清末北京話口語詞及其貢献」『北京社会科学』第5期 pp.83-88
張美蘭（2007b）「明治期間日本漢語教科书中的北京話口語詞」『南京師範大学文学院学報』第2期 pp.146-197
張美蘭（2016）「『官話指南』及其四種方言対訳本的価値」『国際漢語学報』第7巻第1輯 pp.157-165
張衛東（1998）「威妥瑪氏『語言自迩集』所記的北京音系」『北京大学学報』第4期 第35巻 pp.136-144
張衛東（2002）「従『語言自迩集·異読字音表』看百年来北京音的演変」『廣東外語外貿大学学報』第13巻第4期 pp.15-23
趙金銘（1981）「元人雑劇中的象声詞」『中国語文』第2期 pp.144-146
馬慶株（1998）「擬声詞研究」（『著名中年語言学家自選集・馬慶株巻』安徽教育出版社）
趙愛武（2005）「象声詞—従詩經到元曲」『河南科術大学学報』23（2）pp. 47-50
趙愛武（2008）「近20年漢語象声詞研究綜述」『武漢大学学報』61（2）pp.180-185
趙愛武・陳清芬（2013）「明清小説中的象声詞」『長江学術』第1期 pp.100-105
趙愛武（2013）「近代漢語象声詞結構形式的歴時演変」『江漢学術』32（4）pp.100-104
趙愛武（2014）「漢語象声詞的語義與標写形式」『武漢大学学報』67（2）pp.104-108
趙金銘（1981）「元人雑劇中的象声詞」『中国語文』第2期 pp.144-146
趙小丹（2006）「『日清会話辞典』語音研究」吉林大学修士学位論文
朱德熙（1982）「潮陽話和北京話重疊式象声詞的構造」『方言』第3期 pp. 174-180

朱文俊（1996）「声音的象徴意念」「世界漢語教学」第 1 期 pp. 41-50

Ⅱ　日文文献（五十音順）

1　辞典類

相原茂（1976）「現代中国語擬音語小辞典」大修館書店
浅野鶴子（1978）『擬音語・擬態語辞典』角川書店
天沼寧（1978）『擬音語・擬態語辞典』　東京堂出版
伊澤修二（1895）『日清字音鑑』　並木善道
井上翠　（1928）『井上支那語辞典』　文求堂書店
岡本正文編（1929）『支那声音字彙』文求堂書店
新村出（1998）『広辞苑』（第 5 版）岩波書店
『日本国語大辞典』（第 2 版）（2002）　第 4 巻 小学館
野口宗親（1995）『中国語擬音語辞典』東方書店

2　研究書・研究論文

①研究書

王占華・一木達彦・苞山武義（ 2004）『中国語学概論』駿河台出版社
奥野信太郎・常石茂・村松暎/訳（1960）『中国古典文学全集 29 児女英雄伝』平凡社
奥野信太郎・常石茂・村松暎/訳（1961）『中国古典文学全集 30 児女英雄伝』平凡社
筧壽雄・田守育啓/編（1993）『オノマトピア擬音・擬態語の楽園』勁草書房
呉川（2005）『オノマトペを中心とした中日対照言語研究』白帝社
古典研究会（1969）『唐話辞書類集 第一集』汲古書院
篠原和子・宇野良子（2013）『オノマトペ研究の射程　近づく音と意味』ひつじ書房
武藤長平（1926）『西南文運史論』岡書院
田守育啓・ローレンス スコウラップ　（1999）『オノマトペ―形態と意味』岩波書店
丹野眞智俊（2005）『オノマトペ《擬音語・擬態語》を考える日本語音韻の心理学的研究』あいり出版
長澤規矩也/解題（1972）『唐話辭書類集 第六集』汲古書院
長澤規矩也/解題（1972）『唐話辭書類集 第七集』汲古書院
波多野太郎/編・解題（1985）『中国語学資料叢刊』　不二出版
浜野祥子（2014）『日本語のオノマトペ　音象徴と構造』くろしお出版
日向茂男（1991）『擬音語・擬態語の読本』小学館
藤堂明保（1979）『中国語概論』大修館書店
藤堂明保・相原茂（1996）『新訂中国語概論』大修館
六角恒廣（1984）『近代日本の中国語教育』不二出版
六角恒廣（1989）『中国語教育史論考』不二出版
六角恒廣/編・解題（1991）『中国語教本類集成』不二出版

六角恒廣（1994）『中国語書誌』不二出版
六角恒廣（2001）『中国語関係書目（増補版 1867～2000）』不二出版
六角恒廣（2002）『中国語教育史稿拾遺』不二出版
ユージン・A・ナイダ/著、ノア・S・ブラネン/監訳、昇川潔・沢登春仁/訳（1977）『意味の構造ー成分分析』研究社出版

②研究論文

秋田喜美（2013）「オノマトペ・音象徴の研究史」篠原和子・宇野良子（2013）『オノマトペ研究の射程　近づく音と意味』 pp.333-364
飯田香織・玉岡賀津雄・初相娟（2011）「中国人日本語学習者の音象徴語の理解」『日中言語研究と日本語教育』第 5 号 pp.46-54
飯田香織（2012）「音象徴語をめぐる言語普遍性と言語個別性」『ことばの科学』名古屋大学言語文化研究会編（25） pp.21-36
板垣友子（2012）「中国語教本『官話急就篇』の言語について」『外国語学研究 』(13) 大東文化大学大学院外国語学研究科編 pp.59-69
板垣友子（2013a）「中国語教本『官話急就篇』と『急就篇』の比較：「問答」の語彙変化」『中国語教育』(11). pp.46-66
板垣友子（2013b）「中国語教本『官話急就篇』と『急就篇』における語彙の変化(1)単語」『外国語学研究』(14).大東文化大学大学院外国語学研究科編 pp.39-47
Elena Latchezarova Pantcheva（エレナ ラチェザロワ　パンチェワ）（2006）「日本語の擬声語・擬態語における形態と意味の相関についての研究」千葉大学大学院社会文化科学研究科博士論文
王瑩（2013） 「日本語のオノマトペにおける音象徴の普遍性と個別性に関する研究ー日本語母語話者と中国北京語話者との感覚評価の比較を中心にー」首都大学東京博士論文
王武英（1988）「中日両国におけるオノマトペの比較研究—主としてその語構成的な成分において—」 大阪外国語大学修士論文
尾崎実（1966）「清代北京語の一斑」（2007『尾崎実中国語学論集』好文出版 pp.27-47）
角岡賢一（1993）「日本語の「擬似オノマトペ」— 日本語と中国語の接点—」（筧壽雄・田守育啓/編（1993）『オノマトピア擬音・擬態語の楽園』勁草書房 pp.145-218）
角岡賢一(2004)「日本語オノマトペ語葉の語源について」龍谷大学国際センター研究年報 第 13 号 pp.15-36
韓紀星（2015）「日中両言語における擬音語の対照研究」『日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集』30 期巻 pp.163-177
鈴木和子（1988）「象声詞のタイプと音声描写特長」『駒澤大学外国語部論集』(通号 27) pp.121-135
宋正植（2003）「比較語彙研究について「意味分野別構造分析法」による「天声人語」の語

彙分析を通して」pp.26-29
武田みゆき（2000）「日中擬音語の語彙度—人間の活動に関する音と外界音を中心 に—」『ことばの科学』第 13 号名古屋大学言語文化部言語文化研究会 pp.171-186
武田みゆき（2001） 「擬音語の語彙化に関する日中両言語の特徴」『多元文化』(1)名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻 編 pp.79-90
張恒悦（2013）「ABCD タイプ中国語擬声語重ね型の認知論的分析」『立命館言語文化研究』24 巻 3 号 pp.175-187
張照旭（2013）「『日清字音鑑』の中国語仮名表記について」『日本語の研究』9（2） pp.85-86
張照旭（2014）「明治期中国語教科書における中国語カナ表記についての研究」学位論文
張美蘭（2007）「明治時代の中国語教育とその特徴」『中国21』第27巻 愛知大学現代中国学会 p142
那須清（1972）「『急就篇』の語彙」『文学論輯』第19号 北九州大学文学研究会 pp.1-29
野口宗親（1993）「清代北京語の「象声詞」—「紅楼夢」と『児女英雄伝』」『熊本大学教育学部紀要』通号42 pp.1-11
野口宗親（1997）「明代の象声詞」『熊本大学教育学部紀要』(通号 46) pp.1-12
野間秀樹（2008）「音と意味の間に」『国文学』第 53 巻第 14 号 pp.58-69
浜野祥子（2013）「方言における擬音語・擬態語の体系的研究の意義」 篠原和子・宇野良子『オノマトペ研究の射程 近づく音と意味』ひつじ書房 pp.133-147
氷野善寛（2011）『官話指南』の来歴の一端—『正音撮要』との関係について」『関西大学中国文学会紀要』（32） pp.43-71
平田佐智子（2011）「音韻象徴における文字の形態・音声の発音と音韻体系の影響」博士学位論
平弥悠紀（2005）「XYXYタイプの擬音語」『同志社大学留学生別科紀要』第5号
ブレント・バーリン（篠原和子・川原繁人訳）（2013）「動物名称に見られる共感覚的音象徴」篠原和子･宇野良子『オノマトペ研究の射程 近づく音と意味』ひつじ書房 pp.17-42
李無未（2004）「清末期の日本人学者による北京官話の声調認識—四種類の日本人学者編集の中国語の辞書と教科書を手がかりに—」『日本文藝研究』56（2） ひつじ書房 pp.A1-A19
山田忠司（2003）「清末北京語の一斑ー『燕語新編』を資料として」『文教大学文学部紀要』17(1) pp.23-35
游韋倫（2014）「コーパスを用いた音象徴語の分析—中国語を対象に—」『JCSS Japanese Congnitive Science Society』pp.55-62

Ⅲ　欧文文献（アルファベット順）

1　研究書

Hamano.S.（1998）*.The Sound-Symbolism of Japanese.Stanford:CSLIP Publications*

Köhler.W.(1929) *.Gestalt Psychology:An introduction to new concepts in modern psychology.(Second edition).New York:Liverright Co*

Köhler.W.(1947).*Gestalt Psychology:An introduction to new concepts in modern psychology.(Second edition).New York:Liverright Co*

Sapir.E.(1929).*A study in phonetic symbolism. Journal of Experimental Psychology*

Thomas Francis Wade・Walter Cain Hillier（1886）『語言自邇集』(再版) 総税務司統計局発行

Thomas Francis Wade.（1859）『尋津録』ホンコン発行